博士論文

北朝鮮における「首領権力」の生成とそのメカニズム

――「社会政治的生命体」論とその構成要素間の相互作用を中心に――

崔　慶　嬉

目　　次

序 章 「首領権力」の仮説 1

１．問題提起と研究目的 1
(1) 問題提起 1
(2) 研究目的 9
２．先行研究の検討 11
３．使用する資料 19
４．論文の構成 24

第１章 「首領」概念の政治化過程 29

第一節 「首領」の権威構築 30
１．「首領」概念の登場 30
(1) 登場とその背景 30
(2) 党の唯一的価値と「首領」 32
２．「独裁権力の象徴」として「首領」呼称 35
(1) 首領への「制度的権力」の集中化 35
(2) 首領の「健康・仕事」が国家的課題 37

第二節 統治イデオロギーの確立 42
１．後継者の登場 42
２．「金日成主義化」 45
(1) 首領崇拝の内面化 45
(2) 絶対服従の「十大原則」と刑法 48

第三節 統治イデオロギーの拡大 52
１．建築物と権威の象徴化 52

２．「全社会の主体思想化」 56

小　結 61

第２章　「首領権力」の生成(1986年) 65

第一節　「社会政治的生命体」論の登場 66
１．「社会政治的生命体」の形成 66
(1)「生命・政治」結合の変遷過程 66
(2) 時間性の原因と「権力原則」 69
２．「社会政治的生命体」の論理構造 73
３．「首領権力」の原動力 76

第二節　首領・後継者：相互依存関係 81
１．相互依存的比例関係 81
２．権力の部分的継承へ 84

第三節　首領・党：統治者と手段の分離 89
１．「心臓機能」から「神経機能」への党の変化 89
２．党の「支配と服従の交換通路」 93

第四節　首領・大衆：「支配と服従」のメカニズム 96
１．社会統合と教化体系の再編 96
２．「垂直的服従」原理 101
３．「水平的同調」原理 106

小　結 110

第３章　「首領権力」の価値・規範の実践(1987年～1989年) 113

第一節　独自の方向と政策課題 113
１．価値と方向設定 113
(1)　時間の蓄積性と軌跡 113
(2)　独自性と現在性 117
２．経済問題の迷：第3次7ヵ年計画の展開 120
３．「祖国統一」課題の先送り 126

第二節　「首領神話」のシンボル操作 130
１．「社会政治的生命体」の過去操作 130
(1)　「白頭山密営」の象徴化 130
(2)　「口号木」の大量発掘 133
２．　絶対的存在と「建国神話」の同一化 137

第三節　「民族主義」への回帰 140
１．「血統」・「民族」の再定立 140
２．「朝鮮民族第一主義」精神 142

小　結 148

第４章　「首領権力」のさらなる強化（1990年～1991年） 151

第一節　社会主義諸国の変質と「三大危機」 152
１．イデオロギー的「危機」 152
２．安保的「危機」と経済的「危機」 154

第二節　「われわれ式」イデオロギーへ 158
１．社会主義諸国との区別装置 158
２．「北朝鮮式」の三つの特徴 161
３．イデオロギー的抑圧機構の再編と「首領の党」 164

第三節　物理的抑圧機構と強制力の再編 169
１．「社会政治的変革」の開始 169
(1)　首領直轄への司法権（司法・検察・警察） 169
(2)　軍権強化：「革命の軍隊」から「首領の軍隊」 172
２．「経済的変革」：蓄積経済・消費経済の分離 181

小　結 186

第５章　「首領権力」の擁護・固守・安定化（1992年～1994年） 189

第一節　「政治文化的変革」：説得手段の重視 190
１．美的認識の政治過程導入 190
２．大衆行動論と「情緒政治」 193
３．大衆と権力の血縁的紐帯 199

第二節　「首領権力」の合法化 205
１．憲法改正：立法権・行政権「独占的形態」へ 205
２．「一つの大家族」論：政治方式の変容 210
(1)　「忠誠」の持続・「孝誠」の登場 210
(2)　「仁徳政治」から「銃・爆弾精神」へ 214

第三節　金日成の80年の生涯と「首領権力」 219
１．「傘寿演説」と三つの権力観 219
２．「首領権力」の計量的検討 224
(1)　「現地指導」の計量分析 224
(2)　文献の計量分析 227

小　結 235

終　章 239
１．「首領権力」の確立 239
２．「静かな変革」による「首領権力」の特徴 242
３．国際環境の激変とさらなる「首領権力」の強化..... 245

参考文献 253

[図・表]の目次

１．図

[図2－1]　「首領」概念の三段階の変遷史 68
[図2－2]　「社会政治的生命体」論における「首領」概念の構造 77
[図2－3]　首領・後継者の三つ領域の構造 85
[図2－4]　首領・後継者・党の構造的変貌 90
[図2－5]　党の「支配と服従の交換通路」の構造 94
[図2－6]　思想教化体系の変容 99
[図2－7]　「首領権力」の支配構造と作動原理 109
[図5－1]　「仁徳政治」への政治方式の変容 215
[図5－2]　「桃」に比喩した首領中心の構造 221
[図5－3]　金日成・金正日の「講義録及び論文、書簡」の頻度 230
[図5－4]　金日成・金正日の「大衆演説」の頻度 231
[図5－5]　金日成・金正日の「結論及び命令」の頻度 232
[図5－6]　金日成・金正日の外国人に対する「演説・談話」の頻度 233

２．表

[表4－1]　唯物史観と主体史観の相違な主張 163
[表5－1]　「首領権力」の政治的安定化過程 198
[表5－2]　金日成・金正日の「現地指導」の頻度 225
[表5－3]　文献に収録された「教示」と「お言葉」の頻度 228

序　章 「首領権力」の仮説

１．問題提起と研究目的

(1)　問題提起

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略す）において「首領」は特殊な存在である。現在、北朝鮮は「全社会が首領を中心として一つの社会政治的生命体」を形成する中で、「首領と人民の間に切っても切れないほどの血縁的連結がしっかりと堅固に繋がっている」[1]と自負している。首領は、「一つの社会政治的生命体を構成する人民大衆の最高脳髄であり、団結の中心として絶対的な地位を占め、社会の発展において決定的役割を果たす」[2]と位置づけられている。首領の領導は「社会主義偉業の生命線である」ために、「首領の領導を離れては社会主義制度も、社会主義建設もあり得ないし、社会主義偉業の完成について考えることさえできない」[3]と規定される。つまり、首領は絶対的な存在として認識されることになる。

北朝鮮において首領は、広い範囲で金日成(1912～1994)・金正日(1942～2011)・金正恩(現在の北朝鮮の「領導者」、生年月日は公表されていない)の三代に世襲される最高権力者を示すように見えるが、厳密に言えば金日成のみを指す政治的な概念である。現在北朝鮮は、最高権力者の呼称においては、金日成を

---

[1] 「고상하고 건전한 사회주의생활양식」(「高尚で健全な社会主義生活様式」『労働新聞』2014年2月20日)5面。
[2] 김양환 「우리식 국가정치체제의 본질적 특성」(金ヤンファン「われわれ式国家政治体制の本質的特性」『政治法律研究』2011年4号、平壌：科学百科辞典出版社)9－10頁。
[3] 최승주 「수령절대신뢰심, 흠모심은 사회주의 위업의 성과적 수행을 위한 위력한 사상정신적 담보」(崔スンジュ「首領絶対信頼心、欽慕心は社会主義偉業の成果的に遂行するための威力な思想精神的担保」『政治法律研究』2010年2号)9頁。

「偉大な首領」、金正日を「偉大な将軍」、金正恩を「偉大な元帥」と称している。2013年1月、平壌で開催された朝鮮労働党第4回細胞書記大会において、金正恩は「わが党と軍隊と人民は、偉大な首領様と将軍様の不滅の太陽旗の下で固く団結しており、首領様と将軍様の遺訓を守り、自主の道、先軍の道、社会主義の道に従って正しく前進している」[4]と豪語した。金正恩は、この演説のなかで祖父である金日成を「偉大な首領」、父親である金正日を「偉大な将軍」と呼び、「首領様と将軍様」という言い方を11回も多用し、同年4月に行った改正憲法において金日成を「偉大な首領」、金正日を「偉大な領導者」と法文化した[5]。

現在、イデオロギーとしては「金日成・金正日主義」を標榜しているが、これは1974年に公式化された「金日成主義」を本質としている。政策原則と指針に関しては金日成だけが首領様の「教示」とされ、政策執行の方針に関する金正日・金正恩を示す将軍様と元帥様の「お言葉」とは区別される。ここにも明らかなように、北朝鮮で「首領」は、現在においてもなお金日成一人なのである。結局、首領が特殊ではなく、金日成が特殊な存在であると言ってよい。金日成は1994年7月8日に死亡したが、現在も絶対的な存在として「永遠の首領」の地位を占めている。

ここでなぜ、1994年に死亡した金日成が20年過ぎた現在においても、北朝鮮に大きな存在感を維持しているのか。なぜ、金正日は金日成の死後、最高権力を3年も空席にしたのか。金日成が存命中において金正日に独裁権力を移譲したのかという権力の本質的問題に関わる疑問が生じる。これまで金日成から金正日に権力が移動したという「権力移譲」の通説を、金日成の最高権力は移動もせず、分

---

[4] 김정은「조선로동당 제4차 세포비서대회에서 하신 연설」(金正恩「朝鮮労働党第4次細胞秘書大会でおこなった演説」『労働新聞』2013年1月30日)1－2面。
[5] 『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』(日本語版)平壌：外国文出版社、2014年、1－2頁。

立もせず、金正日の補完的役割によって支えられ、最後まで安定化されたのではないかという問題が提起される。

振り返ると、「首領」という用語は1967年に金日成が党の唯一的思想体系の確立を提示した時から使われるようになり、70年代の「全社会の金日成主義化」と80年代初頭の「全社会の主体思想化」というイデオロギー強化と共に変貌してきた。とくに1972年の国家主席制の導入は、首領の絶対的地位を強化させる契機になり、翌年の73年から首領概念はより一層頻繁に使われるようになったのである。

首領の地位と役割の大きさを奉じる上で、後継者は重要な役割を果たしたと見ることができる。金正日は、金日成の健康に関わる問題を最優先に位置づける中で、父親が60歳の還暦を迎えた1972年からは金日成の誕生日を国家の「最大の慶祝日」に設定し、73年に後継者に内定したあとは、74年2月19日に「全社会の金日成主義化」を宣布して父親の個人崇拝を一段と進めると共に、父親の認定のもとでイデオロギーの解釈権を得て、後継者としての力量を強化してきた。また、金日成が70歳になる1982年には、北朝鮮を主体思想国家へと具現化することに腐心し、主体思想を体系化した。こうして、金正日は、首領をより高く奉じ、首領の権威と偉大性を強調するために積極的役割を果たしたのである。

こうして確立された首領の権威と偉大性は、金正日によって1986年7月15日に行われた「主体思想教化で提起されるいくつかの問題について」（以下、「7.15談話」と記す）と題する談話の「社会政治的生命体」論で、さらに大幅に変化することになった。首領は、首領・党・大衆によって構成される「社会政治的生命体」の最高脳髄として、絶対的位置と決定的役割を果たすものになったのである。この時点から、党も大衆も「最高脳髄である首領」が命ずることをただ実行に移す存在となった。過去にも、首領は革命と建設において絶対的地位と決定的役割

を果たす最高脳髄であったが、それはあくまでも「革命と建設」に対するものであり、生存そのものに対するものではなかった。「社会政治的生命体」論における首領は、人民大衆の「生殺与奪」権を持つことになったのであり、それが過去と異なる点であった。

ここで指摘しておきたいのは、「7.15談話」といわれるこの談話は、金正日の名前で公開されたが、実際の執筆者は黄長燁（ファンジャンヨプ）（1923－2010）[6]であるという事実である。黄長燁は筆者とのインタビューの中で、「7.15談話」は自分が直接執筆したと証言しながら、「社会政治的生命体」論には金日成の権力意志がそのまま反映されたと説明した[7]。また、1989年4月に伊豆見元(静岡県立大学教授)が平壌の社会科学者協会を訪問した際、黄長燁が「7.15談話」が収録された金正日の論文集に自分の名前をサインして渡したことにも、黄長燁が執筆したことが間接的に証明されている[8]。北朝鮮では、金正日の名で出された如何なる文献も、金日成の許可がなければ作成することはできない。金日成の存命中において金正日の全ての発言等が、金日成の意志に従って作成されるのは当然なことである。

たとえば、金日成は存命中に「金日成主義」という用語を一回も使ったこと

---

[6] 黄長燁は1923年2月7日、平安南道江東郡生まれ。戦前に、日本の中央大学法学部で学んでいた事もある。1949年、ソ連(現在のロシア)のモスクワ大学へ留学し哲学博士号を取得する。帰国後は金日成総合大学で教鞭を執り、1962年最高人民会議代議員、1965年同大学総長に就任。1970年には朝鮮労働党中央委員会委員に就任し、その後要職を歴任する。1972―1983年まで11年間最高人民会議議長を務めたが、この時期には金日成の側近であり、北朝鮮の統治イデオロギーである主体思想を創造した本人である。1979年朝鮮労働党科学教化担当書記及び主体思想研究所長、1980年朝鮮労働党書記、1984年朝鮮労働党国際担当書記、1987年朝鮮社会科学者協会委員長、1993年最高人民会議外交委員会委員長などに勤めた。1997年、主体思想に関する講演のため訪日した直後、帰路の中国の北京で秘書の金徳弘(キム・ドッコン朝鮮労働党中央委員会資料研究室副室長)と共に韓国大使館に赴き亡命を申請する。その後、韓国で活発な政治哲学の執筆活動を行い、2010年10月10日に86歳の生涯を閉じた。황장엽『회고록』(黄長燁『回顧録』ソウル：時代精神、2006年)と黄長燁著、編集部訳 『北朝鮮の真実と虚偽』光文社、1999年などの著書を参照した。

[7] 黄長燁との2009年2月20日と2010年9月13日、ソウルの江南区宣陵洞に位置している執務室で行ったインタビュー。

[8] 2009年10月11日、静岡県立大学国際関係学研究科伊豆見研究室で行ったインタビュー。

がない。さすがに、本人自らが「金日成主義」と言って自分を称賛することは、好ましくないと判断したのであろう。したがって、「全社会の金日成主義化」を喧伝する際にも、息子でありながら他人である金正日に任せて、それを推進するしかなかったと思われる。以上のことを勘案し、本研究では金日成と金正日の談話等を区別することなく、すべて「金日成の考え」として使用することにする。「社会政治的生命体」論によれば、人民大衆は、党の領導の下で、首領を中心として組織思想的に結束されることにより、永遠の「生命力」を持つ一つの「社会政治的生命体」を構成する。個別的人間の肉体的な生命には限りがあるが、「社会政治的生命体」に結束された人民大衆の生命は永遠になる[9]。逆に社会や集団よりも個人の利益を優先する人間は、社会や集団に捨てられ、根と枝から落ちた葉のような存在になってしまう[10]。ここでは、社会と集団の中心が首領であるために、首領から離れた人間は政治的生命がなくなることを暗示している。

こうして、「社会政治的生命体」の首領は、生命体の最高脳髄として人々の「生と死」を決定しうる、「生殺与奪」権を握ることになる。本研究では、これを「首領権力」と呼ぶことにする。「首領権力」は 1986 年に生成された首領の決定権と首領中心の統治メカニズムでもある。「首領権力」の量は、首領・党・大衆の力の総量であり、「首領権力」の範囲は「社会政治的生命体」であり、そして「首領権力」の対象者は、後継者・党・人民大衆である。つまり、高度に集中化された金日成のみの終身権力を意味する。「首領権力」は、首領を北朝鮮のすべての源泉として見なす結果を生み、首領の出現は歴史上において一回のみに

---

[9] 김정일 『주체사상교양에서 제기되는 몇가지 문제에 대하여』（金正日『主体思想教化で提起されるいくつかの問題について』朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する談話、1986年7月15日、平壌：朝鮮労働党出版社、1987年）18頁。

[10] 김정일 『현시대와 청년들의 임무』（金正日『現時代と青年の任務』朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する談話、1988年10月12日、平壌：朝鮮労働党出版社、1989年）5頁。

限る存在として論じられ[11]、結局、金日成のみが首領として特殊な存在に位置づけられることになった。1980 年代半ばまで、金日成は独裁権力の「獲得及び強化」に努めてきたが、1986 年以降は「維持及び安定化」への再編を目指して「首領権力」を創造したのである。

本来、首領は共産党内での選挙によって選ばれる存在であった。レーニンは「党の定期大会で『首領たち』を自由に正式選挙」[12]すると言った。首領は一人ではなく、選挙によって『首領集団』が選出されたことを想起すると、北朝鮮での首領は人民の生命の親であるため、人民大衆が選挙によって選出するのではなく、自然発生的に出現し人民大衆の推薦を受ける[13]、超人間的な絶対的存在になる。こうして、「社会政治的生命体」論において首領の地位と役割が新たに定義されたことによって、首領と後継者との関係が明確になる。北朝鮮で後継者は首領の領導的役割を継承することになっている。

しかし、「社会政治的生命体」の最高脳髄としての絶対的地位は首領に固有のものであり、後継者は、団結の中心的役割と領導的役割という「首領の決定的役割」の二つの要素のうち、領導的役割のみを継承することになる。換言すると、首領の固有性は、絶対的地位と団結の中心的役割にあることになる。首領と後継者は、領導的役割を共有し、それは首領から後継者へと継承される。したがって、「社会政治的生命体」論に基づくと、首領は誰によっても代わることができない構造になった。このような観点からすれば、1990年代初頭の金正日に対する最高司令官や国防委員長への推戴は、金日成から金正日への権力移行を意味するもの

---

[11] 「社会政治的生命体」論を執筆した黄長燁は、超人間的な絶対的存在である「首領の出現は一回だけであり、その次からは首領に最も忠実な人間がその地位を譲り受けることになる」と証言した。黄長燁著、編集部訳 『北朝鮮の真実と虚偽』光文社、1999年、211頁。

[12] 맑스 엘겔스 레닌 쓰달린 『로동 계급의 당』（マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン『労働階級の党』(原文の抜粋本)平壌：朝鮮労働党出版社、1965年）394頁。

[13] 黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、211頁。

ではなく、「首領権力」を持つ金日成が、金正日への一部の権限を移譲しただけに過ぎなかった、ということになろう。

したがって、それまで「革命と建設」の最高脳髄であった首領は、なぜ、1986年に主体思想を再定義する中で、「社会政治的生命体」の最高脳髄として生まれ変わったのか。なぜ、金日成は自分を「首領権力」を持つ強大な存在にしたのかと疑問が生じる。この時期、北朝鮮は「前から予測された」金日成の高齢化というきわめて重大な課題に直面していた。当時、金日成は1987年に75歳になって高齢化が進んでおり、実際、国家の最高統治者として決定的役割を果たすことは無理であったと見られる。人間の身体の生理的変化は心理的結果を招来するために[14]、最高統治者の高齢化は、北朝鮮の政治体制に影響を及ぼすのが避けられないものである。

北朝鮮は人間の高齢化について次のように定義する。「わが国では初老期は60歳、中老期は70歳、老衰期は75歳から80歳と見ることができる」[15]。これを当てはめれば、金日成の高齢化は1972年の60歳から始まり、1982年には70歳の中老期を経て、1987年の75歳から老衰期に入った。

しかし、金日成の長命に対する欲望はきわめて強く、さらに仕事を継続する意志も持っていた。1987年4月21日に金日成は、75歳の誕生日を祝賀する在日朝鮮人代表団との談話で、「わたしはまだ、およそ10年は健康な体で仕事を続けるでしょう。わたしは今回外国の代表団の殆どと会いましたが、彼らはわたしの手を握って金日成主席の誕生80周年の時に来ると、85周年の時に来ようし、90周年の時にも来て、100周年の時にも来ようと言いました。また、ある外国代表団の

---

[14] E．H．エリクソン・J．M．エリクソン・H．Q．キヴニック著、朝長正徳・朝長梨枝子共訳『老年期』みすず書房、1990年、53頁。
[15] 리재순 『심리학개론』(李ジェスン『心理学概論』平壤：科学百科辞典綜合出版社、1988年)432頁。

メンバーは、わたしの誕生日110周年の時にも来て、120周年の時にも来ると言いました。わたしは彼らの話に大きな鼓舞されました。彼らは、おそらくわたしが長生きして良い政治を行うことを願うという念願からそのように話したようです」と述べた[16]。長生きしたいという欲望と共に、政治を続けようという金日成の強い意志がまさに「社会政治的生命体」論に反映されたと見られる。金日成は、少なくともそれから10年ほど健康な体で政治権力を行使することを考えていたのである。つまり、金日成は年齢を意識して「首領権力」を強化したと見ることができるだろう。

権力を強化しなければ権力の維持が困難になり、強化すれば少なくとも現在の権力を維持することは可能だ、と金日成は考えたものと思われる。したがって、金日成は「首領権力」に最も正統性を付与する革命伝統を再構築し、1987年には「白頭山密営」構築をはじめとする「首領神話」のシンボル操作を行った。また89年の民族遺産の発掘及び「わが民族第一主義」精神の高揚などの社会における実践化を通じて、首領の偉大性をより一層高めることに努めたのである。こうして「首領権力」は、1992年4月に「われわれ式社会主義制度」として憲法の中にも定式化されるようになった。結局、「社会政治的生命体」論は、「首領権力」という政治体制を生み出す転換的契機となる論理であったのである。

「首領権力」を創造した金日成は、朝鮮労働党総書記、朝鮮民主主義人民共和国主席、党中央軍事委員会委員長の最高決定権を握ったまま、1994年に82年の生涯を閉じた。金日成の死後、金正日は「わが民族の建国始祖は檀君であるが、社

---

[16] 김일성 「총련은 예술활동에서 민족적인 것을 적극 살려야한다」（金日成「総連は芸術活動で民族的なものを積極生かせるべきである」在日本朝鮮人芸術団、在日同胞祖国訪問団、総連支部幹部代表団、在日本朝鮮人科学技術協会代表団、総連金鉱山歌曲団後援会代表団との談話、1987年4月21日、『金日成全集』第85巻）386頁。

会主義朝鮮の始祖は偉大な首領金日成同志です」[17]と述べ、金日成を建国始祖として位置づけた。金正日は、首領様を離れては今日の朝鮮を語れないし、首領様を離れては民族について考えることもできないと強調した。こうして、「わが政治体制は首領・党・大衆の一心団結を基礎にしているために、絶対的に揺れないのです」[18]と断言し、金正日は首領・党・大衆の「社会政治的生命体」論が金日成死後もなお政治体制の論理であることを明確にしたのである。

本研究はこのような「首領権力」創造の要因を金日成の高齢化に求め、その形成過程と「生殺与奪」権の制度化過程を考察する。人間として力が落ちる時期に権力維持に関心を注いだ結果、金日成は「首領権力」のさらなる強化に努め、その結果、金日成の権力は低下することがなかった。「社会政治的生命体」論以後、人民の「生殺与奪」権をしっかりと握ったからである。

(2) 研究目的

本研究は以上のような問題意識に基づき、北朝鮮における新たな「政治体制で首領は中核をなす」[19]という論理構造と、「革命の主体は首領・党・大衆の統一体」と定義した「社会政治的生命体」論を、共に「首領権力の装置」として位置づけ、「首領権力」の形成過程、実践的社会化過程、制度化過程を綿密に検討する。本研究の目的は、北朝鮮において1986年に確立した金日成の「生殺与奪」権のさらなる強化が金正日の補完的役割によって支えられ、最後まで安定的であったとい

---

[17] 김정일 「위대한 수령님을 영원히 높이 모시고 수령님의 위업을 끝까지 완성하자」(金正日「偉大な首領様を永遠に高く奉じ、首領様の偉業を最後まで完成しよう」朝鮮労働党中央委員会責任幹部 と の 談話、1994年10月16日、『 金正日選集 』 第13巻、1998年)427－428頁。

[18] 同上、429頁。

[19] 안천훈 「우리의 국가정치체제는 불패의 정치체제이며 가장 위력한 정치체제」(安チョンフン「われわれの国家政治体制は不敗の政治体制であり威力な政治体制」『政治法律研究』2004年1号) 5頁。

う「首領権力」の仮説を検証することである。それを通して、現在の北朝鮮の政治動態をめぐる議論に向けて新たな視点を提供することを目指す。具体的には、北朝鮮における自らの「政治体制」の実践理論とも言われる「社会政治的生命体」論を中心に首領と後継者、党、人民大衆の関係と相互作用を把握する同時に、その動因を明らかにすることによって金日成の権力が最後まで移譲されなかったことを明らかにする。そのためにまず、1986年7月15日に発表された「社会政治的生命体」論の論理的構造と構成要素の相互原理を検討する。この論理では首領・党・大衆からなる運命共同体で首領の絶対的地位と決定的役割が明確になったことによって、後継者の地位と役割が規定されたし、党・大衆の地位と役割がともに規定されたことを明らかにする。

本研究は「首領権力」の論理的側面においてまず、「社会政治的生命体」の中心である「首領」概念を綿密に分析して「社会政治的生命体」を構成する首領・党・大衆の相互作用と、首領・後継者の「相互依存的・補完的関係」を明らかにする。また、「首領権力」の社会実践的側面においては、「首領権力」を社会化するために1987年から第3次7ヵ年計画の大衆運動を展開する中で、大衆に対する「強制と説得」の方法をうまく利用し、人々の忠誠心を高揚させる政治方式も分析の対象とする。大衆に対して「社会政治的生命体」の意識を持つように教化を行い、結果的に「われわれ式社会主義」の優越性に繋がる、誇りや幸せを感じるような効果がそこには生じた。「われわれ（北朝鮮）式社会主義」とは、「首領権力」が支配する社会政治メカニズムを意味するのである。この点については、北朝鮮の大衆に対する理論教化や実践教化の方法について具体的に分析していきたい。1992年4月の憲法改正によって、首領の思想が国家の指導理念として成文化され、首領の独占的国家機構と命令権の体系が制度化された。その分析を通して、「首領権力」の制度的特徴を抽出する。

さらに、「首領権力」が産まれた背景に着目し、その要因を明らかにする。「社会政治的生命体」論は、86年5月に金日成が金日成高級党学校創立40周年を記念して執筆した「講義録」で党建設の三つの権力原則を提示したことに起因する。この一つの思想、一つの行動、一貫する継承性――という原則は、45日後の7月15日に「社会政治的生命体」という一つの生命体論として生み出された。理論的構成である主体思想教化の一つの体系、首領と大衆の渾然一体、そして社会政治的生命体の永遠性の価値は、金日成の「講義録」を基にしたものであった。

本研究では「社会政治的生命体」論の前提である「人間には肉体的生命と政治的生命がある」ことを、人民大衆のみならず首領や後継者にも適用して分析を試みる。それは北朝鮮の論理からすれば、金日成と金正日が党員及び大衆に向けて一方的に使用した論理であるものの、最高権力者としても人間である限り「肉体的生命と政治的生命」から抜け出すことはできない。金日成は最高決定権者であっても人間として高齢化が進み、金正日は後継者であっても首領の負担を減らす役割が義務となった。結局、「首領権力」は後継者・党・大衆のすべての力がそこに吸収され肥大化する存在であったと思われる。

２．先行研究の検討

本研究の問題意識と目的に照らせば、北朝鮮研究における先行研究の特徴は、北朝鮮の権力問題において金日成から金正日に権力が移動したということが一つの通説として認められてきた点である。つまり、「権力移動」説である。北朝鮮研究は文献や資料の制約が非常に大きいにもかかわらず、先行研究は少なくない成果を生み出してきた。だが、未だに解けていない問題が残っている。たとえば、

果たして金日成の最高権力が金正日に移動していたのか、金日成は権力移動あるいは権力分立を認めていたのかという疑問は依然として解けていない。それは、権力の移動や分立は競争と対立を前提にするからである。その点を意識しつつ、ここでは金日成の生涯の最晩年の時期、首領と後継者の二つの力が存在した1986年から1994年にかけての時期を中心に、先行研究について検討していくことにしたい。

代表的なものとして、鐸木昌之[1992、2014]、 李スンヨル[2009]、 金光仁[1998]、鄭成長[2011]、白鶴淳[2010]、平岩俊司[2013]、和田春樹[2012]の研究がある[20]。

まず鐸木昌之は、1992年に出版した『北朝鮮――社会主義と伝統の共鳴』という著書で北朝鮮の体制を「首領制」と特徴づけ、それを首領の領導において代を続けて継続的に実現することを目的とする体制であると定義した[21]。鐸木によると、北朝鮮に導入された社会主義体制が困難な国際環境、国内的条件、そして独特の革命課題に直面する中で、独自の構造と論理を有する体制に変貌したのが「首領制」である。鐸木は、「首領制」の構造と論理を解明するために、権力構造、イデオロギー、政治指導、そして権威と神話に焦点をあてて分析を行った。鐸木は「首領制」の論理構造について、首領は国家機関、党、そして人民大衆のすべてを決定することを核心に、これを循環論法の繰り返しと積み重ねの上に成

[20] 鐸木昌之『北朝鮮――社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会、1992年。『北朝鮮――首領制の形成と変容』明石書店、2014年。이승열 「『수령체제』의 변화와 『수령승계방식』의 한계에 관한 연구」(李スンヨル「『首領体制』の変化と『首領継承方式』の限界に関する研究」ソウル：北韓大学院大学校博士学位論文、2009年)。김광인 『북한 권력승계에 관한 연구』(金光仁『北韓の権力継承に関する研究』ソウル：建国大学校博士学位論文、1998年)。정성장 『현대북한의 정치』 (鄭成長『現代北韓の政治』ソウル：ハンウルアカデミー、2011年) 。백학순 『북한 권력의 역사』(白鶴淳『北韓権力の歴史』ソウル：ハンウル、2010年)。平岩俊司『北朝鮮――変貌を続ける独裁国家』中公新書、2013年。 和田春樹『北朝鮮現代史』岩波新書、2012年。

[21] 鐸木昌之[1992] 、前掲書、15頁。

立すると評価した[22]。

このように早い段階で行った鐸木の発見は、その後の北朝鮮研究の礎石を備えたことから重要な功績と評価される。鐸木は2014年に出版した『北朝鮮――首領制の形成と変容』という著書で、北朝鮮における後継体制構築の最終段階は1990年から始まり、92年4月20日に金正日が朝鮮人民軍元帥に就任して名実共に「偉大な首領」への最終段階に入ったと分析する[23]。この研究の特徴は「首領制」を一種の機関として見なし、首領職が継承されるという点にある。しかし、筆者は「首領」はそもそも継承されるものではなく、金日成ただ一人のものであると考えている。実際、金正日と金正恩は「首領」を継承しなかった。

李スンヨルは、「『首領体制』の変化と『首領承継方式』の限界に関する研究」というタイトルの博士論文で、北朝鮮の政治体制を「首領体制」と位置づけ、鐸木と同様に、「首領承継方式」に注目する。李は、「首領体制」の形成過程で後継体制との相互関連性の核心を金日成の唯一的領導体系の確立と見た。1974年から1986年時期を「首領体制」の堅固化時期と設定し、この過程は後継者を党の領導者につくり上げる過程であった[24]と主張した。彼は、金正日が党の領導者として党の領導体系を確立する過程を、二つ方向で進んだものとして分析している。一つ目は、イデオロギーの解釈権の独占を通した後継体制の正統性を確保する方向であり、二つ目は、党の権力機構を金正日に集中させることによって金正日の指示に従って服従する体系と規律を成立させたとする方向である[25]。

このような解釈は、金日成から金正日へと首領職が継承されるシステムとして捉えられるものである。李の議論の問題は、「首領体制」の中で後継体制はそ

---

22 同上、142頁。
23 鐸木昌之[2014]、134頁。
24 李スンヨル、前掲論文、119頁。
25 同上、117頁。

こに従属したと主張しながらも、後継者の役割をあまりにも大きく評価する点であろう。このような観点は、「首領体制」と言いながらも、金正日への権力集中現像のみに集中した結果、首領であり最高権力者であるのは金日成だという事実が等閑視されることになる。

金光仁は、『北韓の権力継承に関する研究』というタイトルの博士論文で、金日成から金正日への権力承継過程を綿密に検討し、世襲継承の時点とそれを可能にした要因を分析するところに力点をおいた。彼は、北朝鮮での権力継承は他の社会主義国家での一般形態とは次元を異にすると主張する。そして北朝鮮の権力継承は、本質的に単純な権力の継承ではなく「政治的首領の地位と役割を継承」するものだと定義する。金の議論は、鐸木や李などと同様に「首領職の継承」と見ることが出来るが、先にも述べたように金正日も金正恩も「首領」を継承したわけではない。

「権力移動」説をさらに明確に強調する研究は、鄭成長と白鶴淳の研究である。鄭成長は『現代北韓の政治』という著書で、北朝鮮体制を首領中心の党・国家体制と位置づけ、1980年代に金日成から金正日へと権力が移動したと明確にする[26]。金正日は「首領の後継者」としてすでに強固な権力基盤を有していたが、1980年代末に東欧社会主義体制の崩壊とソ連の解体など対外環境が急激に悪化する中で、金正日に対する国家権力の移譲も急いで実行に移された、と鄭は評価した[27]。この鄭の議論は、金日成存命中に権力は殆ど金正日の手に移譲されていたと考える見解の典型的な例である。

白鶴淳は『北韓権力の歴史』という大作で、北朝鮮における金日成・金正日・金正恩の三代世襲の歴史を記述した。白は権力者の思想とアイデンティティ

---

[26] 鄭成長、前掲書、106－114頁。
[27] 同上、115頁。

が権力の現実や権力行為に決定的な影響を及ぼすと見なし、金日成が建国以来権力を掌握するまでの権力闘争の歴史を詳しく分析した。しかし、北朝鮮の権力構造において制度的次元を強調したあまり、権力者の個人要素を参照しなかった点が不十分である。白は金正日が金日成の権力を継承するときには金日成の健康問題もなく、名実相伴う首領の権威と力を持つ指導者に金正日はなった[28]と説明した。金日成が60歳になる1972年前後から彼の健康問題が最大の政治的重要性を持っていたにもかかわらず、このように主張することは、金正日の役割を首領(金日成個人)の意志を実現するという北朝鮮の論調を、可視的側面だけで分析した結果だと思われる。鄭と白の観点から見た場合、北朝鮮の権力構造において首領個人の権力源泉を説明することが難しい。独裁者の個人的欲望（健康と事業）が権力作用に与えた影響、政策決定過程に与えた個人レベルの政治的要素を、これらの研究は看過したのである。

また、平岩俊司は、『北朝鮮――変貌を続ける独裁国家』で北朝鮮を「独裁国家」と規定して、独裁体制の変貌を描いている。彼は、金日成が準備した権力継承は、首領の継承に他ならず、そこにはイデオロギー解釈権の独占についての継承も含まれていると分析した[29]。平岩は、1990年代に入って金正日への権力継承が始まり、93年4月にはこれまで金日成に集中していた権力の一部がついに金正日に移譲されたと主張する。つまり、党・国家・軍の三つの柱のうち、金日成から金正日に最初に譲られたのが軍のポストであるとしたのである[30]。このような解釈は、金日成と金正日の間の権力分立を意味する。しかし、「独裁国家」の特性は一人独裁体制であるために、いくら父子関係の中であっても権力分立は有り得ないものである。

---

[28] 白鶴淳、前掲書、740頁。
[29] 平岩俊司、前掲書、103－122頁。
[30] 同上、122頁。

和田春樹の『北朝鮮現代史』は、現代史的観点で北朝鮮社会を時系列的に分析したものである。金正日を金日成の後継者にするための直接的な準備が1992年、金日成の80歳傘寿の前後に本格化したと和田は説明する[31]。和田は、1992年の憲法改正によって軍事問題が主席の権限からはずされたことで、結果的に軍事面から金正日への権力移行が始まったと評価した。和田も平岩と共に権力分立の観点で説明したのである。

そのほか、北朝鮮の権力構造に関して説明しながらも権力移動を明確に論じてない研究――朴洞重[2002]、李鍾奭[1995] 、李相禹[2011]などがある[32]。朴洞重は、北朝鮮の内部政治と権力、また支配関係の起源と性格などを中長期的な観点から検討し社会政治的動態性を把握しようと試みた。彼は比較社会主義的アプローチを通して、社会主義国家の類型を分類して北朝鮮との比較を試み北朝鮮の政治と権力、支配と服従の体系を明らかにしようとした。北朝鮮体制の特殊性の核心要因は「一人絶対権力体系」と「主体思想」という二つが指摘される。これら二つの要因は、北朝鮮の政治を把握するうえで不可欠だと言えようが、金日成と金正日の関係については明確に説明されていない。

李鍾奭は、北朝鮮において強力な権力手段である朝鮮労働党の研究に焦点を当てている。この研究では、「唯一指導体制」という概念化に基づいて党・国家体制における首領という最高指導者の役割に注目している。首領を中心に全体社会が一つの枠に再編されていると評価し、「この体系は首領という最高指導者1人に集中されている」と論じている。つまり、唯一指導体系が貫通する社会体系がすなわち北朝鮮体制であると規定している。このような主張は、独裁者の個人

---

[31] 和田春樹、前掲書、155－180頁。

[32] 박형중 『북한의 정치와 권력』(朴洞重『北韓の政治と権力』ソウル：白山書院、2002年)。이종석 『조선로동당 연구』(李鍾奭『朝鮮労働党研究』ソウル：歴史批評社、1995年）。이상우『북한정치: 신정체제의 진화와 작동원리』(李相禹『北朝鮮政治：神政体制の進化と作動原理』ソウル：ナナム、2012年)。

要素が体制に与えた影響については目を向けていないところが本研究との異なる部分である。李の研究は、指導思想に中心を置いているために、権力構造や政治変動に関する分析は特になされていない。

李相禹は、北朝鮮の政治体制の特性を「神政体制」であるとした[33]。北朝鮮政治がスターリン式の共産主義国家から出発して半世紀の間に金日成主体思想を基礎にした神政体制へと変質してきた過程に焦点を合わせている[34]。神政体制の進化と作動原理に注目しながらも、李の議論は北朝鮮の政治体制を全体主義的構成体系として見る[35]。他の全体主義国家では先にイデオロギー、そして次に体制が導入されたのに対して、北朝鮮は体制が先に導入されその次にそれを正当化するイデオロギーが作り出されたために、体制とイデオロギーの間には食い違いがあると指摘した。この点は重要な指摘ではあるが、イデオロギーを重視したために北朝鮮の権力構造そのものに関する明確な解明が不足しているようである。

以上のように、北朝鮮の権力研究において通説となっている「権力移動」説は、独裁権力を、その作用関係に着目せずシステムの特性だけに注目するという共通点を持つ。換言すれば、権力の可視的な執行の側面（システムの特性）に関する分析だけを行い、最高権力者の個人レベルから生じる権力の源泉と構造的な側面（作用関係）に注目しなかった結果であると言ってよい。代表的事例は、「首領権力」を生み出した論理である「社会政治的生命体」論に関する解釈からも示される。和田は金正日が「社会政治的生命体」論を打ち出したのは、前と「同じスローガン、同じデザインを繰り返していると、人心が倦むことを意識し

---

[33] 神政体制とは、国家統治における特定宗教を統括する組織と国家の統治機構が実体的に同等な場合である。

[34] 李相禹『北朝鮮政治と権力――支配関係の起源と概念、構造と動態』、89－93頁。

[35] 全体主義体制とは、個人の全ては全体に従属すべきとする思想または政治体制の1つである。この体制を採用する国家は、通常1つの個人や党派または階級によって支配され、その権威には制限が無く、公私を問わず国民生活の全ての側面に対して可能な限り規制を加えるように努める。例えば、ヒトラーのナチズム、スターリニズムなどである。

ていたようだ。だから、看板をかけかえるように、新しい迫力のあるデザインを打ち出そうとしたのである」と解釈した[36]。

一方、鐸木と平岩は、「社会政治的生命体」論が生み出された要因を、外的環境の条件変化と資本主義に対する北朝鮮の認識変化に求めている。いずれにせよ、以上の先行研究はすべて「社会政治的生命体」論を金正日独自の論理であると見ている。しかし、実際は「社会政治的生命体」論を起草したのが主体思想を起草した黄長燁であったことからも明らかなように、それは金日成の権力への意志から出された論理であったと見るべきだろう。振り返ると、金日成の健康と事業を補佐する使命（忠誠心）をもって登場した後継者金正日は、「全社会の金日成主義化」への展開過程で制度的権力を金日成の健康と事業を最優先に保障する手段へと変化させることに努めたのであった。

先行研究は、1987年から1994年までの間に、対内的に権力構造、イデオロギー、社会の関係が変化して政治変動が進んだと評価するものが多い。その原因としては、二つの分析が示される。第一に、中国の改革開放への変化に続いて、ソ連のペレストロイカ政策によって東欧諸国の政治変動とソ連の崩壊がもたらされたことを、北朝鮮の変化の一つの原因とした分析である。

第二は、資本主義体制に対する北朝鮮の認識が変わったことを、北朝鮮の変化の一つの原因とした分析である。いずれも外部環境の影響に原因を求めるものであり、政治行為者の状態についてはとくに注目していないが、この時期、北朝鮮の最高意志決定権者である金日成にとって最も重要な問題は、高齢化が進む中で仕事の負担が大きくなる問題であった。それ故、独裁者にとって高度に集中化される権力体系が求められたのではないかと考えられる。金日成は、「権力移

[36] 和田春樹、前掲書、154頁。

動」や「権力分立」ではなく、彼への「権力集中」を強化するための一つの方策として、金正日の権限を拡大させ、彼の権威も高めるようにしたのである。このような観点からみると、先行研究の問題点は、最高意志決定者の健康状態や心理状態が、彼の権力集中化にどのような影響をもたらしたのかを分析していない点に求められるだろう。

３．使用する資料

本研究では、1987年から1994年時期を対象として北朝鮮の社会・政治に関わる北朝鮮側の資料を主として使用する。周知のように、北朝鮮研究において一次資料は大きく二つの側面で制約されている。第一に、主な資料は公刊文献に限られている。最も困難な問題は、北朝鮮が出版した公刊文献以外は、事実上、使用できる資料が殆どないことである。たとえば、政策に関わる資料のみならず、北朝鮮国内において大衆向けの教化用学習教材として使用されている資料までもほとんどが秘密扱いとなっており、対外的には公開されていない[37]。そうした資料的制約から、本研究では、主に北朝鮮が発行した文献――各種の記録、論文、新聞、雑誌、年鑑、単行本、金日成と金正日の著作類などを使用する。

北朝鮮で出版されるすべての資料は、基本的には機関紙であると言ってよい。北朝鮮の説明によると、機関紙は「一定の組織体や機関の立場を代弁」しつつ、

[37] のみならず、時期によって発行される『講演資料』は発行時に部数が制限され、講演会に活用された後は回収される制度もある。また、中央機関に勤める幹部以上には『参考新聞』という日刊資料が配布されるものの、それも回収されることに示されているように、北朝鮮は資料を徹底的に管理している。

「政治闘争に関与する」[38]ものと定義されている。このように、北朝鮮で発刊される資料は政治的目的に使用される手段である。機関紙は、大きく三つに分類される。党機関紙、政府機関紙、勤労団体及び社会団体機関紙の三つである。

北朝鮮が志向する世界が何かをよく示しているのが『金日成著作集』、『金日成全集』、『金日成回顧録』、『金正日選集』などである[39]。北朝鮮において著作物の解釈権は、同時期においては金日成と金正日のみに限られているために、彼らの論文・談話・演説・外国記者とのインタビューなどが総合されているこれらの文献は、北朝鮮の現代史研究において資料的価値がきわめて高い。

北朝鮮の説明によると、『金日成著作集』は北朝鮮の社会主義革命の全過程に金日成の著作物を体系的・全面的に集大成した「革命と建設の大百科全書的な叢書」である。1979年4月から1997年2月まで出版された全44巻の『金日成著作集』は、金日成が死亡する時期までの活動内容を記録したものである。北朝鮮の絶対的な最高統治者である金日成の『金日成著作集』が政策原則と指針であるとするならば、同時に金日成の後継者である金正日の著作物である『金正日選集』は、政策執行と実践方法を示している。

本研究では、金日成の「教示」である『金日成著作集』を政策原則と指針を示すものとして扱い、金正日の「お言葉」である『金正日選集』を政策執行と実践方法論として捉えて使用する。上で説明したように、黄長燁のような第三者が執筆および整理した文献は、その内容の性格に合わせて、政策原則と方向を示す場合は金日成の「教示」に、政策執行と実践方法を論じる場合は金正日の「お言葉」として発表するからである。そのために、すべての内容が金日成の意図を実

---

[38] 『조선대백과사전(3)』(『朝鮮大百科事典(3)』平壌：百科事典出版社、1996年)617頁。

[39] 송승섭 『북한자료의 수집과 활용』(ソン・スンソプ『北韓資料の収集と活用』ソウル：韓国学術情報(株)、2011年)22－23頁。

現するためであると論じるが、これは金日成・金正日の権力正当化に有利な方向で論じられているため、事実関係に関する信頼性と客観性は乏しい。

ゆえに、これらの文献を基本的に活用しながら、時間・空間的な制約を克服するため、1992年から出版されるようになった『金日成全集』[40]を補完資料として使用しつつ、新聞や雑誌などの他の資料も使いながら補完する。そこでは朝鮮労働党の日刊紙である『労働新聞』を主に利用し、北朝鮮が時々に重視する問題を参考にする。『労働新聞』を分析することは、党の立場のみならず、そこから大衆の反応も抽出できるが故に意味が大きい。また、政府の施策や政権の法令、規定及び国家の政策などを理解するために政府機関紙である『民主朝鮮』を活用する。『民主朝鮮』は「国家政策を群衆の中に解説浸透させ、彼らを国家政策実行に動員する」役割を果たしているため、主として群衆動員における刺激と反応を分析することに使用する。

本研究で使用する資料のなかで特記すべきは、朝鮮労働党理論誌『勤労者』である。月刊誌である『勤労者』は、1946年10月から朝鮮労働党の宣伝扇動の手段としての役割を果たしてきた重要な文献である[41]。党の路線と政策を伝えてい

---

[40] 『金日成全集』は1992年4月、金日成の80歳の誕生日に当たって出版が開始され、2012年4月の金日成生誕100周年までの間に100巻が出版された。この文献は、1926年10月から1994年7月までの間に金日成が発表したすべての演説・報告・談話・論説などを集めた膨大な記録ではあるが、内容については信頼性が決して高くない。『金日成著作集』に含まれておらず、これまで公開されていなかった新しい文献が、『金日成全集』には数多く収録されているからである。本研究で使用する85巻から94巻（1987年1月～1994年7月）は、2009年から2010年の間に出版された。その時点で、金正日がイデオロギーと著作物の解釈権を独占していたことを考慮すると、時期的に月日を経て公表された事実関係の信憑性が疑われることになる。そこには、当時実際行なわれた事実が含まれているかもしれないが、同時に現在のための「神話の再構築」という観点から新たに作成された文章が含まれている可能性もあるからである。したがって、この文献を有効に活用し、そこから新しい新鮮な事実を取り出すためには、『金日成著作集』など他の重要な文献と「クロス・チェック」を行いながら使用する必要がある。

[41] 『勤労者』は1946年10月25日に創刊されて以降、月刊であったが、1962年4月に半月刊になり、1966年に再びに月刊に戻った。1985年以前には50－60頁の分量であったものの、それ以後は100頁程度に分量が増えた。1991年12月までの累計596号を最後に、外部に公開していない。

た『勤労者』は、1991年12月に発刊された同年12号まで公開され、外国でも講読が可能であった。しかし、1992年1月以降北朝鮮は、現在に至るまで一切海外に於ける講読を認めていない。その理由は説明がないために明確ではないが、本研究の対象とする時期の北朝鮮の政治変動によるものと見られる。また、東欧・ソ連の崩壊によって、朝鮮労働党と価値を共有する友党が殆ど消滅したことが、『勤労者』の海外配布を取り止める大きな要因になったと推測される。

金日成によると、「『勤労者』の基本任務は、わが党の路線と政策を理論的に幅広く、深く解釈宣伝して党員と大衆をわが党の思想と革命理論に武装させて党の周辺に彼らを集める」[42]役割を果たしているとされる。また、『勤労者』は「党の革命理論を擁護・防衛し、内外に広く解説宣伝する」[43]ための強力な手段とされる。そうした位置づけがなされていたために、『勤労者』は1991年12月号(累計596号)まで、親善関係にある国々を中心に海外にも幅広く配布されてきた[44]。1992年からは、のちに検討するように、『勤労者』の内容は首領の絶対化強調へとより変化していった。その点からしても、1992年以降は、『勤労者』は国内に対してだけの宣伝手段として位置づけられるようになったものと思われる。

北朝鮮が『勤労者』の教化的価値を重視するが故に、本研究の時期における『勤労者』の資料的価値は高いと思われる。したがって新たに入手した資料の使用によって、北朝鮮による政策の一貫性と変化を抽出し、その意味を把握することに努める。本研究では、1986年1号から1994年12号までの『勤労者』を主に使用するが、その中で1992年1号からの『勤労者』は北朝鮮研究として初めて使用

---

[42] 김일성 「축하문: 『근로자』 편집원들에게」(金日成「祝賀文：『勤労者』編集員たちに」『勤労者』1976年11号)2頁。
[43] 조선로동당중앙위원회「축하문: 『근로자』편집원들에게」(朝鮮労働党中央委員会「祝賀文：『勤労者』編集員たちに」『勤労者』1986年12号)17頁。
[44] 이교덕 『북한 주요 기초문헌 해제집(ＩＩＩ): 「근로자」 해제』(李ギョドク『北韓の主要基礎文献解題集(ＩＩＩ)：「勤労者」解題』ソウル：民族統一研究院、1995年)2－3頁。

する。それによって、北朝鮮の政策について新たな解釈をおこなうことが可能になると考える。

さらに、重視する資料は、北朝鮮の大衆教化総合雑誌である『千里馬』の使いである。文芸出版社から1970年1月22日に発刊された『千里馬』は、112頁の分量の大衆向けの総合雑誌である[45]。『千里馬』には政治、経済に関する問題も扱われるが、ストーリー形式の革命伝統教化資料や階級教化資料などを主に内容とする。大衆読者が多い『千里馬』は金正日も面白い雑誌だと評価したように[46]、生活の多様性を通して政治的意図が隅々まで浸透することを分析する上で極めて重要な資料である。それ以外にも『経済研究』や『国際生活』、『歴史研究』、『哲学研究』などの雑誌を補完的資料として使用する。

第二に、北朝鮮研究には、一次資料を検証するために現場で直接体験することがきわめて困難であるという制約条件がある。ゆえに、現実的な社会の状況・事実を確認し、統治者の政策が人民大衆にどのような反応を引き起こしたのかを知るために、同時期に北朝鮮国内で居住していた「脱北者の証言」を活用する。軍人、言論人や管職（党・外交分野）、労働者と農民の三つのレベルに分けてインタビューを実施する。それによって、北朝鮮の公刊文献において制約された部分を補充することを試みたい。同時に、同時期における資料を読み解く際に筆者の感覚と記憶を生かし、参考文献や資料の分析に特徴をつけたいと考えている。

たとえば、北朝鮮の小学校2年の『親愛する指導者金正日元帥様の幼少期』と

---

[45] 北朝鮮で大衆は、時期の変化によってそれぞれ意味が異なってきた。たとえば、1960年代以前において大衆とは、労働階級を中心とする様々な階層(中産層も存在したことに由来する)と階級(知識人、労働者、農民)の集まりであったが、1970年代の「全社会の金日成主義化」を経て、1980年代になると大衆は自主性を求める一つの勤労人民大衆になり、その中で労働者と農民（勤労する労働者と位置づけ）のみが強調された。したがって、本研究で使用する雑誌『千里馬』の補給対象は、勤労する労働者・農民を示す大衆である。

[46] 『조선대백과사전(20)』(『朝鮮大百科事典(20)』平壌：百科事典出版社、2000年)535頁。

いう教化教科書には次のような金正日の幼い頃の逸話が紹介されており、北朝鮮の一般大衆にはこの話が深く浸透している。幼稚園の時に金正日は、先生に対して「一つに一つを加えると一つになる場合は、ただ一つではなくもっとも大きな一つになります。そして、たくさんのものが集まって一つになる場合には、さらにもっとも大きな一つになります」[47]と言及した。金正日は、続いて父親の将軍様（当時の金日成を示す）に従う人民の心も合わせると一つになり、この力は世の中でもっとも強いものだと強調した。このように教科書は紹介している。この逸話が事実か否かは重要ではない。重要なのは、最高決定権者である金日成とそれを支えている後継者の金正日が重視する力についての考え方が、そこには明確に示されていることである。この逸話に従えば、金正日に権限が移譲されて「後継者の権力」が生じると、それが「金日成の権力」に加わることで、より強大な「首領権力」を生み出すことになる。北朝鮮における力の論理とはそのようなものであることを常に十分に意識しつつ、本研究を進めていくことにしたい。

４．論文の構成

本稿の構成は次の通りである。第１章では、北朝鮮で「首領」という概念が登場した1967年前後の経緯と首領への党の価値集中化過程を検討する。そのうえで、1972年以降、首領を党・国家の上位に位置づけ過程と、その中で後継者の役割が首領の業績に包含されるようになった1985年までの過程を検討する。

---

[47] 「하나에다 하나를 더해도 하나」소학교 2학년교과서『친애하는 지도자 김정일원수님 어린시절』(小学校2年生教科書『親愛する指導者金正日元帥様の幼少期』平壌：教育図書出版社、1987年)。1987年から小学校2年生の教科書に第8課としてこの内容が載っているが、1999年版まで19頁に、2001年版は16頁に、2004年版から2013年版は第１課として2頁に目次の順番が優先になっている。

朝鮮労働党総書記であると共に朝鮮民主主義人民共和国国家主席であることからもたらされる金日成の制度的権力と、その上に首領を位置づけてからもたらされる首領の権威と象徴化との関係を分析する。そして、金日成の個人レベルの健康と安寧が国家における政治的要素として優先されていく過程を考察する。さらに、党・国家の権力が金日成個人に投影される個人崇拝と、後継者の登場過程を、綿密に議論する。後継者は、首領の「健康と事業」を補佐するという使命を持って出発し、首領の権威と偉大性を高めるための役割を担うことになったことを明らかにする。

第２章では、1986年に新たな「社会政治的生命体」論が登場したことに注目し、その構造と構成要素間の相互作用を把握する。とくに、首領概念の変化に焦点を合わせ、「社会政治的生命体」で最高脳髄と位置づけられる首領の絶対的地位と決定的役割の相互関連性と、首領が国家全体に及ぼす影響について論ずる。その中で、首領・後継者、首領・党・大衆のそれぞれの地位と役割、そして相互関係を分析する。「社会政治的生命体」論が内包する首領の権力量と範囲、対象者に関する統治原理を明らかにし、高齢化が進む金日成の権力を維持するための更なる権力強化の意志を確認する。

第３章では、1987年に始まった「社会政治的生命体」論の社会実践過程を通して、金日成の権力維持と独占的地位確保への意志を明確にする。イデオロギーの「深化」が進むことによって、首領の絶対的地位の構成要素は社会の価値意識に転換され、政策決定過程で提示される課題は首領の権力空間と時間に集中されることになった。とくに、「白頭山密営」の象徴化操作を金日成の「建国神話」の根拠として、これが後継者の正統性を高めるためであると主張した既存研究の

視角とは異なる[48]。また、1989年に打ち出した「わが民族第一主義」精神を、「民族」概念の変容と「血統」概念の重視という観点で検討する。同時期の韓国の国際的地位の向上と民主化の実現は、北朝鮮に過去と異なる新たな南北格差をもたらし、それを克服すべきまた一つの課題に直面することになった点に注目しつつ分析する。「民族」概念の変容と「社会政治的生命体」論との関連性で、首領を国家の求心点のみならず、民族共同体の求心点に位置づけようと試みる意図と原因を分析する。

第４章では、1989年の夏から秋にかけて起きた社会主義諸国の崩壊が北朝鮮に大きな衝撃と教訓を与えたことを論ずる中で、北朝鮮のイデオロギー的・経済的「孤立」と安全保障の「危機」意識を分析し、自らの独自路線と彼らが言う「われわれ式社会主義」の対応措置を具体的に検討する。とくに、1990年に宣言した「社会政治的生命体」論を中核とする「われわれ式社会主義」イデオロギーは、東欧諸国とソ連、中国の改革・開放の風が北朝鮮国内に入り込まないようにする安全装置として設定されたことから、「物理的強制力」の更なる強化に注目する。「社会政治的変革」という党内部における権力の再編を通して、党中央への権力集中を強化して党を首領の党に、1991年に軍権の再編を通して軍隊を首領の軍隊に、そして「経済的変革」を通して人民経済部分が党から分離され政務院に引き渡され、人民生活の向上に関する首領の責任と負担が減少するようになったことを解明する。

第５章では、金日成が80歳を迎えた1992年を中心に、国家的に行った各種の政治行為を分析し、物理的強制力のみならず、心理的説得をさらに重視した点に注目する。人の感情・情緒を操作・調節するそれまでの統治技術が、人民大衆の

---

[48] 鐸木昌之[1992]、前掲書。李スンヨル、前掲論文。金光仁、前掲論文。鄭成長、前掲書。白鶴淳、前掲書。和田春樹、前掲書。

同意を得るような形態へ転換する政治方式の変化について論ずる。首領が与える「上からの信頼と愛」と、人民大衆の「下からの忠誠と孝誠」の価値交換がどのように成立し、作用するかについて綿密に検討する。そのために、過去から持続された政治行為と新たに導入された政治イベントを比較分析し、大衆に対する思考と美的感覚の教化過程と改定憲法における権力構造の合理化過程を明らかにする。とくに、国家全体を一つの大家族と設定し、首領と人民大衆の関係を親子関係に設定したことも、金正日の役割を拡大させ、その業績のすべてを首領偉業に吸収するための手段であった。そうした観点から分析を進め、金日成が持っていた権力観を明らかにする。また、最後には、いままで論じた「首領権力」の論理と実践を金日成と金正日の政治行為である「現地指導」と著作の計量的分析を通して改めで検証する。

第１章 「首領」概念の政治化過程

北朝鮮によると、「首領という概念は、人間中心の主体哲学で新たに解明した哲学的概念であり、人民大衆、民族という集団的概念と一体化された概念である」[49]。すなわち、北朝鮮の思想と権力関係、統治方式のすべてが「首領」概念に内包された意味である。したがって、「首領」概念は北朝鮮の政治動態を把握することに最も重要な「鍵」と言ってよい。この概念は金日成に独占された呼称として、北朝鮮の統治イデオロギー、統治論理、統治方法が金日成一人への集中された単一的支配構造を反映するものである。首領である金日成は、党の価値集中化（党の唯一思想体系の確立）を通して伝統的支配の正統性を確保し、「主席制」の導入と個人偶像化の教化を通してカリスマ的権威構築を行い、自らの単一的支配を試みた[50]。以下、本章では、「首領」概念の登場と政治化過程を検討する。一つ目は「首領」概念の形成過程を分析する。二つ目は「首領」の位置が党・国家権力の上に位置付けられる過程、そして三つ目は首領の権威と権力の相関関係について分析を行い、特徴を明らかにする。

---

[49] 고영환『우리 민족제일주의론』(高ヨンファン『わが民族第一主義論』平壌：平壌出版社、1989年)129－130頁。

[50] マックス・ウェーバーの『権力と支配』によると、正当的支配には三つの純粋型がある。合法的支配、伝統的支配、カリスマ的支配である。以下、ウェーバーの理論的主張を用いて首領と権力・正統性・権威の諸関係について説明する。ウェーバー、M著、濱嶋朗訳『権力と支配』講談社学術文庫、2012年を参照。

第一節 「首領」の権威構築

１.「首領」概念の登場

(1) 登場とその背景

北朝鮮で「首領」概念が本格的に使用されたのは、1967年5月25日党中央委員会第4期第15回総会の開催以後からである。金日成は、この会議において「資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリア独裁の問題について」という施政演説を行った。その内容について『朝鮮労働党歴史』は、「党中央全員会議(総会)は偉大な首領である金日成同志を中心としたわが党の統一団結をさらに磐石のように固め、全党を首領様の革命思想、主体思想に一色化することにおいて決定的転換の契機になった」と記録している[51]。いわゆる「5.25教示」と称されるこの施政演説は、朝鮮労働党の歴史において「党の唯一思想体系の確立」[52]が宣布された一つの転換点だと北朝鮮では評価されるようになった。

「5.25教示」が発表された党中央全員会議が、首領の革命思想を基礎とした党隊列の統一と団結を強化するための闘争で、巨大な意義を持つ歴史的な会議として位置づけられる中、北朝鮮では、首領の思想に一色化させようとする唯一思想体系の確立が課題として設定された[53]。その後、1967年7月、党理論雑誌『勤労

---

[51] 『조선로동당 력사(『朝鮮労働党歴史』平壌：朝鮮労働党出版社、1991年)432頁。

[52] 党の唯一思想体系を確立するというのは、党内で首領の革命思想とその具現である党の路線および政策で全党を武装させ、全党員を首領のまわりに団結させて首領の唯一的指導のもとに革命と建設をおし進めることを意味する。黄長燁も、「5.25教示」以後から党と労働階級と人民大衆の団結と領導のために首領が必要なのではなく、反対に、首領のために党と労働階級と人民大衆が必要であると主張されるようになったと回顧している。黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、202頁。

[53] 김정일 「반당반혁명분자들의 사상여독을 뿌리빼고 당의 유일사상체계를 세울데 대하여」(金正日「反党反革命分子の思想余毒を根こそぎにし党の唯一思想体系を立てる

者』の論文は「革命の勝利、社会主義、共産主義建設の推進成果の如何は、党の領導的役割に依存し、党の領導は「首領」の役割によって左右される。首領は労働者階級に正確な闘争路線と方針を提示し、革命力量を確固として結束させ、かれらを組織動員し、革命の勝利を保障することにおいて決定的役割を果たす」[54]と解説した。すなわち、首領にすべての価値を集中させるように党の役割を位置づける試みであった。

元来、北朝鮮において「首領」という用語は、国内では使われず、金日成の「ソ連人民の偉大な首領であり、朝鮮人民の親愛するスターリン同志万歳」[55]という発言の中で用いられたのが最初であった[56]。金日成はスターリンに「偉大な首領」、そして中国の毛沢東にも「首領」の呼称を付けて呼んだのである[57]。また、1955年4月のレーニン生誕85周年に当たって発表した論説で、金日成はレーニンについても「世界進歩的人類の革命の偉大な英才、全世界勤労者の首領」と称した[58]。つまり、金日成は最も尊敬する国際共産主義運動の指導者たちに「首領」を尊称として使ったのである。

ことについて」朝鮮労働党中央委員会宣伝扇動幹部との談話、1967年6月15日、『金正日選集』第1巻、1992年）237頁。

[54] 엄기현 「항일유격대원들의 수령에 대한 무한한 충직성」（オム・キヒョン「抗日遊撃隊員の首領に対する無限の忠直性（後述の「忠実誠」と共に「忠誠」を意味する）」『勤労者』1967年7月号）9頁。

[55] 김일성 「중요산업의 국유화는 자주독립 국가건설의 기초」（金日成「重要産業の国有化は自主独立国家建設の基礎」産業の国有化法令を支持する平壌市群衆大会での演説、1946年8月10日、『金日成著作集』第2巻、1979年）346頁。

[56] 黄長燁は、ソ連のスターリンが生きているときには、金日成はいつも演説の最後に、「偉大な首領スターリン大元帥万歳」と叫び、他の幹部たちは「スターリン万歳」を最後に叫んで、次に「金日成将軍万歳」と叫んだと回顧している。黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、64頁。

[57] 朝鮮戦争の時期に「中国人民志願軍は朝鮮戦線に出動する時に、自己祖国と人民と党と首領の前に朝鮮人民の風速と慣習を尊重し、朝鮮の山と木や草一つも愛護し、朝鮮人民と朝鮮人民軍と共に一致団結して米帝侵略軍隊を完全に消滅することを誓った」と述べるなど、金日成は毛沢東を中国人民の首領と称した。김일성「우리의 정의의 공동투쟁은 승리한다」（金日成「われわれの正義の共同闘争は勝利する」中国人民志願軍朝鮮戦線参戦2周年に当たって、1952年10月25日、『金日成著作集』第7巻、1980年）366頁。

[58] 김일성 「레닌의 학설은 우리의 지침이다」（金日成「レーニンの学説はわれわれの指針である」レーニン誕生85周年に当たって発表した論説、1955年4月15日、『金日成著作集』第9巻、1980年）316頁。

しかし、1956年4月以後から金日成は首領という尊称を別の対象に対して使い始める。金日成は、「わが党はわが人民の政治的首領」であるが故に「祖国と人民を導く領導者」[59]であると述べ、この時期から党自体を「政治的首領」と表現するようになった。たとえば金日成は、1958年4月の全国司法および検察幹部会議において、党の役割を強調しつつ次のように述べた。「今日、誰がわが国の革命と建設に関するすべての政策を樹立しますか。これは言うまでもなくわが党です。わが党がわが革命を領導しているし、わが国の政治を指導しています。そうであるが故に、わが党はわが人民の政治的首領なのです」[60]。

この時期において首領は、金日成によって「党＝首領」という言い方で登場したのが特徴的である。黄長燁は後日、次のように回顧している。「1958年以後に、われわれが書記室でこのような(金日成の)演説の文献を再び整理したとき、『スターリン万歳』の部分はすべて削除した」[61]。結局、北朝鮮の中で首領という概念が登場する一方、金日成が首領と仕えたスターリンの存在は削除されたのである。それ以後、党と首領を明確に区分し、「党を領導する首領の位置と役割」がさらに高くなるようにしたのである。

(2)　党の唯一的価値と「首領」

1967年以後から、北朝鮮政治には金日成中心のパルチザン・グループ（満州派）を除いて他の派閥が存在しなくなったが、このような政治的環境は結果的には金日成に対する個人崇拝と神格化のための唯一思想体系の確立問題を浮上させ

---

[59]　김일성 「평안북도 당단체들의 과업」（金日成「平安北道の党団体の課題」平安北道党代表会での演説、1956年4月7日、『金日成著作集』第10巻、1980年）132頁。
[60]　김일성 「우리당　사법정책을관철하기위하여」（金日成「わが党の司法政策を貫徹するために」全国司法検察幹部会議での演説、1958年4月29日、『金日成著作集』第12巻、1981年）221頁。
[61]　黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、64頁。

る契機になったと考えられる[62]。この時期は、マックス・ウェーバーが指摘したように伝統的支配の秩序を構築するための第一段階であった。伝統的支配は、古くより伝承されてきた秩序や（革命）伝統の神聖、それによって権威を与えられた者の正統性に対する日常的信念にもとづくものである[63]。ここで首長（この研究では「首領」である）は、伝統的に伝えられた規則によって決定されるが、（大衆が）服従するのは伝統を通して彼らに賦与された固有の品位によるのである。北朝鮮では金日成中心の抗日パルチザンの伝統を正当化し、「党の唯一思想体系の確立」を通して党内におけるそれに基づいた首領への価値集中化を試みたのである。

たとえば、党の唯一思想体系の確立とともに全国の党研究室を金日成同志革命研究室に再編し、各地にさらに拡散させた。また、金日成同志革命研究室図録を新たに編纂し、金日成の著書の出版と著書への肖像写真の掲載が命じられた[64]。その後、首領は、党の唯一思想体系の確立によって徐々に中心になり、首領の主体思想は国家の指導理念として展開されるようになった。この時期[65]、内部における思想分裂を防ぐ名分であった党の唯一思想体系の確立は、主体思想の台頭・展開とともに「首領独裁」の萌芽を告げるものであった。

注目すべきは、1970年に平壌で出版された『哲学辞典』に首領という言葉が登場し、それが以下のように概念化された点である。「首領は、労働階級の党と

62　李スンヨル、前掲論文、31頁。
63　マックス・ウェーバー、前掲書、30頁。
64　鐸木昌之[1992]、前掲書、96頁。
65　対外的環境も金日成の「党の価値中心」への強化に有利に作用した。ベトナム戦争において北朝鮮が支援する北ベトナムの勝利が確定的であり、南ベトナムを支援する韓国の混沌状態が続いていた。このような情勢を背景に、68年1月に韓国兵に偽装した朝鮮人民軍のコマンド部隊31名が非武装地帯を超えた。その任務は韓国の朴正熙大統領暗殺であった。この部隊はソウルに入り、青瓦台から1kmの地点まで迫ったが、そこで警察に捕まった。また、北朝鮮東岸の港、元山沖において軽装備で処女航海中のアメリカ海軍スパイ船プエブロ号が北朝鮮の潜水艦探索装置に探知された。北朝鮮艦はプエブロ号を砲撃し、アメリカ軍艦は投降した。ブラッドー・マーティン著、朝倉和子『北朝鮮――偉大な愛の幻（上）』青灯社、2007年、189－198頁。

国家を創建し、党の革命伝統と党の指導思想を創造する。党が労働階級の階級的組織の最高形態であるとすれば、首領は党の最高領導者であり、プロレタリア独裁体系の総体を領導する最高脳髄であり、全党と全体人民の統一団結の中心である」[66]。首領の地位は党の最高領導者として「党の首領」に変貌した。1970年7月6日に、抗日闘争時代に共に戦った戦友である金策を回想して、最初に金日成が自らを首領と称して尊敬を求めたのと同時期である[67]。

このように、プロレタリア独裁に基づいた「党独裁」が正統性を持って展開される中で[68]、首領への党の価値集中化（伝統的支配の秩序）は金日成に有利に作用された[69]。1970年11月に開催された朝鮮労働党第5回大会では、金日成を中心とする抗日パルチザン闘争経験者が党指導部の大半を占めることとなった。もとより金日成は北朝鮮の建国から一貫して北朝鮮の最高権力者であったが、当初は様々な政治グループのバランスの上に成立した地位であった。その意味で、金日成はこの第5回党大会で初めて自らのグループを唯一の基盤とする党組織を確立することができたと言ってよい[70]。同時に、主体思想が正式に党の指導思想と宣言された。党規約の序文で「朝鮮労働党はマルクス・レーニン主義を創造的に適用した金日成同志の偉大な主体思想を自己活動の指針とする」と規定した。また同時に、金日成が党総書記に再推戴されて始めて首領という呼称が正式に使用さ

---

66 『철학사전』（『哲学辞典』平壌：社会科学出版社、1970年）196頁。

67 「われわれは、金策同志が生涯の最後の瞬間まで自己の首領を積極擁護し、党のために立派に戦ったために今日も彼を尊敬している」と金日成は述べた。김일성 「간부들속에서 당의 유일사상체계를 세우며 혁명화하기 위한 사업을 강화할데 대하여」（金日成「幹部の中で党の唯一思想体系を立て、革命化するために事業を強化することについて」朝鮮労働党中央委員会第4期第21次是認会議拡大会議での結論、1970年7月6日、『金日成著作集』第25巻、1983年）166頁。

68 北朝鮮の説明によると、一般的に独裁とは、国家権力を通して実現される支配階級の被支配階級に対する政治的支配を意味する。홍극표, 박원필 『사회주의 국가기구에 대한 위대한 수령 김일성동지의 리론』（洪グックピョ・朴ウォンピル『社会主義国家機構についての偉大な首領金日成同志の理論』平壌：社会科学出版社、1976年）6頁。

69 同上、52頁。

70 平岩俊司、前掲書、92頁。

れたのである。

２.「独裁権力の象徴」として「首領」呼称

(1)　首領への「制度的権力」の集中化

『勤労者』1972年第7号は、「党の唯一思想体系の確立と党政策学習」という論説で次のように説明している。「党の唯一思想体系の確立というのは、マルクス・レーニン主義の党建設の根本原則」[71]になり、それは「首領、党、階級、大衆の相互関係、マルクス・レーニン主義党の本質から流れてくる必然的要求である」[72]。ここで党の唯一思想体系の確立がマルクス・レーニン主義の基本原則であると強調したのは、党の唯一思想体系という理論的根拠が明確になっていなかったことを示している。また、「労働階級の卓越した首領は、革命の最高脳髄」であるとして特殊な位置に規定し、首領を「党と階級、大衆を一つに団結させる統一団結の唯一の中心であり、心臓である」[73]と説明し、首領の特殊性を強調し始めた。

1972年9月17日、金日成は日本の『毎日新聞』が提起した質問に回答を与える形式で、主体思想とそれを具現した朝鮮労働党の政策を説明した。北朝鮮が金日成の独創的思想だと主張する主体思想が初めて定義されたのである[74]。主体思想

---

[71]　리재일 「당의 유일사상체계 확립과 당정책 학습」（李ジェイル「党の唯一思想体系の確立と党政策学習」『勤労者』1972年第7号）29頁。
[72]　同上、29頁。
[73]　同上、30頁。
[74]　黄長燁は、1970年から哲学的原理に基づいて主体思想を理論的に体系化し始め、1972年9月17日に金日成の名前で日本の「毎日新聞」が提起した質問に対する答えの形式で主体思想に対する定義と内容を発表した。黄によると「主体思想は革命と建設の主人が人民大衆であり、革命と建設を主導する力も人民大衆にある、という思想である」という命題であり、この命題を少し一般化し、「自己の運命の主人は自分自身であり、自分の運命を

の創始者になった金日成は、首領の資格を備えた権威的存在として偶像化が進められた。首領の領導的地位と政治的権威を高める中で、北朝鮮は1972年12月27日に社会主義憲法を採択した。改正憲法は、既存の1948年憲法とはその体制を完全に異にする社会主義と主体思想を強調し、社会主義基本原理と朝鮮労働党の指導的地位を規定した[75]。

特徴的なことは、新たな国家機構が「首領の唯一的領導を多角的に支える」原則で再編されるようになった点である[76]。北朝鮮は、「権力道具である国家機構と独裁は不可分」であり、「独裁が国家権力に依拠して実現され、国家機構は独裁実現を目的とする」[77]道具と認めている。既存の内閣責任制（首相の権限）を、すべての国政の指導権限が国家主席に集中する国家主席制に改編したことである。国家主席制の導入に従って、新たな政府機構の中央人民委員会が新設され、内閣が政務院に改編された。

その一方、立法権を行使する最高人民会議常任委員会を、機能が弱化した常設会議に改編した。立法権は、最高人民会議（第76条）とその常設機関である最高人民常設会議（第87条）に認められた[78]。金日成一人に集中した国家機能として主席の命令権と中央人民委員会委員長（金日成）の行政権を強化した。金日成は、1972年段階で党総書記であると共に国家主席として党・国家権力をすべて掌握した。にもかかわらず、金日成は党・国家制度の上に首領を位置づけた。首領はまさに金日成の独裁権力の象徴的呼称となったのである。

開拓する力も自分自身にあるという思想である」という命題で補充した。黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、202頁。

[75] 社会主義憲法第二条において、国家の土台が「全人民の思想的統一と社会主義的生産関係と自律的民族経済の土台に依拠する」と規定した。その上で、第四条において国家は朝鮮労働党の主体思想をその活動の指針とすると規定した。

[76] 洪グックピョ・朴ウォンピル、前掲書、41頁。

[77] 同上、7頁。

[78] 大内憲昭『朝鮮社会主義法の研究』八千代出版、1994年、10頁。

結局、金日成を中心とした権力構造、その神話と神格化、歴史の再解釈、信条体系や文学芸術に至るまで、支配の論理体系などすべてが首領の領導を実現することを目的とするようになったと言える[79]。金日成は「党の唯一思想体系の確立」という首領への価値集中化を通して自らの伝統的権威を構築した。こうして1973年の『政治辞典』には、首領は「革命闘争で決定的役割を果たし、正確な闘争綱領を提示、指導思想を創造し革命伝統を樹立する。そして全人民の統一団結の唯一中心である」[80]と規定されたのである。1972年以後、首領は党・国家の最高地位に位置づけられ、「人民の首領」として絶対的地位を固めるようになり、国家全体が「偉大な首領」の利益に奉仕することを求められるようになった。

(2) 首領の「健康・仕事」が国家的課題

このような権力再編や権威構築は、金日成の高齢化が進む1972年4月15日の金日成の60歳誕生日の前後からあった点に注目する必要がある。その時から金日成の60周年誕生を契機に個人崇拝が本格化されたからである。金正日も後日次のように告白した。金日成の「60歳以前には首領の誕生日を国家的に記念することができなかった」が、金日成の還暦から「わが党は首領をもっと奉じようというわが人民の念願を込めて、首領の誕生日を民族最大の祝日に制定し、記念することを伝統化した」[81]。

北朝鮮では、金日成の60歳の誕生日から「偉大な首領金日成同志の万寿無疆をお祈りします」というスローガンが国家的要求として公式化された[82]。北朝鮮

---

79 鐸木昌之[1992]、前掲書、252頁。
80 『정치사전』（『政治辞典』平壌：社会科学出版社、1973年）324-325頁。
81 김정일 「당사업을 강화하여 우리식사회주의를 더욱 빛내이자」（金正日「党事業を強化してわれわれ式社会主義をさらに輝かせよ」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する談話、1992年1月1日、『金正日選集』第12巻、1997年）269頁。
82 「아버지 김일성원수님 만수무강하십시오」（「父親なる金日成元帥様、万寿無疆でいらして下さい」『朝鮮中央年鑑』1973年）196頁。この時期、「首領様の万寿無疆をお

の辞典的意味で万寿無彊は、尊敬する人の健康を祈る時に長く生きていることを願う意味である[83]。元気で長生きするという金日成の健康問題は首領の権威と同様な文脈で構築された。まず、金日成を「父親(アボジ)たる金日成元帥様」と称したが、この尊称は、最初は子供たちが使い始め、次第に「親たる首領様」として全国に広がった[84]。金日成は子供には「父親元帥様」、人民には「親の首領様」になったのである。これから、親としての首領の「健康・安寧」は全体の人民の願いになるために、国政において重要な政治的要求として正当化されるようになった。

また、首都平壌の万寿台には巨大な黄金色の金日成の銅像が高さ20mで、37kgの金によって表装して建立された。また、金日成の還暦を記念して「金日成賞」、「金日成勲章」、「金日成青年栄耀賞」、「金日成少年栄耀賞」が制定された。金日成は、共和国「二重英雄」称号を授与され、「偉大な首領」、「父なる首領」のように人民の親として呼ばれたのである。金日成を偶像化するために、70年11月から「金日成バッジ」の大量生産が始まり、偉大な日である1972年4月15日までに北朝鮮の大人は胸に金日成の肖像を誇らしげに着けるようになった[85]。また、金日成の肖像画がどの部屋にも飾られるなど、金日成は人々の生活の深い

祈ります」というタイトルの歌が大衆化になった。この歌の歌詞は次のようである。一、われらにこの幸福を与えんと、すべてを捧げしわが首領様、親の愛そのふところに、今日の幸福は花咲けり、二、天地の果てるもかわるまじ、太陽と月の尽きるもかわるまじて、首領様の恩恵を永遠に伝え、もえる忠誠ささげよう、偉大な親の首領様を仰ぎ、人民は万寿無彊祈ります。

[83] 『조선말대사전』제1권（『朝鮮語大辞典』第1巻、平壌：社会科学出版社、1992年）1051頁。

[84] 1970年代から託児所で生後、1年6ヵ月から2年まで子供たちは幼少組に属す。幼少組では、昼食を食べる時に、壁の正面にかけた金日成の肖像に二つの手を上向きに高く掲げて「敬愛する父親なる金日成元帥様ありがとうございます。いただきます」と先生が言うと、子たちはそれに従って挨拶をした後、ご飯を食べることを原則とした。のみならず、幼稚園では「父親なる元帥様の幼少期」という科目を開設し、小学校や中学校でも金日成を父親として認識するように一般的教化が実施される。한만길 『북한에서는 어떻게 교육할까』（『北韓ではどのように教育するのか』ソウル：ウリ教育、1999年）29－50頁。

[85] 金日成バッジは少年少女が12歳になると渡され、少年団バッジの上に着けられる。その年齢からは北朝鮮の人々は外出する時はいつでも着用しなければならない。もし、バッジを着用しないで外出すると、その行為は「党の唯一思想体系の十大原則」に違反するとされ相互批判会議で批判される。アンドレイ・ランコフ著、鳥居英晴『民衆の北朝鮮』花伝社、2009年、7頁。

ところに影響を与えるようになったのである。

このような社会的政治行為は伝統的・制度的秩序を通して首領個人の権威を規定するようになったが、マックス・ウェーバーはこれをカリスマ的権威という。一般的にこれは「カリスマ中心の政治構造の慣例化（日常化）」、さらに具体的には「革命的カリスマの慣例化の過程」として解釈される[86]。首領のカリスマ中心の日常化は金日成の還暦を契機に本格化された。首領の地位が日常的基礎の上に打ち立てられ、「革命と建設」の大義名分の下で金日成個人の健康・安寧を国家の最優先的課題として作り上げた。

金日成は後日、1972年憲法改正で「主席制」を新設した理由について次のように回顧した。「主席制を設け、政務院総理を別におくことにしたのは、経済事業を若い人に任せて活発に進めてもらうことにも重要な目的がありました。わたしは年をとって以前のようには現地指導ができない状態なので若い人を総理にすえて、かれが常時現地に出向いて経済活動の指導にあたることにする必要があったのです。若い人に総理を任せれば、夜を徹してエネルギッシュに活動するだろうと思ったのです」[87]。金日成の言葉から見ると、「主席制」の新設は金日成の高齢化に深く関連していたことになる。首領の権威を高めながら党・国家の決定権を掌握した金日成は、現場で行う政策執行という政治行為を代理人に任せることを意図したようである。

実際に、当時、金日成の近くで勤めた医師によると、金日成は60歳になる72

---

[86] 권헌익 정병호지음 『극장국가 북한』(権ホンイク・鄭ビョンホ『劇場国家・北朝鮮』ソウル：チャンビ、2013年)61－62頁。

[87] 김일성「정무원사업을 개선하며 경제사업에서 5대과업을 틀어쥐고 나갈데 대하여」(金日成「政務院の事業を改善し、経済活動で5大課題をとらえていくために」党中央委員会、政務院の責任幹部協議会で行った演説、1988年1月1日、『金日成著作集』第41巻)15頁。

年から3年の間に2回も中風病に見舞われたという[88]。この証言は、年齢を意識して健康の負担を減らすために国家主席制を新設して（政務院の）総理制を導入したという金日成の告白と一致するものである。マックス・ウェーバーは、共同体(国家)の存続と生成発展による信奉者層の観念的または物質的な利害関心は、カリスマの担い手が脱落（高齢化）する時に、後継者問題が持ち上がってくると指摘している[89]。後述するが、 カリスマ的権威者である首領の健康・安寧が保障されると、首領の領導が継続するために革命の目的が必ず達成されるという主張は、結局、首領の健康と仕事を補佐する後継者の登場を必要としたのである。

首領のカリスマ的支配は、首領は党総書記・国家主席のように選挙によって選ばれる職制ではなく、自然発生的に出現し人民大衆の推薦を受ける超人間的な絶対的存在になる[90]。首領は、選挙もなく日常的基礎の上に打ち立てられる「唯一無二」の存在に設定された。したがって、首領はいつどこでどのように出発したのかという経歴もなく、概念の変容と宣伝扇動の力によって徐々に浮上したところであった。首領の出現は、「一代に限る」ものに規定された点で[91]、後代に職制として継承される「首領機関説」とは異なる地位である。金日成は、首領を伝統的・制度的支配の正当性を通してカリスマ的存在、すべてを備えた絶対的存

---

[88] 中風を2回も経験した金日成はすべての衣食住を自然親和的ものとし、それを自分の身体に合わせて実践したと伝われる。석영환 『김일성 장수건강법』(ソク・ヨンファン『金日成長寿健康法』ソウル：パンパス、2004年)38頁。

[89] マックス・ウェーバー、前掲書、94頁。

[90] 黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、211頁。

[91] 1976年5月に金正日は「われわれは首領様一人のみを高くするべき」であり、「わたしは首領様の永遠の戦士です」と言及したことも偶然ではなく。허담 『김정일위인상(2)』（許錟『金正日の偉人象(2)』平壌：朝鮮労働党出版社、2000年）127－128頁。また、1980年1月1日に党中央委員会の責任幹部に対する談話でも「われわれは偉大な首領様一人のみを高くするべき」であるが、「これはわたしの変わりない信念であり、意志である」と言いながら、「太陽があって星が輝くように首領様がいらっしゃるからわれわれも存在する」ために「首領様のみを永遠に高くするべき」になると強調した。김정일 「위대한 수령님을 높이 모시는 것은 우리의 숭고한 임무」(金正日「偉大な首領様を高く仕えることはわれわれの崇高な任務」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する談話、1980年1月1日、『金正日選集』第6巻、1995年)366頁。

在に位置づけたのである。

こうして、首領の絶対的地位に相応する首領の思想が「権力の基底価値」となり、人民に首領に対する忠誠心（首領への尊敬、首領の意図に従い、首領への愛情）を求める中で、最も重視されたのが首領の健康問題になった。そして経済的富(国家的所有)、技能と知識の独占を通して8つの要素がすべて首領に集中され、首領は社会統合を前提とした三者関係（党・国家・個人）の象徴になった。こうした首領の象徴化は、権力（党・国家）を独占しようとする金日成の私的動機だけでは不十分であり、私的動機の公的対象への転移と公益の名における合理化も必要であった[92]。それ故に、1974年2月に金正日は後継者に「推戴」されたといってよい。金日成は、その「唯一無二」の存在である首領として、死に至るまで北朝鮮に君臨し続けたのである。

[92] ラスウェルは、権力はその自体が一つの価値であり、しかも極めて重要な価値であると定義し、これを権力の基底価値として地位、尊敬、徳義、愛情、健康、富、技能、知識の８つがあると説明している。ラスウェル・カプラン、前掲書、119頁。

第二節　統治イデオロギーの確立

１．　後継者の登場

金日成は60歳の誕生日から一週間目になる1972年4月22日に、抗日革命闘士たちとの談話で後継者問題の重要さについて言及したが、金日成が考えた後継者像は、1971年6月末に、在日本朝鮮青年学生祝賀団への談話で後継者が備えるべき品質と資質についてはじめて明らかにした。金日成は、首領の生存中に首領に限りなく忠実で、非凡な思想・理論的英知と卓越した指導力、気高い徳性を備えた真の人民の指導者を押し立てて、後継者の指導体系を確立しなければならないと指摘した上で、後継者の資格で基本をなすのは首領とその偉業に対する忠実性、徳性であると強調した[93]。金日成は還暦の前後に後継者問題を重要課題として考えたようであるが、金日成にとって後継者問題といえばどこまでも自らの生存中に限りなく忠誠を尽くすものが必要であった。

その後、金正日は72年10月に党中央委員会委員に選出され活動し、党内において73年7月に党中央委員会宣伝扇動部長に、9月には党中央委員会宣伝扇動書記に推戴された[94]。首領の地位と役割が徐々に強化されている中で、金正日を1973年9月に党中央委員会第15期第7回総会において党中央委員会宣伝扇動書記に推戴したが、これは、金正日を金日成の後継者に指名する金日成の意志表明であった。

---

[93]　『金日成主席革命活動史』（日本語版）朝鮮・平壌：2012年、380頁。

[94]　1964年金日成総合大学を卒業した金正日は朝鮮労働党中央委員会で指導員（現在の部員）、課長を経て1970年9月から党中央委員会宣伝扇動部副部長に勤めていた。その以後1973年9月に朝鮮労働党中央委員会第5期第7回総会で党中央委員会書記に推戴された。『金正日略伝』平壌：外国文出版社（日本語版）、2000年、68頁。

そうして翌年1974年初めに抗日革命の老闘士金一(キムイル)(1910-1984)は、金日成の志を体現した金正日を後継者に推戴することを提案し[95]、ついに1974年2月19日に開催された党中央委員会第5期第8回総会では金正日を党中央委員会政治局委員に推戴し、金日成の「唯一の後継者」に内定した[96]。

前述したように同時期に、北朝鮮国内では金日成の万寿無疆を祈るイベントが頻繁に行われ、首領を人民の父親として奉じる全人民的政治思想の教化が社会の隅々まで広がった。金日成は、絶対的権威と威信を求める一方、偉大性という自意識に大きく拘束されていたと見られる。しかし、金日成にとって、自らが先頭に立って自分の威信と偉大性を高めることは困難である。そのために、金日成は息子である金正日を早期に後継者に内定する必要があり、金正日は、父親の威信と偉大性を高める役割に集中することが求められた。したがって、後継者である金正日は、表舞台に登場してから金日成の神格化水準を高める作業に没頭することになったのである[97]。

後継者の使命は、①首領の健康・安寧を保障し、②首領の仕事を補佐することで「首領への忠実性を第一生命とする」[98]ようになるが、ここで最も重視されるのが金日成の健康問題であった。小倉和夫『権力の継承』によれば、独裁的権力の後継者問題は、絶対的権力の持ち主が健康であるかぎり、その後継者如何を論じ、あるいは後継体制の準備をすることは当の独裁者本人の発意でない限り、独裁的体制そのものの論理から言ってタブーに近いということになる[99]。したがって、首領が直接後継者を指名したのは、そのタブーの破壊を意味する。金日成

---

95 『金日成主席革命活動史』、前掲書、381頁。
96 『朝鮮労働党歴史』、前掲書、473頁。
97 黄長燁、『回顧録』、208頁。
98 同上、68頁。
99 小倉和夫『権力の継承』日本国際問題研究所、1985年、2頁。

の健康問題は首領の万年長寿問題として新たな政治的課題に提起され、彼の仕事の負担を減少することが忠誠の基準になったからである。

後日、金日成は金正日に党事業を任せた理由について次のように説明した。「元来、主席制を設けたのは国家事業と党事業、経済事業を発展させるためでした。主席制を打ち出した後、わたしは主に国家事業の全般を運営し、党事業は金正日同志に、経済事業は政務院総理に任せるようにしました」[100]。金日成の地位がより高くなり、権力量が増加したことによって、党事業を金正日に、経済事業を総理に任せたのは、逆に言えば、金日成の権力をさらに強化して絶対化すると同時に、仕事の負担を減らすような意図から生じたことになる。これが後継者を指名した理由になり、後継者は首領に従属した存在、「首領」範疇の中で位置づけられるような存在という説明を可能にする。

このように、後継者の指名は当時社会主義諸国の指導者たちの高齢化が権力維持にもたらした教訓からも受け止めたと見られるが[101]、金日成にとって①後継者は自らの存命中において集中化された自らの支配力を支える手段として必要になり、その次に②自らの死後を準備するものと考えたと思われる。①は、北朝鮮の「革命と建設」の要求としてより優先的であり、②は、社会主義・共産主義国家の典型的な後継者問題と同様である[102]。金日成の終身独裁を正当化する上で、長寿の欲望から出された点で北朝鮮のみの「世襲方式」と言える。金日成の存命

---

[100] 김일성 「사회주의 경제의 본성에 맞게 경제관리를 잘 할데 대하여」（金日成「社会主義経済の本性に合わせて経済管理を正しくおこなうことについて」経済学者との談話、1990年4月4日、『金日成著作集』第42巻）263頁。

[101] 鐸木昌之[1992]、前掲書、86－92頁。

[102] 社会主義・共産主義国家の継承問題については、小倉和夫の前掲書を参照されたい。レーニンの後継者問題とスターリンの台頭、スターリンの死後、後継者たちの争いとマレンコフ政権の登場と没落、毛沢東の死と華国鋒の役割、華国鋒の退陣と鄧小平の登場、ホー・チ・ミンの死とレ・ズアンの台頭と集団指導体系の動揺、チトー死後の集団指導体制などは後継者の指名が独裁者の存命中であっても、死後であっても独裁者の死後を準備することであるという共通点を論じている。

中に必要な後継者であれば、首領の健康を保障する面で他者より息子の方がより安定的であり、そして人民からも「親の首領様」を奉じるような忠誠心を後継者の活躍によって引き出すことができるのである。

２.「金日成主義化」

(1)　首領崇拝の内面化

内面化（internalization）とは一般的に一つの社会の普遍的な、或いは支配的な価値が個人の価値に受け取られる過程をいう[103]。内面化は個人の態度の形成において受け取る人が影響を与える人から補償を期待し、または処罰を避けるために行動する順応（compliance）や、親密な関係を維持するために肯定的な自己管理を志向する同一視(identification)などの概念より、最も深層的な影響を与える状態を指す[104]。

金正日は後継者に内定する1973年9月25日に、朝鮮労働党中央委員会宣伝扇動部責任幹部に対する談話で「全社会を金日成主義化」することを提起した。金正日は「われわれは当面、全党と全社会を金日成主義化するスローガンを提起するが、決してここに満足することができない」、「われわれが打ち出した金日成主義化は金日成主義の終局的勝利を成すまでに掲げるべき戦闘的綱領であり」、この「金日成主義の勝利を成し遂げることが、すなわちわれわれの終局的目的であ

---

[103] 김병로 『주체사상의 내면화 실태』（金炳魯『主体思想の内面化の実態』ソウル：民族統一研究院1994年）10頁。

[104] Herbert C. Kelman, “Three processes of social influences,” in E. P. Hollander R. G. Hunt, *Current Perspectives in Social Psychology* (New York: Oxford University Press, 1963), pp. 454~64: 金炳魯『主体思想の内面化の実態』、11頁より再引用。

る」[105]と規定した。つまり、金正日の宣言によって「全社会の金日成主義化」は、これからの北朝鮮国家の終局的目的になった。

この談話の5ヵ月後、1974年2月19日に金正日は金日成の思想を「金日成主義」と正式に宣布した。金正日は「全社会を金日成主義化するための党思想事業が当面するいくつかの課題について」（以下、「2.19談話」と記す）という談話の中で、「全社会の金日成主義化は、わが党の思想事業の出発点になる」と断言し、「すべての思想事業は全社会を金日成主義化することに徹頭徹尾服従させるべき」だと述べて金日成の個人崇拝を本格的に稼働させた。

当時、最高人民会議議長でありながら主体思想研究を担当した黄長燁は、その時に「わたしはもちろん、主体哲学を完成して金日成を世界革命の不滅の指導者にしたいという野心を抱いていた。だから金正日に何回も、わが国は小さいために経済大国や軍事大国として世界に名声をなそうとしたら、巨大な国力がかかるのみならず、可能性も少ない。したがって、主体思想を発展させ、思想の大国になって人類歴史の発展に寄与すべきです」[106]と提案したという。まさに、この時期の北朝鮮が、主体思想というイデオロギーの価値を高めることによって、金日成の偉大性をさらに高めようとしていたことが、そうした回想からも十分に窺われるであろう。

もっとも、黄長燁は「ところが金正日が金日成の思想を金日成主義として宣布し、また金日成がこれを支持した事実は、彼らが常識を超越した主観主義に陥ったことを説明することであった」[107]と述べ、金日成が「金日成主義」という言

---

[105] 김정일 「선전선동부 사업을 개선강화하는데서 나서는 몇가지 문제에 대하여」(金正日「宣伝扇動部事業を改善強化することから提起されるいくつかの問題について」朝鮮労働党中央委員会宣伝扇動部責任幹部との談話、1973年9月25日、『金正日選集』第5巻)433－434頁。
[106] 黄長燁、『回顧録』、215頁
[107] 同上、216頁。

い方を承認したことに衝撃を受けたことを明らかにした。当時、金正日の活動の中で特徴的な点は、「全社会の金日成主義化」を提示した直後である1974年4月15日である金日成の62歳の誕生日を迎える4月14日に金正日は、党と政府の幹部の前で「敬愛する首領金日成同志はわが人民の数千年歴史で初めて仕えた偉大な首領である」と言及し[108]、金日成に対する崇拝心を公式化したことである。そのために、党と大衆には「首領様の革命思想に武装し、それを絶対に擁護固守し、いつどこでも首領様の革命思想と意図の通りに行動する」[109]ことが強要されたのである。

金日成の承認によって金正日は全社会の金日成主義化を実現する担当者になり、それを通してイデオロギーの解釈権を有するようになった。金正日は、これから「わが党の思想事業は終始一貫して全社会の金日成主義化を中心に、ここにすべての力を集中して行かなければない」[110]と強調しつつ、金日成主義を次のように定義した。「金日成主義は、一言で言うと主体の思想、理論及び方法の体系」であり、「主体思想とそれによって解明された革命と建設に関する理論と方法の全一的な体系」となっている。黄長燁によれば、金日成主義は金日成の思考であり、彼の要求である。金日成主義化の目的は、金日成の支配力を強化するために、彼の権威を高めることであった。

金日成は、金正日を後継者に内定させた以後、74年7月末に党組織活動家講習会の参加者に送った『党活動をいっそう強化するために』という書籍で金正日を

108　金ジェチョン、前掲書、87頁。

109　김정일 「선전선동부의 기본임무에 대하여」(金正日「宣伝扇動部の基本任務について」朝鮮労働党中央委員会宣伝扇動部責任幹部に対する演説、1973年8月17日、『金正日選集』第3巻)422頁。

110　김정일 「온 사회를 김일성주의화하기 위한 당사상 사업의 당면한 몇가지 과업에 대하여」(金正日「全社会を金日成主義化するための党思想事業の当面したいくつかの課題について」全国党宣伝幹部講習会での結論、1974年2月19日、『金正日選集』第6巻(増補版))30頁。

「党中央」[111]として首脳部に戴いた新たな歴史的転換期に入った党と革命発展の要請によって、党の基礎をしっかりと固め、党の指導体系を確立することを指示したのである[112]。党の指導体系は後継者の指導体系であり、首領の事業を支えるための後継者の権限を制度化する体系である。結局、「金日成主義」の中核をなす「党の唯一思想体系」と「党の指導体系」は金日成の思想と方法が社会に実現されることを目的とした、いわゆる金日成の個人独裁体制の出発点であったと言ってよい。

(2) 絶対服従の「十大原則」と刑法

のみならず、金正日は「2.19談話」で全社会の金日成主義化を実現するために「党の唯一思想体系確立の十大原則を検討する事業を全党的に展開する」[113]と指示した。「唯一思想体系確立の十大原則」[114]は、金日成が提示した唯一思想体系を母体として作成されたものである。したがって、金日成に対する人民の絶対的「服従の原則」が「十大原則」だと言っても過言ではない。換言すると、人々の思考や行動様式が「唯一思想体系確立の大原則」から外れることを許さない、

---

[111] 「党中央」は、金正日が金日成の後継者であることが明らかになった後の1974年から1980年にかけて、金正日を指す隠語として使われた。黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、78頁。

[112] 『金日成主席革命活動史』、前掲書、382頁。

[113] 金正日「全社会を金日成主義化するための党思想事業の当面したいくつかの課題について」、42頁。

[114] 「唯一思想体系十大原則」は、①偉大な首領金日成同志の革命思想で、全社会を一色化するために命を捧げて闘争しなければならない。②偉大な首領金日成同志を忠誠に高く仰ぎ奉らなければならない。③偉大な首領金日成同志の権威を絶対化しなければならない。④偉大な首領金日成同志の革命思想を信念とし、首領の教示を信条化しなければならない。⑤偉大な首領金日成同志の教示の執行において、無条件性の原則を徹底して守らなければならない。⑥偉大な首領金日成同志を中心とする全党の思想意思的統一と革命的団結を強化しなければならない。⑦偉大な首領金日成同志に学び、共産主義的風貌と革命的活動方法、人民的活動作風を所有しなければならない。⑧偉大な首領金日成同志から授かった政治的生命を大切に守り、首領の大きな政治的信任と配慮に高い政治的自覚と技術により、忠誠をもって報いなければならない。⑨偉大な首領金日成同志の唯一的指導のもとに、全党、全国、全軍が一体となって動く強い組織規律を確立しなければならない。⑩偉大な首領金日成同志が開拓された革命偉業を、代を継いで最後まで継承し完成していかねばならない。

強力な強制性を持った思想統制の手段である。

「十大原則」が打ち出された後の1974年12月19日、最高人民会議常設会議において「朝鮮民主主義人民共和国刑法」が採択され、1975年2月1日から実行された。この刑法は、総則編・各則編という編別構成であった1950年刑法とはことなり、刑事政策の基本・犯罪と刑事責任・反革命犯罪・一般犯罪・軍事上の犯罪の5編に分けられた[115]。74年刑法は、「全社会の金日成主義化」を推進する中で、次の五つを課題として制定した。

第一は、朝鮮民主主義人民共和国主席と党中央を政治思想的に擁護し防衛すること。第二に、朝鮮労働党の政策を擁護貫徹すること。第三に、あらゆる犯罪的侵害から労働者、農民の主権と社会主義制度及び社会主義的所有をはじめとする革命の獲得物を守ること。第四に、人民の憲法的権利と生命財産をあらゆる犯罪的侵害から守ること。第五に、国家・社会生活のすべての分野で厳格な制度と秩序を樹立し、革命的規律を強化すること、である[116]。

結局、74年刑法は「全社会の金日成主義化」を実現するための統制手段である「十大原則」を合法化する手段として機能したのである。このような「十大原則」は、思想教化と大衆運動と共に強要され、ついに社会に内面化された。1975年9月に「速度戦」方式による「70日戦闘」が「速度戦、電撃戦、殲滅戦」のスローガンの下で展開され、大衆運動を通して人々を「忠誠の総突撃戦」従事させ、現場で金日成主義者を育成する実践的効果を高めた。教化方式には唯一思想体系教化と革命教化が重要であったが、唯一思想体系教化は、金日成を「唯一の中心とする全党の統一団結を強化する」ことを求め、ここで最も基本となるのは金日

115　大内憲昭、前掲書、166頁。
116　同上、167頁。

成に対する「限りない忠実性」[117]であった。この時期、北朝鮮社会における住民統制と監視体系は、監視者と監視対象、統制する人と統制対象が区別されていない高位層と住民の相互監視と統制、相互牽制を目的とする緻密な組織構造として、創られようとしていた。このような統制構造と監視体系は、憲法や党規約ではなく「党の唯一思想体系確立の十大原則」によって合法化されたのである[118]。

北朝鮮で憲法は上からの「支配原理」を制度化・合理化する手段であるとするならば、「十大原則」は下からの絶対的服従を強要する「服従原則」として超憲法的強制手段と認められる。この十ヵ条は金日成の絶対化と無条件性に対する強調で一貫していて、各条の細部項目はその実践指針になっている。金日成の唯一思想体系はひたすら「党中央(金正日を暗示)の唯一の指導」により具現されると明確にした[119]。このように「金日成主義化」とは、金日成の個人独裁を社会で正当化するための支配論理であり、また「党の唯一思想体系十大原則」とは、徹底した服従体系を形成する統制手段であった。

権威は必ず服従を伴い、つねに服従を要求する[120]。「金日成主義化」が金日成の権威と偉大性を高めるものであれば、「十大原則」はそれに従う服従原理であるが故に、金日成の権威が高まれば高まるほど人々の服従はさらに強要された。1980年1月1日、金正日は党中央委員会責任幹部に対する談話で次のように述べた。「首領様の権威は全世界が公認する最高の権威であり、絶対的な権威である。首領様の権威は、すなわちわが党の権威であり、首領様の権威が高まればわが党の

---

[117] 金正日「全社会を金日成主義化するための党思想事業の当面したいくつかの課題について」、43頁。
[118] 현성일 『북한 노동당의 조직구조와 사회통제체계에 관한 연구』（玄成日『北朝鮮労働党の組織構造と社会統制体系に関する研究』ソウル：韓国外国語大学校政策科学大学院修士学位論文、1999年）18頁。
[119] 孫光柱著、ベ・ヨンホン訳『金正日レポート』ランダムハウス講談社、2004年、161頁。
[120] アレクサンドル・コジェーブ著、今村真介訳『権威の概念』法政大学出版局、2010年、13頁。

権威も高まる。わたしは首領様の権威に損傷を与えることを絶対に許せないし、首領様の権威を擁護保証する」[121]。このように、首領の権威が高くなればなるほど党の権威、つまり、後継者の権威も高くなるというのは、首領に従属した後継者の地位を明確に説明するものである。金正日は「金日成主義化」と「党の唯一思想体系十大原則」を通して首領である金日成の権威を高揚させる役割を担っていた。

[121] 金正日「偉大な首領様を高く仕えることはわれわれの崇高な任務」、366頁。

第三節　統治イデオロギーの拡大

１．建築物と権威の象徴化

金日成は、1975年から1990年までの15年間にわたる大規模な平壌市建設プロジェクトを構想し、それを金正日に任せた。いわゆる、「平壌の繋栄期」と称する15年間の建設計画には「10個通り」の建築構想と大記念碑的建築物と住宅建設が計画されていた。以前から推進してきた楽園(ラグォン)通りと琵琶(ビパ)通りは1975年の完成を目指したが、新たに計画された蒼光(チャンガン)通り(第1段階1980年、第2段階1985年)、紋繍(ムンス)通り(1984年)、安商宅(アンサンテク)通り(1987年)、千里馬(チョンリマ)通り(2段階1989年)、光復(クァンボク)通り(1989年)、青春(チョンチュン)通り(1988年)、大学通り(1983年)は大記念碑的建築物の計画案とともに金正日の指導に従って推進されるようになった[122]。このような大プロジェクトは、金正日にとってこれから「平壌市に建設される通りと記念碑的建築物は、万寿台に建築された首領様の銅像（1972年に建築された金日成の銅像）を中心軸として建設すべき」[123]課題であった。

金正日によって「速度戦」の形で推進される「全社会の金日成主義化」の実現の一つとして、平壌市建設プロジックトにはさらに拍車がかけられるようになった。最初の成果は1976年に、翌77年4月15日の金日成の65歳誕生日を記念して「主席宮」と呼ばれる金日成の官邸「錦繍山議事堂」を竣工し[124]、金日成の健康

---

[122] 허담 『김정일 위인상(1)』(許錟『金正日の偉人像(1)』平壌：朝鮮労働党出版社、2000年)293-294頁。
[123] 同上、295頁。
[124] 「主席宮」は1976年に竣工した後、金日成が官邸及び執務を行う場所であった。1994

のみを研究及び保障する「万寿無疆研究所」(「長寿研究所」)を建立して金日成に「金日成花」[125]と共に「贈り物」として捧げた。金正日が後継者として首領の健康と仕事を補佐するために「万寿無疆研究所」と「主席宮」を直接的に指導したことが象徴する意味は大きい。また、10個の通りに住宅建設や人民生活に関連する平壌産院、蒼光院、清流館、牡丹峰競技場、人民大学習堂などの100余個を超える記念碑的建築物が完工され[126]、平壌を金日成主義化が実現された都市空間と位置づけたのである。

また、1982年4月15日、金日成の70歳の誕生日に際して、平壌市大同江のほとりに高さ170メートルの主体思想塔の除幕式が行われた。除幕式では、20万名の市民が参加する中で、「偉大な首領金日成同志万歳」、「栄光の朝鮮労働党万歳」、「偉大な主体思想万歳」、「全社会の主体思想化」、「主体の革命偉業を継承完成しよう」、「慶祝4.15」、「慶祝70周年」などのスローガンが掲げられた。北朝鮮で大記念碑的創造物と言われる主体思想塔は、金日成の革命思想と革命業績を「万代」に継いで伝えることを目的としたものである[127]。金正日の説明によると、主体思想塔の東西壁面部分は18段、南北壁面部分は17段で、その合計は金日成の70歳を示す「70段」とした[128]。また使用された花崗岩の数は25,550個であり、これは金日成の誕生から70歳までの日数を表した。台座部分に彫られた詩は12編、サイズは縦4m、横15mで、金日成の誕生日「1912年4月15日」を示した。

年に金日成が死亡してから金日成の遺体はそこに永久保存されるが、金日成の死亡一年後、1995年から「錦繡山記念宮殿」に名を変え、一般に公開された。現在は「錦繡山太陽宮殿」になっている。金正日の死亡後、金正日の遺体も共に永久保存され、2012年2月に名称を変えたのである。

[125] 「金日成花」は、北朝鮮の国花である木蘭よりさらに尊敬される花である。これは、1977年4月15日、金日成の65歳の誕生日に公開されたもので、65年に金日成がインドネシアを訪問した時、スカルノ大統領からもらった蘭の一種である。北朝鮮では「忠誠の花」として崇拝の象徴である。

[126] 許鋏、『金正日の偉人像(1)』、298-299頁。

[127] 「주체사상탑 제막식」(「主体思想塔の制幕式」『朝鮮中央年鑑』1982年) 150頁。

[128] 『당의 령도밑에 창작건립된 대기념비들의 사상예술성』(『党の領導の下で創作建立された大記念碑の思想芸術性』平壌:朝鮮美術出版社、1989年)152頁。

正面上部には主体（チュチェ）の金文字が[129]飾られた。

このように、主体思想塔の基本塔を70段にしたのは金日成の生涯を象徴するためであり、彼が生きてきた日数と誕生日はその象徴性をさらに支えるものとして位置づけられた。とくに、段部分左右に花束35束を刻む70束の対照構図を形成しているが、この象徴性は金日成の誕生70周年に捧げる人民の忠誠心と祝宴の念願を反映していると説明された[130]。主体思想塔は「支配と服従」の構造を示す金日成権力の象徴する思想芸術的作品に過ぎなかった[131]。

1982年4月14日には、金日成の生誕70周年を記念して平壌の牡丹峰の凱旋門広場に凱旋門が建てられた。凱旋門の除幕式には8万名の平壌市民が参加した[132]。高さは60m、正面幅52.5m、側面幅36.2m、アーチ門の高さ27m、アーチ門の幅18.6mと、世界で一番大きい凱旋門で、1万500個の花崗岩で造られている。4本の花崗岩の柱の上には、金日成が祖国解放を志し平壌を後にしたとされている年である1925年（当時、13歳）と、金日成が平壌に凱旋したとされている1945年を示したレリーフ(浮彫)がある。凱旋門内部は、12個の部屋、手すり、展望台、およびエレベーターがある。また、その東側と西側の壁面には白頭山のレリーフがあり、南側と北側の壁面には「金日成将軍の歌」の歌詞が彫刻されている[133]。

凱旋門の建立過程で金正日は何回も設計図案を検討し、「凱旋門に刻む年代は＜1926年～1945年＞ではなく＜1925年～1945年＞と刻むべきだ」と指示し、

129　同上、149－153頁。
130　同上、152頁。
131　当時、主体思想の設計を担当した人は次のように回想している。高さ170メートルにもなる塔を建設したと自慢、吹聴する国なのに平壌市民は自由に塔に登って、美しい平壌の風景を見学することができないのだから、絵に描いた餅にすぎない。建設関係者もまた塔が完成したあとは、一歩も足を踏み込でいない。エレベーターのドアの前には武器を装着した警備第員が二十四時間歩哨に立っている。張仁淑著、辺真一・李聖男訳『凍える河を超えて(下)』講談社、2003年、26頁。
132　「개선문　제막식」（「凱旋門の除幕式」『朝鮮中央年鑑』1982年）150頁。
133　『党の領導下で創作建立された大記念碑の思想芸術性』、161頁。

「凱旋門に＜1925年～1945年＞と刻めば、首領様が20年振りに祖国に帰ることになる」[134]からだと説明した。これは歴史的事実よりは、見栄えに重きを置いていることを示す小さな例である。金正日は「凱旋門は高さが60mであるために世界で最も大きい。今、世界的に最も大きいと言われる凱旋門も高さは50mもない」と誇らしげに語った[135]。第2次世界大戦の終了と共に日本の植民地から離れることになった事実とはまったく異なる、いわゆる金日成の祖国解放の神話を絶対化したいという意欲が、そこには内包されていたと言えるだろう。

金日成が70歳の誕生日に自らの生まれた生家、万景台への道路拡張と普通江に架するパルゴル橋の竣工のテープカットを行ったことも、建築物を通した金日成の支配的欲望がうかがわれるし、金日成の生誕70年に際して北朝鮮には世界で最も巨大な主体思想塔と凱旋門が建立され、主体思想を創造した金日成、祖国を解放した金日成として、彼の権威と偉大性が国内のみならず海外に向けても喧伝されるようになったのである。後日平壌の万寿台創作社ではこのような「平壌繫栄期」を内容として金正日の業績を称えるために「蒼光山記念碑」という大記念碑の建築を計画した。しかし、1991年2月に金日成は万寿台創作社を現地指導した際に、「蒼光山記念碑」の建立を許さなかった。それ以後、実現できなかった「蒼光山記念碑」は、金正日の主居空間と執務室を中心とした70年代と80年代の活躍を集約した内容であった。金日成が「蒼光山記念碑」の建立に反対した理由は、後継者の業績が独自的業績ではなく、首領偉業に吸収される従属変数と考えたためである。権威と象徴の分散は、権力の分散を意味するからであった。

134　同上、156頁。
135　同上、161頁。

２.「全社会の主体思想化」

1980年10月10日から14日まで朝鮮労働党第6回大会が開催されたが、金日成はこの大会で行った活動報告で三大革命（1970年第5回大会で提示）の成果を総括し[136]、これからの新たな革命路線と闘争課題を提示し、「全社会の主体思想化」というスローガンを打ち出した。金日成は「全社会の主体思想化は、朝鮮革命の総体的任務である」と規定し、「勤労人民大衆の自主性を実現するための労働者階級の革命偉業は、全社会を主体思想化することによって初めて最終的に完成される」[137]と述べ、最終目標が「人民大衆の自主性を実現する」ところにあると明らかにした。このような革命の最終的目標は1982年4月14日に開催された最高人民会議第7期第1回会議での金日成の演説で「全社会を主体思想化することは、わが革命の総合的任務であり、共和国政府の歴史的使命」[138]になった。こうして「全社会の主体思想化」は「人民大衆の自主性を実現する」ための手段として党・国家の目標になった。

「全社会の主体思想化」は、国内にのみに向けて推進してきた「金日成主義化」が対内外に公式化されたものに過ぎない。それは「金日成主義」が主体の思想、理論、方法の全一的体系と規定されたことに比べ、「金日成同志の思想、理

---

[136] 3大革命は、一言で言えば「全社会の金日成主義化」を実現するための社会的運動である。社会主義完全勝利を成す時期までの過渡期段階において、対内的な革命目標と戦略的課題として、①思想革命（全社会の金日成主義化）、②技術革命（生産の機械化、自動化など）、③文化革命（全人民のインテリ化）を設定した。1970年の朝鮮労働党第5回大会において金日成は、3大革命課題を提起した。その後、3大革命の概念は、1972年の改正憲法で規定され、73年2月10日に公式的に3大革命小祖が組織された。この組織は、3大革命を推進するための前衛隊と言える。

[137] 김일성 「조선로동당 제6차대회에서 한 중앙위원회 사업총화보고」（金日成「朝鮮労働党第6回大会の中央委員会事業総括報告」1980年10月10日『金日成著作集』第35巻、1987年）312－313頁。

[138] 김일성 「온 사회를 주체사상화하기 위한 인민정권의 과업」（金日成「全社会を主体思想化するための人民政権の課業」朝鮮労働党中央委員会、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議合同会議での金日成同志の施政演説『労働新聞』1982年4月15日）3面。

論、方法を主体思想という」[139]ために、両方は金日成の思考と統治方法を正当化するからである。しかし、「全社会の金日成主義化」は共産主義社会を建設することを最終目的と設定したものの[140]、「全社会の主体思想化」は「人民大衆の自主性を実現する」ことを最終目標と設定したことに違いがある。すなわち、「金日成主義化」から「全社会の主体思想化」へのイデオロギーの表面的転換は、共産主義社会の実現から人民大衆の自主性の実現への目的の変更を意味する。

1980年代に入って新たに強調されるようになった「人民大衆の自主性の実現」について第6回党大会の金日成の報告からその意味を探る。金日成は「すべての社会構成員を主体型の共産主義的人間に、社会生活のすべての分野を主体思想の要求通りに改造することによって、勤労人民大衆の自主性を完全に実現することができる」[141]と強調した。逆に言えば、人民大衆の自主性を実現するというのは人間と自然を金日成の思考と要求に合わせて改造することを指す。実際に、1983年5月に金正日は全社会の主体思想化について次のように説明した。「わが党が提示した全社会の主体思想化綱領は、人間と社会と自然を主体思想の要求に合わせて改造し、共産主義の思想的要塞と物質的要塞を成果的に占領し、勤労人民大衆の自主性を完全に実現させる偉大な共産主義建設の綱領である」[142]。

このように、「全社会の主体思想化」は二つの側面をもっている。一つは、社会のすべての構成員を主体思想によって堅固に武装させ、主体型の共産主義革命家に改造することである。また、いま一つは、社会生活のすべての分野を主体思想の要求通りに改造することである。前者が思想改造であれば、後者は文化水

---

139 김정일 「맑스-레닌주의와 주체사상의 기치를 높이 들고 나가자」（金正日「マルクス・レーニン主義と主体思想の旗幟を高く掲げよう」カル・マルクスの誕生165周年および逝去100周年に当って、『勤労者』1983年5月号）6頁。
140 金正日「全社会を金日成主義化するための党思想事業の当面したいくつかの課題について」、31頁。
141 金日成「朝鮮労働党第6回大会の中央委員会事業総括報告」、313頁。
142 金正日「マルクス・レーニン主義と主体思想の旗幟を高く掲げよう」、439頁。

準の向上であるが、この二つの内容は「人間改造」という論理によって正当化される。「人間改造」は思想改造と文化水準を高める二側面を包括するが、より根本的であり重要なのが思想改造であり、文化水準を高めるのも窮極的には思想改造に帰結する[143]。 結局、「人間改造」とは思想と文化によって個人の欲望が抑制され、自らの判断を失って金日成・金正日の意図にしたがって生きているような人間に改造することである。つまり、人間の思想と欲望を主体型に改造するのが「全社会の主体思想化」を実現するうえで基本であると見なされた[144]。このように、「金日成主義化」は「主体型」の人間＋「共産主義」革命家と言う合成語によって、より体系的論理を備えて「全社会の主体思想化」に転換したのである。

「全社会の主体思想化」は、海外にも主体思想の伝播を目的としていた。実際、1979年10月に開催された党政治局会議において、金日成は世界的に主体思想を宣伝するために、党中央委員会の内部に「主体思想研究所」を非公開の部署として設置することを決定した[145]。当時、思想理論的な対外事業を行う党国際部とも言える「主体思想研究所」について、金正日は、主体思想の対外宣伝事業を凡そ30年間継続するならば、世界の思想に変化が起こるだろうと期待していたと黄長燁は回顧している[146]。こうして、当初対内的に限定されていた「金日成主義化」という目標は、1980年から対外的にも「拡大」されたと見るべきであろう。金日成は、主体思想の世界化を目指したのである。

金正日は、1980年1月1日に主体思想の世界化戦略が金日成の偉大性を全世界に広く知らせるためであったことを示唆した。「首領様を奉じて世界に輝く朝鮮があり」、「首領様の権威は全世界が公認する最高の権威であり、絶対的な権威

---

143 주체사상총서 제6권『인간개조리론』（主体思想叢書第6巻『人間改造理論』平壌：社会科学出版社、1985年）27頁。
144 『철학사전』（『哲学辞典』平壌：社会科学出版社、1985年）662頁。
145 黄長燁、『回顧録』、223頁。
146 同上、227頁。

である」ために、「首領様の誕生70周年を契機に首領様の権威を世界にさらに輝くようにすべきであり」、「首領様の偉大性を心臓に体験し、全世界に広く宣伝すべきである」[147]。金正日は、①金日成の健康問題を国家における最も重要な要素として優先させ、②同時期に事業補佐として金日成の権威を高めることを推進したのである。この両者は、金日成の独裁権力への欲望という私的動機から出発したと思われる。このような政治過程は、権力関係が人々の価値を剥奪する能力を有する時に生じると言ったラスウェルの権力論にあてはまるところである[148]。

金正日は、1982年3月31日、金日成の誕生70周年に先立ち、全国主体思想討論会に送った論文を公表した。『主体思想について』というタイトルのこの論文において、金正日は、主体思想が金日成の多方面にわたる思想理論活動の高貴な結実であり、主体思想を創始したことは金日成の革命業績でもっとも輝かしい位置を占めていると評価した。ここで首領は、革命と建設で最高脳髄として絶対的地位を占め、決定的役割を遂行する党と革命の卓越する領導者になった[149]。主体思想の哲学的原理は、人民大衆の自主性を実現するために首領の領導を受けるべきであり、首領が存在しない限り人民大衆の自主性が実現できないという「首領論」を体系化した論理である。

こうして、人民大衆の歴史的偉業は、すなわち、首領偉業になり、「全社会の主体思想化」は、「社会主義制度が打ち建てられ、全党と全人民の確固とした政治思想的統一が成し遂げられた新たな歴史的条件のもとで、進行する幅広い主体思想化過程である」と定義されることになった[150]。主体思想は、1985年に主体

147　金正日「偉大な首領様を高く仕えることはわれわれの崇高な任務」、366頁。
148 ラスウェルは、権力論の実体的アプローチについて、権力の本質を権力者が物理的強制力をはじめとする社会的諸力（富、情報、知的能力等）を独占している点に求める。ラスウェル. H. D著、永井陽之助訳『権力と人間』東京創元社、1990年を参照されたい。
149　『哲学辞典』1985年、376頁。
150　同上、661頁。

思想叢書全10巻に集大成されて出版された。主体思想叢書は、人民大衆は首領の領導を受ければ、その役割を果たすという首領中心の社会原理が貫かれており、したがって、革命と建設における首領の存在は絶対的なものになったのである。

小　結

1967年から頻繁に使われるようになった「首領」という用語は、金日成が唯一思想体系の確立を宣言した後に正式に使用され、1970年前後に概念化された。この時期、金日成は1970年11月に開催された朝鮮労働党第5回党大会で党総書記として再任され、党の唯一思想体系の確立によって金日成に価値集中化が初めて展開された。さらに、1972年12月には憲法改正を断行して主席制を導入し国家主席に就任した。党総書記であると共に国家主席になった金日成は、その上に首領の地位を絶対化したのである。この時点で、首領概念を通して党・国家権力が金日成個人に集中されるようになり、金日成の個人レベルの「健康」が最優先として公式レベルの「仕事」が伴うことが政治的決定要素になった。

金日成が60歳になる1972年から金日成の健康・安寧が重要な政治要素として登場し、それと同時に、平壌の万寿台に世界で最も巨大な金日成銅像が建立され、金日成の個人崇拝が制度化され始めた。全国で「首領様の万寿無疆をお祈ります」というイベントが開かれ、金日成を「建国の父」、「解放の恩人」として奉じ、金日成の偶像化が一般化された。また、金日成の誕生日を「民族の最大の日」と設定し、金日成の権威と偉大性を象徴する、いわゆるシンポル操作が本格化された。その2年後、1974年に金日成は自らの長男である金正日を後継者として指名し、後継者は「全社会の金日成主義化」を宣布して「党の唯一思想体系確立の十大原則」という強力な強制手段を使い、大衆を「金日成主義者」に改造することを目指した。

政治費用を多く支払いながらも[151]、金日成が65歳になる1977年に、後継者金

[151]　和田春樹によると、「 北朝鮮は、74年秋から貿易代金が支払えなくなり、その責務は75年9月には総額3億ルーブル、76年初には20億ルーブルに達した」。そのうち6割が対

正日は金日成の「万寿無疆研究所」と「主席宮」を建立して「忠誠の贈り物」とし、金日成の象徴化に取り組んだ。これが首領の健康と仕事を補佐する後継者の役割であり、全国の人々には金日成に喜びを与えるのが最大の「忠誠心」であるという教化を行った。この時期から金日成の「健康」という個人レベルの政治的要素は最も重要な政治関数として公式化された。政治関数とは金日成の「健康」という変数の変化によって権力関係が再編される重要な政治的影響力を指す。金日成の「健康と仕事」は首領の呼称によって正当化され、後継者の登場を可能にした。

首領を補佐する後継者の役割によって、金日成が70歳になる1982年には金日成の存在を象徴する世界で最も高い「主体思想塔」と最大の「凱善門」が建立され、金日成の思想と主張する主体思想が論理的構成体系を備えた「哲学的原理」として発表され、人々の人生に深い影響を及ぼすようになった。このような過程で金日成の個人崇拝は、人々にとって党総書記や国家主席に対するものではなく、「首領」に対する無条件の忠誠を発揮するものとなり、これが一般人民大衆に対する教化の目的とされたのである。

金正日が後継者として登場してから「全社会の金日成主義化」を推進しつつ、それを実現するために「党の唯一思想体系十大原則」という強力な統制手段を作り出し、北朝鮮社会に「金日成主義」を着実に内面化させていった。結局、後継者の役割が強化されればされるほど金日成主義は正当化され、結果的に「首領」の権威を象徴する偉大性は一段と高まることになった。

このような「首領の偉大性強化と金日成主義化」は、1982年4月15日の金日成

西側諸国への負債である。この実態の中で助けられたのはやはりソ連だった。76年2月の朝ソ経済技術協力協定では1億1700万ルーブルの借款と利子・元金返済のために4000万ルーブルが与えられている」。和田春樹『北朝鮮――遊撃隊国家の現在』岩波書店、1998年、234頁。

の70歳の誕生日前後に大幅に変容する。金日成は80年10月10日に開催された朝鮮労働党第6回党大会において「全社会の主体思想化」を内外に宣布した。「全社会の金日成主義化」について自ら口にすることがなかった金日成は、自分の名前を冠さない「全社会の主体思想化」を、直接掲げることができたのである。「全社会の主体思想化」とは、本質的には「金日成主義化」と同義である。

この第6回党大会において、金正日は党中央委員会の政治局常務委員、書記、軍事委員会委員に推戴され、表舞台に登場することになった。その後、金日成の70歳の誕生日に向けて金正日は、金日成を象徴する「主体思想塔」を平壌に建立し、82年3月31日には「主体思想について」という論文を発表した。この論文は「首領」の個人独裁の政治方式を正当化する方向で論じられるものだが、初めて主体思想の論理的体系化を試みたことの意味は大きい。歴史の主体は人民大衆であると定義し、人民大衆の自主性を実現するのが主体思想の真髄であるとしたうえで、人民大衆の自主性を実現するためには首領の領導を受けなければならない、としたのである。1985年まで首領は、金日成の独裁権力を象徴する呼称であった。

こうして、首領は革命と建設において絶対的な存在として位置づけられるようになった。一方、金正日は後継者の最も重要な役割であるイデオロギー解釈を通して自らの政治活動領域をさらに拡大した。しかし、後継者の役割を強化すればするほど首領の権威と偉大性はさらに高められるようになり、絶対的力を持つようになったのである。

第２章 「首領権力」の生成(1986年)

1986年7月15日に金正日は、「7.15談話」において「革命の主体は、首領・党・大衆の統一体」[152]であると定義した。ここで言う革命の主体は、首領・党・大衆の単純な結合体ではなく、一つの生命に結合されて運命を共にする社会政治的集団であり[153]、いわゆる「社会政治的生命体」を指す。それは、単なる生物学的実態ではなく、個人的「自我(エゴ)」と社会的「自己(セルフ)」[154]を結びつける試みである。

その理由は、政治における最優先的要素になった首領の「健康と仕事」の問題が、金日成の高齢化が進むことによって重大な課題になったからである。金日成の独裁権力を象徴した「首領」呼称は、権力そのものになって「首領権力」を生み出す理由になる。「革命と建設」の先頭に立って指揮した首領は、「社会政治的生命体」の中心に生まれ変わる。金日成は「生命体」の中心なってすべてを「生命」の繋がりに再構成し、権力「維持・安定化」を目指した。第二章では、新たに登場した「社会政治的生命体」論の構造と構成要素の作動原理を解明する。権力構造とメカニズムはどのようになり、何を目指して構造化されたのか、「社会政治的生命体」論の統治性を問題として設定する。

---

152 「7・15談話」、前掲書、18頁。
153 김학봉「수령, 당, 대중은 운명을 같이하는 사회정치적 생명체」(金ハクボン「首領・党・大衆は運命をともにする社会政治的生命体」『勤労者』1987年12号)17頁。
154 ラスウェル・カプラン、前掲書、29頁を参照。

第一節 「社会政治的生命体」論の登場

１.「社会政治的生命体」の形成

(1) 「生命・政治」結合の変遷過程

金正日は、「7.15談話」で金日成が「歴史上初めて個人の肉体的生命と区別される社会政治的生命があることを明らかにした」[155]と述べ、金日成の要求に従って「社会政治的生命体」論を作り出したことを明確にした。人間の生命において肉体（物質）は生物学的属性であり、社会政治（精神）は社会的属性を意味する。このような論理は歴史上、数多く議論されたものであろうが[156]、金日成の独創性として強調されたのは、これからの統治方向を予告する権力意志を示したものと見られる。従来、北朝鮮で使われた生命の「二つの軸」[157]は統治領域と服従領域の二つに分けて説明することができる。一つは、最高統治者の「健康(肉体)と事業（政治）」であり、もう一つは、一般の人々の「肉体（献身性）と政治（服従性）」的生命であった。前者は、国家統治の最優先的要求として設定されたが、後者は、人々の精神を通して肉体を支配する方式の「忠実性」と規定された。

では、新たに登場した「社会政治的生命体」論の構造を分析するために、「生

---

[155] 同上、18頁。

[156] ニーチェによれば、ヨーロッパの2000年の歴史は、精神支配による肉体支配の歴史であった。彼は歴史を精神の歴史としてではなく、肉体の歴史として見なし、「精神と肉体」という二元論を主張した。大石紀一郎ほか『ニーチェ事典』弘文堂、2014年、60－61頁を参照。

[157] 「二つの軸」は、市野川容孝の『身体／生命』による精神と物質（身体）を指すものであり、また、「自己」と「他者」という軸として用いるようにする。市野川容孝『身体/生命』岩波書店、2009年、3頁。

命」を媒介としてきた三段階の統治過程を検討してみよう。第一段階において、「社会政治的生命体」は、北朝鮮で「政治的生命」という用語から始まり、「首領」概念の変化と共に変貌してきた。最初は、一般的に「党員は党生活をするのみで政治的生命を維持することができる」[158]という党員の組織的生命として使われた。ところが、1967年以後新たな展開が見られた。唯一思想体系の確立の要求に合わせて人間には政治的生命と肉体的生命があり、前者を持つことは「人間として最大の生きがいと真の価値を持つこと」だと規定し、さらに、政治的生命を貴重とみなす高貴な品性は、すなわち「首領と革命に対する無限の忠実性」であるとされた[159]。このような「政治的生命」という用語は、党内において首領である金日成に価値集中化を試みる独裁権力の資源「獲得」を目指したものであった。

第二段階においては、「政治的生命」は自主性、すなわち主体に結び付けられ[160]、「社会政治的生命」として論じられた。1972年9月17日、金日成は毎日新聞記者に主体思想を説明した中で「社会的存在である人間にとっては肉体的生命よりも社会政治的生命が貴重であると言うことができます」[161]と述べた。その後から、全社会的範囲で「社会政治的生命」の価値概念が使われたが、金日成の個人レベルである健康・安寧が最優先の政治要素になる時期と重なるものであった。さらに、後継者の登場以後から「社会政治的生命」という概念は「全社会の金日成主義化」の価値として展開され、とくに、82年に発表された金正日『主体思想

---

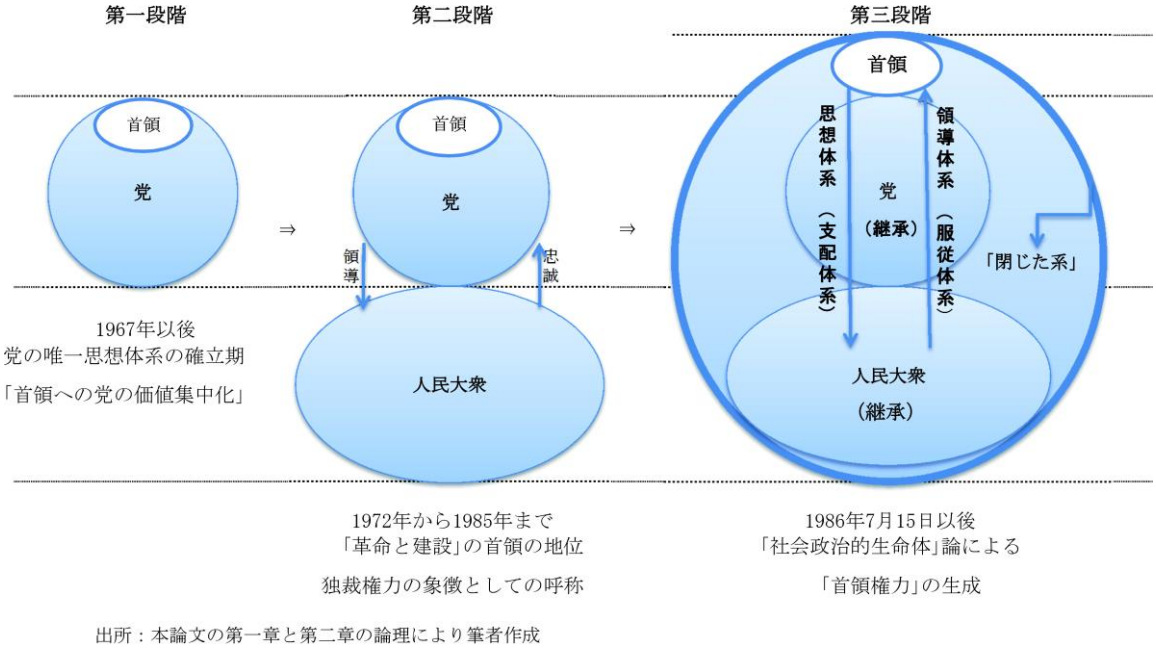
158 김일성 「지도일군들의 당성, 계급성, 인민성을 높이며 인민경제의 관리운영사업을 개선할데 대하여」(金日成「指導幹部の党性、階級性、人民性を高めて人民経済の管理運営事業を改善することについて」朝鮮労働党中央委員会第4期第10回全員会議での結論、1964年12月19日、『金日成著作集』第18巻)501頁。

159 鐸木昌之[1992]、前掲書、146－147頁。

160 同上、148頁。

161 김일성 「우리당의 주체사상과 공화국정부의 대내외정책의 몇가지 문제에 대하여」(金日成「わが党の主体思想と共和国政府の対内外政策のいくつかの問題について」日本『毎日新聞』記者が提起した質問にたいする回答、1972年9月17日、『金日成著作集』第27巻)396頁。

について』でその論理的体系を備えたのである。この論文の中核をなす「主体思想の哲学的原理」の中で、金正日は「社会的存在である人間にとって自主性は生命です。人間にとって自主性が生命という時、それは社会政治的生命を指します。人間は肉体的生命と共に社会政治的生命を持ちます。肉体的生命が生物有機体としての人間の生命であれば、社会政治的生命は社会的存在としての人間の生命です」[162]と主張した。人間の社会的価値を党員の「政治的生命」から全社会の構成員の「社会政治的生命」へと変化させたが、この過程は首領が「党の唯一的価値集中化」から「独裁権力の象徴としての呼称」に転化した時期と重なるものであった。



［図2-1］「首領」概念の三段階の変遷史

[162] 김정일 『주체사상에 대하여』（金正日『主体思想について』偉大な首領金日成同志誕生70周年記念、全国主体思想討論会に送った論文、1982年3月31日、平壌 ： 朝鮮労働党出版社、1982年）10頁。

[図2－1]に示したように第三段階は、個々の「社会政治的生命」が「社会政治的生命体」の属性になることを指している。金正日は、国家全体を「社会政治的生命体」と定義し、社会を一つの「生命体」にまとめた。黄長燁の『論理学』によれば、「生命体」は生命活動ができる程度の自己保存能力が発展した物質的存在であるが、「生命」は「生命体」の自己保存性である[163]。一般的に自己保存とは、生物が自分の生命を保存し発展させようとすることであろうが、黄長燁の論理を受け入れると「社会政治的生命体」の自己保存には、首領を中心とした統一体になり、そこには金日成の権力維持への意志が作用したことになる。金正日は、「人民大衆は党の領導下で首領を中心に組織思想的に結束されることによって永遠の自主的な生命力を持つ一つの社会政治的生命体をなす」[164]と述べたところからも金日成の権力への意志が作用したことが説明される。ここで人民大衆は①首領を中心に結束した「影響力の範囲」になり、②首領を中心に結束されたために永生する「時間の持続性」を持つようになる。永遠とは、前後ぬきの今という絶対的現在であることを参照すれば[165]、「永遠の自主的生命力」の要求は、最高権力の維持を目指すものである。

(2)　時間性の原因と「権力原則」

1987年、75歳を迎える金日成にとって、長生きしながら仕事を続けたいという欲望と身体的機能の低下がもたらす不安とが交錯する時期であった[166]。北朝鮮

---

[163]　황장엽 『인간중심철학 원론』（黄長燁『人間中心の哲学原論』ソウル：時代精神、2008年）49頁。
[164]　「7.15談話」、前掲書、18頁。
[165]　加藤尚武ほか『ヘーゲル事典』弘文堂、2014年、37頁。
[166]　Ｅ．Ｈ．エリクソン・Ｊ．Ｍ．エリクソン・Ｈ．Ｑ．キヴニックの共同著書によると、一般的に老年期では統合と絶望との間の緊張が生じ、これは最高潮に達する。まだこれから生きなければならないというよりは、もうほとんど元決しているライフサイクルを目のあたりにし、残された未来を生き抜くための英知の感覚を統合し、現在生きている世代の中でうまく釣り合う位置に自分を置き、無限の歴史的連続の中での自分の場所を受け入れ

の『心理学概論』によると、一般的に人間は、老衰期（75歳から）になると有機体の適応能力が低下し、仕事のやりがいが大きい場合でも、体が思った通りに動かないという特徴があると言う[167]。高齢化が進んでいる金日成も例外ではない。最高統治者である金日成に与える影響は相当大きかったと思われる。

1986 年 4 月 16 日、金日成は 74 歳の誕生日を迎えた翌日に、10 年前の 1976 年に長寿者に対して強い関心を抱いていたことを明らかにした。北朝鮮の「金塘里には、100 歳を超えた長寿者らが多くいます。金塘里の人々が長生きすると聞いて、わたしは 10 余年前にある医療幹部らを、そこに行かせ、長寿者らがどのように生きているのかを調べるようにしましたが、彼らは健康な身体で縄をない、むしろも、かますも編みながら仕事をしていたそうです」[168]。このように、金日成の長寿に対する強い関心は、最高医療幹部を長寿者が住む地域に直接派遣したことにもよく示されている。1977 年に金日成は自分の健康のために平壌に「万寿無彊研究所」を設立したが、それも金日成の健康の問題と長寿に対する強い関心を傍証するものであろう。しかし、1984 年末に金日成の健康は心臓病を抱えて悪化し、金正日はソ連に最高医療診を要請したこともあったという[169]。同時期に金正日は、人は「年寄りになると脳髄の機能が低下するために創発的自己能力が弱くなり、記憶力も落ちる」[170]と言ったが、それは金日成にも全て当てはまるものだったと言ってよい。

る、という課題に直面する。E．H．エリクソン・J．M．エリクソン・H．Q．キヴニック、前掲書、59頁。

[167] 李ジェスン、前掲書、433頁。

[168] 김일성 「재일동포들은 애국애족의 정신을 지니고 참답게 살아야 한다」（金日成「在日同胞らは、愛国愛族の精神を持って真実に生きるべきである」在日本朝鮮人祝賀団と西新井病院院長と家族、在日本朝鮮人医学協会代表団との談話、1986年4月16日、『金日成全集』第83巻）320頁。

[169] 「김일성 84년 극비 신병치료」（「金日成84年極秘に身病治療」『東亜日報』1995年10月12日）8面。

[170] 김정일「평양 제1고등중학교를 본보기 학교로 잘 꾸릴데 대하여」（金正日「平壌第一高等学校をモデル学校としてよく備するために」教化部門責任幹部協議会の演説、1984年4月28日、『金正日選集』第8巻）51頁。

このような一般論にも通じる認識を持った金正日は、活動領域が拡大することによって党と大衆の目が若い後継者に向けられていたにもかかわらず、なぜ、金日成を「社会政治的生命体」の最高脳髄として位置づけたのか。これは金日成の権力への意志であったと答えられる。人間として高齢化が進めば進むほど決定能力や記憶力の低下が著しくなり、「社会政治的生命体」という「分離不可能」な権力の強力な装置を設定しない限り、最高権力を維持することさえできないとの不安が存在していたと考えられる。75 歳になった金日成は、以前のように政治現場に行って人民らと接する（現地指導）機会が減少する反面、後継者の存在が大きくなれば権力中心の移動あるいは分散の可能性も十分あり得るものであった。

そうした状況が生まれることを防ぐために、「社会政治的生命体」の枠を設定して「首領権力」の集中化をはかり、後継者と党、人民大衆が首領という存在に運命を委ねるように従属させたのである。その「社会政治的生命体」は、金日成の権力維持のために「首領権力」の理論的装置として、北朝鮮の政治体制を再構築する「静かな変革」を備えるものであった。

1986 年 5 月 31 日に金日成は金日成高級党学校の創立 40 周年を記念して「朝鮮労働党建設の歴史的経験」という「講義録」で党建設と党活動の基本原則を提示した。第一に、党の唯一思想体系の確立、第二に、党と（人民）大衆の渾然一体をなしとげ、第三に、党建設で継承性を保障することであった[171]。すなわち、党内における①首領の思想体系、②首領の領導体系、③独裁の継承といった権力原則を提示したのである。この三つの「権力原則」で目立つのは、首領の「領導体系」の確立である。金日成は「講義録」で領導体系の確立を 7 回も強調したのである。金日成が「領導体系」に最初に言及したのは、1985 年 10 月 9 日日本社

[171] 김일성 『조선로동당 건설의 력사적 경험』（金日成『朝鮮労働党建設の歴史的経験』平壌：朝鮮労働党出版社、1986年）23頁(以下、「講義録」と略す）。

会党機関紙『社会新報』とのインタビューで 1 回であり、1986 年 1 月 1 日に国政方向を示す「新年辞」で党の「領導的役割」を高めることがすべての勝利の基本要因と言い、「主体思想を基礎とした全党の組織思想団結をさらに強化して党の領導体系を徹底して確立すべき」[172]と強調したことが 1 回であった。それに比べれば、金日成が「講義録」で繰り返し「領導体系」を強調したのは、興味深いところである。

もちちん、以前から領導体系は金正日によってよく使われた統治方式である。1975 年の「全軍を金日成主義化しよう」という談話で、金正日は軍隊内に領導体系を確立することを強調し[173]、1983 年 3 月には軍隊に「党の領導体系を確立することで重要なのは党に対する忠実性と革命的信念を持つことである」[174]と述べ、ほとんど、軍人の絶対的「服従」を求める時に使われた。このように、軍隊や思想的側面で部分的に適用された「領導体系」が、86 年 5 月に金日成によって繰り返して強調されたのであり、これは過去のそれより比重は大きかった。「領導体系」は、二つの意味を内包する。一つは、金日成と金正日の「領導の唯一性」、つまり、指揮権の統一性を図るものであり、もう一つは、領導する者と従う者との関係を明確にすることである。したがって、「領導体系」は権力体系ともいえよう。

1985年に平壌で出版された『主体思想叢書』で論理的体系化を備えることになり、そこで「領導体系は革命と建設に対する労働階級の首領と後継者の唯一的

---

[172] 김일성 「신년사」 1986년 1월 1일（金日成『新年辞』、『労働新聞』1986年1月2日）1面。
[173] 김정일 「전군을 김일성주의화하자」（金正日「全軍を金日成主義化しよう」朝鮮人民軍総政治局責任幹部との談話、1975年1月1日、『金正日選集』第5巻）。
[174] 김정일「유능한 군사지휘간부들을 키워낼데대하여」（金正日「有能な軍事指揮幹部を育てるために」金日成軍事総合大学政治部長との談話、1983年3月9日、『金正日選集』第7巻）。

領導を最も成果的に実現する」[175]ことを目指すものとされた。注目すべき点は、「講義録」で「思想と行動の一致性を保障することができない党は事実上一つの党と言えない」[176]と断言されたことである。金日成の86年の「新年辞」と5月の「講義録」を参照すると、「領導」とは治め導くことであるが、何よりも相手の「従う」行為を前提とする意味であり、「領導体系の確立」を思想体系・領導体系・持続性の「権力原則」の一つに掲げたことは、新たな構造や方式の再編を予告するものであった。

２．「社会政治的生命体」の論理構造

「社会政治的生命体」は、「生命力」を持った有機体として論理化された。これは、他の社会的集団と異なる一つの中心に統一される垂直的関係と、人民大衆に属する人々が革命的信義と同志愛の水平的原理によって結合された全一的な有機体集団になった、とされたのである。金正日は「首領・党・大衆が一つに結合される時のみに永生の社会政治的生命体をなすために、それを互いに分離・対置させてはいけない」[177]と主張し、分離不可分の有機体と位置づけた。「社会政治的生命体」論で首領を生命体の最高脳髄として絶対的地位と決定的役割を果たす

---

[175] 주체사상총서(9) 『령도체계』（主体思想叢書(9)『領導体系』平壌：社会科学出版社、1985年)56頁。
[176] 「講義録」、前掲書、24頁。
[177] 1988年に平壌で出版された「『主体思想教化で提起されるいくつかの問題について』の解説」には、首領・党・大衆の役割が一つに統一されることについて、金正日は三位一体性とその理論的根拠を闡明し、三位一体性について深奥な論証をしたと論じている。「친애하는 지도자 김정일동지의 로작 『주체사상교육에서 제기되는 몇가지 문제에 대하여』의 해설」(「親愛なる指導者金正日同志の労作『主体思想教化で提起されるいくつかの問題について』の解説」平壌：朝鮮労働党出版社、1988年)141－143頁(以下、「7.15談話の解説」と略す)。

唯一の存在に位置づけ、党は生命体の神経組織として機能を果たす道具であり、人民大衆は党を通して首領の指揮に従い動く受動的存在であると理論化された。結局、一つの生命体は最高脳髄の意志を実現するために一つの思考、一つの行動を目指し、思想と社会生活、社会的運動のすべてが首領の意図のとおりに動くことが正当化された。

こうした説明は、いくつかの特徴を示唆している。第一の特徴は「社会政治的生命体」の設定は別の言葉で言えば、外部との境界が明確になる「閉じた系」(closed system) である[178]。その中で、①首領・党・大衆の構成と、②相互作用の結合原理が新たに論じられる。最も重視する第二の特徴は「閉じた系」に「内」と「外」を区別する中心(首領)が存在しているという点である。北朝鮮が論じる「閉じた系」は外生変数（外的要因）によって規定されるのではなく、模型化された体系発展の内的な合法則性によって内生変数（内的要因）によって規定される[179]。

このような「閉じた系」をルーマンは「閉鎖的システム」として説明する。彼によると政治システムが国家を基軸とすることは、その政治システムの自己準拠(首領中心)の閉鎖性を可能にしている[180]。ルーマンが指摘した自己準拠は、システムの限定可能性を強化するための要件であると同時に、システムの性能を高めるための条件であり、つまり、システムの複雑性を縮減することをとおしてシステムの秩序を形成するための条件にほかならない[181]。

178　たとえば、「閉鎖系」とも表現される「閉じた系」は外界と質量の交換はしないがエネルギー交換が可能な系であり、その特徴は、外界との関係に制限がある系にはその制限に応じた保存則が適用される。

179　『조선대백과사전（6)』（『朝鮮大百科事典(6)』平壌：百科事典出版社、1998年）24頁。

180　N・ルーマン著、佐藤勉監訳『社会システム理論』(下)恒星社厚生閣、2007年、845頁。

181　同上、861頁。

結局、首領中心の秩序化を目的とした「社会政治的生命体」は首領・党・大衆という構成要素と集合体の関係を体系化することに役立っている。つまり、有機体的パターンを形成・維持するような形で相互作用が展開される論理である[182]。後日、金正日はこのような有機体的システムを三位一体と論じ、首領・党・大衆が一つの有機体として分離できない理論的根拠とした。金正日は「革命史的事業で首領・党・大衆の三位一体を保障すべき」[183]という当為性と、その中で「三位一体の観点と立場に立てば、首領を党と大衆との血縁的な関係と見なす」[184]ようになると強調し、首領を党と大衆から分離できない絶対的存在に位置づけると同時に、党と大衆を首領の権力対象として求める認識を示したのである。

「社会政治的生命体」論で中核をなすのは、「首領を社会政治的生命体の最高脳髄」と設定したことである。金正日は「社会政治的生命体は多くの人々が集まっているために、そこには社会的集団の生命活動を統一的に指揮する中心があるべきです。個別的人々の生命の中心が脳髄であるように社会政治的集団の生命の中心はこの集団の最高脳髄である首領です」[185]と述べ、社会における首領の絶対的地位を規定し、「首領を社会政治的生命体の最高脳髄というのは、首領がすなわち、この生命体の生命活動を統一的に指揮する中心であるためです」[186]と断じ、「生命体」を動かす決定的な役割を果たす存在は首領であると定義した。一言で言えば、首領が唯一の決定権者であることを意味する。

さらに興味深いところは、「社会政治的生命体」論によって構造化された首

182　ラスウェル・カプラン、前掲書、14頁。
183　김정일「주체의 혁명전통을 빛나게 계승발전시키자」(金正日「主体の革命伝統を輝かしく継承発展させよう」全国革命事跡責任幹部大会の参加者に送った書簡、1991年12月5日、『金正日選集』第12巻)237頁。
184　김정일『주체문학론』(金正日『主体文学論』1992年1月20日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年)126頁。
185　「7.15談話」、前掲書、18－19頁。
186　同上、19頁。

領・党・大衆の三位一体は、「階級」を削除したことによってマルクス主義的観点を全面的に否定した。元来であれば、首領・党・階級・大衆と言われた社会構成が[187]、「社会政治的生命体」論で首領・党・大衆に変更された。第三章で具体的に論じられるが、かつて、北朝鮮は階級闘争を革命と建設の根本問題と強調してきたが、「社会政治的生命体」論で「階級」概念をなくすことによって1986年12月30日に金日成は「階級廃絶」を宣言するに至る。こうして闘争目的が「階級闘争」から「思想闘争」に変わったのである。前者を「革命」という共同の目標を価値と言うならば、後者は「首領」個人を価値と設定したことに違いがある。

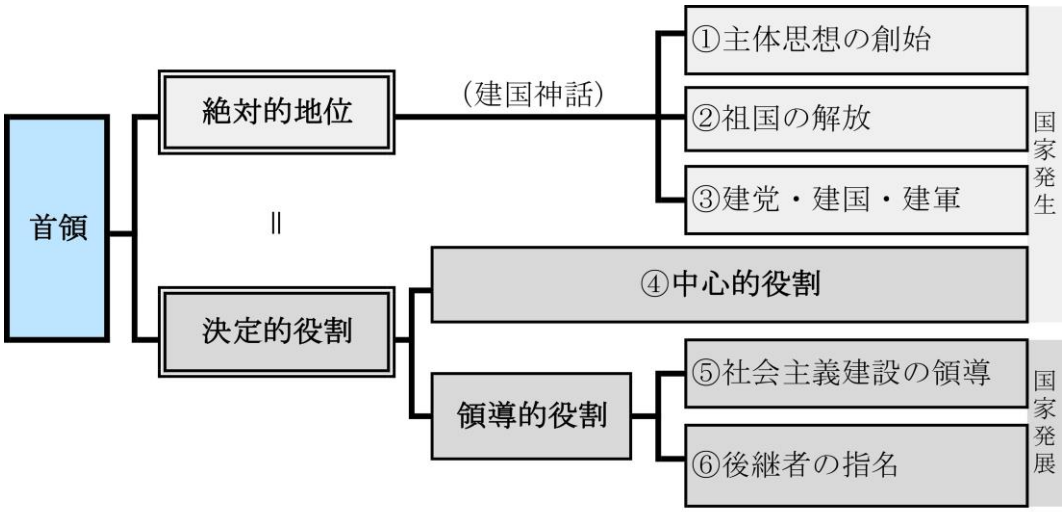
３.「首領権力」の原動力

「社会政治的生命体」での首領は、北朝鮮社会の最高脳髄として絶対的地位と決定的役割を果たす神聖不可侵の存在として「生命力」の源泉になるために、首領が意図したとおりに思考し、行動する一つの生命体の生成要因になった。つまり、「社会政治的生命体」論において「首領に自分の運命を委託し、首領の領導に忠誠を捧げる」ために、首領には人民の運命を決定する「生殺与奪」の権利が生じたのである。「社会政治的生命体」論は一言で言えば、首領の「生殺与奪」の特権を論じる理論であると言ってよいだろう。首領の「生殺与奪」権は、「社会政治的生命体」において首領の「絶対的地位」と「決定的役割」の空間的二側

[187] ここで「階級」と「大衆」の区別について説明する必要がある。階級は、生産手段に対する所有関係によって分かれる社会的集団であれば、「大衆は様々な階級に分かれている」（レーニン「共産主義における『左翼』の小児病」、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン、前掲書、393頁。つまり、様々な階級を包括したのが大衆であるが、北朝鮮は生産手段に対する全人民的所有と協同的所有があるために、労働階級と農民が存在していると言う。『哲学辞典』1985年、34-35頁。

面の継承・持続という時間的側面から論じられることになる。 以下では、「社会政治的生命体」論が追求する①「生命力」の源泉、対象を把握し、②また、その生成原理を解明するために、生命体の最高脳髄である首領概念の構造を綿密に検討してみる。

首領の絶対的地位は、金日成を絶対的存在として正当化するために、①革命思想の創始者、②祖国の解放者、③党・国家・軍隊の創建者として国家発生の根源に位置づける論理であれば、首領の決定的役割は、首領が領導する社会主義建設の発展過程で金日成の最高決定権を合理化する、④団結の中心的役割と⑤領導的役割、⑥後継者の指名（下の首領と後継者の関係で説明される）によって構成された。



出所：「首領」概念の分析により筆者作成

[図2-2]「社会政治的生命体」論における「首領」概念の構造

[図2-2]に示されたように首領概念は六つの要素から構成されているが、①～④までは首領のみの固有性として絶対的地位の根拠に位置づけられる。そして⑤と⑥は首領の領導的役割として権力の作用方法を示す領域である。つまり、「社会政治的生命体」の中で首領の絶対的地位は、絶対的権威を示しながら権力の絶

対範囲を規定し、決定的役割は首領を中心とする権力の諸関係を説明するものである。

第一に、首領の「絶対的地位」（首領概念の①、②、③）は「首領権力」の影響力の範囲として規定したものである。ここで首領は国の「内部」と「外部」（世界＝他界）を区分する境界として機能する。つまり、国内において首領は「自己の抑制」の基準になり、対外においては「他者の抑制」として機能する。これは首領を「社会政治的生命体」の最高脳髄として「唯一の存在」、国家発生の根源（国家の出発点）と設定したからである。金正日の説明によると「永生不滅の主体思想を創始したことは敬愛する首領金日成同志が成し遂げた業績の中でもっとも偉大な業績であり」[188]、そして主体思想を具現して「祖国を解放し、建党・建国・建軍の3代課題を実現し（以下、「建国神話」）、社会主義革命を遂行して社会主義制度を打ちたてた」という偉大な業績は、金日成が首領として絶対的地位を占める充足条件になる[189]。

第二に、首領の「団結の中心」（首領概念の④）役割は、「首領権力」の最高決定権として機能する。「団結の中心」役割は「決定的役割」の二つの側面の中で一つである。この根拠は「社会政治的生命体」で「首領は、団結と領導の中心として人民大衆の運命を開拓することに決定的役割を果たす」[190]存在になるからである。「中心的役割」において首領は、「歴史的必然だ」とされ、「人民大衆を統一及び団結させるための中心を求める切実な社会的要求が提起される時に、人民大衆の中で人類がなしたすべての思想と文化に精通し、人民大衆の要求を集大成し、革命思想を創始する偉大な思想理論家、卓越した領導力と徳性を備えた

188　김정일 「전당에 혁명적 당풍을 철저히 세우자」（金正日「全党に革命的党風を徹底して建てよう」朝鮮労働党中央委員会組織指導部責任幹部会議での演説、1988年1月10日『金正日選集』第9巻）126頁。
189　同上、128頁。
190　「7.15談話」、前掲書、22頁。

偉大な政治家、人民の偉大な首領が出現し、人民大衆は自己の首領を奉じることになる」[191]とされたのである。このような論理は、首領のみが政策決定過程である「入出変換過程」[192]を独占した点を強調するところである。このような「首領中心」論は、以前にも強調されたものであるが、「閉じた系」の中で絶対化された「首領決定論」として過去とは異なる。ここには最高決定権者である金日成の不安が反映されたところと思われる。

第三に、首領の「領導的役割」（首領概念の⑤、⑥要素）は指揮権（執行権）として機能する。これは「決定的役割」のもう一つの側面である。 首領は「人民大衆の自主的な要求と利害関係を分析総合して一つに統一させる中心であると同時に、それを実現するために人民大衆の創造的活動を統一的に指揮する中心」[193]になるからである。上で説明したように、領導は首領を中心に党・大衆の役割の統一性を保障するように指揮する点である。前者は最高決定権を意味するが、後者は首領の直接的な指揮権、すなわち、政策執行の領導的役割を意味する。この領導的役割は権力作用において核心問題になる。それは「首領の役割、党の役割、大衆の役割はいつも統一されている」が、この役割の統一性は、首領・党・大衆の権力作用に貫通する力学的関係に影響を及ぼすからである。

領導的役割は首領と後継者の共通領域である。金日成が「講義録」で領導体系の確立を強調したことも、首領と後継者の「唯一的領導」、「領導の唯一性」を強調することも、二人の領導者による権力中心の二分化を防ぐためであったと考えられる。金日成にとって政策執行という政治行動は、高齢化が進んでいる中で最も不安要素として作用されたと思われる。金日成が「講義録」で三つの権力

---

[191] 김재성 「수령, 당, 대중의 통일체는 력사의 자주적인 주체」(金ジェソン「首領・党・大衆の統一体は歴史の自主的な主体」『勤労者』1987年7号)33-34頁。
[192] 政治構造の「入出変換過程」については、デイヴィッド・イーストン著、山川雄巳監訳『政治構造の分析』ミネルヴァ書房、1998年、22－23頁を参照されたい。
[193] 金ジェソン、前掲書、19頁。

原則を提示し、それに基づいて金正日は「首領権力」の論理を発表したのである。「社会政治的生命体」論は、金日成の絶対的地位論（①、②、③）から金日成の絶対的存在とし、絶対的中心論（④）を通して権力中心を維持しようという金日成の権力「維持・安定化」への意志がどれほど強かったのかがうかがわれる。首領の絶対的地位と絶対的中心の固有性（①、②、③、④）を規定した上で、後継者と領導的役割を共有するようになったことは、金日成の最高権力への不安を表わすものである。

このような「首領権力」の論理は、金日成にとって二つの意味を持つ。一つは、金正日の役割を拡大する必要がある時期に、彼の役割による権限の拡大を制約する論理的装置であり、もう一つは、人民の生命を金日成の生涯に結びつけたことによって自らを最高権力者と認知させる精神的装置であった。その上で、領導的役割（⑤、⑥）の側面を金正日と共有すれば、どれほど彼の活動や権限を強化しても最高権力の安定性が揺さぶれることがなくなるからである。

第二節　首領・後継者：相互依存関係

１．相互依存的比例関係

北朝鮮の「首領権力」の分析において次に重要な問題は後継者の地位と役割である。首領と後継者の関係を明確に解明するのは、それが「首領権力」の凝集力を測定する試金石になるからである。最高権力の集中化か、権力の分権化かを考える時に「首領権力」に後継者が占める地位と役割はもっとも重要な検討対象になると言ってよい。「社会政治的生命体」論において、革命の主体は首領・党・大衆の統一体と規定されたが、この革命偉業の継承には二つの側面が内包される。一つ目は、革命伝統という首領偉業の継承問題であり、二つ目は首領の領導的役割の継承問題、後継者問題である。前者は首領の革命伝統を信念とした人民大衆が代を次いで首領に忠誠を尽くす正統性問題であれば、後者は首領の領導的役割を持続する権力の補完的問題である。首領偉業の継承性と権力の補完性は「首領権力」の維持という要求から生じたものである。

たとえば、金日成は1986年5月31日の「講義録」で権力の正統性問題について「代を継ぐ労働階級の党の偉業を誰がどのように継承するかというのは党の運命、革命の運命に関連される重大な問題」[194]と言及して正統性の継承を権力の生命力に関わる決定的問題として認識を示した。その理由は「首領の領導的地位と役割はその後継者によって変わりなく継承されるべき」[195]問題として強調した。金日成が公式的に後継者問題に言及したのは「講義録」が初めてであったが、かれは

---

[194] 「講義録」、前掲書、112頁。
[195] 同上、110頁。

後継者問題を自分の運命に関わるもっとも重大な問題と認識したのである。その前に、平壌で執筆されたと見られる『後継者論』が出版されたことからも[196]、1986年前後に後継者問題がどれほど重視されていたかを十分に窺わせたのである。

『後継者論』によれば、後継者の役割は次のようである。①何よりも首領にとって後継者は「首領の安寧と万寿無彊（長寿）を徹底に補佐すること」[197]であり、②また、首領の「権威と威信を百方に高めることが首領を奉じるうえで重要な席を占める」[198]。③その次に「全党と全体人民を首領の下に団結させ、政治的力を強化」して行く。後継者は革命隊伍を首領に忠実を尽くす革命戦士に育成する。④後継者は「党と人民大衆を組織動員し、首領が深慮する問題を解決することによって首領に喜びと満足を与える」[199]。⑤首領を補佐する「後継者は卓越した思想理論と党及び国家事業の全般に対する指導を通じて、首領が願う通りに革命と建設を指導する」。

このように首領を身近で補佐する唯一の指導者として、後継者の役割はすべてが首領を最上位に位置づけ、首領を高く奉じて首領の領導が確固として保障され、首領の革命偉業が輝かしく実現されるところに求められることになる[200]。結局、後継者の五つの資質は首領の健康、権威、事業、喜び、思いを実現する道具に過ぎないという条件である。

---

196 『後継者論』は1984年に初版され、1986年に再版されたが、執筆者の名前や発行者の名義が明確になっていない。しかし、北朝鮮の首領と後継者の論理を示したものとして先行研究でも多く使われる。この論理は「社会政治的生命体」論が発表される前に理論化されたことに注目する必要がある。それは『後継者論』のような認識が、1986年に理論化した新たな政治体制の理論である「社会政治的生命体」論に影響を及ぼしたと見られるからである。

197 「万寿無彊」とは、本来は中国の皇帝を祈念する言葉であるが『朝鮮語事典』によれば、(尊敬する人の健康を祈る時)長生きすることを切に願う言葉である。この言葉が北朝鮮に登場したのは、金日成の60歳誕生日の1972年からであり、北朝鮮では金日成のみに使われた言葉であることを第一章で説明した。

198 「百方」とは、形容詞として①すべての方法を尽くす、②また、様々な方面に行うという意味である。『朝鮮語辞典(2)』平壌：科学百科辞典出版社、2010年、721頁。

199 『後継者論』、前掲書、66－68頁。

200 同上、68頁。

後継者の資質で最も注目すべきは、首領の健康と安寧を補佐することが最優先に設定され、つぎに首領の権威と偉大性を最も高めることが求められると同時に、これが首領に対する「忠実性」として求められた。結果的に、後継者の役割は首領の存命中に首領の「健康と仕事」を補佐するための役割に尽きるのである。たとえば、1987年2月16日、金正日は自分の誕生日に首領と後継者との関係について次のような認識を示した。「わたしは首領様のために生まれ、首領様のために生きている戦士です。首領様を高く奉じるのがわたしの任務です…首領様に奉じるためには綺麗な忠誠心を持つべきです。忠誠、忠誠、また忠誠、わたしはこのように言いたいのです」[201]と述べ、首領に対する忠誠心を生命とするのみならず、首領に対する金正日の忠誠度が高くなればなるほど首領の地位は安定的であることを間接的に示唆したのである。

これに対して金日成も1988年1月2日に党・国家・軍隊の責任幹部との談話で後継者の資格について次のように断言した。「首領の後継者が具備すべき資質と風貌において最も重要なのは、首領に対する忠実性です。もし、首領の後継者が首領に対する忠実性を持ってなければ、彼はもはや後継者ではありません。首領の後継者は第一に、第二に、第三にも首領に対する忠実性を第一生命に持つべきです」[202]。これは、後継者に対する首領の「生殺与奪」権を示すものであり、金正日に絶対的服従の求める要求でもある。金日成は金正日の「首領に対する忠実性は誰も模倣することはできません。わたしは、金正日同志の資質と風貌の中で首領に対する忠実性を一番貴重に思います」[203]と述べ、絶対忠誠を求める期待心

---

[201] 同上、136頁。

[202] 第一生命とは、北朝鮮の説明によると人間の存在と価値を規定する最も重要な生命という。つまり、本論でも説明するが、人間の肉体的生命より政治的生命が最も重要であることを意味する。「조선백과사전」(「朝鮮大百科事典」タブレット電子辞典『三池淵（サムジヨン）』平壌、2013年)を参照。

[203] 김일성 「주체의 혁명위업계승문제를 빛나게 해결한 것은 우리당과 인민의 크나큰 영광이며 자랑이다」(金日成「主体の革命偉業継承問題を輝かしく解決することは、わ

理を表した。

このような絶対忠誠を求める者と絶対忠誠を誓う者は、互いに相互依存的関係にあることを説明する。金日成と金正日の言葉から見ると、両者の関係は次のように解釈できる。金日成の「健康・仕事」は金正日の「役割」によって補充されるが「首領権力」の一定量を保存する。金正日の役割（首領に対する「忠誠心」）は金日成の年齢に正比例し、金日成の年齢は権力行使に反比例するからである。金日成の年齢が高くなればなるほど金正日の役割は増加し、金正日の忠誠心が増加すればするほど金日成の偉大性はさらに高くなり、それほど権力維持は安定的になるようなメカニズムを作り出したのである。

２．権力の部分的継承へ

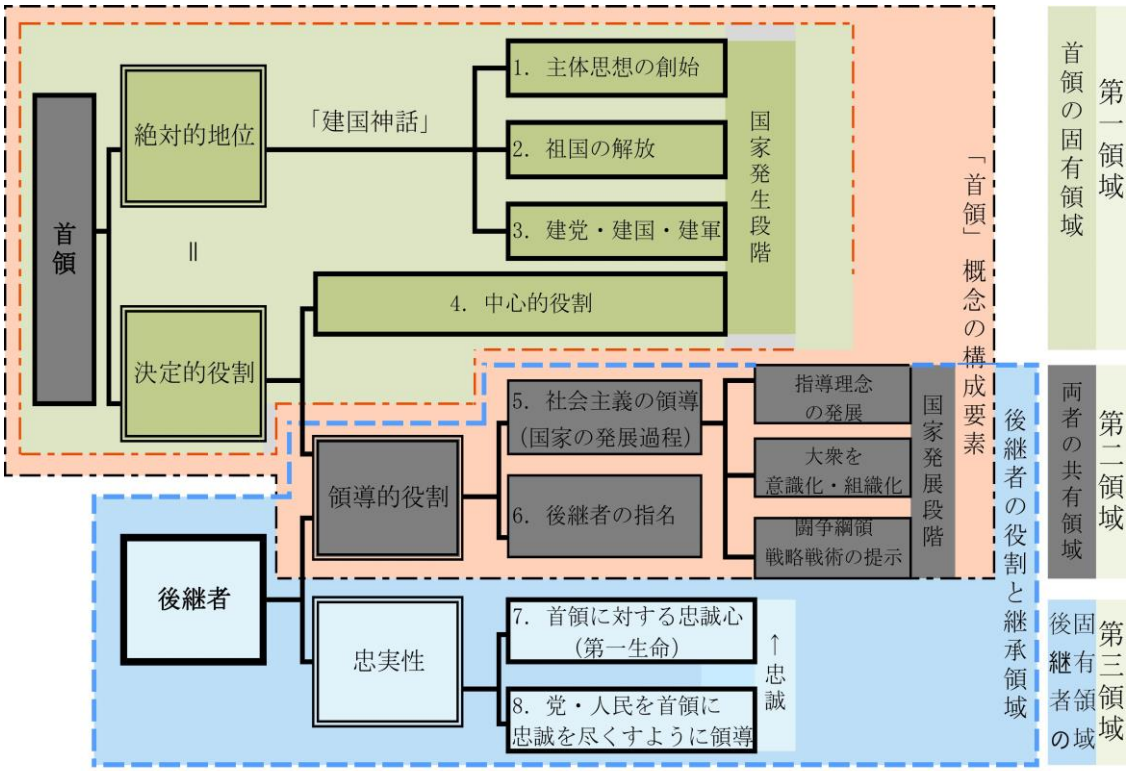
首領から後継者に継承される部分は、首領の「領導的地位」の側面のみである。金日成は1986年5月の「講義録」で後継者の継承について次のように言及した。「労働階級の党建設の後継者問題は、政治的首領の地位と役割を継承する問題です。首領の領導的地位と役割はその後継者によって変わりなく継承されるべきです」[204]。金日成は後継者が首領概念の絶対的な固有性を除いて領導的地位と役割を継承することを明確にした。

前述したように、「社会政治的生命体」論で首領は集団生命体の最高脳髄として絶対的地位である四つの固有性を占める「建国神話」の神話的存在である。

が党と人民の大きな栄光であり誇りである」党・国家・軍隊の責任幹部との談話、1988年1月2日、1989年6月8日、11月6日、『金日成全集』第87巻）34頁。許錟、『金正日の偉人像(1)』、10－11頁。

[204] 「講義録」、前掲書、110頁。

つまり、国家発生の根源である首領の領導的役割は、国家建設と発展段階でも①指導思想を発展させ、人民大衆を闘争の道に導く。②人民大衆を意識化、組織化させ一つの政治的力量に結集させる役割を果たす。③正しい闘争綱領と戦略戦術を提示し、その実現に大衆を組織動員することにあり[205]、④後継者を指名する[206]。



出所：『金日成著作集』、『金正日選集』、『勤労者』、『後継者論』より筆者作成

［図2-3］　首領・後継者の三つ領域の構造

それに比べ後継者が継承する重要な条件は、①首領の革命思想を固守・貫徹し、発展させる。②革命伝統を徹底に擁護固守し、時代と革命発展の新たな要請に応じて大きく発展させる。③首領・党・大衆の統一体を強化していく。①が首

---

[205] 김재천『후계자문제의 이론과 실천』（金ジェチョン『後継者問題の理論と実践』1989年）18－19頁。
[206] 『後継者論』を参照されたい。

領の団結の中心的役割を支えることであれば、②と③は首領の領導的役割を継承する論理であり、④のように首領は後継者を指名するが、後継者に後継者を指名する論理は存在していない。この点からも後継者はあくまでも首領に従属した存在であることが説明される。

［図2-3］に示されたように、首領と後継者の関係は三つの領域から構成される。第一に、首領の絶対的地位と団結の中心的役割は首領のみの固有領域（首領概念の①、②、③、④）、第二に、首領の領導的役割は首領と後継者の共有領域（⑤、⑥）、第三に、首領に対する後継者の絶対的忠誠心は後継者の固有領域（⑦、⑧）になる。第一の領域は、金日成のみの最高決定権を意味する。第二の領域は、金日成と金正日の二人の共有領域として「首領権力」の相互補完的作用を示すが、これは「領導の唯一性」を求める形で政策執行における「指揮権の統一」を意味する。第三の領域は、金正日の固有領域として金日成に限りなく忠誠を尽くすものとして位置づけられる。

したがって、首領と後継者は第一と第三の領域において地位の上下区別を通して「主従関係」を絶対化し、第二の領域において「首領権力」の相互補完的依存関係により明確にした。首領が国家の発生と発展を総括する絶対的存在である一方、後継者は首領の領導下で一つの思想、一つの組織に結束した革命主体を強化していくような[207]、国家発展の段階で首領とともに領導的役割を果たす存在であった。党と人民大衆が首領に忠誠を尽くすように領導する役割を担う。これは、後継者は首領の領導的役割の補完的な力になると同時に、その役割が党の役割に重なることを意味し、首領・党・大衆の垂直的構造から見れば、後継者は首領と党を繋ぐ媒介として①首領との関係では下部に、②党との関係では上部に置かれ

[207] 金ジェチョン、前掲書、31－33頁。

ることになる。

そのために後継者は、党の領導者として人民大衆には首領に限りなく忠誠を尽くす「忠誠のモデル」となり、首領には首領の領導的役割を補佐する「唯一の存在」となる。金日成は「講義録」で「労働階級の党は革命に限りなく忠実となり、全社会に対する政治的領導を実現することができる品格と資質を備えた人民の指導者を後継者に立たせるべき」だと論じた。金日成は後継者に党の「神経機能」（第三節で説明）を調節・統制する権限を与えたのである。これが首領の「領導の唯一性」、つまり、「指揮の統一性」が保障される根本条件である。

1987年2号の『勤労者』には、当時の最高人民会議常設会議議長であった楊(ヤン)亨燮(ヒョンソプ)(1925～2015現在)[208]の名で次のような内容の論考が掲載された。「労働階級の革命偉業は、元来、首領によって開拓され発展する首領の偉業であり」、これから「代を継いで継続する労働階級の革命偉業は、首領の後継者によって継承完成される。労働階級の革命偉業の継承完成はこのような合法性から政治的首領の後継者問題、首領の領導的地位と役割を継承する問題を正しく解決することが、革命の歴史的継承性を保障する基本を形成する」[209]。

ここで重要なのは、後継者が「首領の領導的（側面）地位と役割を継承」することが、「革命の歴史的継承性を保障する基本」であると認識したことである。

---

[208] 楊亨燮は、1925年10月1日、咸鏡南道咸興市に生まれる。金日成総合大学卒業、モスクワ大学に留学。1962年10月から最高人民会議代議員を務め、1977年―1979年の2年間は一時的に失脚。1980年10月に朝鮮社会科学院の院長、1984年4月に最高人民会議常設会議議長を務める。1993年12月に朝鮮労働党の政治局員候補、1998年9月より最高人民会議常任委員会副委員長、2010年9月28日の第3回党代表者会および中央委員会総会で党中央委員会政治局員に選出された。黄長燁のインタビューの内容、元朝鮮中央ＴＶ放送局20年間勤務した張〇〇の証言に基づき、アジア経済研究所、(毎年)アジア動向データベース（http://d-arch.ide.go.jp/browse/html）を参照した。

[209] 양형섭 「우리당의 사상이론은 조선혁명을 승리에로 령도하는 지도적지침」(楊亨燮「わが党の思想理論は朝鮮革命を勝利に領導する指導的指針」『勤労者』1987年第2号)15頁。

換言すれば首領の絶対的地位と団結の中心的役割は継承できず、領導的地位と役割のみが継承されると限定したことである。結局、後継者は首領の一部になるような首領の地位と役割をそのまま継承するわけではないという論理を作り出したのである。首領範疇に後継者が従属し、後継者は首領に無限に忠誠を尽くしながら党の「神経機能」を調節・統制し、大衆に対する領導的役割を果たすことが、首領の領導の唯一性を保障することになる。後継者の業績はすべてが首領の業績に吸収されるのである。

第三節　首領・党：統治者と手段の分離

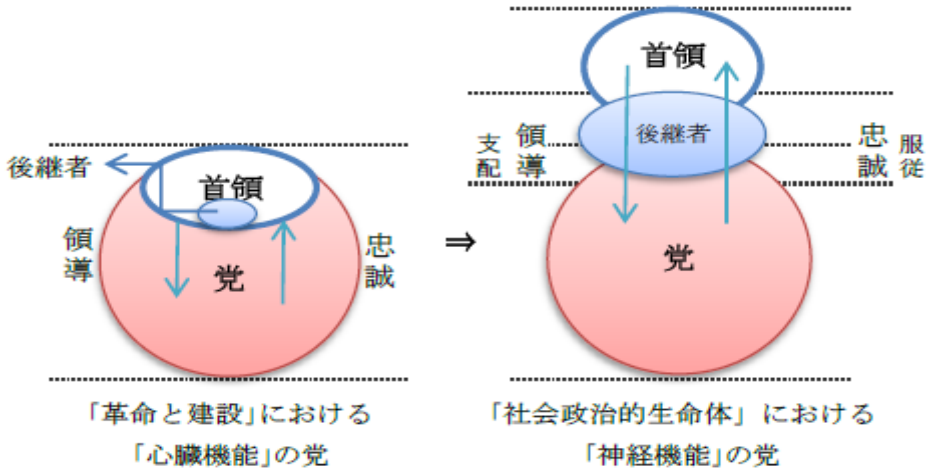
１.「心臓機能」から「神経機能」への党の変化

「首領権力」は、党を「神経機能」の地位に位置づけた。「社会政治的生命体」論において、「党は首領を中心に組織思想的に確固として結合された人民大衆の核心部隊として社会政治的生命体の神経となる」[210]と定義されたが、ここで党は首領の決定や領導を大衆に伝え、また大衆の忠誠心を首領に伝達する機能的道具として「神経機能」を果たす組織として位置づけられた。金正日は党の地位と機能について次のように明確にした。

「一般的に党というのは、首領を中心として組織思想的に結合された労働者階級と勤労大衆の前衛部隊」として「首領は党の首領であるために党と首領を分離させてはいけません。しかし、党と首領を完全に同一視することはできません。首領が社会政治的集団の生命の中心ということにその本質があるとするなら、党は首領を中心に人民大衆を一つの社会政治的生命体に結合させる神経機能を遂行する組織であるというところにその本質があります」[211]と述べた。首領と党の関係において注目される点は、首領の最高脳髄としての機能と党の神経機能の相違点から首領が党から分離された点である。これは、首領と党の関係において党の役割が「心臓」から「神経」に転換されたことを意味する。

---

[210] 「7.15談話」、前掲書、19頁。
[211] 김정일 「주체의 혁명관을 튼튼히 세울데 대하여」(金正日「主体の革命観を確立することについて」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話、1987年10月10日、『金正日選集』第9巻)53-54頁 。



出所：本論文の第一章と第二章の論理により筆者作成

［図2-4］　首領・後継者・党構造の変貌

［図2-4］のように、「社会政治的生命体」論において首領と党は分離され、「党は首領を中心とする党組織の結合体」[212]になったが、過去、1970年代には「党は党員大衆が固めた政治的組織」として「領導的役割」を果たしていた。たとえば、1975年2月17日、金日成は党中央委員会第5期第10回全員会議で「党は朝鮮労働階級と勤労大衆の先鋒隊であり、朝鮮革命の参謀部であり、朝鮮人民の嚮導的力量」であると定義し、「党を組織した目的は党員を動かせ、彼らの先鋒的役割を高め、革命と建設を成果的に遂行するところにある」ために、すべての幹部と党員が「引き受けた任務を徹底に遂行すればわが党が領導的機能を円満に遂行することができる」[213]からであった。

こうした党は「朝鮮人民の嚮導的力量」として党員の集まりであるだけでは

---

[212] 同上、54頁。

[213] 김일성「당, 정권기관, 인민군대를 더욱 강화하며 사회주의 대건설을 더 잘하여 혁명적대사변을 승리적으로 맞이하자」（金日成「党、政権機関、人民軍隊をさらに強化し、社会主義大建設に拍車をかけ革命的大事変を勝利的に迎えよう」朝鮮労働党中央委員会第5期第10次全員会での結論、1975年2月17日、『金日成著作集』第30巻）50頁。

なく、「領導的機能」を果たす機関とされたのである。これは、本章の第一節で論じたように、「革命と建設」における首領の地位が党の中に位置づけられ、党員の「政治的生命」が強調される時期であった。また、1980年10月10日、金日成は党第6回大会の報告で「わが党は人民大衆を領導してきた」と述べ、党の領導的役割を認めた。さらに「党は革命と建設を領導する困難な闘争過程でもっとも鍛錬されて不敗の革命的党に強化発展」し「強力な戦闘隊伍に成長した」[214]と述べ、党を「革命と建設」を領導する地位として認めた。また、84年3月に行った政務院責任幹部との談話では、「革命は人民大衆の自主性を実現するための闘争であり、党は革命を領導して労働階級と人民大衆の自主性を実現することを使命とする最高形態の政治組織です」[215]と述べて党を「革命」を領導する政治組織として評価したが、労働階級と人民大衆の自主性を実現することで「社会政治的生命」が強調された時期である。

このように、これまで「革命と建設」を領導してきた「革命的党」の機能には、1986年に入ってから変化が生じた。1986年1月3日に金正日は目的と手段の関係を次のように明らかにした。「党は祖国のために必要です。党のために祖国があるのではなく、祖国のために党があるのです。党は祖国建設の武器です」[216]。その目的が共産主義理念ではなく国家になり、そのための道具が党であることを明確にした。過去、金日成は「党は全社会を動かす社会の心臓であり、原動力である」と位置づけ、人の心臓が動きながら身体に血と栄養を供給し、そうすれば

---

[214] 金日成「朝鮮労働党第6回大会の中央委員会事業総括報告」、370頁。
[215] 김일성 「일군들속에서 혁명성, 당성, 로동계급성, 인민성을 높일데 대하여」（金日成「幹部の中で革命性、党性、労働階級性、人民性を高めることについて」政務院責任幹部との談話、1984年3月13日、『金日成著作集』第38巻）249頁。
[216] 김정일 「당과 혁명대오의 강화발전과 사회주의 경제건설의 새로운 앙양을 위하여」（金正日「党と革命隊伍の強化発展と社会主義経済建設の新たな高揚のために」朝鮮労働党中央委員会責任幹部の前で行なった演説、1986年1月3日『金正日選集』第8巻）333頁。

人が健康で仕事を続けるように、党組織が動けば社会で古いものをなくし、新たなものを助長することができる。このように党は革命のために必要な領導的存在であった[217]。つまり、目的が革命から祖国へ転換したことになり、その意味で手段も「革命のための党」から「祖国のための党」へと変化したのである。

その後、「社会政治的生命体」論が公開される直前の1986年5月31日に、金日成は「講義録」で党の地位と役割の変化を予告する論理を示した。金日成は「党は党組織の有機的結合体です。党はすべての党組織が一つの有機体のような全一的な体系をなす時のみに、組織された部隊として機能を完全に遂行することができます」[218]と述べた。その40日後、党は「社会政治的生命体」の神経として論理化されたが、これによって革命の「領導的機能」を果たす党の地位と役割は、革命と建設の「心臓機能」から「生命体」の「神経機能」に変わった。

その原因は、前述したように、まず、第一に、「社会政治的生命体」において首領の地位が変わったことにより、「革命と建設」を領導した首領が「社会政治的生命体」の最高脳髄に変わったことに起因する。そのために、第二に、「階級」を削除したことによって「革命」の利害関係より、首領個人の利害関係に集中するようになった。「階級」を規定する決定的要因は生産手段に対する所有関係であるが、それをなくすことによって中央集中化がさらに強化されるようになった。その結果、第三に、党は「労働階級の党」と言いながらも、実際には「首領の党」に転換したのである。結果的には、金正日によって党は「首領の党」になるが、これは「社会政治的生命体」の論理的構造によるものである。

李鍾奭も『朝鮮労働党研究』で、「社会政治的生命体」論で提示された革命

---

217 김일성 「현시기 당사상사업을 개선강화하기 위한 몇가지 과업」(金日成「現時期党思想事業を改善強化するためのいくつの課題」党思想事業部門幹部会議での談話1973年6月12日、『金日成著作集』第28巻、1984年)362頁。
218 「講義録」、前掲書、53頁。

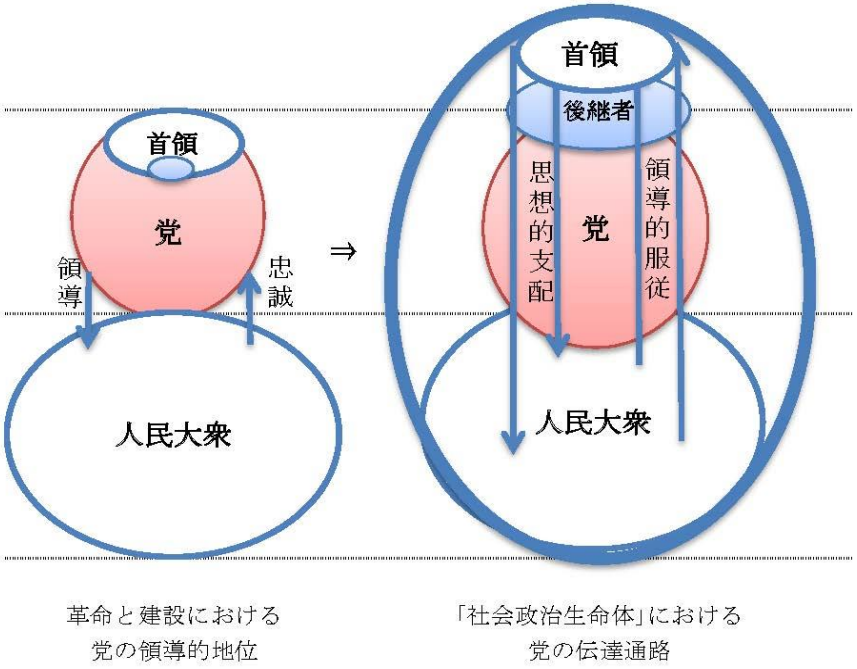
的首領観（後述するように社会政治的生命体論で首領と大衆を結合する思想的原理）での理論的強調点や北朝鮮の政治過程を見る時に、革命的首領観の下で党は実際には道具的役割の担当者として格下げになっていたことを否認することが難しいと認めた[219]。また、朴洞重も『北韓の政治と権力』で首領に対する個人崇拝の象徴体系で党はそれに不可欠の要素であるが、その位相は格下げになると説明している[220]。「首領権力」の観点からみた場合党の格下げは、「社会政治的生命体」の構造に起因するものである。首領のみが思考、判断、決定する存在者となり、党はそれを実現する神経機能を果たすために、領導的決定権はなくなったからである。厳密に言えば、首領はすべての最高決定権を持って党から離れ、さらに絶対的な地位を占めたことにその原因があった。

２．党の「支配と服従の交換通路」

ところが「社会政治的生命体」論では、「首領はどこまでも党の首領、人民の首領であるために、首領の役割を党の役割、大衆の役割と分離してはいけない」[221]し、首領の役割、党の役割、大衆の役割はいつも統一されているために、「首領に対する忠実性と党に対する忠実性、人民に対する忠実性は一つに統一されている」[222]ということになる。換言すれば、三位一体の役割の統一は、党の「神経機能」を通して成立することになる。すなわち、①上からの領導的役割を果たす「支配の通路」ーー首領が党を通して人民大衆を領導する。②下からの忠

219 李鍾奭、前掲書、117頁。
220 朴洞重、前掲書、225頁。
221 「7.15談話」、前掲書、22頁。
222 同上、22頁。

誠心を捧げる「服従の通路」――人民大衆は党を通して首領に無限な忠誠心を捧げるようになる。したがって、党の役割である「神経機能」は、「首領権力」の「支配と服従の交換通路」と言うことができるであろう。



出所：筆者作成

［図2-5］　党の「支配と服従の交換通路」の構造

［図2-5］で示されたように、かつて「革命と建設」を推進し領導してきた党は、最高脳髄である首領とその後継者と共に領導的な地位と役割を果たす存在であったが、「社会政治的生命体」において最高脳髄から分離された党は、首領の意図を伝達する神経組織に変化したのである。金日成が1986年5月の「講義録」で提示した三つの権力原則は、結局、「首領権力」の「領導の唯一性」を保障する規制であった。

党と大衆の渾然一体とは、党が人民大衆の中に深く根を下ろし、広範な大衆を党に組織化して党と人民がともに呼吸し、ともに動く運命共同体になることで

あり、また、党建設における継承の基本とは党の思想と領導の唯一性を基本とした「現在の変わりない持続性」[223]、すなわち、最高権力の維持を目的としたものであった。この権力原則は、①全社会に首領の革命思想のみが支配すること、②全党、全国、全民が首領の命令、指示に従って一つになって行動すること[224]、また③首領の領導の継承と忠誠の継承性によって形成される。このように「社会政治的生命体」論で首領の絶対的地位と決定的役割が規定されたことによって、党は「心臓機能」から「神経機能」に格下げされ、「首領権力」の「支配と服従の交換通路」に変質されたのである。

---

[223] 同上、25頁。
[224] 주체사상총서　제9권『령도체계』(主体思想叢書、第9巻『領導体系』平壌：社会科学出版社、1985年)48頁。

第四節　首領・大衆：「支配と服従」のメカニズム

１．社会統合と教化体系の再編

1986年の「7.15談話」において金正日は、主体思想教化を「党における死活的な意義を持つ重要な問題」[225]と認識した。それは政治社会学的側面から見ると、主体思想は統制された北朝鮮の社会体制の中で成長段階に合わせて組織的でかつ体系的な思想教化を通して社会化される過程である[226]。ベンサムの教育論によれば、教育は社会統合の基底に位置づけられるものであるので、このような教育の仕組みは、同時に社会の統治の仕組みでもある[227]。前述したように、北朝鮮は社会統合については 「社会政治的生命体」の「分離不可能」な社会統合論を生み出し、その仕組みとして教化体系を変更させた。それがすなわち、首領思想教育の総合的体系化である。金正日は「わが党には主体の思想体系以外に他の思想体系は必要なく、主体思想教化と因縁のないどのような思想教化もあり得ない」[228]と断言した。換言すると、北朝鮮のすべての思想教化が主体思想教化に繋がることになる。それは主体思想教化が唯一思想教化になったからである。

過去、北朝鮮における思想教化は1967年の「5.25教示」以後、唯一思想体系の確立に基づいて進んだが、1970年代になって教化体系が構造化され、多様な形態で行われた。たとえば、1971年12月27日に金日成は全国教員大会で「教化において社会主義教化学の原理を徹底的に具現するために」という演説を行い、「思

---

[225] 「7.15談話の解説」、前掲書、1頁。
[226] 金炳魯、前掲書、4頁。
[227] 小松佳代子『社会統合と教育――ベンサムの教育思想』流通経済大学出版会、2006年、13頁。
[228] 「7.15談話」、前掲書、11－12頁。

想革命を強く進めて人々を革命化、労働階級化することが共産主義建設の不可欠の要求であるだけに、われわれは学校教化で当然に学生らを革命化、労働階級化する活動を第一に取り上げるべきであり、これがまさに社会主義教化学の基本原理となる」[229]と宣言した。また、1977年9月5日に金日成は党中央委員会第5期第14回総会で「社会主義教化に関するテーゼ」を発表し、「社会主義教化の基本問題は、人々を思想的に改造し、彼らの文化・技術水準を高めること」であると規定して、「人々を思想的に改造するためには、階級的教化を強化」し、「社会主義愛国主義教化を強化すべき」だとの認識を示したが、この時期は国内における金日成主義化が活発に進められていた時期であった。したがって、1970年代における北朝鮮の思想教化は、社会主義愛国主義教化という名分の下で金日成主義教化を確立しようとする両面性の特徴が現れていたのである。

しかし、1980年10月10日、金日成が党第6回大会で「全社会の主体思想化」を宣布したことによって主体思想教化がより重視されることになった。もっともその時点でも、主体思想教化は他の思想教化である共産主義教化、階級教化、党政策教化、革命伝統教化、忠実性教化などと並列する中で優先的に位置付けられていた。たとえば、金日成は1980年6回党大会の報告において、「党員と勤労者らの中で主体思想教化と党政策教化、革命伝統教化を強化して、すべての古い思想に反対する思想闘争を力強く行なった」[230]と評価したが、ここには主体思想教化を他の思想教化と同様に思想教化の一つとして認識していたことが反映されていた。また、金正日は1984年5月3日に全国職業同盟幹部講習の参加者に送った書簡において、「勤労者に対して革命伝統教化は党の唯一思想体系を確固にして革命

---

[229] 김일성「교육사업에서 사회주의 교육학의 원리를 철저히 구현할데 대하여」(金日成「教化事業で社会主義教化学の原理を徹底的に具現するために」全国教員大会で行った演説1971年12月27日、『金日成著作集』第26巻)567頁。
[230] 金日成「朝鮮労働党第6回大会の中央委員会事業総括報告」、296頁。

的世界観を確立すること、忠実性教化はわが党の偉大性について認識させること、革命教化・階級教化は帝国主義と搾取制度との闘争、これが反修正主義教化でもある」[231]と説明したことも、党の唯一思想体系を確立するための教化に目標を置いたことになる。このように、1980年代の初頭には思想教化という広い範囲の中に個別的特性を持った個々の教化が並び、その中で主体思想教化が一つの項目として優先された。

このような様々な思想教化は、「7.15談話」によって主体思想教化に包含されることになった。その原理について金正日は「もちろん、階級教化、党政策教化、革命伝統教化、社会主義愛国主義教化のような様々な形態の思想教化の内容が主体思想原理教化と同様ではないが、それぞれの教化は人々をわが党の唯一思想である主体思想にしっかりと武装させるための思想教化の一つの部分である」と説明した[232]。

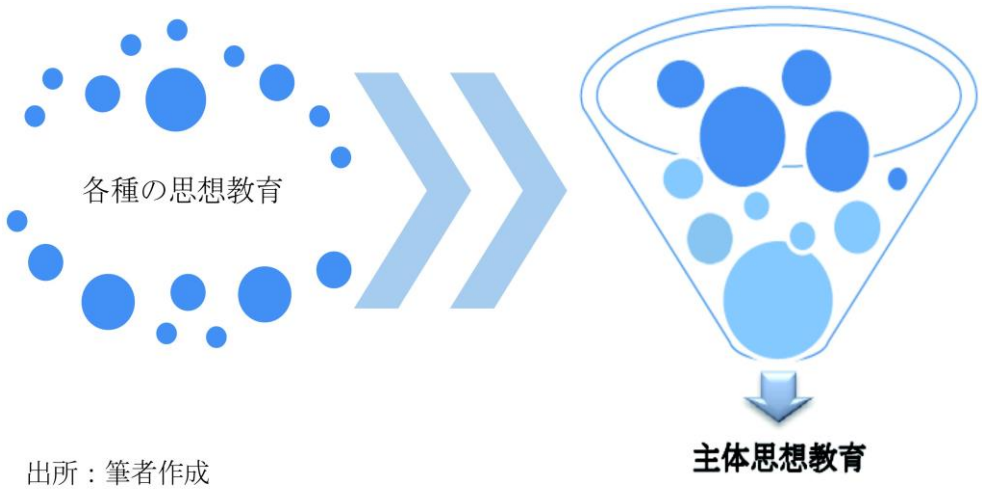
他の思想教化と主体思想教化は内容が相違する点を認めつつも、唯一思想体系の確立のために必要な措置だと強調したのである。たとえば、階級教化は、党員と勤労者に「敵我を正しく区別させ、革命と建設で労働階級の革命的立場を固守させる」[233]教化であるために、「革命の主体を強化するための主体思想教化の重要な形態」として位置づけた。それまでは、労働階級の階級意識は共産主義思想で核をなし、階級教化は共産主義的人間育成の必須的要求であり、階級教化で重視される教化は反帝教化、米帝と日本軍国主義に反対する教化であった[234]。革

---

[231] 김정일 『직업동맹사업을 더욱 강화할데 대하여』(金正日「職業同盟事業をさらに教化するために」全国職業同盟幹部教習会に参加者に送った書簡、1984年5月3日、平壌：朝鮮労働党出版社、1984年)5頁。
[232] 「7.15談話」、前掲書、12頁。
[233] 同上、13頁。
[234] 김정일 「당사상사업을 더욱 개선강화할데 대하여」(金正日「党思想事業をさらに改善強化することについて」全国党宣伝幹部会議で行なわれた結論、1981年3月8日、『金正日選集』第7巻)12頁。

命教化・共産主義教化に含まれた階級教化は、「7.15談話」によって、首領中心の「内部」(我)と「外部」(敵)を区分する内容として、主体思想教化を支える重要構成部分になった。また、「社会主義愛国主義教化も革命の主体を強化する」手段として重視された。

金正日は「7.15談話」で、社会主義愛国主義教化から自国の革命に忠実となり、わが民族を愛する「わが民族第一主義」[235]を強調した。後述するように、「わが民族第一主義」は、首領を社会主義国家と民族に同一視する教化手段であった。



[図2-6]　思想教化体系の変容

[図2-6]のように北朝鮮は、各種の思想教化を主体思想教化に属させ、唯一思想体系に基づいて主体思想教育を体系化することを試みた。つまり、それはすべての形態の思想教化を主体思想教化と別個の教化ではなく、革命の主体を強化するための主体思想教化の一つに見ることを意味する[236]。金正日は「主体思想教化

[235] 「7.15談話」、前掲書、14頁。
[236] 강하빈 「모든 형태의 사상교양은 주체사상교양의 한고리」(カン・ハビン「すべて

の根本目的は一言で言うと、革命の主体である人民大衆を自主的な革命思想で武装させ、革命隊伍の思想意志的統一を保障し、人民大衆が革命と建設で主人の地位を守り、主人の役割を果たせるところにある」[237]と主張したのである。

金正日は思想意識を人間の価値と品格を決定し、人間のすべての活動を規定する根本要因として認識する[238]。金正日は「にもかかわらず、一部宣伝幹部らが主体思想教化を何%とし、階級教化と革命伝統教化を何%とするというふうに党思想教化事業に関する計画を立てることは、主体思想教化以外に何が他の思想教化があるように考えているようだ」[239]と強く批判した。これは、すべての思想教化を主体思想教化に包含する方針を明確にしたものである。

このような、主体思想教化は「社会政治的生命体」が首領の意図に従って一つの思想、一つの行動として一貫されるようになることを目的にしていたと思われる。つまり、「首領権力」を行使する装置であったと言わざるを得ないだろう。J・S・ミルが適切に指摘したように、教化の「現実的で内的な支持物」には二つあり、一つは「良く統治すること（governing well）」であり、そしてもう一つは「人々が良く統治されていることを理解するように、教化すること（instructing the people）」である[240]。変化した主体思想教化の唯一的思想体系は、上から言えば、「首領権力」の支配力を強化するための統治として意識されるかも知れないが、下から言えば数千万の人々が一人の首領に従って「一つに思考し、一つに呼吸し、一つに行動」することを強要される支配論理になる。しかし、当時に主体思想教化を受けた人々は「よく統治されていると理解したために忠誠心が自発的に出てきた」ことを思い出し、「首領様がいらっしゃるために、

の形態の思想教化は主体思想教化の一つ」『千里馬』1988年5月号)12-13頁。
[237] 「7.15談話」、前掲書、12頁。
[238] 『주체의 학습론』(『主体の学習論』平壌：金成青年出版社、1982年)52頁。
[239] 「7.15談話」、前掲書、11-12頁。
[240] 小松佳代子、前掲書、129頁。

わたしの存在も、わたしの未来も保障できると考えた。そのために、首領に対する忠誠心が自発的に出てきた」と告白し、「現在考えてみると騙されたと思う」と証言する[241]。

「社会政治的生命体」論によって社会が「分離不可能」な一つの生命体に統合され、新たな「首領権力」の政治体制に変更された。このようなシステムの変更に合わせて思想教化も主体思想教化に包含されたのである。すべての思想教化は、唯一の思想教化である主体思想教化に包含される、それに合わせて首領の意図のみが実現することが企図されたのである。

２.「垂直的服従」原理

金正日は、「主体思想教化でもっとも重要なのは党員と勤労者が革命の主体に対する認識を正しく持ち、革命的首領観を確固にすることである」[242]と明言した。すなわち「革命的首領観は革命的人生観の核とも言える」[243]と説明した。革命的首領観とは、首領を絶対化して無条件に奉じる見解と観点、姿勢と立場のことをいう[244]。したがって、「7.15談話」は人々に革命的首領観を注入することと、人々が革命的首領観を保持するようになることを目的としたのである。

本来、革命的首領観は首領概念の変容と時期をともにしてきた。金日成は、1966年2月、革命的世界観に初めて言及した。映画分野幹部との談話の中で、「映

---

[241] 元北朝鮮の宣伝扇動講師として勤めた李○○(50歳)との2014年12月2日、ソウル市内で行ったインタビュー。元朝鮮中央ＴＶ放送局記者として20年間勤務した張○○(73歳)との2015年5月12日、2013年8月14日、2009年8月10日、9月15日、ソウル市で行ったインタビュー。

[242] 「7.15談話」、前掲書、23頁。

[243] 同上、24頁。

[244] 『哲学辞典』1985年、796頁。

画は人々の革命的世界観を確立させるようにするべきであり、映画を見る人々が自ら革命的主人公になったように戦う決心をするように」[245]制作すべきだと金日成は述べたのである。第一章で説明したように、1967年「5.25教示」で唯一思想体系の確立が提示された以後、それに基づいて革命的世界観、革命観が頻繁に使われようになった。たとえば、1975年2月17日、金日成は党中央委員会第5期第10次全員会議で「人々の革命観を短い間に何回かの教化で確立することはあり得ません。人々の革命観は、搾取階級と搾取制度が悪いことを理解してそれを嫌がるようにすることから形成され始めます」[246]と述べた。また、1980年10月10日に金日成が「全社会の主体思想化」を宣布して以降、革命観は「主体の革命観」に変更された。

1982年3月31日、金正日は「主体思想について」と題する論文で「思想改造での基本は、革命的世界観、革命観をうち立てること」であるとした上で、「 わが党員と勤労者らが持つべき革命観は、主体の革命観である。主体の革命観は、人民大衆を中心においた革命に対する観点と立場であり、人民大衆のために確固として闘っていく革命精神である」と説明した。しかし、86年になると主体の革命観は「社会政治的生命体」論によって「首領権力」を保障する革命的首領観へと一変したのである。金正日が求めている革命的首領観は、人民大衆が「首領の思想と理論の偉大性、領導の偉大性、思想精神的風貌の偉大性を認識するのが基本」[247]であった。

---

[245] 김일성 「깊이 있고 내용이 풍부한 영화를 더 많이 창작하자」(金日成「深みがあり内容が豊かな映画をより沢山創作しよう」映画文学作家、映画演出家との演説、1966年2月24日、『金日成著作集』第20巻) 277頁。

[246] 김일성 「당, 정권기관, 인민군대를 더욱 강화하며 사회주의 대건설을 더 잘하여 혁명적 대사변을 승리적으로 맞이하자」(金日成「党、政権機関、人民軍隊をもっとも強化し、社会主義大建設をさらに高め革命的大事変を勝利的に迎えよう」朝鮮労働党中央委員会第5期第10回総会での結論、1975年2月17日、『金日成著作集』第30巻)55頁。

[247] 「7.15談話」、前掲書 、26頁。

革命的首領観の本質は、①「社会政治的生命体」論における首領の絶対的地位と決定的役割を認める認識、②首領を真に高く奉じる行動である。つまり、首領に対する絶対的な認識と服従の行動を言うが、革命的首領観の本質をなすこの二つの要求は互いに統一され、革命的首領観の根本要求として作用する。このような革命的首領観の根本要求は、「首領権力」の「生殺与奪」権を正当化することに帰結する。

北朝鮮の説明によると、①から首領に対する忠誠心を革命的信念と道理として受け止め、最高領導者である首領を奉じることを最大の幸福、最高の価値として認識し、瞬間を生きても専ら首領のために生き、首領の領導に従えば、すべてが勝利すると言う信念を持ち、首領に運命を委託し、首領のためにすべてを捧げ忠誠の心が生じる。また、②から首領の権威を絶対的に擁護することを信念となし、実践活動で首領の革命思想を無条件に貫徹する姿勢と首領を徹底的に防衛する立場が形成される[248]。これが、すなわち、金正日が言うように「革命的首領観を確固としてうち立てるのは党の政治思想的統一と団結の純潔性を固守するための根本要求」[249]なのであり、これは後継者の役割によるものである。唯一指導体系が革命的首領観を基礎にして全社会を統制する全一的領導体系とすれば、社会政治的生命体は革命的首領観を基礎にして形成された党・国家・社会を包含する総体的意味の社会体系だと言えるであろう[250]。

厳密な意味で革命的首領観は「首領権力」の影響力を行使する作用原理であり、ここには絶対的な強制性を伴う。金日成は「社会政治的生命体」論で「主体思想は、肉体的生命の要求のみを求めるために生きている生活は動物の生活と違

---

248 『哲学辞典』1985年、796－797頁。
249 「7.15談話」、前掲書、26頁。
250 김세균 『북한체제의 형성과 한반도 국제정치』(金セギュン『北韓体制の形成と韓半島の国際政治』ソウル：ソウル大学出版部、2006年)59頁。

いがないし、首領・党・大衆と離れた孤立的に生きる生活は人間の社会的本性と背馳する価値ない生活と見ます」[251]と断言した。彼は首領と離れた人間は動物のように価値がない存在として扱われることを暗黙的に示したが、これによって「社会政治的生命体」の中では服従することしかできず、他の選択肢はないことを意味したのである。

したがって、革命的首領観は「社会政治的生命体」を強化する源泉であり、決定的要因になる。人民大衆と革命の運命を決定するもっとも偉大な首領を無条件に絶対化し、どのような条件と環境の中でも首領の領導に忠誠を捧げるのが革命的首領観の本質である[252]。いわゆる、革命的首領観は絶対的な服従化の論理である。服従とは人が自分を別の人間の願望実行の道具として考えるようになり、したがって、自分の行動に責任をとらなくていいと考えるようになることである。この重要な視点の変化がその人の内部で生じたら、それに従って服従の本質的な特徴すべてが生じる[253]。金日成と金正日は人々に革命的首領観を確立させることが「首領権力」の支配的影響力を絶対化するために重要であると思ったようである。

革命的首領観の服従原理は、党の「支配と服従の交換通路」を通して実現される。それは首領の思想と命令を一方的に無条件で受け入れるのが首領に対する見解と観点であり、それに対して無条件に忠誠を尽くすのが首領に対する姿勢と立場になる革命的首領観を持った人間であるが、このような首領と人の交換関係は党の「神経機能」を通して達成される。

金正日は「社会政治的生命体」論において「偉大な首領金日成同志の教示と

---

[251] 「7.15談話」、前掲書、23頁。
[252] 리동춘 「주체형의 공산주의자의 혁명적수령관」(李ドンチュン「主体型の共産主義者の革命的首領観」『勤労者』1987年8号)22頁。
[253] スタンレー・ミルグラム、山形浩生訳『服従の心理』河出文庫、2012年、10頁。

党の方針を何よりも先に受け入れ、これが最も崇高な生の要求ということを深く自覚し、限りない喜びと光栄を持って受け入れるべきであり、母なる党と父なる首領様が恵む大いなる愛情と信頼であることを胸に深く刻み、それを貫徹するために自分のすべてを捧げるべきであります。このように思考し行動する人であってこそ、革命的首領観が透徹した主体型の共産主義的革命家と言えます」[254]と強調した。「社会政治的生命体」の中で個人は、全体像を見ることができず、偉大な首領と党の命令に従って「権威に服従するが、その結果として自分自身の行動から疎外される」[255]ことも知らない。首領と個人、首領と大衆の垂直的関係は人々が一つの意識を共有する中で情緒的共感を形成する要因になると思われる。

結局、革命的首領観はいわゆる首領に対する崇拝思想であり、金日成中心の人生観である。革命的首領観を通して、金日成は、唯一の自由意志、唯一の指導思想、唯一の完全行動の行為者、精神のあらゆる特性と特権の唯一の享受者になることを目指した。革命的首領観は「社会政治的生命体」の中で主人である首領とそれに従う個人の間に「主従関係」を設定するものであり、そこには「支配と服従」の原理が作用するようになった。革命的首領観は首領の絶対的権威と決定的役割の正当性を認識するように教化して内面化し、その認識が個人の中で感動をともなう形で忠誠心が噴出する行動に繋げることを目指すものである。したがって、「首領権力」という範囲の中で選択の余地もないまま、人々に無条件の忠誠心を強要する革命的首領観は、崇拝心と服従化の「首領権力の装置」、つまり、統治手段の核心なのである。

---

[254] 「7.15談話」、前掲書、24頁。
[255] S・ミルグラム、前掲書、29頁。

３．「水平的同調」原理

革命的首領観が首領に向かう人々の生命観だとすれば、革命的信義と同志愛は人民大衆を有機体に結束させる触媒として横断的に作用する。革命的信義と同志愛は、二つの意味を持っている。一つは、絶対的なものであり、もう一つは、絶対的ではないものである。金正日は「首領は社会政治的生命体の最高脳髄として集団の生命を体現しているために、首領に対する忠実性と同志愛は絶対的であり、無条件的なもの」[256]と論じたが、「運命をともにする社会政治的生命体の中では、個人の間でも革命的義理と同志愛が作用するが、その個別的な成員は、社会政治的集団の中心になることができないために、彼らの革命的信義と同志愛は絶対的なものにならない」[257]と説明した。

絶対的な愛と無条件的な忠誠心は、ニーチェが指摘した「愛の誤解」と言えるだろう。彼は「奴隷的な愛があるが、これは屈服しておのれを譲渡する、すなわち、理想化しておのれを欺く」[258]ことであり、それを「愛の誤解」と言った。社会政治的生命体の中で個人の生の欲望が革命的という概念で抑制され、絶対的・無条件的愛が強要されるのは奴隷的愛であり、個人にとっては自分自身を欺くことである。革命的信義と同志愛は「首領権力」への服従意識を鼓吹させると同時に、個人と個人の間には首領を中心として団結と闘争の情緒を鼓吹させる。北朝鮮の大衆文化雑誌『千里馬』1987年4月号は、革命的同志愛の心理的本質を次のように説明した。

愛には様々なものがある。夫婦間の愛、親子の愛、兄弟間の愛、友だちの愛

256 「7.15談話」、前掲書、22頁。
257 同上、21－22頁。
258 ニーチェ全集(13)・原佑訳『権力への意志』(下)、ちくま学芸文庫、2010年、464頁。

などがある。このような愛は人々の人情的な関係、血縁的な関係、そして親しく個性的な関係を示す愛である。したがって、これらも人間生活でなければならない必要な愛である。しかし、このような愛はどこまでも人間の肉体的生命体と関連する非本質的な属性に基礎を置いた愛であり、人間の間の本質的な属性、すなわち、社会政治的生命、自主性を擁護する基礎の上に結びついた愛ではない。そのゆえに、友情や愛情がいくら深いと言ってもそれが革命思想と結合された愛にならない時にはどのような意義もなく、むしろ個人的利益のみを追求する低俗な愛になってしまう[259]。

このように「社会政治的生命体」論は、人間のもっとも自然で基本的な愛の関係を非本質的として否定し、「一つの目的と理想を実現するための一つの隊伍に集まった思想感情」[260]のみを本質と見なす。革命的同志愛の特徴は二つある。一つは集団に対する人々の献身性を求めるが、結局その集団の中心である首領に一身を捧げることに帰結される。また、革命的同志愛の二つ目の特徴は、革命思想の闘争原理であるが、「愛の中に批判があり、批判の中に愛がある」[261]ということになる。革命的同志愛は大衆を相互に水平的位置において、「団結と闘争」という葛藤の原理を設定する。暗黙のうちに仲間が互いに監視、統制、牽制し、公式的には批判し闘争する中で団結を試みる原理である。実際に、北朝鮮のすべての人々は組織に参加し、組織生活を通してこのような原理を身に着ける。

革命的信義は、社会と集団、他人の愛と恩に報いる行為として、首領・党・

---

[259] 리대덕 「혁명적동지애」 『천리마』(李テドク「革命的同志愛」『千里馬』1987年4月号)74頁。

[260] 김정일 「당과 혁명대오의 강화발전과 사회주의 경제건설의 새로운 앙양을 위하여」(金正日「党と革命隊伍の強化発展と社会主義経済建設の新たな高揚のために」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する演説、1986年1月3日、『金正日選集』第8巻）322頁。

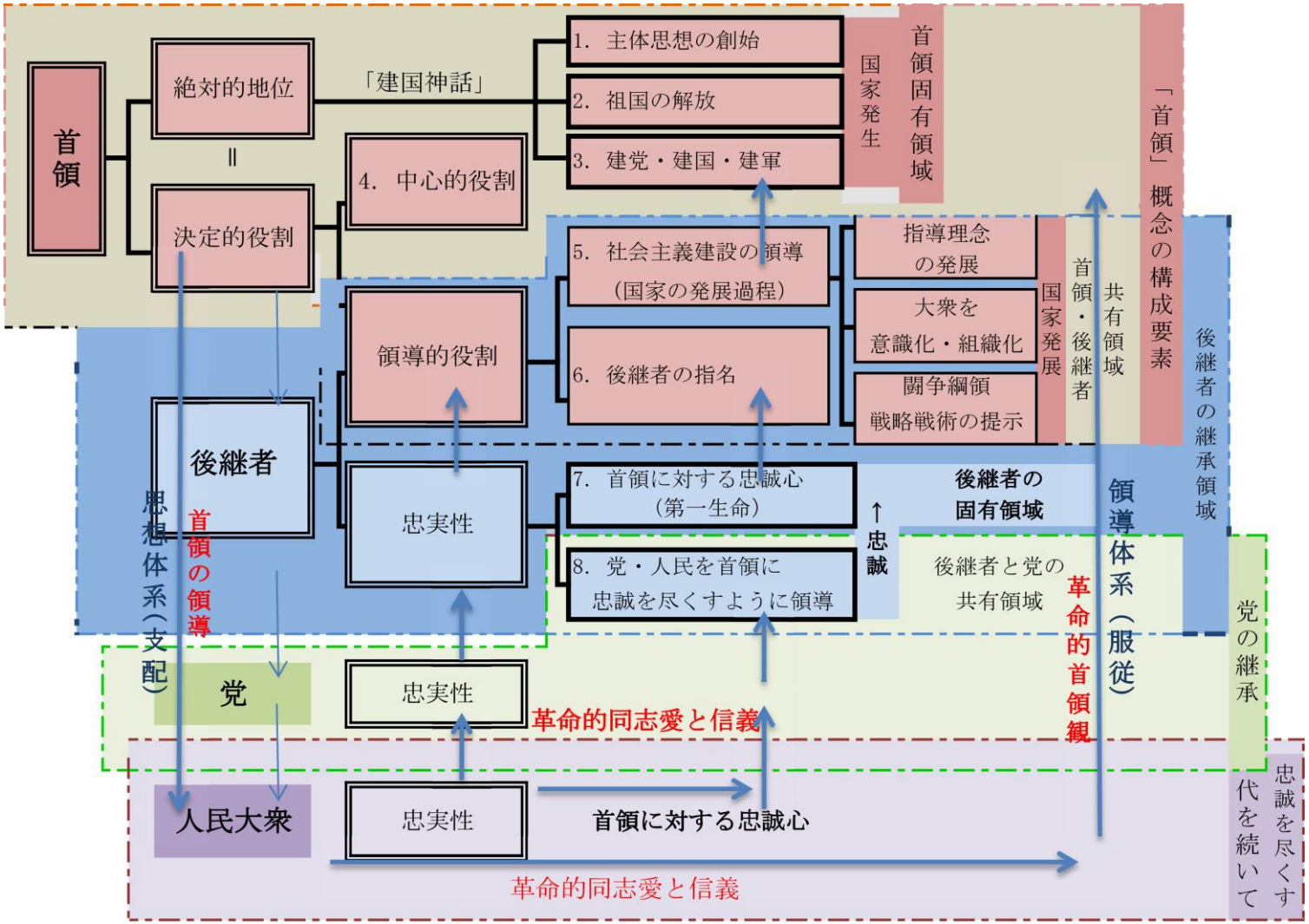
[261] 李テドク、前掲書、76頁。

大衆を一つの生命体に結合させる作用をする。したがって、首領が与えた命令を執行する前に死ぬ権利さえないと考え、首領の命令を執行するところで生きても栄光、死んでも栄光という精神が発揮されることになる。すなわち、ここに首領に対する戦士の尊敬と欽慕、忠実性と道理はもっとも崇高な高さに至るとされるのである[262]。

革命的首領観から見ると、首領の愛と信任に報恩するような絶対的な忠実性をいう。したがって革命的信義は「社会政治的生命体」の発展の要因として作用し、革命的同志愛は個別的な人々を一つの生命体に結合させる同調的要因として作用する。革命的首領観はいわゆる革命的道徳観によって支えられるが、これは革命的良心に基づく人々の行動規範であり、革命的良心は個人の生命より社会的・政治的集団の生命を大切にする社会的意識である[263]。つまり、首領観、組織観、大衆観から互いに分けられないほど関連し、全一的な革命観を構成する一つの体系になった。

---

[262] 연정술 「사회정치적 생명체에서의 혁명적 의리와 동지애」(延ジョンスル「社会政治的生命体での革命的義理と同志愛」『千里馬』1988年12月号)24頁。
[263] 金正日「主体の革命観を確立するために」、58頁。



出典：筆者作成

［図2-7］「首領権力」の支配構造と作動原理

小　結

1986年に政治体制の変動を迎えて新たに論じられた権力原則、論理及び方法は「首領権力」を創造するための試みであった。権力原則は5月31日、金日成が執筆した「講義録」で党の唯一思想体系、党の唯一領導体系、継承性の保障という三つの権力原則であった。首領の思想、領導体系と独裁の連続性を強調する権力原則に基づいて7月15日、金正日は権力の論理構造と作用方法である「社会政治的生命体」論を非公式的に発表した。党中央委員会の責任幹部に対する談話の形式であるこの談話は、翌年1987年7月に『勤労者』を通じて一般に公開されたことを考慮すると、86年は「首領権力」を論理的に完成し実践に導入するための準備段階であり、1987年から社会実践に適用したと思われる。「社会政治的生命体」論は人々の「革命的首領観」の確立を目的とした論理とも言えるが、一つの生命体は最高脳髄の意志を実現するために一つの思考、一つの行動を目指し、思想と社会生活、社会的運動のすべてが首領の意図のとおりに動くことが正当化された。

過去にも首領は「革命と建設」の最高脳髄として絶対的役割を果たす存在として位置づけられていたが、「社会政治的生命体」の首領は集団生命体の最高脳髄として人々の「生殺与奪」権を握ったことから、その意味が大いに異なる。首領は生きている生命体の最高脳髄であり、その生命体の生存の根本源泉になるからである。首領が存在するが故に政治的生命を持った個人も存在するとされるために、首領と離れた個人は動物と同様に扱われ、生命体からこぼれ落ちることになる。このように、「社会政治的生命体」論は首領を絶対的存在と位置づけ、北朝鮮社会のすべての人の「生命」を金日成に依存させたことが明確になったのである。「首領権力」の特徴は次のようである。第一に、金日成の「影響力の範

囲」を設定して個人の選択肢を論理的に制限したことである。その中で唯一の中心は首領であり、首領は絶対的地位の構成要素である「建国神話」（思想の創始者、祖国の開放者、建党・建国・建軍）の主体により明確になった。「社会政治的生命体」の首領は最高脳髄として唯一無二の絶対的存在になり、生命体の中心としてすべての生命の根源に強調された。

第二に、金日成の「権力の行使」のために、権力メカニズムを再構成したことである。「社会政治的生命体」は首領・後継者・党・大衆の結合であり、「首領権力」の総量になる。権力の動きは、首領の決定的役割によって行使される。首領の決定的役割は団結の中心的役割と領導的役割の二側面を持つようになる。一つ目は、団結の中心的役割は首領のみの固有な役割であり、権力の決定権である。二つ目は、領導的役割は首領と後継者の共通部分でありながら、首領を党と大衆に繋げる媒介でもある。権力構造において最も注目すべき部分であるが、後継者の領導的役割による生産物や業績は中心である首領に帰結される。これが③の後継者の固有領域である首領に対する忠実性である。首領の思想は後継者によって党と大衆に押し付け、それから出される忠誠心を後継者によって首領に帰結させるメカニズムに構造化された。

第三に、権力維持という持続性の論理的装置である。継承問題は、領導の継承と忠誠の継承という二つの意味を内包する。双方が首領と後継者関係において「領導的部分の継承」という原理に帰結される。①首領の領導的役割は後継者によって継承されることになり、②そのために後継者の使命は首領に対する忠誠心になる。後継者の役割は、上からの領導的役割を継承し、下からの忠実性を継承のモデルとしたのである。首領の生存時には後継者は首領の「健康と仕事」を領導的に補佐するが、首領の死亡後には首領の領導を代の続ける存在になる。結局、首領の固有性（絶対的地位と中心的役割）を除く領導的役割のみが部分的に継承

されることになる。したがって、首領の出現は一回に限られることになり、終わりがない永遠の存在になる。そのために、党は「社会政治的生命体」の神経として役割を果し、首領の領導は党を通して人民大衆に伝達され、人民大衆の忠誠心は党を通して首領に伝達される「支配と服従の交換通路」になった。人々の首領に対する無限な忠実性を生み出し、結果的には首領に自己の身、心、精神も捧げるように構造化した。首領・後継者・党・大衆の分離不可分の「生命体」は首領と個人の生命を繋げることによって「生殺与奪」権を強化した。

このように金日成が「首領権力」にこだわった理由は、自らの高齢化による時間の衝動を受けた金日成の個人的要因に起因したと思われる。最高脳髄である金日成の高齢化が進むことによって、金正日の活動領域が広くなる同時に権力中心の流動性及び分散可能性を防ぐための措置であった。金日成は、自らの身体的機能の低下する部分を金正日の役割によって補完するために「首領権力」を創造したのである。

第３章　「首領権力」の価値・規範の実践（1987年～1989年）

第一節　独自の方向と政策課題

１．価値と方向設定

(1)　時間の蓄積性と軌跡

1987年から、北朝鮮の国家目標は「主体革命偉業」の完成に向けられた。1986年12月30日に最高人民会議第8期第1回会議で金日成は「社会主義完全勝利のために」という施政演説を行なった。金日成は「主体革命偉業を遂行している今日、共和国政府に提起される当面の闘争課題は、共和国北半部で社会主義の完全な勝利を成し遂げ、祖国の自主的平和統一を実現することです」[264]と述べ、北朝鮮が志向する価値と方向を明確にした。価値とは、望ましいもの、つまり目標となるものをいう[265]。ここで社会主義の完全な勝利と祖国の自主的平和統一の実現という課題は、主体革命偉業の実現のための手段となる。

その前、金日成は1986年5月の「講義録」において国家の方向を党の革命任務と規定したことを思えば[266]、87年に向けて党・国家の方向が主体革命偉業として新たに設定されたことを意味する。つまり、1980年10月10日に金日成が朝鮮労働

---

[264]　김일성 『사회주의 완전한 승리를 위하여』（金日成『社会主義の完全な勝利のために』朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第8期第1次会議で行った施政演説、1986年12月30日、平壌：朝鮮労働党出版社、1986年）1頁、（以下、「12.30施政演説」）。

[265]　ラスウェル・カプラン、前掲書、43頁。

[266]　金日成は「主体偉業を遂行している今日、わが党の前に提起された当面の革命任務は、共和国北半部で社会主義の完全な勝利をなしとげ、祖国の自主的平和統一を実現すること」。「講義録」、前掲書、17頁。

党第6回大会で直接提示した「全社会の主体思想化」という目標が、86年5月の「講義録」と「12.30施政演説」によって変化したのである。

それまで北朝鮮は、1980年10月に開催された朝鮮労働党第6回大会で改正された「朝鮮労働党規約」において、党の当面目的は共和国北半部で社会主義の完全勝利を成し遂げ、全国的範囲で民族解放人民民主主義の革命課題を遂行することにあり、最終目的は「全社会を主体思想化」して共産主義社会を建設することにあるとしていた[267]。また、1982年4月14日に開かれた最高人民会議第7期第1回会議での金日成の施政演説は、「全社会を主体思想化することはわが革命の総合的任務であり、共和国政府の歴史的使命です。共和国政府は全社会を主体思想化するために闘争し、一日も早く共産主義楽園を打ち立てることを自己の歴史的使命」[268]にしていると述べていた。

このように、1980年代初頭において北朝鮮の党と政府が志向した方向は「全社会の主体思想化」であったが、86年からは「主体革命偉業」へと転換したのである。それは一言で言えば、イデオロギーの「拡大」から「深化」へと目標が変わったことを意味した。「拡大」が現在と未来に注目したものだとすれば、「深化」は過去（革命伝統）を現在の正統性として重視し、未来も現在のために使用されることを意味する。「革命伝統は、党と革命の歴史的根であり、代の続ける血統」[269]として認識されてきたように、現存する権力の正統性は革命伝統にあり、

---

[267] 「조선로동당규약」1980년 10월 13일、『조선로동당 제6차대회 문헌집』(「朝鮮労働党規約」朝鮮労働党第6回大会での採択、1980年10月13日、『朝鮮労働党第6回大会文献集』平壌：朝鮮労働党出版社、1981年)172頁。

[268] 김일성「온 사회를 주체사상화하기 위한 인민정권의 과업」(金日成「全社会を主体思想化するための人民政権の課題」朝鮮労働党中央委員会・朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議合同会議での施政演説、1982年4月14日、『金日成著作集』第37巻、1992年)119頁。

[269] 김정일 「당사상사업을 더욱 개선강화할데 대하여」（金正日「党思想事業をさらに改善強化することについて」 全国党宣伝幹部会議での結論、1981年3月8日、『金正日選集』第7巻）9頁。

その深化は「首領権力」の要求として浮上してきた。「社会政治的生命体」論で「革命の主体は自己の歴史的根を持っている」ために、このような伝統を「継承発展させなければ革命の主体を強化する事業で一貫性と継承性を保障することができない」と強調されたのである[270]。換言すると、「首領権力」の伝統的支配を正当化する必要に迫られたことを意味する。伝統的支配は第一章でも説明したが、権力の再編に合わせて行うものであった。「首領権力」は金日成の伝統的支配の根拠を再構築する必要性を提起したのである。

北朝鮮が編纂した『哲学辞典』によれば、「主体革命偉業」は次のように定義される。偉大な首領様は抗日武装闘争時期に革命伝統を作り、解放後にはそれを基礎にして建党、建国、建軍事業を遂行し、社会主義革命を完遂して社会主義制度を樹立したことによって人民は国の主人になった[271]。これが、「主体革命偉業」を実現する歴史的転換点になったと定義された。1986年12月29日付『労働新聞』は、「朝鮮の栄光」と題する政論で、金日成は「永生不滅の主体思想を創始し、時代と革命の進路を独創的に明らかにした偉大な思想理論家」であり、日本の植民地下で「生死存亡の岐路に立った民族を救った絶世の愛国者、抗日の伝説的英雄」として人民の絶対的な信頼を受けていると評した。

さらに、「30代の若い時に敬愛する首領様が持っていた権威、それは歴史上、唯一わが首領様のみが持つ偉大性であった」[272]と評価した。第二章で分析したように、主体思想の創始、建党、建国、建軍事業を遂行した偉大性は首領の絶対的地位の基礎となり、それが革命伝統として包括されることになる。注目すべきは、「主体革命偉業」を金日成の生涯に一致させたところであろう。新たに構成され

---

270 「7.15談話」、前掲書、15頁。
271 『哲学辞典』1985年、522頁。
272 정론 「조선의 영광」(政論「朝鮮の栄光」『労働新聞』1986年12月29日)2面。

た最高人民会議常設会議[273]議長に就いた楊亨燮は、1987年第2号の『勤労者』で「主体革命偉業」の内容について次のように論じた。「労働階級の革命偉業は、元来首領によって開拓され発展される首領の偉業」[274]であるために、「革命と建設はすなわち、首領の思想と領導を具現する過程であり、首領の思想と意図から離れる首領の革命偉業継承はあり得ない」[275]と言って金日成の意図に依存するシステムを正当化した。つまり、「社会政治的生命体」において「主体」は首領であり、その中で起きる「革命」という相互作用は独裁の実現と見なし、その結果は首領の「偉業」に吸収される体系の蓄積性を目指すものである。

ここでは、このような解釈から「主体革命偉業」を「首領独裁体系」と言うことにする。すなわち、「首領権力」の政治体制において「首領独裁体系」が本質的内容であれば、「主体革命偉業」はその形式になる。時間の蓄積性は革命伝統として首領の出現を出発点と見なすために、この始まりには終わりがない。

したがって、「社会政治的生命体」の過去は革命伝統であり、現在は「首領権力」の行使空間であり、それが未来に続く一つの軌道を設定したのが「主体革命偉業」という「首領独裁体系」の価値志向的目標になる。つまり、「主体革命偉業」は未来でもなく、過去でもなく現在の「首領権力」を強化する手段としての大義名分に過ぎない。後述するように、北朝鮮は1987年から革命伝統の再解釈を行い、「建国神話」を再構成して金日成を主体思想の創始者、党、政、軍の創建者、偉大な領導者として再定義し、「首領権力」の正統性を確保して金日成の権

---

[273] 最高人民会議常設委員会は、1972年改正憲法で主席制によって、既存の最高人民会議常任委員会を廃止して、その代わりに新設された国家機関である。1992年改正憲法においてそのまま維持したものの、金日成死後1998年の改正憲法においては共和国主席職の廃止とともに、最高人民会議常任委員会として復活した。両者は主席制と内閣制に従って区別される。정성장 『김정은시대 북한최고인민회의 상임위원회의 위상과 역할』(鄭成長『金正恩時代、北韓最高人民会議常任委員会の以上と役割』ソウル：世宗研究所、2014年)20頁。

[274] 楊亨燮「わが党の思想理論は朝鮮革命を勝利に導く指導的指針」、15頁。

[275] 『哲学辞典』1985年、408頁。

力の源泉をさらに強化したのである。まさに、「社会政治的生命体」は首領中心の現存権力の空間であれば、「主体革命偉業」は北朝鮮全体を金日成の生涯の中に投影し、金日成の歴史を再構成し、現在の「首領権力」を正当化するための高齢化に従う金日成の「時間的切迫感」と「現在の持続性」を望む欲望の反映と思われる。

(2) 独自性と現在性

「首領独裁体系」への価値志向的目標を実現するために、「社会主義の完全な勝利」への三つの実践課題が提示された。金日成は「12.30施政演説」で①「首領権力」の独自的理念の展開、②当面の経済困難の解決、③祖国統一という究極的課題を 「社会主義の完全な勝利」を達成するための基本問題として提示した。元来、北朝鮮は「社会主義革命を成功的に遂行した以後、社会主義の完全な勝利を成し遂げることを過渡期の戦略的目標として社会主義の建設」を推進し、「社会主義革命は階級廃絶のための労働階級の闘争で重要な転換点になる」[276]と認めてきた。しかし、「12.30施政演説」で示された社会主義の完全な勝利の基本課題は、そこにいくつかの変化をもたらした。

第一に、「独自的理念」は「階級」の「物質」的要素の統合として表れるようになった。たとえば、「12.30施政演説」で新たに登場した「階級廃絶」という用語は、金日成がそれまでに行った演説の中で初めて登場したものであり、したがってその意味するところは大きい。金日成は「階級廃絶」という用語を7回も使ってその重要性を強調したものの、この「12.30施政演説」以後は一切使えなくなった。過去には階級をなくすことを目指して「無階級社会」を頻繁に強調し

[276] 「12.30施政演説」、前掲書、4頁。

ていたが、今回は無階級社会より「階級廃絶」をさらに強調したのである。第二章で論じたように首領・党・大衆の結合体である「社会政治的生命体」で階級が削除されたことによるものである。全社会が人民大衆に統合され、人民大衆は首領の意志に従うことで生命力と持つようになった「首領権力」の実践であった。

もちろん、広い意味では「無階級社会」と「階級廃絶」は階級が存在しない社会の実現を目指す意味で同様に見えるかも知れない。しかし厳密に言えば無階級社会は、様々な段階の社会関係の改造を通じて実現されるものであり[277]、その点で「階級廃絶」は人民大衆の役割を強化するための人為的な操作だと言わざるを得ない。それは、無階級社会は未来に達成するべき課題で「未来志向形」だが、「階級廃絶」は階級を包括した人民大衆の現在的役割を重視することから「現在目的形」と位置付けられる。

また、それは「物質的」要素の統合的変化である。金日成は「12.30施政演説」で「労働階級と農民の差をなくすために、協同的所有を全人民的所有に転換させ、生産手段に対する全人民的所有の唯一的支配を確立すれば、農民の労働階級化が実現され、したがって労働階級と農民の間の階級的差異がなくなるようになる」[278]と述べた。過去にも、北朝鮮は協同的所有を全人民的所有に転換する問題に持続的に言及してきたが[279]、「12.30施政演説」におけるそれは、内外の環境変化に直面したことを意味している。同時期に「理念的」および「物質的」要

---

[277] 리기성「사회주의의 완전한 승리를 이룩하는데서 나서는 기본문제」(李キション「社会主義の完全な勝利を成し遂げることから提起される基本問題」『経済研究』1987年2号)19頁。

[278] 「12.30施政演説」、前掲書、9－10頁。

[279] 所有関係について1984年7月22日金正日は全国教化部門の幹部会議に参加者に送った書簡で次のように説明した。「わが国で協同的所有を全人民的所有に転換させることを妨害する社会的勢力はいません。今、協同的所有を全人民的所有に転換することができないのは、人間改造事業と自然改造事業がいまだに高い水準に至っていないことと関連されています」。김정일 「교육사업을 더욱 발전시킬데 대하여」(金正日「教化事業をさらに発展することについて」全国教化幹部会議の参加者に送った書簡、1984年7月22日『金正日選集』第8巻)105頁。

素を統合することは、時間的に切迫した「首領権力」の現在的要求であった。

金日成は「社会主義の完全な勝利、これは人民大衆の自主性を実現するための闘争であり、また一つの画期的な事件であり、それは社会主義・共産主義建設の過程で重要な里程標になる」[280]としたうえで、現在は、「社会主義完全勝利の転換の境界線に近づいている」と位置づけた。金日成は遠い理想ではなく、現在的意味であるように示したが、これは一般社会主義のイデオロギーから離れる決定的なものであった。

社会主義の宗主国であるソ連は1986年2月第27回党大会で「ペレストロイカ」の課題を提示し、その以後「改革」・「開放」に進んだ。また、中国は1979年から「改革」・「開放」政策に進んだにも関わらず、1987年10月に開催された党13期全国代表大会で党総書記の趙紫陽が現段階を「社会主義初級段階」と位置づけた。これに比べれば、金日成が近づいたと見る「社会主義の完全な勝利」は、一般社会主義の理念から大いに離れた理念的変容に過ぎない。同時期に、中国とソ連で党の基本路線は「一つの中心」、すなわち、経済建設を中心としたのであれば、北朝鮮の「一つの中心」は首領一人になった。このような理念的変容から表れる対照的な態度は、支配者の権力欲によって異なる結果をもたらした。中国の党第13回全国代表者大会で鄧小平は自らの意志を表明し、中央委員会及び政治局常務委員会の職務から退いたが[281]、それに比べれば、金日成は職務から引退もせず、「階級」と「物質」的総合を通して「一つの権力中心」に腐心したのである。

---

[280] 「12.30施政演説」、前掲書、5頁。
[281] 岡部達味『中国の対外戦略』東京大学出版会、2002年、202頁。

２．経済問題の迷：第3次7ヵ年計画の展開

第二に、しかし、もっとも困難であったのが国内における経済の停滞であった。1980年代初頭から人民の生活水準は低下し、1985年には食糧の量が減り、配給が遅れるなど人民生活の困難さが表面に現れ始めた[282]。もちろん、社会主義諸国のように制度的非効率性の問題も原因の一つになろうが、いずれにせよ、金日成も人民生活水準の低下を深刻に認めていた。

たとえば、1985年1月3日に金日成は、全国農業大会に参加した農業部門責任幹部との談話で、今「農民は国家から貰う分配を金ではなく穀物として要求している」が、「穀物を配給してもらうと国家に収買することもなく、(家に)持っている」傾向がある[283]。その理由は、農民が「商店でヘアピン一つ売ってないので収買してお金を貰っても何に使えるのか」と悩み、むしろ「結婚した娘が帰ってくる時に、お餅を作りたいと思って持っている」[284]という農民の話を紹介しながら、「今も商品が不足している」と経済の厳しさを吐露した。この言葉には、農民の私的所有が生じる可能性、②国家に対する不信の故に個人主義が生まれる可

---

[282] その理由は、1984年韓国の水害民に支援物資を送った以後から配給制度が停滞したからであると評価された。1984年9月にソウルで暴雨による水害を被った時に北朝鮮が南半部の水害民に支援を提議した。米5万石、生地50万ｍ、セメント10万ｔ、ほか医薬品などを支援した。しかし、支援以後北朝鮮の食糧事情が悪化し、住民は政権の対南支援について不満を持った。北朝鮮の人々は、「南朝鮮に支援して国の米倉庫が空いた」という噂が広まり、「食料配給がうまくできないし、配給の量が減ることに不満が生じるようになった」と記憶している。이주철，최완규 「북한주민의 역사인식과 의식변화」2003년(李ジュチョル・崔完圭「北韓住民の歴史認識と意識変化」『韓国民族運動史研究』第37集、ソウル：韓国民族運動史学会、2003年)379頁。

[283] 北朝鮮で農民は「協同組合」の中で「分組管理制」という数世帯の分組が一定の土地や農具を分担して請負生産する仕組で農業を営むが、その農業の結果は、年間決算分配で労働量に応じて「協同組合」から穀物と現金が分配される。国家は分配された農民の穀物を収買し、全国の人民に配給する。したがって、農民が分配してもらった穀物を国家に収買するのが制度であり、農民の義務でもある。

[284] 김일성 「전국농업대회에 참가한 농업부문 책임일군들과 한 담화」(金日成「全国農業大会に参加した農業部門責任幹部との談話」1985年1月3日、『金日成全集』第81巻)19頁。

能性、③これからも国営商店に商品が不足する可能性などに対する憂慮が示されている。

社会主義諸国が経済成長において速度のみならず、質的成長を求めるために変化を模索する同時期に[285]、金日成が40余年間頻繁に掲げてきた「白いご飯で肉汁を食べさせる」という「朝鮮労働党の最高原則」は、さらに遠い理想になった。食糧問題の解決について金日成は「外国に米を売ってその代わりに小麦を買うことが、人民の食生活を改善する良い方法」と考案し、「外国に米を１トン売って小麦を1.８トン買うことができる」ために「翌年(1986年)の計画に米を20万トン売って小麦を36万トン買うような予算」[286]を策定すべきだと指示した。このような困難さは食糧のみならず、人民生活の消費財にも現れていた。

たとえば、1986年7月に金日成は咸鏡北道を現地指導した際に、深刻な経済状況について指摘した。「今、咸鏡北道の国境地域で外国人(中国人)が服地をひそかに売っているが、わが国の人々がその服地を鶏とも交換し、お金でも高い値段で買っている」[287]と述べ、人民生活の不振状況を説明している。金日成が言う外国人とは中国の旅行者のことであり、彼らは1980年代初頭から北朝鮮を訪問し、とくに国境地域（北朝鮮と中国の国境地域）に中国で生産された商品を北朝鮮に持ち運んで売買を頻繁に行った。このような現状は社会統合と中央集権制を強化

---

[285] 「소련공산당 제27차대회 보고」(「ソ連共産党第27次大会報告」『勤労者』1987年7月号)90頁。また、또도르 쥡꼬브「벌가리아공산당 제13차대회에서 한 연설」(ジプコフ「ブルガリア共産党第13次大会での演説」『勤労者』1987年7号)83－89頁。

[286] 김일성 「축산업을 발전시키는데서 나서는 몇가지 과업에 대하여」(金日成「畜産業を発展させることから提起されるいくつかの課題について」朝鮮民主主義人民共和国政務院常務会議での演説1985年5月20日、『金日成全集』第81巻)360頁。

[287] この話の内容は、1980年代に入って国境地域に中国人（ほとんど朝鮮族）が親戚の訪問を名分に、改革・開放以後大量に生産された生活必修品を北朝鮮に持ち込んで売り、逆に北朝鮮の人々は国家の供給が減る中で足らない生活必修品を国家価格より高い値段で中国のものを買い、あるいは、金がなければ家で飼った鶏と交換したことを金日成は指摘している。김일성 「순천비날론련합기업소 건설을 다그치며 순천시를 잘 꾸릴데 대하여」(金日成「順川ビナルロン連合企業所建設をさらに促進して順川をりっぱに建設するために」関係部分幹部協議会での結論、1986年10月15日、『金日成全集』第84巻」)291頁。

する北朝鮮の立場に背馳するものであり、北朝鮮は個人主義の萌芽と危険性を感じるようになっていたのである。1987年10月10日に、金正日は個人主義が生じる現実について「党の政策貫徹に信念を持たず、さらにわが党の革命的事業方法と縁がない個人主義的実用主義の方法に期待をかける状況が表れている」[288]と強く批判したが、その後、金日成と金正日は個人主義的実用主義の禁止を強調した。

以上のような状況が生じたことは、結果的には金日成の政治的失敗であったと言ってよい。金日成は、「階級廃絶」を通して階級統合を強調し、人民大衆の役割を高めることを目指し、協同的所有を全人民的所有へと転換することを通して個人主義の萌芽を防ぎ、生産手段の独占的支配を強化する方向に向った。このような仕組みは「主体革命偉業」という「首領独裁体系」の価値目標によって神聖化されることになった。国家が人民生活に責任を負うのが、領導的役割の基本課題であったものの、「12.30施政演説」を契機にその基本課題が先送りになったことに、注目すべきであろう。

1987年から1993年にかけて、社会主義の完全な勝利を目指す重大課題が提示された。それは、第3次7ヵ年計画の開始であり、87年4月21日から23日に開催された最高人民会議の第8期第2回会議において、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議法令「朝鮮民主主義人民共和国人民経済発展第3次第7ヵ年(1987年-1993年)計画について」として採択された[289]。第3次7ヵ年計画の目的は、「人民経済の主体化、現代化、科学化を継続して拍車をかけて社会主義完全勝利の物質技術的土台を作り出すこと」であった[290]。具体的には、①科学技術を速やかに発展させて

---

[288] 김정일 「주체의 혁명관을 튼튼히 세울데 대하여」(金正日「主体の革命観を確立するために」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話1987年10月10日、『金正日選集』第9巻)58頁。
[289] 「당 및 국가 중요회의」(「党および国家重要会議：最高人民会議第8期第2回会議」『朝鮮中央年鑑』1988年）109頁。
[290] 「12.30施政演説」、前掲書、16頁。

経済の技術改造を促進する、②生産能力を決定的に高め、社会主義経済建設の十大展望目標を達成し、③衣食住問題をいっそう円満に解決して国民生産水準を一段階高める――の三点を掲げた[291]。

経済建設十大展望目標は、1980年に開かれた第6回党大会で「80年代に達成すべき社会主義経済建設の十大展望目標」として提示された[292]。第3次7ヵ年計画は、その十大展望目標を実現して社会総生産額（ＧＤＰ）を1.8倍、国民総生産（ＧＮＰ）を1.7倍に増やすことを目指すものであった。さらに人民生活を画期的に高め、1993年には労働者と事務員の実質所得を1.6倍、農民の実質所得を1.7倍に増やすことを期待していた[293]。この第3次7ヵ年計画については、「工業生産は毎年平均10％の高い速度で成長する」[294]という楽観的期待と、しかし「第3次7ヵ年計画は例がない膨大でありながら困難な課題」[295]であるという悲観的認識が交錯していた。

その理由は、第2次7ヵ年計画（1978年～1984年）の目標が達成できなかったからである。そのために、1985年から86年までの2年間の調整期を経て再開したが、第3次7ヵ年計画のマクロ指標は、第2次7ヵ年計画の目標において工業生産が2.2倍（年平均増加率12.2％）、国民所得が1.9倍であったのと比べて、低い目標ではなく当初からその達成は容易ではないと見られていた。なぜなら、十大展望目標である電力1000億kw/時、鉄鋼1000万トン、穀物1500万トンなどが第2次7ヵ

---

[291] 小牧輝夫「対外開放を模索する北朝鮮経済」（小此木政夫編『ポスト冷戦の朝鮮半島』、日本国際問題研究所、1994年）349頁。

[292] 十大展望目標は第二次7ヵ年計画が開始されて3年目になる1980年10月10日に提示された。電力1000億kw時、　石炭1億2000万t、鉄鋼1500万t、非鉄金属150万t、セメント2000万t、科学肥料700万t、織物15億メートル、水産物500万t、穀物1500万t、　干潟地開墾30万ヘクタールとなる。

[293] 윤재창「제3차7개년계획은 사회주의완전승리를 위한 웅대한 경제건설강령」（ユン・ジェチャン「第3次7ヵ年計画は社会主義完全勝利のための雄大な経済建設綱領」『経済研究』1987年3月号）3頁。

[294] 「제3차7개년계획을 수행하기 위한 진군을 힘있게 다그치자」（「第3次7ヵ年計画を遂行のための進軍を力強くせき立てよう」『勤労者』1987年第7月号）21頁。

[295] 同上、22頁。

年計画の実績からみてあまりにも過大であったからである[296]。この計画が実現すれば社会主義の完全勝利の段階を達成するとの期待感を高めながら、実現不可能な計画を掲げた理由は二つある。第一に経済的蓄積を目指したからである。北朝鮮の経済論理によれば、経済制度下では蓄積と消費があり、「蓄積は未来の消費のためのものと言える」。つまり、投資であるが、消費は「当面の勤労者の消費需要を充足させるという意味で互いに区別される」[297]ことになる。したがって、第3次7ヵ年計画で提示された重要課題である人民経済の主体化、現代化、科学化は、「生産的蓄積」を目指した長期計画であり、集中的投資を意味するものであった。結局、消費を主とする人民生活の向上という課題は、先送りされたのである。

第二に、言葉で人民経済と言っても、第2次7ヵ年計画から進めてきた主体化、現代化、科学化の本質は、思想、技術、文化の3大革命であったからである。金日成も「3大革命運動は、思想革命、技術革命、文化革命を力強く繰り広げて社会主義建設を早めるための全人民的な大衆運動」[298]であると認めたことがある。大衆運動を大衆の団結と協調を強化し、彼らに限りなく力を発揚させる創造的方法であり、大衆的闘争と集団的革新の革命的方法と認識していたのである[299]。

「首領権力」を実践するためには、大衆運動を展開しながら「社会政治的生命体」の結集力を強化する一方、首領の絶対的地位と決定的役割を認めるような教化を行うことを目指したのである。その結集力によって「首領権力」を大衆の中

---

[296] 小牧輝夫、前掲書、351頁。
[297] 리춘학 「제3차 7개년계획 시기 생산적 축적과 그 실현」(李春学「第3次7ヵ年計画の時期における生産的蓄積とその実現」『経済研究』1988年1号)30頁。
[298] 김일성「주체사상의 기치를 높이 들고 사회주의 건설을 더욱 다그치자」(金日成「主体思想の旗幟を高く掲げ、社会主義建設をさらにせき立てよう」朝鮮民主主義人民共和国創建30周年記念中央慶祝大会での報告、1978年9月9日、『金日成著作集』第33巻、1987年)417頁。
[299] 주체사상총서　제5권『사회주의, 공산주의 건설이론』(主体思想叢書第5巻『社会主義、共産主義建設理論』平壌：社会科学出版社、1985年)101頁。

に浸透させるのが「第3次7ヵ年計画」を展開した目的であった。1987年2月5日、最高人民会議常設会議は朝鮮民主主義人民共和国刑法を採択した[300]。前述したように、1974年刑法を改正したが、新たな刑法を制定しなければならなかった理由については、人民経済大学での説明は次のようなものである。

「首領、党、大衆が運命を共にする一つの社会政治的生命体として一心団結した」が、このことは「社会の一心団結が強化され、社会内部が健全なものとなったということである。このような社会生活と関連して、不法な行為、犯罪現象が少なくなった。階級闘争はもちろん厳しいけれども、敵の思想文化的攻撃は共和国内部に入れなくなった。そのような条件の中で、刑法を改正する要求が出された」[301]。つまり、「社会政治的生命体」論に基づいた刑法であることを明らかにしたとことである。74年刑法が「全社会の金日成主義化」を目指すための恐怖の手段であったとすれば、第3次7ヵ年計画という大衆運動の展開と共に採択された87年刑法は、「首領権力」の実践を目指した恐怖の手段であった。

とくに注目すべきは、「社会政治的生命体」論を骨子とする「7.15談話」は、1986年7月15日に党中央委員会の幹部に対して行ったものだが、一般大衆に向けては一年後である87年7月の『勤労者』によって公開されたことも、「首領権力」が社会的実践を目指してどれほど計画的であったのかを説明するところである。党幹部に対する談話の段階には政策として打ち出したものを、第3次7ヵ年計画のスタートによって大衆運動が推進される中で北朝鮮は一般化したのである。

---

300 大内憲昭、前掲書、170頁。
301 同上、171頁より再引用。

３．「祖国統一」課題の先送り

第三に、祖国統一問題を先送りにした。上に説明したように、金日成は共和国北半部で社会主義の完全な勝利を達成し、その力による「自主的平和統一を実現すること」を目指した[302]。金日成は祖国統一問題を「共和国政府に提起される最も切迫した民族的課題」[303]と言いながらも、「社会主義の完全な勝利」段階と区分した。最も大きな姿勢の変化を見せたのは、「北南高位級政治軍事会談」の提案であった。北朝鮮が南北間の対話で政治と軍事を分離した過去のやり方に比べれば[304]、新たな提案は政治軍事問題を包括的に認めることに特徴があった。

金日成は①「北南高位級政治軍事会談では互いに誹謗中傷を中止」し、②「北南間に多面的合作と交流を実現して民族のきずなを強める問題」のような当面の政治的対決状態を解消する対策が協議されなければならず、これと共に③「軍事力を縮小して軍備競争を中止し、軍事境界線非武装地帯を平和地帯に変え、大規模な軍事演習を打ち切る問題」のような当面の緊張緩和措置が協議されなければならないと強調した[305]。この提案は、北朝鮮が実践している①「首領権力」の尊厳を守るためであり、②南北の多面的合作によって経済問題も解決し、③南北間の軍縮を通して軍備などの費用を減らそうとする意図が背景にあったと言ってよい。

1980年代に入り、韓国は世界経済の潮流に乗って、経済自由化、安定化政策を採用することになり、1980年のマイナス成長という経済危機を克服して、「三

---

302 「12.30施政演説」、前掲書、1頁。
303 同上、、25頁。
304 過去、北朝鮮は祖国統一のために南北会談を提案したが、「南北政治協商会議・当局者会談、高位級当局者会談」(1980年1月11日)、「南北高位級政治会談実現の意向表明」(1985年1月1日)、「南北国会会談」(1985年4月9日)、「軍事当局者会談」(1986年6月17日)などのように政治と軍事を分離して提案した。
305 「12.30施政演説」、前掲書、30－31頁。

低景気」（低金利・低油価、ウォン安）という好条件に支えられながら持続的成長を達成した[306]。こうして発展した韓国の経済力は、北朝鮮のそれに比べれば圧倒的な優位を占める。言い換えれば、南北の経済力格差が著しくなったのである。のみならず、経済格差が拡大することに加えて、韓国政治は民主化をめぐる葛藤が続いたが、北朝鮮が期待するような付け込む隙があったわけではなかった[307]。

1987年に韓国の民主化は達成されたが、盧泰愚（ノテウ）（1932～）与党大統領候補の「6.29宣言」[308]によって大統領直接選挙制を骨子とする改憲案が与野党合意で成立し、民主主義への移動に大きな一歩を踏み出すことになった[309]。

1987年は北朝鮮の「首領権力」と韓国の「民主主義」（民主化）が達成された南北の「逆方向体制」の転換点であった。このような時期に、金日成は「主体革命偉業」という「首領独裁体系」への価値目標に向けて祖国統一課題を「現状維持」という観点で提示したのである。たとえば、1987年7月23日、共和国政府声明を行い「朝鮮半島の緊張を緩和し、平和統一を促進するうえで決定的な局面を開くため大規模な段階的武力削減を実現する提案」[310]を発表し、南北間の軍事力を1988年から1991年まで3段階にわたって縮小し、1992年からはそれぞれ10万以下の兵力を維持することを求めた。また、7月30日朝鮮人民軍最高司令部は「1987年末までに10万人の将兵を除隊させ社会主義建設の各部門に進出させる」と命令を下し、同年12月14日に命令が「成功裏に執行された」とコミュニケを発

306　木宮正史『国際政治のなかの韓国現代史』山川出版社、2012年、107頁。
307　同上、137頁。
308　「6.29民主化宣言」は、与野党合意による大統領直選制改憲とその後の大統領選挙実施、大統領選挙法改正による公正な選挙の実施、金大中赦免復権と思想犯釈放、人権侵害是正のための制度改善、言論基本法改廃など言論自由の暢達、地方自治制・教育自治制の早期実施、政党活動保障、社会浄化措置の追求などを内容とするものであった。［徐仲錫、2008：174－175］木宮正史、同上、110頁より再引用。
309　同上、110頁。
310　資料集『祖国統一めざして』朝鮮通信社、1990年、66頁。

表した[311]。

北朝鮮は、「平和共存」という平和的攻勢を続く一方、87年11月29日、韓国の大韓航空機爆破事件を起こし[312]、翌年の1988年1月に米国によってテロ支援国に制定された。この事件は、北朝鮮の切迫した状況を反映した事件として88年9月に韓国で行われる予定であったソウル五輪を妨害するためであったと言われる。韓国の国際的地位が向上することが北朝鮮にとって不利になると認識し、極めて不利な状況を防ぐための対応策であったかも知れない。しかし、ソ連・中国および社会主義諸国はソウル五輪に大挙参加して成功裏に開催された[313]。このような北朝鮮の対南姿勢を韓国から見た場合、守勢的次元で共存を志向するように見えた[314]。北朝鮮は共存志向形対南政策として連邦制を提示したが[315]、それは「双方の当局者を含む諸政党、社会団体の代表と各界の人士が参加する北南連席会議の開催を提案」したことによって[316]、「現状維持」を目指したのである。

「首領権力」から見ると、真の祖国統一問題はその当為性から未来への期待感であり、金日成が言った最も切迫した民族問題とは南北の共存を求めるという課題であったと思われる。それは、祖国統一問題は「誰が誰かを喰ったり誰かに喰

311　同上、66－68頁。

312　87年11月29日、乗員・乗客115人を乗せた大韓航空機858便がビルマの沖で爆破した。この事件は、逮捕された北朝鮮の工作員金賢姫によって、金正日の指示でよることと明らかになった。この大韓航空機爆破事件は、83年起きたラングーン事件とともに、北朝鮮がテロ国家であるというイメジを国際社会に与えた結果、88年1月には米国から「テロ支援国」と指定された。

313　ソウル・五輪の申請期間が締め切られる88年1月17日までに、ソ連・中国をはじめ社会主義諸国が88五輪の参加を次々と申請し、北朝鮮はさらに苦境に追い込まれた。結果的に、88年1月月11日、88五輪の参加を正式決定し、同月15日には中国が88五輪に参加することを正式に発表した。ソウルで開催された88五輪は、ソ連、中国、東欧諸国を含む161の国・地域によって行われ、その規模は史上最大となった。『外交青書―我が外交の近況』(外務省、昭和63年、第32号)172頁を参照。

314 허문영 『북한 지도부의 정세인식 변화와 정책 전망』(許文英『北韓指導部の情勢認識の変化と政策展望』ソウル：民族統一研究院、1994年)85頁。

315　同上、85頁。

316　김일성 「신년사」(金日成「新年辞」『労働新聞』1988年1月1日)1面。

われたり、一方が他方を圧倒したり優勢を占める」[317]ということを避け、南北が「共存の原則で二つの制度をそのままに置いて二つの自治政府を連合する方法」が模索されたのである[318]。「首領権力」が実践される時点で、祖国統一問題は守勢的「現状維持」へと変化したが、それは主に「首領権力」維持の手段に過ぎなかったと思われる。

---

[317] 同上、『労働新聞』、1面。

[318] 김일성 「주체의 혁명적기치를 높이 들고 사회주의, 공산주의 위업을 끝까지 완성하자」（金日成「主体の革命的旗幟を高く掲げ、社会主義、共産主義の偉業を最後まで完成しよう」朝鮮民主主義人民共和国創建40周年記念慶祝報告大会で行った報告、1988年9月8日、『金日成著作集』第41巻）226頁。

第二節 「首領神話」のシンボル操作

１.「社会政治的生命体」の過去操作

(1) 「白頭山密営」の象徴化

1987年2月11日、金正日の45歳の誕生日を前に「民族の聖山」と呼ばれる白頭山で密営が開営された[319]。いわゆる「白頭山密営」である。北朝鮮の記録によれば、英雄的な抗日武装闘争が新たな発展段階に入る時期の1930年代後半期から1940年代前半期にかけて、朝鮮人民革命軍司令部が秘密裏に場所を確保していた革命の根拠地であり、主体革命偉業の輝かしい継承と、その終局的勝利の確固な担保が成し遂げられた意義深い聖地として記されている[320]。金日成が1930年代末から1945年8月15日の祖国解放に至る時期まで、白頭山密営を根拠地として活動したと言われる遺跡を、復元したのである。

この「白頭山密営」は、開営の6ヵ月前の1986年7月26日、金日成が両江道の白頭山地域を現地指導する時に、自ら抗日革命闘争時期に生活したことを思い出し、その周辺に遺跡を探すことを指示したとされる。朝鮮「革命の聖地」の現場として浮上した白頭山密営は、まるで「社会政治的生命体」の縮小版のように構成された点が興味深い。金正日が「7.15談話」を行ってから10日後に、金日成が白頭

---

[319] 白頭山は、朝鮮半島の北部にある。古くから白頭山が最高名山で長白山とも呼ばれ、東方諸族の間では神山と考えられ，伝説の中心ともなっていた。したがって、風水の上で朝鮮の宗山として、半島の地脈はすべてここに源を発するものといわれ、その主派は、南方に延びて慶尚北道の太白山に達するものとされた。中村栄孝『朝鮮――風土・民族・伝統』吉川弘文館、1970年、6頁。

[320] 「백두산밀영 개영」(「白頭山密営の開営」『朝鮮中央年鑑』平壌：朝鮮中央通信社、1988年)165頁。

山に登りその現場を直接探し出した唯一の証言者であった[321]。40年前の白頭山密営の宿営地について、金日成は次のように指示した。

「小白水谷には司令部丸太小屋と金正日同志の生家、警衛隊員室、隊員室、ミシン所、 秘書処、 前方遮断所を備えている条件で、金正日同志の生家の後谷に後方警戒諸所のみを小さいものに建設」する。また、「出版所は、抗日武装闘争時期に小部隊責任者と政治工作員を地下革命組織責任者として、様々な出版物を印刷して普及したサジャ峰に作り、武器の修理所、ミシン所、病院などの後方基地密営は小縁池峰につくること」[322]。ここでは、金日成が抗日闘争を指揮したという「司令部丸太小屋」と金正日が生まれたという「金正日の生家」が中心となり、それら以外のものは金日成を防衛するように構成されていたことに注目したい。

最も目立つのは「金日成の司令部」と「金正日の生家」であるが、金日成と金正日はそこに特別な意味を置いた。金日成は「革命の司令部があり、金正日同志の生家がある小白水谷地域は、静かで崇高な雰囲気が保証されるように整備した方が良いです。それでこそ、ここを訪ねる踏査者らが崇高な感情に包まれて自ら頭を下げるようになります」[323]と述べ、人々の崇拝心を求めた。実際、白頭山密営を訪れた踏査者たちは、自然の美しさを感じながら「金日成の司令部」と「金正日の生家」の前で講師の解説を聴き、真に崇高な感情が沸き上がっている

---

[321] 金日成は1988年7月26日、アイルランド労働党総書記との談話の中で「抗日武装闘争に参加した人々の中で過去朝鮮人民革命軍部隊が宿営した跡と密営を知る人は今も多い。しかし、白頭山密営をはじめ白頭山地域の秘密根拠地はその時に絶対秘密であったために他の人々は知っていない」と述べたことが証明になる。김일성 「아일랜드로동당 총비서와 한 담화」(金日成「アイルランド労働党総書記との談話」1988年7月26日、『金日成全集』第87巻)418頁。

[322] 김일성 「백두산밀영을 잘 보존관리하여야 한다」(金日成「白頭山密営をよく保存管理すべきである」白頭山密営に訪れ、幹部を対象として談話、1988年8月10日、『金日成全集』第87巻)440頁。

[323] 김일성 「백두산지구를 대로천 혁명박물관으로 더 잘 꾸리자」(金日成「白頭山地域を大露天革命博物館としてさらに整備しよう」白頭山革命戦跡地建設総計画版を見ながら幹部との談話、1988年7月25日、『金日成全集』第87巻)412頁。

ことを体験しつつ、金日成の偉大性と金正日の神秘な誕生神話に頭を下げるようになる。北朝鮮が定義する崇高なものとは、人民大衆の自主的要求が基本的に実現される今日だけでなく、より高い要求と理想が実現される未来を志向するのが特徴的である。したがって、崇高なことは、未来的な性格を帯び、高い要求を実現するところにある[324]。こうした白頭山密営を通して金日成が目指したのは、①革命伝統の偉大性から自らが絶対的存在として認められるようになり、②未来への期待感を持って運命を任せることのできる過去、現在、未来の中心になることであったと思われる。

それは、次のような事例からも明確に証明される。金日成と金正日は白頭山密営に訪れたことが数多くある。ところが、金日成は白頭山密営を訪れる度に「金正日の生家」や白頭山天池を背景に解説講師や管理人、同行した幹部らと一緒に、また一人で、様々な姿で写真や映像を資料としてたくさん撮り残した。しかし、金正日は2011年12月に死亡する時まで自らの生家を背景に一枚の写真も撮ったことがない。

1988年8月に金正日と一緒に白頭山密営に同行した許錟(ホダム)(1929-1991)[325]は、次のように回想している。金正日は誕生してから「45年ぶり(生まれはじめて)に生家に訪れたこの歴史の瞬間を記念して、永遠の記録に残せるように生家を背景に一人で写真を撮ることを私は頼んだ」。それで金正日は「一人で写真を」と言い

---

[324] 同上、49頁。

[325] 許錟は、1929年咸鏡北道で生まれる。金日成総合大学卒業、モスクワ大学留学。1962年外務次官に就任し、その後、第一外務次官、1970年外務相、5回党大会で党中央委員に選出。1973年政務院副総理、1980年第6回党大会で政治局員候補。1983年党政治局員に昇格、書記を兼務、政務院副総理兼外交部長を辞任。1989年、最高人民会議外交委員長に就任、1991年死去する。許錟は、金日成の姪である金貞淑(キム・チョンシュク)と結婚し、金正日とは最も親しい関係であったために、許錟の名前で出版された金正日に関するエピソードの書籍が少なくない。黄長燁『回顧録』とインタビューの内容、元朝鮮中央ＴＶ放送局20年間勤務した張〇〇との証言に基づき、アジア経済研究所、(毎年)アジア動向データベース（http://d-arch.ide.go.jp/browse/html）を参照した。

ながら、「生家前に一人で撮る写真を、来年の冬に来て雪渓を背景に撮りたいです。わたしが2月に生まれたから生家前での一人の写真を撮るのであれば冬に撮るのがもっと意義があります」[326]と述べて、その時には生家を背景に写真を撮らなかった。その後も金正日は、白頭山を何回も訪ね自分が誕生したと主張する生家の前で写真を一枚も撮ることはなかった。これは彼の死後、朝鮮中央ＴＶの放送によって事実と確認された[327]。

金日成は「金正日の生家」前で楽しんで写真を撮ったものの、金正日が意識的に避けた理由は、白頭山密営がどこまでも金日成の偉大性を高めるためのものであったからである。1988年8月18日に白頭山密営を訪れた金正日は、「小白水谷は、白頭山革命戦跡地の中でもっとも中心的なところです。小白水谷をよく整えることは首領様の革命業績を永遠に伝え、わが人民を教化することに非常に重要な意義を持ちます」と述べ[328]、首領偉業の偉大性を人民に教化する目的を明確にした。白頭山密営という舞台装置で行った金日成の写真撮影は、金日成を絶対的存在として神格化する「首領神話」構築の一環であった。

(2) 「口号木」の大量発掘

さらに、1987年5月に朝鮮労働党歴史研究所は、白頭山密営を中心とした白頭山地域と北部国境沿岸の樹林地帯から、朝鮮人民革命軍隊員らが木の皮をはぎ、そこに彫ったスローガンや屋敷のあと、天幕のあとなど革命遺跡と遺物を数多く

---

326 許錟、『金正日の偉人象(2)』、109頁。

327 金正日は2011年12月に死亡するまで、何回も白頭山密営を訪問したものの、自分の生家の前で写真一枚も撮ったことがない。金正日は白頭山密営の生家で写真一枚を撮る時間も惜しんで人民のために現地指導した、と2012年2月朝鮮中央ＴＶは伝えた。詩『生家と写真』放映、2012年2月。

328 김정일 「백두산밀영지구를 잘 꾸릴데 대하여」(金正日「白頭山密営地域をよく備えることについて」白頭山密営を回りながら幹部に対する談話、1988年8月18日、『金正日選集』増補版、第12巻)328頁。

発掘したと発表した[329]。白頭山密営周辺の樹林地帯で初の「口号木」が発掘された後、その数は11月には1万余個にも達し、屋敷のあとは40個、そして宿営地で発掘された遺跡遺物は90余種類390余点にもなった。88年に入ると「口号木」の数がさらに増えて2,400点になり、89年末までには9,000余点に、金正日の誕生日である1990年2月7日までは1万点を突破したと説明している[330]。87年11年7日付『労働新聞』には「万代に長く光る革命的財簿（伝統）」という記事に「革命の聖地、白頭山密営を中心にした北部国境沿岸地帯の樹林地帯で抗日武将闘争時期の『口号木』と宿営地場所が数多く発見された」と掲載した。新聞は「皮を剝いた木には朝鮮人民革命軍隊員らが確固に持っていた革命的首領観を見せるスローガンが沢山発見された」と伝えた[331]。内容は次のように分類される。

第一に、首領の偉大性、つまり「革命的首領観」を内容とする。 何よりも、金日成を統一団結の中心に高く奉じた朝鮮人民革命軍と地下政治工作員の確固な信念と透徹な革命的首領観がそのまま反映された[332]。たとえば、「2千万朝鮮人民の最高指導者金日成」、「金日成朝鮮の太陽、世界の大英雄」、「金日成、2千万の求心点、万民の自由解放の求心」などをはじめ[333]、『勤労者』では、革命的スローガン文献の思想主題的内容において中心をなすのは、抗日革命闘士が持っていた「革命的首領観」であると論じている[334]。前述したように、「革命的首

---

329 「백두산밀영을 중심으로 한 북부국경 연안지역에서 혁명적 재부를 발견」（「白頭山密営を中心にした北部国境沿岸地域で革命的財富(宝物)の発見」『朝鮮中央年鑑』1990年）93頁。

330 同上、93頁。

331 「만대에 길이 빛날 혁명적 재부」(「万代に長く輝く革命的財富」『労働新聞』1987年11月7日)1面。

332 강석숭 「백두산 밀영일대에서 새로 발굴된 사적물들은 항일의 혁명전통을 빛내이는 귀중한 재부」(カン・ソクスン「白頭山密営一帯で新たに発掘された史的物は抗日の革命伝統を輝かす貴重な財富」『勤労者』1988年11月号)49頁。

333 敬愛なる首領を「天出名人」、「朝鮮革命の心臓」、「民族の英雄」と仕える文字は、偉大な首領金日成同志を「民族の太陽」、祖国解放の構成、統一団結の中心になり、抗日革命闘争の陣頭で指揮した事実を反映するような内容であった。

334 주도일 「혁명적 구호문헌에 반영된 항일혁명투사들의 혁명적 수령관」(チュ・ド

領観」は人民大衆を首領に絶対服従させる「垂直的服従」原理である。「口号木」の発掘の目的は「首領権力」を大衆に徐々に浸透させることであった。ここで最も重要なのは、首領の絶対的地位と決定的役割を認識させることである。

第二に、人々の崇拝心を正当化する内容である。白頭山密営で金正日の誕生を称する中で、金日成・金正日・金正淑の家庭を崇拝する内容である。金日成を「太陽」、誕生した金正日を「光明星」、金正淑を「月星」として三人を「三大星」と仰ぎながら、その民族の幸運を「三大通運」「三大自慢」として賞揚したスローガンが続々と発見された[335]。

さらに、革命根拠地の問題、抗日武装闘争の影響下で広範に展開された大衆闘争の問題、主体的力量による祖国解放作戦問題などを解明する資料を提供したところに意味があったと言われる[336]。こうして北朝鮮は、平壌市と両江道、慈江道、咸鏡北道、江原道、平安南道、黄海北道、黄海南道の全国で数多く発掘されたと主張した。長期間の風化作用によって文字が見えない口号木は、蛍光投光法を使用して文字が現れるようにし、ガラス箱に保存した。新たな革命的口号木の文献室は全国の露天文献庫と言い、党員と勤労者、新世代の革命伝統教化の立派な教化室になっていると評価した[337]。結局、「口号木」の内容は、①金日成が日本の植民地下で苦労している人民を意識化、組織化したことを暗示する資料、②したがって、人民は限りない崇拝心を持つようになったことを強調するテキスト

イル「革命的口号文献に反映された抗日革命闘士の革命的首領観」『勤労者』1990年『근로자』 4月号)30頁。

[335] たとえば、「ああ朝鮮よ、はらからたちよ、白頭光明星の誕生を告げる」、「二千万同胞よ、白頭山に白頭光明星、独立の天馬に乗って現れた」、「二千万同胞よ、白頭光明星が昇った。朝鮮独立の大通運」「白頭山に金日成将軍を継ぐ白頭光明星、三千里江山に光り輝く白頭光明星万歳」、「白頭山に光明星現わる。白頭光明星、三千里を照らす。みな光明星を仰ごう」、「二千万同胞よ、白頭光明星輝いて、子々孫々白頭光明星を仰ぎ祖国光復をなしとげよう」など。

[336] 「혁명전통」(「革命伝統」『朝鮮中央年鑑』1990年版)93頁。

[337] 「혁명적구호 문헌실을 새로 꾸리고 개관」(「革命的口号文献室を新たに準備して開館」『朝鮮中央年鑑』1992年)181頁。

として意味があった[338]。結局、金日成の「建国神話」が再構築され伝統的支配を正当化する内容のテキストが作られた。

また、1988年8月に白頭山密営を訪れた金日成はその周辺を回りながら幹部たちに「金正日同志の生家の横にある峰がすばらしいです。その峰の名前を長寿峰といったようですが、金正日同志が生まれたところという意味で『正日峰』というのが良いと思います。『正日峰』のある崖に『正日峰』という筆跡を彫りこむべきでしょう」[339]と指示した。その3ヵ月後の11月15日に、白頭山密営においてもっとも高い峰を、金正日の名を取って「正日峰」と命名し[340]、文字が刻まれ除幕式が行われた。このように操作した革命伝統は、もちろん事実ではなく神話である。神話が歴史を規定し、「それ自体民族の運命であり、民族にはじめから下された宿命」であるように、革命伝統は北朝鮮の歴史を規定した。それは朝鮮民族の運命を語っているものであるという点で神話に過ぎない[341]。「正日峰」は、金日成を中心とする「首領神話」を見守るまた一つの象徴として設定されたのである。

---

[338] 1987年の当時に、突然に発掘された40年前の「口号木」の内容について違和感を持った人々もいたようだ。白頭山地帯での「口号木」の発掘を朝鮮労働党歴史研究所が担当したが、発掘された「口号木」は咸興科学院の史的研究所が咸興コンピュータ科学技術大学に「口号木」とされる写真と党中央委員会の宣伝扇動部の職印がある命令書を提出した。こうして3名の分析家は「口号木」の写真を分析した。その中の一人の分析家は最初に接した時に、二つの疑問を持ったと回想する。まず、現代の新造語である「白頭光明星」や「民族の太陽」などの言葉が40年前にも使われたのかと言う疑問を持つ。しかし、一回のみではなく何回も繰り返すとその言葉に慣れるので昔からあったような気になる。また、写真資料の分析を指示された時に、1940年代初頭に書かれた「口号木」だが、皆さんの分析の結果によってその時の人民がどれほど首領様を崇拝したかと言う首領様の偉大性が決定されるために、小さい誤差もなく分析することが強調された。分析家の立場から見ると一つの誤差がないことは1940年代のものであることを無条件に認めるほか選択肢がなかった。金〇〇(58歳)、元北朝鮮咸興コンピュータ科学技術大学教員、2014年8月30日、9月1日インタビュー。

[339] 金日成「白頭山密営をよく保存管理すべきである」、436頁。

[340] 장영구 『혁명의 성산 백두산밀영』（チャ・ヨング『革命の聖地　白頭山密営』平壌、金星青年出版社、1990年）202頁。

[341] 鐸木昌之、前掲書、194頁。

２．絶対的存在と「建国神話」の同一化

白頭山密営の意義によって1987年に「祖国は首領の胸」[342]として概念化された。祖国を示す要素には、領土、人民、主権があるとすれば、領土は日本の植民地から祖国を解放したのが首領であり[343]、人民は首領の領導を受けるのみで人民大衆になり、自己の主権を持つようになる[344]。自主権と言われる自主的な政権のみで人民大衆は主人の権利、権限を行使することができる。結局、首領と領土、首領と人民、首領と主権の繋がりを正当化することになるが、ここで興味深いのは、祖国が領土、人民、主権を包括する概念であるならば、首領は祖国を抱いた最も偉大な存在になることである。したがって、「祖国はすなわち、首領であり、首領の胸が人民大衆の真の生命が保障される温かいところ」と定義された[345]。それは前述したように、「主体革命偉業」の意味とも文脈を同じくする。金日成は自ら「革命偉業には必ず伝統があり、継承があるのです。革命偉業の伝統が偉大であれば、継承も偉大になります。私は、主体革命偉業の過去について矜持高く誇りを持つことができます。主体革命偉業の過去が偉大であるために今日も偉大になり、明日も偉大になるでしょう」[346]と述べた。

ここで継承は、過去、現在、未来へと繋ぐことであり、とくに過去(伝統)の偉大さを示すものである。先行研究で論じられたように、白頭山密営が金日成から金正日への首領の交代という継承を前提とする手段のみならず[347]、「首領権

---

[342] 최세진 『주체사상이 밝힌 조국에 대한 견해와 관점, 립장』(崔シェジン『主体思想が明らかにした祖国に対する見解と観点、立場』平壌：科学百科辞典出版社、1987年)を参照させたい。
[343] 同上、25頁。
[344] 同上、36頁。
[345] 同上、67頁。
[346] 許錟、『金正日の偉人象(2)』、10頁。
[347] 鐸木昌之は、白頭山における金正日誕生で北朝鮮が意図していることは、金日成から金正日への首領の交代がたんに革命の継承、すなわち支配の正統性の委譲だけではなく、

力」を実践する目的から作られたのである。つまり、白頭山密営は金正日のためではなく金日成自分の伝統的支配の正当化を通して自らの権力を強化するための手段であった。したがって、北朝鮮は白頭山密営を通して金日成の「首領神話」を新たに創造しつつ、その中で金正日の「誕生神話」は金日成の「建国神話」を支える機能を遂行したのである。これが「首領権力」の観点から見た場合、首領の絶対的地位の構成要素である「建国神話」のシンボル操作である。

また、1987年10月14日に北朝鮮は、平壌の凱旋門広場に金日成の「凱旋演説親筆教示碑」と「記念壁画」を建立して除幕式を敢行した[348]。記念碑は、金日成の75歳の誕生日（1987年4月15日）と金日成が解放後、凱旋演説した1945年10月14日を永遠に記念する意志を反映して高さ75m、記念壁画基壇石の長さ45m、記念壁画の高さ10.14mになるように造ったものであった。記念壁画は平壌市群衆大会で凱旋演説する金日成の写真を形象化した大型壁画であり、また、凱旋演説親筆教示碑は金日成の凱旋演説を刻んだ数百トンの一つの天然花崗岩である。

前述したように、凱旋門は1982年4月14日に金日成の70歳誕生日を迎えて建築されたいわゆる大記念碑的建築物であるが、特徴的な点は大きさと『1925－1945』という文字である。金日成の偉大性を示す数字の文字1925は、金日成が祖国解放の夢を持って14歳の時に平壌から中国に行ったと主張する年であり、1945年は金日成によって祖国が解放されたと強調する年である。そこに、解放後に行

聖性を継承させ、中心を象徴化させることでもあった。そのシンボルが白頭山なのであると説明されていると分析している。鐸木昌之[1992]、前掲書、213－214頁。

348　この凱旋門は、金日成の生誕70周年を記念して、1982年4月15日に牡丹峰の凱旋門広場に建てられた。高さは60m、正面幅52.5m、側面幅36.2m、アーチ門の高さ27m、アーチ門の幅18.6mと、世界で一番大きい凱旋門で、1万500個の花崗岩で造られている。4本の花崗岩の枝の柱の上には、金日成が祖国回復を志し平壌を後にした年である1925年(当時、13歳)と、金日成が平壌に凱旋したとされている(実際にはソ連軍 と同行して帰国した)1945年を示した浮き彫りがある。また、その東側と西側の壁面は白頭山の浮き彫りがあり、南側と北側の壁面には「金日成将軍の歌」や革命を賛美する歌の歌詞が彫刻されている。凱旋門内部は、12個の部屋、手すり、展望台、およびエレベーターがある。

った凱旋演説文と金日成の写真を入れて、金日成の業績を称えることを現実化したのである。この「凱旋門」象徴化は、金正日の指示によって87年1月から始まり、わずか9ヵ月間という短期間で完成されたと言われる。

このように金日成は、「白頭山密営」の最も中心である「金正日の生家」を背景に撮った写真や平壌の凱旋門に「凱旋演説親筆教示碑」と「記念壁画」に自らの写真を刻み、視覚効果を生み出すことを目指したと見られる。もちろん、以前からも視覚効果の政治は常に行っていたものの、同時期に行った「首領権力」の絶対化は過去とはその意味を異にするものであった。全国の人々はテレビや教化、図書を通じて接する時に、金日成の「建国神話」を「真実」と信じるからである。この「建国神話」を信念化する時に、金日成は絶対的存在として祖国と同一化され、その中で過ごす人々の絶対的服従を導き出すことになった。

第三節 「民族主義」への回帰

１.「血統」・「民族」の再定立

1987年に平壌で出版された『主体思想が明らかにした祖国に対する見解と観点、立場』という書籍には、民族概念について過去と異なる内容が記された。そこでは、民族は血統、言語、地域の共通性であり、この中でも血統と言語の共通性は民族を特徴づける最も重要な要素であると定義される[349]。民族は何よりも血統の共通性に基づいた人々の社会的集団である。人々を一つの集団に結束させる血統の共通性とは、血液型や血液の構成成分などの生物化学的理解ではなく、民族形成において同一な先祖を持って代を続いで生きてきた人々の集団であると説明される[350]。

このような民族の概念は新たな定義であり、民族に対する北朝鮮の観点が変わったことを意味する。辞典的意味での民族は、言語、地域、経済生活、文化と心理などで共通性を持った歴史的に形成された人々の強固な集団である[351]。過去、民族を特徴づける最も重要なものは言語であった。金日成は「言語は民族を特徴づける共通性の中で最も重要な一つです。血統が同じで一つの領土の中に生きていても言語が異なると一つの民族とは言えません」[352]と述べたことがある。このように血統と領土の共通性が言語の共通性より重要ではなかったことは、1984年

---

349 崔シェジン、前掲書、38頁。
350 同上、38頁。
351 『哲学辞典』1970年、256頁。
352 김일성 「조선어를 발전시키기 위한 몇가지 문제」（金日成「朝鮮語を発展させるためのいくつかの問題」言語学者との談話、1964年1月3日、『金日成著作集』第18巻）14頁。

第1号の『勤労者』においても強調された[353]。

しかし、1987年から「民族」に関する概念定義において「血統の共通性」を優先し、既存の民族概念で重視された「経済生活の共通性」を排除し[354]、民族を「運命の共同体」として概念化したことに注目したい。それは、血統についてなされる主張が、実際には政治的に重要な帰属意識を強める働きをする場合があるからである[355]。革命伝統を通して「首領神話」を創造する中、1987年6月7日に金日成は「歴史遺跡と遺物を発掘復元する事業のために」という談話を出した。政務院責任幹部と歴史学者の間で行ったこの談話で、金日成は「歴史遺跡と遺物を発掘復元するのは党の一貫した方針」だと紹介しつつ、「歴史遺跡と遺物を発掘復元することに重要なのは、主体性の原則を堅持すること」であると述べた。さらに具体的に「主体性の原則と歴史主義的原則に基づいて国宝的価値がある歴史遺跡、遺物を立派に復元する」ことを指示し、「何よりも高句麗の始祖である東明王の陵を立派に復元すべき」[356]と課題を提起した。つまり、民族史を主体的原則に基づいて再解釈することが、「首領権力」にとって有利になるからである。そのなかで金日成が最も関心を向けたのは、東明王の「建国神話」の再建であった。

1989年4月2日に続いて14日にも、金日成は平壌市力浦区域に位置している東明王陵を視察したが、その時に東明王陵に関心を持つ理由を次のように語った。

---

[353] 정순기 「언어는 민족을 특징 짓은 가장 중요한 공통성」(鄭スンギ「言語は民族を特徴づけるもっとも重要な共通性」『勤労者』1984年1号)33－336頁。

[354] 民族主義の概念は北朝鮮でも数多く変遷してきた。この内容については鄭成長の論文を参考させたい。정성장 「스탈린체제와 김일성체제의 비교연구」(鄭成長「スターリン体制と金日成体制の比較研究」ソウル：韓国国際政治学会『国際政治論叢』第37集2号、1997年)61頁。

[355] ラスウェル・カプラン、前掲書、140頁。

[356] 김일성 「력사유적과 유물을 발굴복원하는 사업을 잘 할데 대하여」(金日成「歴史遺跡と遺物を発掘復権する事業を改善することについて」政務院責任幹部、歴史学者に対する談話、1987年6月7日、『金日成選集』第85巻)425頁。

「東明王陵は、わが国の歴史と文化伝統を示すもっとも貴重な遺跡です。家庭に祖先があるように国にも祖先があります。わが国の初の封建国家であった高句麗を建国した始祖王は東明王です。高句麗の人々は東明王を祖先として崇尚しました。高句麗の人々が彼をどれほど神格化したのかというのは、高朱夢に関する伝説のみでもよくわかるようになります」[357]。

金日成が東明王陵の再建において目的としたのは、①建国始祖の崇高さ、②高朱蒙に対する高句麗の人々の神格化であった。このような「民族神話」の再解釈は、「白頭山密営」をはじめに本格化された金日成の「建国神話」を正当化する現代的意味のシンボル操作であった。東明王陵に対する金日成の認識から見ると、民族始祖を東明王として再解釈したことによって、民族国家の始祖は首領として金日成を絶対的存在に位置づけるような試みであった。

２．「朝鮮民族第一主義」精神

1989年夏に起きた中国の「天安門事件」[358]をはじめ、秋から冬にかけて東欧

---

[357] 김일성 「동명왕릉을 잘 꾸릴데 대하여」（金日成「東明王陵をよく備えることについて」東明王陵と東明王陵建設総計画、図面を見ながら行った幹部との談話、1989年4月2日、14日、『金日成著作集』第41巻)302頁。

[358] 1989年4月15日から始まった中国の民主化運動は、6月4日に自国の軍隊によって流血事態で鎮圧された。いわゆる「天安門事件」であるが、この大規模な民主化運動は中国共産党によって「計画的陰謀、動乱」と規定され（「旗幟鮮明に動乱に反対せよ」『人民日報』1989年4月26日、第1面）、鄧小平（1904-1997）は「動乱」の一連の経過を内因より外因が大きいと表明し（岡部達味、前掲書、212頁）、西側が中国を社会主義から資本主義へと平和的に移行させようとするものであったと位置づけた。中国が「和平演変」と呼称した「天安門事件」が、その意味するところを「広義には、非暴力方式で敵対政党、敵対政権の性質を変え、これを「帰順」せしめる闘争形式、戦術および実践を言い、狭義には、帝国主義勢力もしくは西側ブルジョワジーが、社会主義国家制度を転覆させるために取る、平和裡に勝つ、もしくは戦わずに勝つ闘争方式、戦略、戦術、思想である」。李振城主編「无硝烟的战争『和平演事变』的对策」天津社会科学出版社，1991年(李振城主編「無硝煙的戦争『和平演変』に関する対策」北京：天津社会科学出版社、1991年)1頁。ここでは、中国で天安門事件が起きた原因を、国内階級闘争を軽視してきた結果、国外敵対

諸国で脱社会主義化が次々と進行し、ついに社会主義陣営の崩壊をもたらした。冷戦の終結とも言われる社会主義陣営の敗北が、北朝鮮にどれほどの衝撃を与えたのかは想像に難くない。北朝鮮の建国初期から支援国・兄弟国であった社会主義諸国の崩壊は、北朝鮮に「社会主義諸国の帝国主義に対する投降の産物」[359]として受け止められた。

社会主義諸国の変質は北朝鮮にとって社会主義の失敗を意味し、社会主義を守ろうとする北朝鮮を国際環境から「孤立」させた。いわゆる、北朝鮮の支援国・兄弟国である社会主義陣営の中で、1989年10月3日、東欧諸国のポーランドでは統一労働者党（共産党）が解散を決議し、10月18日にはハンガリー国会が憲法から「共産党の指導的役割」条項を削除した[360]。また、同日の10月18日には金日成の親友であり東ドイツの社会主義統一党書記長であったホーネッカーが、18年間君臨した党書記長から退陣を強いられた。また、12月22日には共産党独裁者で金日成の盟友であったルーマニアのチャウシェスク大統領夫妻が反体制のデモで自国の軍隊に逮捕され、25日に秘密裁判によって銃殺処刑された。それを最後に、東欧諸国の社会主義体制には完全に幕が降ろされた。このように不安感が高まる中で12月3日、米国とソ連はマルタ島で開かれた首脳会談で「冷戦の終結」を宣言したのである[361]。

1989年4月と11月に平壌を訪問した伊豆見元は、4月に「相互内政不干渉」の

勢力が和平攻勢によってブルジョワ自由化思想を氾濫させたためであるとしている。また国内に「新搾取階級」があらわれたことも指摘している。 同上、231頁。

[359] 김정일 「사회주의의 사상적 기초에 관한 몇가지 문제에 대하여」（金正日「社会主義の思想的基礎に関するいくつかの問題について」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する演説1990年5月30日、『金正日選集』第10巻、1997年）112頁。

[360] 1948年9月9日、北朝鮮は建国を宣布したが、その直後、ソ連は1948年10月12日に大使級外交関係を結び、ポーランドは48年10月6日、東ドイツは49年11月7日、ルーマニアは48年10月26日、スロバキアは48年10月21日、ハンガリーは48年11月11日、ブルガリアは48年11月29日、チェコスロバキアは48年10月21日、ユーゴスラビアは48年10月30日に北朝鮮と大使級外交関係を結んだ。

[361] 柳澤英二郎・加藤正男・細井保編『危機の国際政治史（1917－1992）』亜紀書房、1997年、357頁。

原則を掲げ、ソ連の改革に関する言及を避けた北朝鮮の専門家たちが、11月にはモスクワが資本主義の道を歩む可能性を強く示唆した点がもっとも印象的であったと述べた[362]。ペレストロイカがさらに早いスピードで推進される中で、ソ連が社会主義の全面的な修正に踏み切る可能性がより高くなったことに北朝鮮が不安感を持ったことを、平壌で十分に読み取れるようになったのである[363]。

1989年12月28日に金正日は、朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対して「朝鮮民族第一主義精神を高く発揚させる」という演説を行い、朝鮮民族第一主義を提唱した。金正日は「朝鮮民族第一主義の精神は、一言で言えば朝鮮民族の偉大性に対する誇りと自負心」であり、さらに「輝く高い自覚と意志として発現される崇高な思想・感情である」[364]と定義した。金正日は「民族の偉大性は、すなわち、首領の偉大性、党の偉大性である」ために、朝鮮民族第一主義精神に基づいた首領の偉大性を大衆に深く認識させる教化を強調した。朝鮮民族第一主義精神に最初に言及したのが、「7.15談話」である。しかし、それまでは国内的に強調する程度であったものを、それ以後は対外的にも公式化したことが注目される。それは、金日成と金正日が持っていた「民族」に対する認識が一変したからである。

過去、彼ら二人は、朝鮮民族に対する否定的な認識を持っていた。1988年9月29日に言及した金正日の言葉を借りると、「元来、朝鮮の人々には何事も一回始まるとそれをずっと押し進めることをせず、すぐ捨て去るという悪い習性がある」[365]。「鍋が煮えるようにぐらぐら煮えても、すぐに冷えてしまうのが朝鮮民

---

[362] 이즈미 하지메 「北韓에도 『東歐』바람 불까」『월간중앙』 1990년 2월(伊豆見元「北韓にも『東欧』風が吹くか」『月刊中央』1990年2月)379頁。
[363] 同上、379頁。
[364] 김정일 「조선민족 제일주의정신을 높이 발양시키자」(金正日「朝鮮民族第一主義精神を高く発揚しよう」朝鮮労働党中央委員会の責任幹部に行った演説、1989年12月28日『金正日選集』第9巻)419頁。
[365] 김정일 「혁명가극 『꽃파는 처녀』는 사상예술적으로 완벽한 최고의 걸작이다」(金正日「革命歌劇『花を売る処女』は思想芸術的に完璧な最高の作品である」朝鮮労働党中央委員会、万寿台芸術団責任幹部及び創作家との談話、1988年9月29日、『金正日選

族の持っているもっとも大きな弱点」である。金正日は、金日成は常に「父親が何事も鍋が煮え立つようですぐに冷えるのが朝鮮民族の持っている弱点だと教示した」[366]と伝えながら、その民族の弱点を克服すべきだと指摘した。金日成の父親と言えば、金正日には祖父であるが、3代にわたる民族に対する根深い否定的認識を勘案すれば、朝鮮民族第一主義の宣布は「首領権力」の目的を持った意識的行為と言わざるを得ない。その目的はいくつかの要因から説明される。

第一に、首領・祖国・民族の同一化を試みる「首領権力」の一つの装置である。民族史上、一回に限る首領の出現を正当化するためである。1989年に平壌で発刊された『わが民族第一主義論』には、 首領は民族の運命開拓で決定的な役割を果たすために、「民族の思想的結束、組織的結集の求心点」になり、首領によって「民族の運命を開拓する闘争の戦略戦術が提示」される[367]。首領は主体思想を創始し、民族成員を意識化・組織化して一つの「社会政治的生命体」に結集させる戦略戦術を提示する[368]。「首領権力」における首領の地位と役割である。したがって、首領の範疇は集団の最高脳髄としての首領という概念が人間中心の主体哲学で新たに解明された概念であり、人民大衆、民族という集団的概念と一体化した概念である[369]。このような論理は、数千年の歴史で初めて偉大な首領を民族運動の源泉に繋げ、結局、首領の偉大性は民族の偉大性になる。革命伝統の再解釈を通して首領と祖国を、そして民族伝統の再建と、朝鮮民族第一主義精神を通して首領と民族を一体化したのである。したがって、「朝鮮民族第一主義」精神は首領が人民大衆のみならず祖国・民族を包含した最高脳髄になる過程の一つの作動装置と設定された。

集』増補版、第12巻)404頁。

[366] 同上、404頁。

[367] 高ヨンファン、前掲書、125頁。

[368] 同上、133頁。

[369] 同上、130頁。

第二に、国際環境の激変事態との関連がある。1989年夏からの社会主義諸国の脱社会主義化の波は、東欧諸国の社会主義体制を次々と崩壊させることになった。北朝鮮は兄弟国の社会主義体制の崩壊の影響が自国に及ぶことを防ぐ目的で、「朝鮮民族第一主義」精神を宣布したのである。元来、北朝鮮が認識した民族主義感情は、1988年に平壌で出版された『心理学概論』によると自己の民族の特別な「優秀性」、「功労（偉業）」を打ち出して一方的に自己民族のものを自慢し、他民族とその成果に対して軽視して排斥しつつ、敵意を持って対面する極端的な感情であるとされた。このような「民族的感情と情緒は、民族の運命と関連する様々な事件と環境から、より即刻的でありながら生々しい心理的反応である」[370]と批判している。しかし、このような認識を持っていた北朝鮮が「朝鮮民族第一主義」の精神を宣布したのは、東欧の変革とソ連の韓国への接近に対する対応であったと思われる。結局、東欧の変化が与えた衝撃は「首領権力」の構造によって少なくとも最高脳髄の意識の中で最小化するようになった。北朝鮮の外部から見た中ソの変化が与える衝撃に比べれば、北朝鮮の内部が受けた衝撃は相対的に少なくなった[371]。このような対応措置が「朝鮮民族の第一主義」精神であったと言えるだろう。

第三に、韓国の国力増加に恐れを感じたために、韓国による吸収統一への防衛的手段として宣布されたと言ってよい。前述したように、金日成にとって1988年からの南北関係は「誰が誰を喰ったり喰われたり」、「一方が他方を圧倒したり優勢を占める」恐れがあるものとして意識していた。したがって、北朝鮮が韓国に吸収される危機を防ぐために、「南北が共に一つの血統を持った民族である

---

370 李ジェスン、前掲書、316頁。
371 이즈미하지메（伊豆見元）、前掲論文、379頁。

ために民族的団結を実現する」[372]ことを提案し、積極的な措置として「朝鮮民族第一主義」精神を掲げたと考えられる。結局、北朝鮮は「首領権力」論理によって首領を「祖国」と「民族」に一体化する論理的装置を作り出した。その中で、対外環境の激変事態に直面したが、その対応として「朝鮮民族第一主義」を掲げるようになった。これは、朝鮮民族は、崩壊する東欧社会主義とは異なる民族であるという、社会主義諸国に対する排他的性格を持つ一方、分断国家の相手でありながら国際的地位が向上している韓国には同民族という融和的姿勢を示すものであった。

[372] 김일성 『신년사』(金日成「新年辞」『労働新聞』1988年1月1日)1面。

小　結

1987年は、北朝鮮の現代史において「首領権力」の確立を試みるという政治変動の年であった。「首領権力」の核心である首領の絶対的地位と決定的役割を社会化する実践的運動が進められた年であったからである。「首領権力」の目的は、金日成の権力維持であったために、その力の絶対性は人々の絶対的忠誠と崇拝心を前提とした。権力の維持は、権力行使の基盤たる政治的主義・主張に対する権力の対象者の忠誠の度合いに左右されるからである[373]。したがって、「首領権力」が最初に実践したのは、首領を絶対的存在とする新たな価値目標と象徴体系を再定立することであった。

1987年から第3次7ヵ年計画という膨大な大衆運動がはじまる中で、2月に「白頭山密営」を開営したのは、「首領権力」の効果を高めるためであった。金日成は「首領権力」論理である「社会政治的生命体」論が論じられてから一ヵ月後、白頭山に直接登り、40年前に生活したと主張する様々な証拠を探し出した。そして、さらに物証を発掘するよう指示したのである。結局、「白頭山密営」の発掘作業は証拠を探したというより、証拠を操作したという結論になる。金日成は、「白頭山密営」のシンボル操作を通して、その時にソ連のハバロフスクでソ連軍として生活した事実を隠蔽し、祖国の解放者、民族の恩人として位置付けたのである。そのために、白頭山を舞台に金正日の「誕生神話」を操作し、「金正日の生家」を背景とする一人の主人公になった。金日成のみがそれを背景に写真や映像の資料をたくさん撮り残し、全国の人民に感動させる機会を広めたのである。

87年9月に同様な意味で以前から建築された巨大な凱旋門に金日成の写真や演

---

[373] ラスウェル・カプラン、前掲書、156頁。

説を刻んだ大型の修正建築も、金日成を求心点として絶対化する事例である。金日成の偉大性を認知しつつ常に一緒にいるような親近感を与えることが目的であった。同時に、全国的範囲で発掘された「口号木」などは全て「首領神話」の構成要素になる。したがって、金正日の「誕生神話」は「首領神話」の一部分になり、金日成を「祖国」と同一化し、さらに「民族」と同一化するに至る。

北朝鮮で「民族」と言うときに、南北の人々とともに海外に住む同胞を包括するが、「民族問題」という場合は南北関係に関する問題を指す。1987年、韓国では「6.29宣言」によって大統領直接選挙制への改憲と民主化措置が行われ[374]、同年12月に大統領選挙が実施された。韓国で「87年体制」と呼ばれる「6.29民主化宣言」は、民主主義の実現を宣言したはじめての民主化の成果であったが、その後7月に北朝鮮では「社会政治的生命体」論が一般に公開され制度化に向けられたのである。1987年は「民族」の観点から見た場合、韓国は民主化という権力分立の制度を選択し、北朝鮮は「首領権力」という更なる独裁権力の強化を制度化した年であった。つまり、「南北の87年体制」によって朝鮮半島の分断体制がより明確になったのである。1988年段階で、中国の鄧小平が「中国の立場からすれば、韓国との関係発展には利益があり、経済上も双方の発展にとって有益であり、政治上は中国の統一に有利である」[375]と述べたように、韓国の経済発展は中国にとって魅力的なものであった。同年9月16日、ソ連のゴルバチョフはクラスノヤルスク演説で韓国との経済関係改善に言及したことも韓国の国際的地位の向上を認めるものであった。北朝鮮は韓国に有利な部分には触れないが、南北格差の現実については否定できなかった。

1989年12月に金正日は「朝鮮民族第一主義」精神を掲げたが、これは三つの

---

[374] 木宮正史、前掲書、110頁。
[375] 钱其琛『外交部档案馆新华社』世界知识出版社，2003年(銭期琛『外交十記』世界知識人出版社、2003年)144頁。

原因から出された。第一に、国内における「首領権力」の展開である。国家全体を「社会政治的生命体」として規定した以上、それ自体が祖国になり、その生命体を動かすのが首領であるために、結局、祖国は首領の胸であると説明される。「朝鮮民族第一主義」精神は1986年の「7.15談話」から言及されたことを勘案すると国内的には突然のできことではない。それは「首領権力」の実践部分に過ぎないのである。

第二に、「朝鮮民族第一主義」精神を宣布した時点が社会主義諸国の変質が現れた直後であることに注目すべきである。1989年の夏から続いた社会主義諸国の崩壊は北朝鮮に巨大な衝撃を与えた。北朝鮮は他の社会主義とは異なる民族として一つの「血統」を強調することによって外部からの「黄色の風」（東欧の風）を遮断する装置を設置したのである。したがって、「朝鮮民族第一主義」精神は、「首領権力」の対外政策の方向を示したものであった。

第三に、「朝鮮民族第一主義」精神は韓国による吸収統一を防ぐ装置であった。韓国の民主化と国際的地位の向上、さらに、ソウル五輪を通じてソ連や東欧諸国との関係正常化に向けて進む中で、89年11月に起きた東西ドイツの「ベルリンの壁」の崩壊、北朝鮮に韓国による吸収統一の恐れを感じさせた大きな事件であった。北朝鮮が民族主義の姿勢を示した時点は、金日成が演説のたびに「誰が誰を喰ったり喰われたり」、「誰が誰を圧倒したり圧倒されたり」という言葉に象徴される危機感を表した時期であった。金日成が求めたのは南北の共存であったが、そのような思いを込めたのが「朝鮮民族第一主義」という精神的装置であったのである。

第４章 「首領権力」のさらなる強化(1990年～1991年)

ある社会において一人の行為者が権力を所有すれば、他の行為者の権力をそれだけ制限することとなる。権力が本質的に希少であり、一般化された道具としての地位にとどまっているものであるために、権力はすべての客体の中で最も熱心に最も力強くそれを獲得しようとして競争対象とされる[376]。首領の地位を通して一般化された「首領権力」は1990年初頭、新たな「歴史の重要な転換点に立っている」ように位置づけられた[377]。この歴史の重要な転換点は、国内における金日成の高齢化に対する対応に加えて北朝鮮を取り巻く国際環境の激変から招来された「危機的対応」という課題であった。

1980年代に入り、韓国の経済発展や政治的民主化により南北間体制競争が韓国有利に展開するようになる中で[378]、社会主義諸国の崩壊は、北朝鮮にとって①イデオロギーと正統性の否定、②安全保障の無効化、③社会主義市場の消失という、まさに「生存の危機」を模索すべき新たな課題をもたらすことになったのである。本章では、国際環境の激変が北朝鮮の「首領権力」にどのような影響を及ぼしたのか、「政治の鍵」である首領（支配者）の地位と役割は権力維持のために、どのように強化されたのかなどの対応方式について考察し、その要因を分析する。

---

[376] ニクラス・ルーマン『権力』24頁。星野智『現代権力論の構造』情況出版株式会社、2000年、220頁より再引用。

[377] 1990年1月1日に金日成は「新年辞」で、主体革命偉業の勝利のために長期間に艱難な闘争を続いてきた北朝鮮が「今日、歴史の重要な転換点に立っている」と位置づけた。김일성 「신년사」『로동신문』 1990년 1월 1일(金日成「新年辞」『労働新聞』1990年1月1日)1面。同時に90年1月号の『勤労者』も北朝鮮の現在を「歴史の重要な転換点」と規定し、金日成の意図に歩調を合わせた。「주체의 혁명적기치를 높이 추켜들고 1990년대를 위대한 승리와 영광의 년대로 빛내이자」(「主体の革命的旗幟を高く掲げ、1990年代を偉大な勝利と栄光の年代として輝かそう」『勤労者』1990年1月号)13頁。

[378] 木宮正史「米中関係と朝鮮半島」、『国際問題』2014年1・2月、17頁。

第一節　社会主義諸国の変質と「三大危機」

１．イデオロギー的「危機」

東欧での社会主義諸国の崩壊のみならず、1990年に入るとソ連は自ら憲法改正において党の領導権を放棄して大統領制を導入し、3月15日に人民代議員大会でゴルバチョフが初代の大統領に選出された。ソ連の変質は、北朝鮮に社会主義イデオロギーの失敗に加えて、安全保障の危機[379]と最大の経済支援国の消失[380]を意味する深刻な「危機」意識を与えた。実際、90年10月に金日成は米国社会労働党代表団との談話で、変化した国際環境に対する認識を次のように示した。「今まで、世界には二つの超大国が存在し、一つはソ連であり、もう一つは米国でありました。ところが超大国隊列でソ連が落ちこぼれ米国だけ残っています。ソ連は、米国の同伴者になってしまいました」[381]。

このような国際環境の変化が北朝鮮に及ぼした政治的「危機」は、三点に集約される。一つ目は、社会主義のイデオロギーの変質がもたらした「孤立」、二つ目は、安全保障の危機と韓国による「吸収統一」の「危機」、三つ目は、「社会主義市場」の消失と経済的「危機」（以下、イデオロギー・安保・経済の「三大危機」と略す）である。いわゆる、最初に経済の変革から始まった「改革」・

---

[379] 1961年7月6日、モスクワで「朝・ソ友好協力相互援助条約」が結ばれた。この条約は、同盟国は一方がどこかの国に軍事攻撃を受けときには、直ちに相互軍事援助と支持をおこなうと規定された。下斗米伸夫『モスクワと金日成』岩波書店、2006年、293頁。

[380] 1949年3月17日、北朝鮮とソ連の間に経済及び文化協調に関する初の協定が締結された。その以後、1955年2月5日に科学技術協調に関する協定、1960年には商業及び海運条約、1970年9月には経済及び科学技術協調に関する協定が締結された。

[381] 김일성 「미국사회로동당대표단과 한 담화」 1990년 10월 5일（金日成「米国社会労働党代表団との談話」1990年10月5日、『金日成著作集』第42巻、1995年）398頁。

「開放」政策は、政治的「改編」を求められ、ついに、「社会主義の原則」も捨てるまでに至った。北朝鮮は社会主義体制の崩壊について、「資本主義への復帰」と規定して経済的要因に着目した。プーランツァスによると「『経済的』諸要因は現実的に資本主義体系総体の新しい接合を決定し、そのさい政治とイデオロギーに深刻な変化をもたらす」[382]とされる。以下、北朝鮮のイデオロギー・安保・経済の「三大危機」に対する対応課題について考察してみよう。

第一に、社会主義諸国の崩壊で最も「危機」として受け止められたのは、イデオロギー的変質であった。イデオロギー的変質は、金日成に独裁者の悲惨な末路を目撃させた。たとえば、東ドイツのホーネッカーが、自ら主導してきた共産党から強制的に引退させられ、それ以後、亡命先で不幸な運命に終わったことも、また、社会主義陣営の中で最も親しい金日成の盟友であったルーマニアのチャウシェスクが自国の軍隊によって逮捕され処刑されたことも、独裁者の悲惨な末路を示した点において金日成には衝撃であったかも知れない。社会主義諸国の政治における「多党制」は「一党体制」である北朝鮮にとって「多党制の背後で政治を左右する実際的な操縦者は大独占資本家である」[383]ために、首領の唯一的領導権を奪う「首領権力」の「危機」として受け止められるものであった。

結果的に、 経済路線の変更がもたらした政治的変動は、集団主義を放棄する方向に指導部を追い込み、その結果社会主義のイデオロギーを捨てるに至ったのである。北朝鮮にとって社会主義のイデオロギーを捨てることは、金日成の思想である主体思想の放棄を意味し、これは、独裁権力を放棄する結果に繋がるものである。したがって、社会主義体制の崩壊は、北朝鮮にイデオロギーが「首領権

---

[382] Poulantzas, Fascism and Dicitatorship, p.20. デイヴィッド・イーストン、前掲書、313頁より再引用。

[383] 김정일 「우리 나라 사회주의는 주체사상을 구현한 우리 식 사회주의이다」(金正日「わが国の社会主義は主体思想を具現したわれわれ式社会主義である」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する演説、1990年12月27日、『金正日選集』第10巻)498頁。

力」の存亡を左右するという教訓からさらなる権力強化を模索する「歴史の重要な転換点」を認知させたのである。

２．安保的「危機」と経済的「危機」

第二に、社会主義諸国の崩壊は対内外的に安全保障の「危機」をもたらした。安保的危機は二つの側面で進行した。一つは、1991年12月のソ連の崩壊によって東西間の二極構造が崩れた以後、唯一超大国になった米国は孤立圧殺政策を実施した。このような危機意識は、対外的に1989年11月9日に「ベルリンの壁」が崩壊してからわずか一年後の1990年10月30日に宣布された東西ドイツの統一を目撃してからさらに高まるようになった。北朝鮮にとって、ソ連という巨大な同盟国を消失する一方、米国に直接的に対応すべき課題が台頭された。

もう一つは、同じ分断国である北朝鮮に韓国による「吸収統一」の危機感を覚えさせるものであった。「ベルリンの壁」が東ドイツの人々の手によって崩壊される場面が、生放送で世界に流れる中で危機を感じ、さらに崩壊した社会主義諸国は次々と韓国との外交関係を樹立したからである[384]。東欧諸国が韓国と国交を樹立したのに続き、1990年9月30日にはソ連[385]、そして1992年8月24日に中国[386]も

---

[384] ハンガリーは89年2月1日に韓国と国交正常化を樹立したことに初め、89年11月1日にはポーランド、12月22日にはユーゴスラビア、1990年3月22日にチェコスロバキア、3月23日にはブルガリア、3月30日にはルーマニアが韓国と外交関係を樹立した。

[385] ソ連は、冷戦期において北朝鮮の最大の支援国、保証国であったがこれまでとってきていた韓国全面否定・北朝鮮支持という「絶対的」図式は、社会主義の相対化を目標とするペレストロイカの進展によって変化しはじまった。 秋野豊「モスクワの朝鮮半島政策」(小此木政夫編『ポスト冷戦の朝鮮半島』日本国際問題研究所、1994年)205－206頁。

[386] 中国は、冷戦期において朝鮮半島の二つの政府(韓国・北朝鮮) の存在を認めず、北朝鮮を全力で支え、韓国に全面的に対抗した。刘金质・潘京初・潘荣英・立锡遇编 『中国与朝鲜半岛国家关系文件资料汇编』上卷(1991-2006)，世界知识出版社，2006年，(劉金質・潘京初・潘栄英・李錫遇編『中国と朝鮮半島との国家関係文献資料集』上巻(1991－2

また韓国との国交正常化に踏み切った。朝鮮半島において北朝鮮のみを正統な国家として認めてきたソ連・中国及び社会主義諸国が、韓国と国交を樹立することによって韓国の国際的地位はさらに向上し、北朝鮮は相対的劣勢に置かれるようになった。このような南北朝鮮の現実的格差は、北朝鮮にとって韓国による思想浸透、いわゆる、北朝鮮内部に修正主義と資本主義的で不健全な思想要素が浸食する危険性が高くなると認識させた[387]。したがって「首領権力」を擁護するために「蚊帳」[388]を吊るような物理的抑圧機構を再編する必要に迫られたのである。

第三に、社会主義の崩壊は北朝鮮に経済的「危機」の要因として作用した。対外的には「社会主義市場」の消失を意味するからである。イーストンによると経済的危機は政治的危機の一要素に過ぎないのであり、全体としての生産様式における一つの危機の焦点または凝縮点[389]である。過去、金日成は「すべての社会関係の基礎は生産手段に対する所有関係であり、すべての階級的差は生産手段に対する所有関係によって規定される」[390]と言及していた。

金正日は、1990年12月27日にソ連及び東欧諸国は国家所有の企業と土地を個人に売り、さらに資本家に安い価格で売って私的所有を基礎とした市場経済を導入し、経済的繁栄を模索するようになったと認識したのである。金正日は、「市場経済の基本特徴をなす価値法則の無制限の作用と無制限の競争の支配は、生産

---

006)北京：世界知識出版社、 2006 年)1頁。

[387] 김정일 「당을 강화하고 그 령도적 역학을 더욱 높이자」(金正日「党を強化しその領導的役割をさらに高めよう」朝鮮労働党中央委員会責任幹部及び道党責任書記との談話1989年6月9日、12日『金正日選集』第9巻)355頁。

[388] 金正日は、「一部の国々が改革、改変政策に深く落ち込んでいる」教訓から、金日成が「蚊帳を吊らずに窓を開けておくと蚊にまぶたを刺されるし、キンバエが飛んできて卵を産みつけられる恐れがあるから、窓を開けておく場合も蚊帳をきちんと吊らなくではならないと教えていた」[388]と伝えたように、資本主義「黄色の風」が入らないような装置を「蚊帳」に比喩したのである。同上、336頁。

[389] デイヴィッド・イーストン、前掲書、312頁。

[390] 金日成「朝鮮労働党第6回大会の中央委員会事業総括報告」、317頁。

手段に対する私的所有を基礎としている」[391]と言い、「市場経済と社会主義は決して両立することができない」と断言した。そのことからも、金正日は生産手段の私有化が政治やイデオロギーに及ぼす影響を「危機」と意識したと思われる。また、対外的にみて「社会主義市場」の消失は、元来経済的困難に直面した北朝鮮にさらなる衝撃を与えた。冷戦期において、北朝鮮にとってソ連は最大の経済パートナーであった。

1988年の金日成の言葉によれば、「朝ソ間には、2000年までの間に経済および科学技術の交流に関する長期綱領が作成されており、エネルギー産業、金属工業、電子工業、林業、軽工業、農業、最新科学技術分野をはじめとした各分野において、協調と交流、合作と合併を拡大発展させている」[392]。この金日成の発言こそが、ソ連に対する北朝鮮の経済全般にわたる依存度を示したものでもある。1989年の数字で北朝鮮の貿易総量をみると、約40億ドルであり、その内ソ連・東欧だけで約25億ドルがソ連・東欧を相手とするものであったが、ソ連が圧倒的に多く約24億ドルとなっている。比率でいえば、57.8%がソ連で、残りの2.3%が東欧諸国であったが、少なくともソ連・東欧の支援が60%以上のシェアを占めていた[393]。しかし、それまで基本的にバーター貿易であったものが、1990年からは現金決済方式に転換されてソ連・東欧との貿易が急減し、その影響が北朝鮮の経済全体に打撃を与えたのである。

このように、社会主義諸国の崩壊から北朝鮮が受けた衝撃の大きさは、1990年1月11日に行った金正日の談話に集約されている。金正日は「社会主義は、い

---

[391] 金正日「わが国の社会主義は主体思想を具現したわれわれ式社会主義である」、501頁。

[392] 김일성 「쏘련주간정치잡지 『노보예브레먀』 책임주필이 제기한 질문에 대한 대답」(金日成「ソ連週刊誌『ノーボエ・ブレーミャ』責任主筆が提起した質問に対する答え」『国際生活』1988年9月号)15頁。

[393] 伊豆見元「急転換の北朝鮮と今後の展望」(『アジア時報』1991年7月号)31ー32頁。

わゆる多元主義を許容できない」と断言し、「多元主義」が標榜する思想における「自由化」、政治における「多党制」、所有における「多様化」は、個人主義と自由主義を基礎に生存競争が支配する資本主義社会の政治方式であると定義した[394]。すなわち、生産手段の国家的所有を私的所有に変更させることによって、市場経済を受け入れ、結果的には資本主義的個人主義を復活させ国家的所有、社会主義的集団主義を弱体化させる要因になり[395]、ついに、首領の「唯一的領導を放棄」するようになることへの恐れの反映であった。

---

[394] 김정일 「당사상교양 사업에서 나서는 몇가지 과업에 대하여」(金正日「党思想教化事業で提起されるいくつかの課題について」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する演説、1990年1月11日『金正日選集』第10巻)28-44頁。

[395] 「경제분야에서 제국주의자들의 반사회주의적 책동의 반동성」(「経済分野における帝国主義者の反社会主義的策動の反動性」『経済研究』 1991년 3호)14頁。

第二節　「われわれ式」イデオロギーへ

１．社会主義諸国との区別装置

1990年初頭の「歴史的に重要な転換点」は、「われわれ式に生きてゆこう」と金日成が呼びかけ、そこに崩壊する社会主義諸国との識別を図ることから始まった。もちろん、「われわれ式に生きてゆこう」は、以前から金正日が掲げていたスローガンであるが[396]、金日成が「新年辞」で直接言及したからには、その重さが異なる。前者が国内のみで静かに行ったイデオロギー的表現であったとすれば、後者は対内外に公式に宣布したことから、独自的政策方向になる。また、過去数年以上金日成が「新年辞」のなかでスローガンに言及しなかったことを想起すると[397]、 単なるスローガンにとどまらず政治的・象徴的意味が包含されていたと見ることができるだろう。

金正日の言葉を借りると、「われわれ式とは、すなわち、主体式」であり、「われわれ式には人間中心の哲学があり、人民大衆中心の政治が具現される」[398]。つまり、指導思想、指導理論、指導方法が北朝鮮のみの独特性を持つ「われわれ

---

[396]　1979年12月19日金正日は、当時に改革・開放に進んだ中国について「社会主義を建設している一部の国は労働階級の革命的原則を捨て修正主義の道に歩んでいるのみならず、自己の間違った路線を他国に押し込むようにしている」と非難しながら、「誰が強要するとしてわれわれが優越な自己式を捨て他者の式に生きて行くのは有り得ない」と断言した。こうして「われわれ式に生きてゆこう！」というスローガンを高く掲げることを提示したのである。김정일 「우리 식대로 살아나갈데 대한 당의 전략적방침을 철저히 관철하자」(金正日「われわれ式に生きていくことについての党の戦略的方針」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話、1979年12月9日『金正日選集』第6巻)355－356頁。

[397]　伊豆見元「東欧の変化と北朝鮮の対外関係」『東亜』1990年、2月号、25頁。

[398]　김정일 「주체사상의 기치높이 우리식 사회주의를 고수하고 더욱 빛내여나가자」(金正日「主体思想の旗幟高くわれわれ式社会主義を固守し、さらに輝かせよう」朝鮮労働党中央委員会責任感部との談話、1990年1月21日、『金正日選集』(増補版)第13巻)216頁。

式」という他社会主義との区別装置である。この「われわれ式」は、首領・党・大衆の内的体系として構成された「社会政治的生命体」であるが、ここで最も重要なのは「われわれ式」という「閉じた系」の再設定である。

対内的な危機が深化するこの時期に登場した「われわれ式」の概念は、一種の比較の拒否とも言えるであろう。すなわち、普遍的な意味での発展または成長の概念を北朝鮮の体制に適用することに反対するという意味である[399]。金日成は「新年辞」で「今日、わが国に提起されている膨大な課題は、共和国で社会主義を主体の要求通りさらに立派に建設するためのものであり、それを成功裏に遂行するための根本的な鍵も主体思想が具現された共和国社会主義制度の優越性を高く発揮させることにあります」[400]と述べた。

金日成は主体思想の持続性とさらにそれを強化する再編成の課題を提起したと言ってよいが、このような課題は社会主義諸国の崩壊過程でイデオロギーが権力の破壊に決定的な要因となったことから生じる教訓であった。1990年1月11日に金正日は、党中央委員会責任幹部に対する演説で、「われわれ式社会主義」が他の社会主義と異なる点について具体的に説明した。

> 「わが国の社会主義は指導思想、指導理論、指導方法においても、建設過程の特殊性においても、自主性実現の幅と深さにおいても、その 強靭性においても、他の社会主義とは異なるわれわれ式の独特な社会主義です。わが国の社会主義は指導理念において他国の社会主義と異なります」[401]。

---

399 이우영 『북한사회의 상징체계 연구』(李ウヨン『北朝鮮社会における象徴体系の研究』ソウル：統一研究院、2002年)88頁。
400 金日成「新年辞」1990年。
401 金正日「党思想教化事業で提起されるいくつかの課題について」、 30頁。

金正日は北朝鮮体制を自ら「われわれ式の独特な社会主義」と位置づけ、「わが党は領導理論と首領式の事業方法を持っているために首領・党・大衆の一心団結をなしている」と説明した。結局、主体思想に加えて領導理論と領導方法も「首領式」になり、「首領式」がすなわち、「われわれ式」になり、「われわれ式」の下位体系である首領の「思想体系」と「領導体系」は「首領式」に帰結されるという論理である。北朝鮮は、首領を中心とした時空間の再講成を特殊性と言い、人民大衆が首領を中心に党の回りに結束している構造に「わが国の強靭性があり、他国の社会主義と根本的に異なる本質的特性」[402]があるとしたのである。金正日が強調する独特な社会主義の理論的根拠は、「社会政治的生命体」論であり、「われわれ式社会主義」は「首領権力」の政治体制として正当化されるのである。

また、金日成は1990年5月24日に開かれた最高人民会議第9期第1次会議での施政演説で、「主体思想の偉大性、主体が立ったわが人民の不敗性、主体思想を具現したわれわれ式社会主義制度の優越性、これが社会主義のために闘争してきたわが人民の主な総括であり、すなわち、ここにわが人民の巨大な誇りと未来への信心がある」[403]と述べた。金日成が言う「われわれ式」とは、思想の偉大性は主体の思想体系確立、団結の不敗性は首領中心の領導体系の正当性を示すものである。

しかし、思想体系と領導体系の総体である「われわれ式社会主義制度の優越性」は、過去から主張していた言葉でありながらもその内容を異にする。過去には自らの社会主義制度の優越性を韓国の資本主義制度に比べて優位に立つと主張

402　同上、179頁。

403　김일성 「우리나라 사회주의의 우월성을 더욱 높이 발양시키자」(金日成「わが国の社会主義の優越性をさらに高く発揚させよう」朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第9期第1次会議での施政演説、1990年5月24日、『金日成著作集』第42巻)285－286頁。

し、南北間の制度及び体制における正統性の競争の概念として使ったが、同時期に出されたわれわれ式社会主義制度の優越性は崩壊する社会主義諸国との区別装置に変貌したのである。北朝鮮が強調した「われわれ式」体制の優越性は「首領権力」の独占性であり、首領の意志が実現される固有な社会制度を指す。金正日は、現在まで「大部分の労働階級の党はマルクス・レーニン主義を指導思想にした」と述べたが、それに比べて「われわれ式」において次のような三つの特徴を主張した。

２．「北朝鮮式」の三つの特徴

第一に、首領の地位と役割が他の社会主義と区別される中核として「無制限の存在」だという点であるが、ここには二つの意味が内在している。一つは、マルクス主義は首領の役割を社会運動一般における指導者の役割や労働運動の責任的な地位である個人の役割と区別しなかったが[404]、「われわれ式」の主体史観は、革命偉業の遂行において首領が絶対的な地位を占め、決定的役割を果たすために、首領は個人ではなく「社会政治的生命体」の唯一の最高脳髄として最高代表者の地位を占めたことに特殊性がある[405]。

唯物史観の原理によると、個人の役割はその活動を制約する物質的社会的関

---

[404] 1982年3月31日に発表した『主体思想について』の論文で金正日は、従来には物質と意識、存在と思惟の関係を哲学の根本問題と認めてきた。物質の一次性、存在の一次性に関してマルクス主義の唯物論的原理はこの問題に科学的に解明した。主体思想は世界の始原問題が唯物論的に明らかになった条件の下、世界で人間の地位と役割問題を哲学の根本問題に新たに提起して世界の主人が誰かという問題に解答したと論じたのである。金正日『主体思想について』、74頁。

[405] 同上、268頁。

係に依存するために[406]、 首領の役割に対しても制約性を内包している。しかし、主体史観の原理は、首領は単純に指揮者ではなく「社会政治的生命体」の中心、最高脳髄になる。脳髄が人間の生命有機体としてすべての生命活動を指揮調節する総体であるように、首領は社会を牽引する求心力になり、人民大衆は首領に依存する存在として首領の地位と役割によってその活動は制約されるようになる。

もう一つは、首領は「唯一無二の存在」であるということである。マルクスによって創造された唯物史観において首領は、レーニンの実践によって具現されたと強調することによって思想的首領と領導的首領としてその機能を区別した。しかし、「われわれ式」の首領とは主体思想の創始のみではなく、祖国解放と社会主義建設過程の現在と、未来も包括する絶対的地位であり決定的役割を果たす存在として位置づけた。つまり、一般社会主義が共有するマルクスとレーニンの「首領」概念は思想と領導的部分に分離される一方、「われわれ式」ではそれに相応する形で首領を国家発生と発展の根源として思想と領導の中心と強調し、金日成の特殊性を強調したのである。第二章ですでに論じたように、首領の利害によって社会がコントロールされる論理、つまり、政策決定過程の「入出変換過程」を首領に独占させたのが「われわれ式」の根本的な特殊性と称している。

第二は、革命の性格が異なる点で特徴がある。唯物史観は社会関係を「社会を土台と上部構造に区分し、土台に規定的意義を付与した」[407]が、主体史観は「人間のすべての活動は思想意識によって規定されるために労働階級の党建設では思想論の原理を徹底に具現すべき」と論じるように人間関係に焦点を置いた。前者が社会関係であるために階級闘争を革命の目的とすれば、後者は人間関係である

---

[406] 金正日「社会主義の思想的基礎に関するいくつかの問題について」、97頁。

[407] 김정일 「주체의 당건설 리론은 로동계급의 당건설에서 틀어쥐고 나가야 할 지도적 지침이다」（金正日「主体の党建設理論は労働階級の党建設においてしっかり持って進むべき指導的指針である」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する演説、1990年10月10日、『金正日選集』第10巻）263頁。

ために人間改造、すなわち、思想闘争を革命の目的とする。両者の出発点において、唯物史観は物質及び存在であるとすれば、主体史観は意識及び思惟に重要性を置いたことから根本的に異なるものになる。

区分	始原	原理		首領の地位と役割の相違点	
		首領の地位	決定的役割	思想の創始	領導的役割
唯物史観	物質（存在）	個人（指導者）	個人の役割がその活動を制約する物質関係に依存（客観的条件に意識が従う）	マスクス弁証法的唯物論	レーニンの領導によってプロレタリア革命の勝利
				マルクス・レーニン主義	
主体史観	意識（思惟）	個人ではなく、階級の最高代表者	人民大衆の役割は首領の絶対的地位と決定的役割に依存（意識の決定的役割）	金日成主体思想の創始	金日成の領導によって祖国解放と社会主義建設
				金日成主義	

［表4-1］ 唯物史観と主体史観の相違な主張

金正日は、主体史観が強調する意識の重要性について「人民大衆の自主的で創造的で、意識的な運動として社会歴史的運動原理」[408]に解明されたと新しさを付与した。言い換えれば、この時期に北朝鮮がマルクス・レーニン主義を全面的に否定したのはここに根拠を置いたからである。金正日によって、マルクスが初の労働階級の党を創建したことが、マルクス・レーニン主義の出発点と認めるならば[409]、主体思想の社会歴史的運動の原理は、首領の出現を革命の出発点と認め、時間の流れによってその偉業（主体偉業）はさらに蓄積し深化されるように論じられた。

---

408 同上、264頁。

409 金正日は主体の党建設理論を首領の地位と役割を基本として全一的体系化した理論と言う。彼によると具体的には「首領の地位と役割に関する問題は労働階級の党の運命を左右する根本問題であり、党建設で提起されるすべての実践問題を解決していくための出発点になる。김정일 「주체의 당건설 위업을 대를이어 빛내여 나갈 참된 일군을 키워내자」（金正日「主体の党建設偉業を代を続けて輝かせる真の幹部を育てよう」創立45周年に当たる金日成高級党学校教職員、学生に送った書簡、1991年6月1日、『金正日選集』第11巻）308頁。

第三に、党の性格と体制の特徴を規定した。 北朝鮮の論理に従えば、党の性格と特徴は、①党が何のために闘争し、②どのような思想によって指導されるかによって規定される[410]。このような問いは、①首領の領導を実現するために闘争する党であり、②首領の主体思想、つまり、金日成の思いによって指導される党と回答される。前者が首領の「唯一的思想体系」になれば、後者は首領の「唯一的領導体系」を正当化する条件になる。金正日は「党の唯一思想体系とは、首領の思想体系であり、領導体系である」[411]と明確にし、党を「階級的党」から「主体型の革命的党」と定義した[412]。つまり、党は首領の「思想体系」と「領導体系」を包括した「首領権力」体制の手段になったのである。「マルクス・レーニン主義の党」が中央集権制的で「公的な党」であるならば、金日成の私的イデオロギーに帰属された「主体型の革命党」は徹底的な金日成の「私的な党」として位置づけられた点が特徴である。

３．イデオロギー的抑圧機構の再編と「首領の党」

1990年1月1日に金正日は「現実的要求に合わせて党事業を決定的に改善すべき」ことを呼びかげた[413]。その後、10月3日になって公開された論文『朝鮮労働党はわが人民のすべての勝利の組織者であり、嚮導者である』（以下「10.3論文」と略す）で「社会政治的及び経済的変革」の実践的方法について具体的に論

410　金正日「主体の党建設理論は労働階級の党建設でしっかり持って進むべき指導的指針である」、263頁。
411　同上、267頁。
412　同上、 262頁。
413　김정일 「당사업과 사회주의 건설에서 전환을 일으켜 1990년대를 빛내이자」（金正日「党事業と社会主義建設で転換を起こし、1990年代を輝かせよう」朝鮮労働党中央委員会及び政務院責任幹部に対する談話、1990年1月1日、『金正日選集』第10巻）2頁。

じた。金正日は「われわれは発展する現実の要求に合わせて党内部事業体系を深化発展させ、党事業を人との事業にさらに徹底して転換させるべきである」[414]と論じ、政治手段である党の機能を「首領権力」の存続を左右する「重要な鍵」であると位置づけた。

本来であれば、党事業は党内部事業と行政経済事業によって構成されている。金正日は「党幹部の官僚主義は党と大衆を離脱させ、党自体の生命を破壊し、わが社会の基本である首領・党・大衆の統一を破壊する厳重な結果をもたらすようになる」[415]と懸念したが、これは「10.3論文」で党幹部が「権力に依拠して官僚、行政式に人民大衆を治めるのは社会主義権力の本性にもとる」[416]行為だと断言されたことによる。党事業を人との事業に転換するのは前述したように、党を「革命的党から首領の党」に転換させる一つの措置であったと理解されるだろう。権力領域内を党中央委員会と見なす場合[417]、党幹部の官僚主義は単純な事業方式の問題ではなく、権力の潜在能力を増進する場合の「首領権力」の分散を惹起する危険性が内包されているからである。東欧諸国の一党独裁の没落が齎した独裁者の悲惨な末路から得られた教訓であろう。

金正日が強調した党事業の決定的な改善は、1990年12月27日に党中央委員会の責任幹部に対する演説で、さらに「革命の主体を強化するために何よりも社会政治的及び経済的変革をなすべき」[418]だと強調され、このような社会政治的変革

414　김정일 『조선로동당은 우리 인민의 모든 승리의 조직자이며 향도자이다』(金正日『朝鮮労働党はわが人民のすべての勝利の組織者であり、嚮導者である』1990年10月3日平壌：朝鮮労働党出版社、1993年)34頁。

415　金正日「党事業と社会主義建設で転換を起こし、1990年代を輝かせよう」、4頁。

416　金正日『朝鮮労働党はわが人民のすべての勝利の組織者であり、嚮導者である』、30-31頁。

417　ラスェルの『権力と人間』論で言えば、権力の闘場（aurena）の再整備である。権力の闘場とは権力を要求する人々と又は権力領域内にいる人々によって講成される状況である。ラスェル、『権力と人間』、277頁。

418　金正日「わが国の社会主義は主体思想を具現したわれわれ式社会主義である」、479頁。

と経済的「変革は、党と首領の周りに結束された人民大衆の政治思想的統一を強化する方向で遂行すべきであり」[419]、すなわち、社会統制的性格を持って進められるべきであることが強調された。一言で言えば、「首領権力」の保存・深化への「変革」であったということになるだろう。社会統制的性格を持った変革はイデオロギー的抑圧機構と物理的抑圧機構の再編を通じて行われた。

最も特徴的な点は、イデオロギー的抑圧機構である党の権力や構造の再編を通して、物理的抑圧機構をさらに強化したことである。 李ウヨンによると、イデオロギー的抑圧機構は体制が志向する価値と理念を社会構成員に注入することによって社会に順応させるようにする[420]。また、物理的抑圧機構やイデオロギー的抑圧機構は形態と機能で差異があるものの、基本的に既存の支配秩序の維持という次元で同様な役割を遂行する[421]。いずれにせよ、金正日が試みた「社会政治的及び経済的変革」は、政治・経済の側面で断行されたのである。

党内部における権力と組織構造の再編は、「社会政治的変革」を進めるうえで最も重要な手段であった。まず、党幹部の官僚主義を改善するために、金正日は1989年末に党中央委員会の「書記局特別命令書」を各級党組織に下達し[422]、党組織指導部の役割を高めるようになった。内容は「10年間の党生活総括」[423]という全党的キャンペーンを行うことであった。金正日によると、「党生活総括は誤った党員を集中的に批判することが良い」のであり、「そうすれば、思想闘争の

---

419 同上、479頁。
420 李ウヨン『転換期の北朝鮮の社会統制体制』ソウル：統一研究院、1999年、7頁参照。
421 同上、7頁。
422 金正日「党事業と社会主義建設で転換を起こし、1990年代を輝かせよう」、4頁。
423 党生活総括とは1973年8月21日に金正日によって宣布・制度化された。全社会の金日成主義化を実現するための手段として「党の唯一思想体系10大原則」を基準に、「党員は党生活を通して正常的に自己批判と相互批判をし、直接に批判を受けながらも他人の批判を見ながら刺激を受けて自分を限りなく修養するようになる」という強制的手段である。김정일 「전당에 새로운 당생활 총화 제도를 세울데 대하여」(金正日「全党に新たな党生活の総括制度を立つことについて」朝鮮労働党中央委員会組織指導部責任幹部協議会での演説、1973年8月21日、『金正日選集』第3巻)101頁。

度数を高くし、欠陥がある党員を批判する過程で他の党員もその影響で刺激を受ける」[424]。つまり、同僚間で批判と思想闘争を強化する「統制と監視」の強力な政治手段である。

金正日は、中央党委員会組織指導部の副部長らがチーム長になって下部機関や党組織に派遣され、党官僚の思想検討や腐敗に関する調査を行った。10年間の個人の生活を組織という大衆の前で率直に反省することを求めるという方式であるが、この事件は全国に恐怖の雰囲気をもたらした[425]。それが体験者の証言である。また、官僚主義の闘争では、党組織の末端官僚の「指導員」という職位が権威主義的ニュアンスを持つとして、その呼称を「部員」に変える措置や、同時期に党及び権力機関の刷新が進み、秩序と規律、幹部の業務方式と態度などのすべての側面で根本的な変化が生じることになった[426]。実際、金正日は1991年1月5日に党機関の「指導員」の呼称を「部員」に改めたのは、「党幹部の中で権勢と官僚主義を決定的に排除するための重要な措置であった」[427]と説明したのである。

したがって、個別的幹部に「首領権力」が指定した範囲を超えないように制約装置を設ける必要があったのである。たとえは、この頃中央党での会議後に起きたことだが、ある党中央委員会の書記に対してエレベーターに乗るのを先に譲った副部長が、「唯一思想体系の10大原則」の個別的幹部に対する偶像化の禁止項目に当たるとされて解任された[428]。これは党内部での個別的幹部の権力を牽制

424　金正日「全党に革命的党風を徹底して建てよう」、136頁。

425　のみならず、幹部の事業を支える秘書と運転手も自分が持ち上げる幹部と家族のすべての動向を毎日「報告先」を通じて上部に報告するように義務化した。현성일 『북한의 국가전략과 파워엘리트』(玄成日『北韓の国家戦略とパワーエリート』ソウル：ソンイン、2007年)254頁。

426　当時、筆者が勤めていた道党委員会でも「指導員」であった呼称を「部員」に変えた。中央党から道党委員会、市・郡党委員会まで呼称を変更したことを現場で直接に経験した。

427　김정일 「당사업을 더욱 강화하며 사회주의 건설을 힘있게 다그치자」(金正日「党事業をさらに強化して社会主義建設を力強くせき立てよう」朝鮮労働党中央委員会、政務院責任幹部の前に行った演説、1991年1月5日、『金正日選集』第11巻)21頁。

428　これは一言で言えば「首領権力」の集中化ということになろう。玄成日、前掲書、25

する一つの事例であり、首領以外の個人幹部に対する崇拝心を警戒した行為である。言い換えれば、個別幹部の潜在能力を削ぐだけでなく、増進した権力を制約することによって価値の選択肢を制限する「首領権力」の集中化操作であったと言ってよいだろう。

一般的に制約とは、個人または集合体のとりうる選択に加えられる、なんらかの制限ないし限定のことである。つまり、選択肢の数をある有限の数に減らすような条件を意味する。選択肢の数が少なければ少ないほど、制約が大きいといえよう[429]。それは党内部に首領に対する限りない忠誠心と崇拝心、そして権力集中化を求める雰囲気を醸成するものであった。党権力を縮小しながら「首領権力」の集中化を図るものである。こうして1991年6月1日に、金正日が創立45年を迎える金日成高級党学校教職員及び学生に送った書簡で「主体の党建設理論は、革命的首領観を基礎とし党を徹底的に『首領の党』と建設するよう党組織原則を新たに解明した」[430]と明言してから、朝鮮労働党は「首領の党」として規定されるようになった。

6頁、参照。

[429] デイヴィッド・イーストン、前掲書、78頁。

[430] 1991年6月1日、金正日は「主体の党建設偉業を代の続いて輝かせる真の幹部を育てよう」の書簡で、党を「首領の党」と呼称した以後から頻繁に使用するようになった。例えば、1992年１月に発表された金正日の論文『主体文学論』に「労働階級の党は首領の党であり、党に対する忠実性は首領に対する忠実性で集中的に表現される」ために、党と首領のために命も捧げる強要的論理が形成されるようになった。『主体文学論』、前掲書、285頁。

第三節　物理的抑圧機構と強制力の再編

１.「社会政治的変革」の開始

(1)　首領直轄の司法権（司法・検察・警察）

1990年、党における権力の再編成が行われたが[431]、党組織の再編という形態で最も目立ったのは党組織指導部の肥大化であった。もともと金正日の直轄部署である組織指導部は、党中央委員会の中で「中央党」と呼ばれるほど権力の核心部署であった[432]。過去、金正日は組織指導部の再編を通して中央集権的統制体制を確立し、幹部の権力を牽制しながら人事権を独占してきた[433]。さらに90年には党中央委員会行政部を組織指導部に編入させる措置を採ったが、この党行政部は国家の重要権力機関を掌握・指導・統制するのみならず、この機関の幹部と党員に対する党生活指導機能、つまり、組織指導部の機能まで独占した最も権威的な部署であった[434]。

行政部の組織指導部への編入は、二つの意味を持つ。一つ目は、党権力の集中化という意味で組織指導部をさらに強化する側面もある一方、党全般における決定権の制限を意味する。二つ目は、過去の党を通した国家権力の行使から、首

431　党中央委員会と称する朝鮮労働党中央委員会は党的指導機能を遂行する組織指導部、宣伝部、幹部部、行政部、軍事部、国際部、勤労団体部、科学教育部、経済政策検事部などの実務部署がある。

432　1970年代に金正日は組織指導部と宣伝煽動部を通して広範な党権力を掌握したが、公開的に全面に登場しなかった。しかし、1980年に開催された第6回党大会で公開的に金日成の後継者として登場した以後、金正日は党中央委員会組織書記として組織指導部はさらに強化された。

433　최진욱『김정일 정권과 한반도 장래』(崔ジンウク『金正日政権と韓半島の将来』ソウル：韓国外国語大学出版部、2005年)43頁。

434　玄成日、前掲論文、49頁。

領の直接的権力行使へと転換した点である。つまり、司法権に関する首領への独占を目指した措置であった。

従来、国家権力は「国家の鎮圧機能と防衛機能を強化する」[435]側面で党独裁機能の一つの部分であった。しかし、社会主義諸国の崩壊を目撃した北朝鮮は、国家権力の使命を「首領権力」を擁護・固守するための道具に求めたのである。党組織の改編に当たって、行政部は国家権力機関の幹部らの政治的生命を担当する機関であるために、その力は膨大であり党内部で最も権威が高まった部署と見なされていた。

党行政部は1970年代以前にも膨大な権力を行使したために、金日成は71年9月30日の党中央委員会政治委員会拡大会議で、「党中央委員会内部で行政部を組織部に編入させる意見が提起された」と言いながらも、実際は行政部を存続させることに固執してきた。金日成が70年代前後からも党行政部の再編に関する様々な意見があったにもかかわらず、それを抑えて維持してきた理由は、第一章で説明したように党の唯一思想体系の確立が目指した「首領への党の価値集中化」を実現するためであり、その目的の下で党行政部は国家機関と司法・検察・警察などの制度的権力を金日成に集中する有利な手段になったからである。先行研究は91年に行った行政部の組織指導部への編入は、行政部の幹部らが官僚主義などの行為で大挙粛清され、部署自体を解体する形式で進められたと評価した[436]。

しかし、このような事実についての証言だけでは党行政部を廃止する権力構造の再編によって一体何を目指したのか、なぜ、過去には権力の肥大化を牽制するために組織指導部を統制したにも関わらず、党行政部を組織指導部に編入した

---

[435] 리원경 「사회주의사회 발전과 완성의 몇가지 문제」（李ウォンギョン「社会主義の社会発展と完成のいくつかの問題」『勤労者』1986年4月号）39頁。
[436] 玄成日、前掲論文と곽인수 『조선노동당의 당적지도에 관한 연구』（グァク・インス『朝鮮労働党の党的指導に関する研究』慶南大学校、修士論文、2003年）16頁を参照させたい。

のかという疑問が解けない。たとえば、1980年代初頭にも金正日は肥大化する組織指導部の構成員の権力を牽制するために、組織指導部は「党内のすべての事業を担当する部署ではなく」、決して「党委員会を代弁する部署でもなく、すべてを総合する部署でもない」し、「組織部は他の部署と同様に党委員会の一つの部署として自己機能によって事業を行う」と述べ[437]、組織指導部の機能を抑制した。しかし、党行政部が組織指導部の中で一つの部署としての行政課になったことによって、組織指導部の機能は、党内部の範囲を超えて中央機関、司法、検察、警察なども総括する社会全般に向けての「鎮圧と防衛」の機能も加えさらに肥大化したからである。

このような疑問は「首領権力」の観点から見た場合、党行政部の解体は党幹部の権力縮小を意味するが、より重大な意味を内包するのは組織指導部に行政部（司法・検察・警察など）を編入したことによって、権力中心の更なる強化が行われたことであった。党権力を党中央委員会の組織書記である金正日に集中させ、彼の領導的役割を高めることによって金日成の権威と「首領権力」の強化を求めることを意味するからである。確かに、党を通して国家権力機関の機能と、掌握、統制力が金正日の直轄管理下に置かれたことは、90年5月24日に開催された最高人民会議第9期第1回会議で金正日が国防委員会の第1副委員長に就任したことや、91年12月24日に人民軍最高司令官に推戴されたことと同様の文脈の中で捉えられるであろう。

最も注目すべきは、中国で起きた「天安門事件」の5日後の1989年6月9日、金正日が国家権力の重要性について次のように述べたことである。「社会公安機関と司法検察機関は党の政策を法的に擁護防衛する政治的防衛者です。社会安全機

[437] 김정일 「현정세의 요구에 맞게 당사업에서 혁명적 전환을 일으키자」（金正日「現情勢の要求に合わせて党事業で革命的転換を起こそう」朝鮮労働党中央委員会組織指導部、宣伝部責任幹部会議の演説、1983年1月14日、『金正日選集』第7巻、1996年）398頁。

関と司法検察機関が党の方針貫徹を法的に保障すれば、自己の使命と任務を果たしたと言えるでしょう」[438]。かつて1982年11月21日に金正日は、全国司法検察幹部会議の参加者に送った書簡で、「裁判機関と検察機関、社会安全機関は、党と国家の安全を防衛し、国の法秩序を強化するために闘争するプロレタリア独裁機関です」[439]と説明した。金正日は「法は国家の重要な統治手段として国家と共に発生した」[440]と述べたことがあるが、その政治目的に合わせて司法検察機関と社会安全機関などの統治手段も、プロレタリア独裁機関から「首領権力」を擁護防衛する政治的防衛者、つまり、首領個人のために使用される鎮圧と防衛機能に変化したのである。このように国家権力、強制力を直轄下に置く再編は、首領の独裁権力が深化される時期に、大衆の反抗と敵対的行為、いわゆる「非社会主義的な要素」を萌芽的段階で統制する目的で進められた。これは、東欧諸国で起きた民主化運動の教訓からの対応であったと思われる。

(2) 軍権強化：「革命の軍隊」から「首領の軍隊」

1991年12月24日に開催された党中央委員会第6期第19回全員会義で、金日成の提案によって金正日は朝鮮人民軍最高司令官に推戴された。この翌日の12月25日に開かれた朝鮮人民軍中隊政治指導員大会に金正日は最高司令官の資格で参加したが[441]、金日成は金正日に最高司令官職を渡したことを宣布した。金日成は自らの高齢化による対応措置であるとして次のように説明した。「私は80の高齢なので、最高司令官として夜を徹して全軍を指揮、統率するのは困難です。これから

---

438 金正日「党を強化しその領導的役割をさらに高めよう」、379頁。
439 김정일 「사회주의 법무생활을 강화할데 대하여」(金正日「社会主義法務生活を強化するために」1982年12月15日、『金正日選集』第7巻、1996年)332頁。
440 同上、332頁。
441 「조선인민군 중대정치지도원대회」(「朝鮮人民軍中隊政治指導員大会」『朝鮮中央年鑑』1992年版)162頁。

私は、党中央委員会軍事委員会委員長として顧問役を務めます。私は、全人民軍将兵が、金正日最高司令官の命令を私の命令と同じく見なし、その命令に絶対服従し、最高司令官の指導に忠実に従うように期待します」[442]。

ここで党中央委員会軍事委員会委員長と最高司令官の関係は、「決定権」・「命令権」・「指揮権」の関係である。決定権は、党中央委員会軍事委員会委員長が持つものであり、最高指令官は命令権と指揮権を行使する地位である。つまり、最高司令官の地位が党中央委員会軍事委員会に従属し上下関係をなすために、両者は「主従関係」になる。党中央委員会軍事委員会は1970年代には集団的論議を経て金日成が決定する政策決定過程を使用したが、1980年代に入って金日成が直接に決定する方式に変化した[443]。また、最高司令官は党中央委員会軍事委員会の決定を執行する機構であるが、軍事委員会の「民間武力」[444]と関連する重要決定や命令に対する執行は最高司令官の命令を通して発するように[445]一元化していた。このように過去、金日成は党中央委員会軍事委員会委員長と最高司令官の地位を兼任したが、91年12月に金日成は軍事における最高決定権者としての党中央委員会軍事委員会委員長を維持しながら、金正日に最高司令官の権限である指揮

---

[442] 김일성 「인민군 정치지도원들의 임무에 대하여」(金日成「人民軍中隊政治指導員の任務について」朝鮮人民軍中隊政治指導員大会で行った演説、1991年12月25日、『金日成著作集』第43巻)250頁。

[443] 1970年に開催された第5回党大会で改定された党規約で党中央委員会全員会議が「選挙」すると規定したものの、1980年に開催された第6回党大会で党中央委員会全員会議が党中央委員会軍事委員会を「組織」することに改定された。정성장 「중국과 북한의 당 중앙군사위원회 비교연구」(鄭成長「中国と北朝鮮の党中央軍事委員会の比較研究」『世宗政策研究』ソウル：世宗研究所、2011年)25頁。

[444] 「民間武力」とは、正規軍武力を除く、労農赤衛隊（労働者・農民、満17歳選挙権を持つ人による全社会人）、赤い青年近衛隊（14歳から軍事訓練を受ける全国の中学生）を包括する武力である。平時には一般人が党・国家機関・社会団体の組織に勤めるものの、準戦時状態の命令が下達されると、最高指令官を従う非常体制に転換される。そのために毎年に2週間の正規軍訓練・実弾訓練を行い常に非常態勢を備えている。体制として、地方党委員会軍事委員会（道党責任書記を指令官とする民防衛部）は党中央軍事委員会の指導を受け、党の軍事政策の執行方法を討議決定し、戦時動員体制を検討し、執行する。筆者の見解と오일환，정순원 『김정일시대의 북한정치경제』（オ・イルファン、鄭スンウォン『金正日時代の北朝鮮政治経済』ソウル：乙酉文化社、1999年)84頁を参照。

[445] 고재홍 「북한군 최고사령관 연구」(高ジェホン「北韓軍における最高司令官の研究」ソウル：統一研究院、2006年)24頁。

権を委譲したのである。ここで命令権は、最高指令官の名で出されるのもであるが、実際には党中央委員会軍事委員長の許可を受けてから出されるために、金日成の真の権限である。金正日の最高司令官就任は、金日成が直接的に、そして公式的に自らの軍事ポストを引き渡したことで、過去と比べれば金正日の軍隊に対する影響力そのものが増大することになったことは間違いない。

もちろん、既存の研究では1980年10月、金正日は党中央委員会軍事委員会委員に選出された後、軍に対する指導をさらに本格化し、とくに、金日成が70歳になる1982年から軍隊に対する組織書記の軍事行政的指導体系を強化し、82年6月には党中央委員会軍事委員会を開いて軍隊内のすべての軍事事業を金正日が掌握・指導するように党と軍隊内の事業秩序を新たに規定したという解釈もある[446]。その主張が妥当であれば、なぜ、この時期に金正日に最高司令官職を引き渡すことを改めて宣布したのかという疑問が生じる。従来、金正日が軍事問題に介入したのは、軍に対する党的指導という名目の下の人事問題であったが、それも金日成の許可を受ける構造的限界を免れられなかったからである。

たとえば、1987年に金正日によって行われた軍幹部の人事が金日成から咎められた事件があった[447]。金日成は1988年2月に金正日の腹心の総参謀長呉克烈(オ グッリョル)(1931－)[448]を更送し、パルチザン当時から金日成につき従ってきた崔光(チェグァン)(1918

---

[446] 정성장 『현대북한의 정치: 역사・이념・권력체계』(鄭成長『現代北韓の政治：歴史・理念・権力体系』ソウル：ハンウルアカデミー、2011年)106-108頁。

[447] 崔○○(63歳、男性、1995年脱北、元朝鮮人民軍相左、韓国軍大佐に当たる地位)との2015年2月25日、2012年6月7日、ソウル市内の国策研究所で行ったインタビュー。

[448] 呉克烈は、1931年中国吉林省で生まれる。幼い頃パルチザンに入り、金日成に従う金正日の義兄弟と言われるほど金正日と強い関係に結ばれた。万景台革命学院卒業し、1962年留学したソ連空軍大学を卒業し、1964年少将、金策空軍大学学部長に就任。1967年中将、空軍司令官に就任。1970年党中央委員会の委員、1967年最高人民会議の第4期代議員に続いて1972年最高人民会議の第5期代議員、1977年最高人民会議の第6期代議員に就任。1977年朝鮮人民軍副参謀長、1979年党政治局員候補と朝鮮人民軍総参謀長に就任。1980年上将に昇進、第6回党大会において党政治局員に選出。1985年中央人民委員会により人民軍大将の称号を授与。1988年2月、総参謀長から解任される。1989年党中央委員に格下げとな

－1997）を就任させた[449]。また、人民武力部長は呉振宇（1917－1995）[450]であったが、副部長には、同じくパルチザン派の全文燮(1937－1998)[451]を起用した。これは恐らく金正日による軍の統率に、金日成が不安を感じ、古参幹部を起用する

るが、2009年国防委員会副委員長に就任するが、2011年金正日が死後、党政治局員候補の地位に留まっている。黄長燁のインタビューの内容、前朝鮮人民軍相左崔○○(63歳)の証言に基づき、アジア経済研究所、(毎年)アジア動向データベース（http://d-arch.ide.go.jp/browse/html）を参照した。

[449] 崔光は、1918年7月に咸鏡北道羅先市で生まれる。北朝鮮でパルチザン第一世代と言われる。1948年2月に朝鮮人民軍第1師団参謀長に就任。1948年9月より最高人民会議代議員に選出。1950年6月に朝鮮人民軍第1師団長、1953年朝鮮人民軍第5軍団長、1958年空軍司令官を経て1963年2月に朝鮮人民軍大将、総参謀長に就任。1967年に最高人民会議常任委員に選出されて以後、1969年失脚して鉱山労働者になり、1976年黄海南道の道人民委員会委員長に就任し、復活。1980年10月の第6回党大会において党中央委員、政治局員候補、1981年政務院副総理に就任。1988年朝鮮人民軍総参謀長、党中央軍事委員に就任するとともに、朝鮮人民軍大将に昇格。1990年5月23日の第6期第党中央委員会第18回総会において党政治局委員、国防委員会副委員長に就任。1991年、党中央軍事委員会委員、1992年4月20日に朝鮮人民軍次帥の称号を授与される。1995年に人民武力部長に任命されるとともに、朝鮮人民軍元帥の称号を授与される。1997年2月21日に死去した。黄長燁のインタビューの内容、前朝鮮人民軍相左崔○○(63歳)の証言に基づき、アジア経済研究所、(毎年)アジア動向データベース（http://d-arch.ide.go.jp/browse/html）を参照した。

[450] 呉振宇は、咸鏡北道の農民の家庭に生まれる。パルチザン第一世代と言われる。1946年9月から中央保安幹部学校軍事副校長、第3旅団参謀長、旅団長、第3軍官学校校長に努めた。朝鮮戦争時には人民軍第766連隊長、第43師団長、最高司令部副参謀長、第6軍団参謀長、近衛ソウル第3師団長を歴任。朝鮮戦争後は人民軍空軍司令部参謀長に歴任した。1956年の朝鮮労働党第3回党大会において党中央委員候補に選出されてから1961年第4回党大会において党中央委員、1967年朝鮮人民軍総政治局長、1968年から総参謀長に務めた。1970年11月の第5回党大会において党中央委員会政治委員会委員（現在の政治局委員）・中央委員会書記に選出され、1972年憲法改正によって中央人民委員会の委員に列し、同委員会の付属機関である国防委員会の副委員長を兼任する。1976年人民武力部長に就任。1980年10月の第6回党大会において政治局常務委員・中央軍事委員会委員に選出され、金日成・金正日の次の序列3位に昇格した。軍の最高幹部として重きをなした呉は、1985年4月13日、中央人民委員会より朝鮮人民軍次帥の称号を授、1992年4月20日、朝鮮労働党中央委員会、党中央軍事委員会、国防委員会、中央人民委員会の決定により、呉は元帥に昇進し、1995年2月25日には癌により死去した。黄長燁『回顧録』とインタビューの内容、前朝鮮人民軍相左崔○○(63歳)の証言に基づき、アジア経済研究所、(毎年)アジア動向データベース（http://d-arch.ide.go.jp/browse/html）を参照した。

[451] 全文燮は、1937年中国長白県で生まれる。金日成のパルチザンに入隊し、金日成の特別な保護の下で成長したという。1940年金日成に従ってソ連に行き、1945年以後金日成と共に北朝鮮に帰国した。朝鮮戦争の時に、師団長として参戦、戦後には軍団長、集団軍司令官を経て1963年社会安全省部相に就任。同時に、金日成の警護を担当する護衛総司令官になり金日成の信任を受けた。1961年第4回党大会から党中央委員会委員に選出、党中央委員会第5期8次全員会議で政治委員会候補委員、1976年から1986年まで政治局委員として活動し、1988年に人民武力部副委員長に選出。1983年国家瞼裂委員長、1998年改定憲法と共に改編された最高人民会議常任委員会名誉委員長に選任したが、12月に病気で死亡する。黄長燁の『回顧録』と『北朝鮮の真実と虚偽』とインタビューの内容、崔○○(63歳)の証言に基づき、アジア経済研究所、(毎年)アジア動向データベース（http://d-arch.ide.go.jp/browse/html）を参照した。

ことによって、金正日体制を立て直そうとしたからであろう[452]。この事件は当時、軍部内で拡散した金正日の権力が金日成によって容赦なく牽制される契機になった[453]。結局、金正日による軍の人事問題が軍に対する党的指導の範囲を超え、金日成には権力分立の問題として認識されたと思われる。この事件は、金日成の意志が何よりも決定的であることを示す事例であった。

この事件が示すように、最高司令官職の移動は金日成が権力維持を目指したのか、金正日への権力移譲を目指したのかという質問に関して検討すべき一つの重要な事例になる。本研究の「首領権力」のメカニズムから見た場合、最高司令官の移譲は金日成から金正日への権力移譲ではなく、「首領権力」維持のために金正日の執行権限をさらに強化したと思われる。つまり、後継者は首領に従属する構造であった両者の「主従関係」は、軍事における党中央軍事委員会委員長という最高決定権者の意志によって、最高司令官は命令を出し、党と大衆を指揮する「領導的役割」を果たすことで明確に説明される。

結局、後継者の「領導的役割」で首領に対する忠誠心と首領の権威・権力は正比例関係にあるように、金正日の権限強化は金日成が言及したように金日成の高齢化に従う「首領権力」維持の措置に過ぎないと解釈される。したがって、この時期に金正日への最高司令官職の移譲の原因（必要性・対応）と結果は次のように説明される。一つ目は、社会主義諸国の崩壊は独裁者の悲惨な末路によってもたらされた独裁権力の危機意識から更なる権力強化の必要性を迫った。二つ目は、それ故に、金日成の高齢化への対応として政策執行の部分を金正日の役割によって補完・補充するために、金正日の権限を強化する必要があった。三つ目は、金正日最高司令官の役割によって軍隊の性格を過去の「革命の軍隊」から「首領

452　塚本勝一『北朝鮮・軍と政治』原書房、2012年、128頁。
453　当時、朝鮮人民軍幹部であった崔〇〇さんは、「呉克烈の事件」について金日成の権力意志が強いことを現場で実感したと証言した。

の軍隊」へ変えられることによって、軍隊の使命が首領を擁護・防衛することに求められ、軍隊を金日成の私的手段に変える結果をもたらした。この三つの原因と結果を具体的に見てみよう。

第一に、軍隊に対する最高「決定権」を改めて強化する必要があった。金日成は社会主義諸国の崩壊過程で「首領権力」の保存及び維持には軍隊の位置づけが重要であるとの深刻な教訓を得ていた。たとえば、中国の「天安門事件」の場合、民主化デモは共産党が説得と脅迫にもかかわらず、さらに拡大の一途を辿ったが、結局、共産党の軍隊を動員したことによって鎮圧された。のみならず、ルーマニアのチャウシェスクが自国の軍隊に逮捕・処刑されるという悲惨な結末は、金日成・金正日にとって、軍隊に対する掌握・統制はもちろん、首領の私有化を必要とする重要な契機として作用したことは疑うまでもない。軍隊を権力維持の重要な手段として求めた金正日の認識は、1991年1月5日に行った発言に明確に示されていたが、もとよりそれは金日成の権力への強い意志を代弁するものであったと言えよう[454]。独裁権力を示す革命的領導は、軍隊によって維持されるものであり、かつて毛沢東の言った「権力は銃から生まれる」という言葉が想起される。

このような金日成の権力への執着は同時期に中国の最高決定権者であった鄧小平に比べ大いに異なる。鄧小平は1987年に党中央委員会及び政治局常任委員会の職務から退き、1990年に入って中央軍事委員会主席も辞任した。もちろん、「天安門事件」の責任を取って辞任したと評価されるが、これに比べれば、金日成は党と軍隊を、自らを称する「首領」の下に位置づけ、その維持のために金正日を自分の力を補完・補充する手段として使ったことが、鄧小平及び一般社会主義諸国との違いである。

---

[454] 「党が軍隊を掌握しなければ、政権を維持することができないし、革命を領導していくことができない。軍隊を握った党のみが不敗の威力を持つ」ことができる。金正日「党事業をさらに強化して社会主義建設を力強くせき立てよう」、24頁。

第二に、最高司令官という「指揮権」の移動は金日成の高齢化による「首領権力」の一定量の保存性を維持するための対応措置であった。傘寿を迎えようとする金日成は仕事をこれから10年間も続ける強い意志を持って、金正日の役割を高めることによって自らの肉体的負担を減少しつつ、低下した機能を補完して「首領権力」の一定量を補充する方法を模索したのである。このような心境は、1991年 6月2日に在米僑胞の孫元泰に対して行った金日成の談話に如実に表れている。金日成は「人々は私を見て、かくしゃくとしているので百歳以上長生きできそうだといってくれる人もいますが、私自身もあと10年は仕事ができそうだと思っています」と述べ、政治の一線から引退もせず、むしろ90歳まで仕事を続ける気でいることを明らかにした[455]。前述したように、金日成・金正日の二人の相互補完的権力関係は、「領導の唯一性」という「一つの効果の産出」を目指したものであった。

とくに、現場で働ける「指揮権」を金正日に任せても権力の運命を左右する決定権は任せないことを意味する。1990年に至るまで「実務指導」と称された金正日の活動を、金日成のみに使用されてきた「現地指導」という呼称に昇格させたことも、金日成の高齢化に伴う金正日の補完的役割を高める目的によるものであった[456]。その中で最も重要である軍部に対する「現地指導」は、山岳地帯が

---

[455] 金日成は80歳になる1992年3月13日に抗日革命闘士らに対する談話で「みなさんは、テレビで私の元気な姿を見るときがいちばん嬉しいとのことですが、私はまだ元気です。これから先、まだ10年は勤まりそうです。私はずっと前に、60は青春、90が還暦と言ったとおり、60の還暦を認めません。私もみなさんもまだ90にはなっていないのですから、還暦を迎えてはいないわけです。だから、自分が年老いたと考えず、希望と楽観に満ちてより多く働こうと考えるべきです。長生きして革命をつづけるためには、勝利の確信をもって楽天的に生活しなければなりません」と述べた。金日成は長生きして仕事を続けることに腐心していたのである。김일성 「사회주의 위업의 승리, 완성을 위하여」(金日成「社会主義偉業の勝利、完成のために」抗日革命闘士、革命家の遺児との談話、1992年 3月13日『金日成全集』第92巻)125-126頁。

[456] 北朝鮮の朝鮮中央通信社が発行する『朝鮮中央年鑑』は、1989年の内容を記録した1990年版まで金正日の現場視察を「金正日同志の実務指導」と記していたが、1990年の内容を記録した1991年版からは「金正日同志の現地指導」と記すようになった。また1990年1

80%を占める北朝鮮の地形的特性[457]と道路や鉄道の古さから考えると、80歳の高齢になる金日成にとってはもはや実施し得ないものになっていたことは明らかであろう。金日成は、それ故、金正日を自らの道具として活用しようとしたのである。

第三に、軍隊を金日成の軍隊として私有化するという結果を生み出した。金正日が最高司令官になって一週間後、軍隊に対して過去の「革命の軍隊」から「首領の軍隊」に位置づけたことが著しく表れた。1992年1月1日に党中央委員会責任幹部に対する談話において金正日は、「人民軍隊が名実共に首領の軍隊、党の軍隊、人民の軍隊として使命と任務を遂行すべき」[458]であると宣言したのである。その一週間前に中隊政治指導員大会で金日成は「人民軍隊は革命の軍隊、党の軍隊、人民の軍隊として強化すべき」[459]と述べていた。それを想起するならば、金正日に最高司令官職を与えた目的は、軍隊を「首領の軍隊」にするためであったと言わざるを得ない。金正日の人民軍最高司令官就任は、金日成にとっては軍隊を私有化する最も有効な装置であったと思われる。いずれにせよ、金正日に最高司令官職が与えられたことは、軍隊の地位を首領の軍隊に、軍隊の役割を「首領権力」の強化へと根本的に転換する契機を提供したと言ってよい。

1992年2月号の『勤労者』に寄稿した党中央軍事委員会委員であり、かつ朝鮮人民軍総参謀長である崔光は、金正日が「建軍偉業の実現で首領が占める絶対的地位と決定的役割に対する科学的分析に基礎して、労働階級の建軍偉業を首領の建軍偉業へ、革命軍隊の性格を首領の軍隊へと規定し、その使命は首領の革命偉

月からの『朝鮮中央放送』や各種新聞でも、金正日の現場視察を「現地指導」と呼称するようになった。

457　이교덕 『김정일 현지지도의 특성』(李ギョドク『金正日の現地指導の特性』ソウル：統一研究院、2002年)1頁。

458　金正日「党事業を強化してわれわれ式社会主義をさらに輝かせよ」、271頁。

459　金日成「人民軍中隊政治指導員の任務について」、262頁。

業を実現することにある」[460]と説明し、「人民軍隊を偉大な首領様の軍隊、親愛する指導者同志の軍隊として強化すべき」[461]だと主張して軍隊に対する首領の私有化を正当化した。また、党中央軍事委員会委員であると共に人民武力部長であった呉振宇は、1992年4月号の『勤労者』で、軍事思想の革命的転換について次のように説明した。

既存の唯物史観原理の軍事学説は、一部社会主義国で労働階級の暴力闘争経験を一般化したものであるために、時代的制限性を持ち、現在世界的範囲で起きている新たな変化過程は軍事学説の革命的転換を求めている。新たな軍事思想は、人民大衆の自主性を擁護防衛することを軍事活動の根本目的とし、人民大衆の自主的要求と利害関係を中心に創始された「自衛の軍事思想」でなければならないと定義し[462]、新たな軍事思想には全軍を首領の思想体系と領軍体系に従って「首領の軍隊」、「党の軍隊」に強化発展させるための革命的建軍の原則と方法が含まれていると説明した[463]。こうして、金正日の人民軍最高司令官就任を契機に、軍隊は、「首領の軍隊」として首領を擁護・保衛する使命を果たす軍隊になったのである。

前述したように、党をイデオロギー的抑圧機構として「社会政治的生命体」の神経の機能を強化すると同時に、物理的抑圧機構としての社会統制機関を金正日の直接管轄下においた事実と、同様の文脈で捉えることが可能であろう。

---

[460] 최광 「친애하는 김정일동지를 조선인민군 최고사령관으로 추대한 것은 주체의 혁명무력 건설에서 특기할 력사적 사변」(崔光「親愛する金正日同志を朝鮮人民軍最高司令官に推戴したのは主体の革命武力建設で特記する歴史的事変」『勤労者』1992年2月号)16頁。

[461] 同上、20頁。

[462] 오진우 「경애하는 수령 김일성동지는 주체 시대의 위대한 군사전략가이시며 백전백승의 강철의 령장이시다」(呉振宇「敬愛する首領金日成同志は主体時代の偉大な軍事戦略家であり、百戦百勝の強鉄の霊長である」『勤労者』1992年4月号)60－61頁。

[463] 同上、62頁。

２．「経済的変革」：蓄積経済・消費経済の分離

党事業における「経済的変革」は、党から経済事業を分離して政務院の下に移行させることになったが、中央集権的経済体系はさらに強化されることになった。1990年1月1日に金正日が提示した党事業における「経済的変革」は、 経済事業を党から中央人民委員会の行政執行機関である政務院に移行させた[464]。元来、党事業の二つの軸であった党内部事業と行政経済事業が優劣なく相互結合されていたのに対し、1990年前後に党事業で党内部事業をもっと重視する傾向が現れ、行政経済事業に対する党的指導は象徴的な意味のみとなり、行政経済事業の中心が行政経済機関に移動することになった[465]。党事業における党内部事業は上述したように権力の再編として行うと同時に、経済事業においては政経分離が始まったのである。金正日は「経済事業に関わる問題はすべて政務院に集中させ、政務院の決心によって処理すべき」[466]だと指示し、その一方で、「政務院では国の経済事業に対して全的に責任を負う立場で経済組織事業を立て指揮すべき」[467]だとも述べて、政務院に経済事業の指揮権限と責任を与えた。また「党中央委員会の経済書記らは自ら決断して下部単位に追加的な課題を与えない」[468]ように強調され、政務院の権限を一層高めた。

464　中央人民委員会は、国家主権の最高指導機関として国家主席を首位として対内政策委員会、対外政策委員会、国防委員会、司法・安全委員会など中央人民委員会の活動を助ける部門委員会を置く。また、政務院は1972年12月に採択された「社会主義憲法」によって新設された国家の最高主権機関の行政執行機関として国家主席を首位とする中央委員会の指導の下で、総理、副総理、部長などの成員に15委員会、16部署が構成された。

465　김갑식 『김정일정권의 권력구조』(金ガブシク『金正日政権の権力構造』ソウル：韓国学術情報㈱、2005年)180-181頁。

466　金正日「党事業と社会主義建設で転換を起こし、1990年代を輝かせよう」、23頁。

467　同上、16頁。

468　同上、24頁。

金正日は、1983年3月3日に党経済部幹部らに対して「党中央委員会経済部幹部らが下部単位に赴いて直接種子をまき、直接収穫を取り入れる」[469]ことを求めながら、さらに「党幹部らは党内部事業を行うと言って経済事業には関心を向けない」と指摘し、「経済事業を設計し、作戦(計画)する段階から総括及び結束する段階に至るまでの全過程で提起されるすべての問題」に関心を向けることを要求した。1970年代に（執権）党にとって経済事業と離れた純粋な党事業は有り得ないとの認識を示し、1978年から始まる第2次7ヵ年計画で 「経済事業に対する党的指導を強化するために党中央委員会、道、市、郡党委員会に経済部署を設置する」[470]ことになった。その後金正日は、「党事業を経済事業に密着させて指導を下部に接近する」方向を推し進めることになった。

金日成と金正日は、「人民生活の向上を党活動の最高原則」[471]と頻繁に公約してきた。その時には「人民生活を高めれば広範な群衆を党と首領の周りに固く団結させ、北と南の対決で決定的勝利を成し遂げることができる」[472]と考えたからである。つまり、人民生活の向上が独裁権力の正統性になり、南北関係においても体制の正統性になると認識したからである。1984年2月16日に金正日は「人民に空の食器を置いて社会主義制度がよいと教化しても、彼らが社会主義制度の真の優越性を深く認識することもできない」[473]と述べた。このように北朝鮮は、1980年代半ばまで経済事業に対する党的指導を強調して経済事業での党の優位と

---

469 김정일 「당경제부서 일군들의 책임성과 역할을 높일데 대하여」(金正日「党経済部署幹部の責任性と役割を高めることについて」朝鮮労働党中央委員会経済部署責任幹部協議会での演説1983年 3月3日、『金正日選集』第7巻)421頁。

470 김정일 「자력갱생의 혁명적구호를 높이 들고 전당, 전민을 불러일으켜 제2차 7개년계획을 앞당겨 수행하자」(金正日「自力更生の革命的スローガンを高く掲げて全党、全民を呼び起こし第2次7ヵ年計画の完遂を短縮しよう」朝鮮労働党中央委員会組織思想部と宣伝扇動部責任幹部に対する演説、1978年1月1日『金正日選集』第6巻)9頁。

471 金正日「現情勢の要求に合わせて党事業で革命的転換を起こそう」、374頁。

472 同上、374頁。

473 김정일 『인민생활을 더욱 높일데 대하여』(金正日『人民生活をさらに高めることについて』朝鮮　労働党中央委員会責任幹部会議での説、1984年2月16日、平壌：朝鮮労働党出版社、1984年)8頁。

責任を明確に標榜し、「経済の政治化」を追求してきた[474]。

注目すべきは、政務院における経済権限の強化が進められたのが、1988年後のことであるという点である。金日成が1988年1月1日に党中央委員会、政責任幹部協議会で「政務院の活動を改善し、経済事業の5大課題をとらえていために」と題して行った演説と、11月1日に計画部門責任幹部協議会で行った家計画機関の計画単位を正しく定めるために」と題する演説が、「経済的変の指針になったと思われる。最初は党事業の経済的統制から生み出された計画委員会の膨大化」に関する改革であった。金日成は、88年11月1日に「様々な理由から国家計画委員会が計画化した企業がたくさん増えた一方、地方計画委員会が計画化した企業は減っている」[475]と厳しく指摘し、「国家計画委員会がたくさんの計画単位を引き受け自ら役割を果たせず、計画通りに実行されない」[476]現実の下で、地方計画の独自性を高める方法で計画経済を転換することを方針として打ち出したのである。

実際、金日成は1989年にとくに平壌市をはじめとする各道・地域への現地指導や経済政策に関する演説を集中的に行った[477]。これらの演説の共通点は、政務院の役割を人民経済に結びつけたことである。政務院に自律性と権限を与えた「経済的変革」は、1990年5月に開催された最高人民会議第9期第1回会議で、中央人民委員会の構成に党・政高位幹部ではなく従来と異なる道党責

474　金ガブシク、前掲書、172頁。

475　김일성 「국가계획기관들의 계획단위를 바로 정할데 대하여」(金日成「国家計画機関の計画単位を正しく設定することについて」計画部門責任幹部に対する演説、1988年11月1日『金日成著作集』第41巻)262頁。

476　同上、262頁。

477　「平壌市の都市経営と供給活動を改善するために」(89年4月20日)、「香山郡をはじめ観光地を立派に整備するために」(89年6月16日)、「咸鏡南道の経済活動に転換をもたらすために」(89年6月24~26日)、「麻田遊園地を立派に整備するために」(89年8月27日)、「大成山を立派な人民の遊園地にかえよう」(89年8月31日)、「平安北道の経済事業で提起されるいくつかの問題について」(89年11月11~12日)、「江原道を国際観光地に立派に整備するために」(89年11月14~15日)、「慈江道の経済発展の中心的課題について」(89年12月21~22日)などである。

任書記及び人民委員長全員を委員とする新たな形を示したのである[478]。こうして中央委員会の政策執行機関である政務院の権限はさらに強化され、ついに、1991年1月15日朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会決定第71号「1991年人民経済発展計画について」が政務院決定第1号として採択された[479]。政務院は人民生活計画について決定権を行使したのである。

同時に、党事業から経済事業を分離したことは党の形骸化を意味し、政務院に引き渡した経済権限は責任を同伴するものである。政務院の権限と言えば、中央人民委員会が決定した政策の執行権限のみであり、総体的指揮権は中央人民委員会の首位にある金日成に限る。第3次7ヵ年計画が目指した経済の蓄積と消費の均衡が、国内的経済構造の矛盾とともに「社会主義市場」の消失によって原料、資材の保障ができなくなり、経済発展に対して期待し難くなったために、すでに党活動の最高原則であった人民生活の向上は期待できなくなった。このような時点で進められた「経済的変革」は、事実上、人民生活の向上に失敗した党の責任回避策であったと言わざるを得ないだろう。

1991年1月5日、金正日は党事業において政治と経済の分離を次のように説明した。「首領は党が経済事業に巻き込まれず、党事業のみに継続的に力を入れると教示した」[480]と言いながら、党は政治的領導者であるために、人との事業、政治事業のみを果たす機能的手段であると強調した。経済事業と離れた党事業というものは有り得ないとしていた過去の主張から一変した態度である。続けて金正日は「各道の党委員会が経済事業に巻き込まれると、そこに党中央委員会組織指導部と宣伝部まで巻き込まれるようになり、そうすると道党委員会はもちろん、

478　従来は、党政治局委員(候補委員を含め)、書記、政務院総理、副総理などの労働党の核心幹部と政務院の高位幹部によって構成された。
479　政務院「1991年度人民経済発展計画を成功裏に遂行するための決定を採択」『民主朝鮮』1991年1月16日、第1面。
480　金正日「党事業をさらに強化して社会主義建設を力強くせき立てよう」、3頁。

革命の最高参謀部である党中央委員会まで自己の役割を円満に遂行することができず、結果的にはわが党が経済主義党に落ち込むようになる」[481]と懸念した。

これは、前述したように、社会主義諸国のマルクス・レーニン主義の党が物質を優先し、思想精神をその次に重視したために、物質の制限が思想的変質をもたらしたと判断した教訓からの措置でもあろうが、最も重要なことは、社会主義体制の崩壊から「社会主義市場」を消失した結果を受けての措置であったことである。「社会主義市場」の消失は、「有無商通」の原則の崩壊を意味し、財政が足らない北朝鮮は原料・資財などを「資本主義市場」から解決せざるを得ない状況に追い込まれたのである。

このように、経済的側面では本来の政治・経済事業から成る党事業の二側面を分離し、経済の中で人民生活、つまり、消費部分を政務院に引き渡した。党活動の最高原則であった人民生活の向上を政務院に任せることによって、人民生活の不振に対する党の責任を回避する一方、政務院の経済活動を指導・統制する上部機関（中央人民委員会や国家計画委員会）の役割を強化することによって、中央集権制をさらに強化したのである。これが主な「経済的変革」である。

481　同上、4頁。

小　結

1989年の夏から秋にかけて急激に起きた社会主義諸国の崩壊は、北朝鮮に相当な衝撃を与え、「首領権力」に更なる強化を求めていた。北朝鮮は、1990年を「歴史の重要な転換点」と位置づけた。社会主義諸国の崩壊過程は、イデオロギーの変質がもたらした思想の自由化、政治の多党制、所有の多様化過程であり、その結果は一党独裁の破壊から独裁者の悲惨な末路に終わったことに、北朝鮮は最も衝撃を受けたのである。金日成一人に集中した「首領権力」が全社会的に深化していく中で起きた社会主義諸国の崩壊が、北朝鮮にイデオロギー的危機、安保的危機、経済的危機という三つの「生存の危機」への対応という新たな課題を与えた。

金日成・金正日は1990年を「歴史の重要な転換点」と設定し、他の社会主義とは異なる「われわれ式社会主義」の独自的路線を主張しつつ、それに合わせて党、国家、軍隊に対する構造的改編を行った。「社会政治的及び経済的変革」と称されるこの変革は、政治システムにおいて「首領権力」が制度化される一種の革新過程であった。「社会政治的変革」には、イデオロギー的・物理的統制力の再編及び強化する方向に展開された。

イデオロギー的再編では二つの側面で行われたが、一つ目は、他の社会主義と異なる「われわれ式社会主義」のイデオロギー的境界線を設定したことである。二つ目は、党を「革命的党」から「首領の党」に変化させたことである。唯物史観において物質を出発点と見たために生産手段を労働階級化する闘争が革命の目的であったとするならば、主体史観は首領の出現を出発点と見なしたために首領の領導によって進められてきた革命闘争の全過程を首領の偉業として位置づけ、革命の目的は首領の意志を実現することになり、そのための手段である党を「首

領の党」に変えるようになった。

物理的統制力の改編及び強化も二つの側面で行われた。一つ目は、党権力を制限しながら中央集中制を強化し、国家権力の司法権（中央機関と司法・検察・社会安全部、国家防衛部）を金正日の直接管轄下に置くように改編し、彼の執行権を高めた。二つ目は、金日成は金正日を人民軍最高司令官に就けたが、それによって軍隊を革命の軍隊から首領を擁護・固守するための「首領の軍隊」へと改編したのである。最高司令官として軍事的側面の命令権・指揮権を担うことになった金正日の第一の任務は、首領の健康と事業を補佐することであり、これは党中央軍事委員会委員長の最高決定権者の意志を実現することである。

さらに重視されたのは「経済的変革」であった。政治における政経分離の原則で経済事業を党から分離して政務院に任せる「経済的変革」を行ったことが新たに解明された。国家計画と地方計画を分離することによって中央経済と地方経済も分離され、地方経済は政務院に引き渡された。党活動の最高原則であると頻繁に強調してきた人民生活の向上という課題の責任を政務院に押しつけたことは、党事業における最高原則の放棄であり責任の回避であった。社会主義諸国の崩壊によって「社会主義市場」を消失した北朝鮮は、経済における生産の蓄積と消費の側面で蓄積可能な企業は中央経済として国家的管理下に置き、人民生活の消費生産は地方経済として政務院の管轄下に置くよう再編したのである。

結局、党・国家・軍隊の本質が大衆の「公的」手段から首領の「私的」手段へと変更する過程を、金正日は「社会政治的及び経済的変革」と定義したと言ってよいだろう。その目的は、首領の高齢化に伴う権力維持に加えて、社会主義諸国の崩壊がもたらした教訓からくる体制維持でもあった。

第５章　「首領権力」の擁護・固守・安定化(1992年～1994年)

どのような社会でも強制力のみによって権力と価値が一人に集中されることは、価値の配分を望む数多くの人々の心理とはその方向を異にする。そのために、権力集中と多元的な大衆の要求との間に、適切な均衡を作り出すことが「首領権力」の安定化の条件となる。したがって、「上からの指導・監視・統制」の強化のみならず、「下からの自発的服従」を最も重視することになる理由がここにあると言ってよい。

前者が第４章で論じた「物理的強制」（violence）の再編・強化であるとすれば、後者は第５章で論じることになる「心理的説得」（persuasion）の方法である。本章では、いわゆる「社会政治的生命体」の最高脳髄である首領に従って、全社会が「一つの思考、一つの呼吸、一つの行動」をもって動くように血縁的一体感を固めていく過程を検討する。「一つの思考と一つの行動」は過去から継続してきた政治過程であるが、両者の間に「一つの呼吸」という新たな政治過程として設定されるプロセスをここではとくに綿密に分析し、大衆の感情・情緒をどのように操作して積極的服従へと誘導し、服従者が満足を感じるように「首領権力」の安定的増大を図っていったのかを解明することにしたい。

第一節　「政治文化的変革」：説得手段の重視

１．美的認識の政治過程導入

1992年1月3日、金正日は党中央委員会責任幹部との談話で社会主義的な生活方式を全面的に確立するための文化創造を提唱した[482]。この社会主義的生活方式は、前述したように「われわれ式社会主義」の生活様式を指すものであり、首領を中心とした党・大衆の「渾然一体」制度の生活方式である。ここで注目されるのは、思想意識と文化情緒を分離したところである。金正日はこの談話で、「わが党は文化一般から思想を分離して、思想意識がすべてを決定するという思想理論を産み出した」[483]と述べ、思想と文化の分離と相関性を明らかにした。この頃、金正日は「人間の感情・情緒の基礎には思想が背景になっている」[484]と認識しており、「思想意識がすべてを決定するというのは人間の行動を規定する決定的要因が思想意識であることを意味する」[485]と強調していた。つまり、思想意識は、人間の感情・情緒に作用して文化情緒を創り出し、この文化情緒は大衆の自発的行動の動機になることを意味していたのである。

ここで、思想意識と行動は過去から続けて強調される手段で変わりがないが、感情・情緒の刺激を通した文化情緒の政治過程が新たに追加されたことになる。

---

[482]　金正日は談話で「人民大衆の自主的志向と思想感情、情緒に合わせる革命的であり、人民的な新たな文化を創造すべきです」と言った。김정일「사회주의 건설의 력사적 교훈과 우리당의 총로선」（金正日「社会主義の歴史的教訓とわが党の総路線」朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する談話、1992年1月3日、『金正日選集』第12巻）298頁。

[483]　同上、290頁。

[484]　김정일 『미술론』（金正日『美術論』1991年10月6日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年）70－71頁。

[485]　金正日「社会主義の歴史的教訓とわが党の総路線」、209頁。

まさに、「思想の絶対性」を支えるために「文化の柔軟性」を志向する「政治文化的変革」とも呼びうるものである。サミュエル・ビアー（Samuel Beer）によれば、政治文化の構成要素は様々な価値、信念に加えて、政治がいかになされ、また政治は何をなすべきかについての情緒的態度である[486]。北朝鮮は、このような情緒的態度を気分、激情、熱情などの感情体験として区分し[487]、そのうえで、こうした感情・情緒は信念の構成要素の一つであり、人間は思考しながら感情を体験し、感情を体験しながら思考するために、知識から信念への転換過程は感情、情緒的体験を経るようになると主張した。その際、知識は質的に変化発展して世界観的知識になり、また信念は忠実性を生む行動の動機を誘発するとしたのである[488]。

したがって、新たな文化の創造とは、思想意識が忠実性の信念に転換される過程において、思想感情・情緒の作用過程を一つの政治過程として設定することであり、本研究はこの過程を大衆に対する説得と調節過程と見なし、強制力のみではなく説得力を並行する政治方式に注目する。このような論理は、金正日の「主体の美学観」によって具体化された[489]。1991年に平壌で出版された『美学概論』は、主体美学論について詳しく説明している。それによると、主体美学の本質的特性は他の美学論とは異なり価値論的美学であり[490]、この価値論的美学は美と醜を区別する尺度の問題として設定された。この論理によって「主体の美学

---

[486] S.M.Beer and Adam Ulam, Patterns of Government(New York, 1958)p,32(D.カヴァナー著、寄本勝美・中野実訳『政治文化論』早稲田大学出版部、1977年)3頁より再引用。
[487] 李ジェスン、前掲書、164頁。
[488] 同上、207－208頁。
[489] 1991年に平壌で出版された『青年と美学観』には主体の美学観について次のように説明されている。主体美学観は美が本質において人間から離れた美とは存在しないし、人間との関係の中のみで美的対象が美的意味を持つことを明らかにし、それに基礎して美の唯一の基準は人間、人民大衆の自主的要求ということを解明した。『청년과 미학관』(『青年と美学観』平壌：金成青年出版社、1991年)23頁。
[490] 『미학개론』(『美学概論』平壌：社会科学出版社、1991年)21頁。

観」は、美しいものを区別する唯一の基準を人民大衆の志向と要求に置き、この基準から、①美しいものは人民大衆の要求に合わせる美的現象に、②崇高なものは人の自主的要求を高める美的現象に、③悲劇的なものは人民大衆の要求が蹂躙される人間の苦しみと死に、④喜劇的なものは人民大衆の要求に合わないものが合うように仮装する美的現象と見ている[491]。

結局、人民大衆の要求は「社会政治的生命体」の唯一の体現者である首領の意志であることを想起するならば、人民大衆の美的基準は首領の偉大性に対する情緒的態度に帰結されることになる。つまり、首領中心の思考様式が美的基準となり、党と大衆の「渾然一体」はその調節者である首領のコントロールによって刺激を受け、感情・情緒として作用し、ついに即刻かつ自発的忠誠の行動に結びつくような反応をもたらすことを目指したのである。したがって、人民大衆を「美的認識の主体」として設定した目的は、首領の絶対的権力の維持にあった[492]。

思想意識が美的認識の基準になるが、美的認識はそれ以外にも社会や生活を問わず、人々の生により深く浸透する側面でさらに重要な政治手段となる。そのため、金正日は1990年11月から1992年1月までの時期に、「主体の美学観」から派生する五つの論文を発表した。「舞踊芸術論」(1990年11月30日)、「建築芸術論」(1991年5月21日)、「音楽芸術論」(1991年7月17日)、「美術論」(1991年10月16日)、「文学芸術論」(1992年1月20日)の五つである。

北朝鮮はこの五つの論文を「五大命題」と位置付けたが、強力な政治手段である美学認識論を二年間に五つも発表したことは、前例がない出来事である。もちろん、過去に金正日は1973年4月11日に発表した「映画芸術論」を嚆矢として、

491　同上、29頁。

492　『美学概論』は人民大衆の美的認識について①感性的性格を持ち、②感情・情緒的性格を同伴した強い情緒的緩和力を持ち、③対象を総合的・全面的に反映し、対象に対する評価で全一的な性格を持ち、④より即刻的であり、瞬間的であると説明している。

「歌劇芸術について」、「演劇芸術について」などの論文を発表したことがある。かねてより、北朝鮮では芸術が大衆教化の政治手段として重視されたのは言うまでもない。映画、歌劇、演劇という舞台装置を通して大衆を教化し、大衆はそこから思想文化・階級闘争を間接的に体験することになったからである。

しかし、美学認識過程が提起された後は専門家本位の形式から抜け出し、人々が直接享有・体験する大衆的芸術として、人々の生そのものになる形式が追求されるようになった。つまり、過去と同様な政治的手段であっても、それを演じる主体が専門家中心から一般の人々（以下、説明するが舞踊と音楽において）に、そして舞台装置から全社会的装置（建築と美術において）へと変化したのが特徴である[493]。これが、まさに「下からの自発的服従」意欲を誘発させる情緒文化の創造であった。

２．大衆行動論と「情緒政治」

行動（act）は必ず、何らかの舞台装置（setting）の中で生じる[494]。政治の

---

[493] 当時、北朝鮮に過ごした脱北者らは次のように証言した。1990年から党の指導の下で組織的に芸術活動が活性化された。以前には芸術人と言えば、専門性を持った俳優や扇動宣伝隊の職員を指したものの、この頃からは全国の人々が組織的な芸術作品に参加し、歌や舞踊を通して一体感を持ち、首領様に対する忠誠心を誓った。その時に、集団の成員という誇りが生じ、それで組織生活に真面目に参加することと党の要求に従う決心を心から何度も繰り返した。とくに、金正日を最高司令官に推戴する1991年12月24日は、金正淑(金正日の母)の誕生日であったが、全国的に大衆的芸術活動の焦点を金正淑の業績、つまり、首領に対する忠誠心に合わせた。私もその芸術作品に参加しながら金正淑のように「忠誠の化身」になりたかった。みんな一緒に歌を歌ったり、群衆舞踊を踊ったりすると親しい関係になり、首領様と愛国心も心から生まれることを感じる。今、食糧配給が前より上手くできなくてもその時が一番誇りを感じる時期であったと思う。李〇〇(50歳)、2010年4月脱北、元北朝鮮の宣伝扇動講師、2014年12月2日、インタビュー。

[494] マーレー・エーデルマンは『政治の象徴作用』で舞台装置が政治エリートや大衆の行動に及ぼす影響を多少なりとも厳密に分析しようと政治の研究者が望むならば、人類学や社会心理学よりも美学理論からはるかに多くが得られるはずであると指摘している。マーレー・エーデルマン著、法貴良一訳『政治の象徴作用』中央大学出版社、1998年、144頁。

舞台装置には、作為性がどのような効果を生むのかが重要になる。背景の設定は見る者の感受力を高め理解を容易にするが、人工的な空間や摸像（semblance）を創り出して舞台（stage）を設えることは、暗示作用の焦点の設定[495]を意味する。

金正日が同時期に発表した「五大論文」はまさに、政治の舞台装置と大衆の役割に関する行動原理を規定した指針であった。大衆の行動原理は、たとえば、「舞踊芸術論」の場合、舞踊の特性上首領の偉大性を直接表現するのが難しいために、首領を奉じて従う数多くの人々の忠誠心を表現して首領の偉大性を見せるようになる[496]。そして「音楽芸術論」は、音楽を、人々を教化する強力な手段とするために、革命的首領観は音楽内容の真髄をなすと論じ、首領の絶対的地位と役割、首領と党・大衆の一心団結の根本要因、首領と人民大衆の血縁的関係、そして首領に対する戦士の革命的信義に基づく忠孝といった問題を、第一に解決すべき重要な思想的・主題的課題として提起した[497]。それは、音楽を主に現実から人間の情緒的体験、心理的衝動によって生じる感情と情緒を描出する認識の反映であると認めたからである。

黄長燁の『論理学』によると、人間の神経は一箇所に精神が集中するように継続的に刺激すると、他の部分の神経細胞の作用が停止する。その時に残っている神経細胞は、外部が与える暗示に従って他の神経細胞と結合し、暗示を与える人の意図に従う神経作用が働くことになる[498]。「社会政治的生命体」論を執筆した黄長燁の論理を参照すると、党と大衆が「渾然一体」になった上で、首領の偉

495　同上、145頁。
496　김정일『무용예술론』(金正日『舞踊芸術論』1990年11月30日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年)25頁。
497　김정일 『음악예술론』(金正日『音楽芸術論』1991年7月17日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年)34頁。
498　황장엽·이신철 저 『논리학』 (黄長燁・李シンチョル著『論理学』ソウル：時代精神、2010年)49頁。

大性に関する「美しい刺激」のみを与えれば、「渾然一体」は首領の意図に従う行動原理を適用する美的認識の主体になる。

金正日は「美術論」において、人々の感情と情緒は客観的世界の美的感情の体験を同伴するが、美的感情は自然なものではなく、思想意識を基礎にして体験されると論じ、人民大衆の美しさを基準とする人にとって反動階級の美的感情が起こらないし、反動階級が賛美する人にとっては人民大衆が醜く感じるようになると論じて、美術は階級を区別する手段になると主張した[499]。

また、「建築芸術論」は、すべての建築空間を「革命的首領観」に基づいた都市として統一する方法論である。たとえば、金正日は平壌市中心部に建築された金日成の銅像は、市内の膨大な空間に満ちた現代的な多層、超高層建物が首領を仰ぎ見る、全人民が歓呼する感動的な画幅を連想させ、首領を唯一の中心にするわが人民の一心団結を甘受するように建築したものだと論じた[500]。また、清津競技場を例えにして、地方の場合、首領が訪ねるかどうか判じ難い建築物であっても、そうした建築物も「革命的首領観」の原則を厳守しなければならないと主張した。建築物は、首領の安寧と万寿無疆のためになるという確固な立場と観点に立って考え設計及び創作してこそ、建築創作において首領を丁重に奉じる忠誠心になるからだと強調したのである[501]。このような政治の舞台装置と大衆の行動原理は、金日成の権力への意志から作り出されたのは言うまでもない。

実際、1991年2月11日、金日成は平壌にある万寿台芸術創作社を現地指導する際に、翌92年4月15日の金日成80歳の誕生日に備えて制作が進む大型の銅像を観覧した。銅像は、金日成と金正日を共に奉じる作品であり、金正日の業績を象徴

---

499 『美術論』、前掲書、10頁。
500 김정일 『건축예술론』(金正日『建築芸術論』1991年5月21日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年)103頁。
501 同上、21頁。

する「蒼光山大記念碑」[502]、「長子山記念碑」[503]を背景に配置していて、1972年に建立した金日成のみを形象した「万寿台銅像」に比べて、規模や技術、内容の面でもより先進的であった。しかし、金日成は、「万寿台芸術創作社が建立しようとする金正日同志の銅像と蒼光山大記念碑や長子山記念碑は、党の結論を受けてから実現するのが良い」と断言した[504]。結果として金日成は、金正日の銅像の建立を拒否したのである。その一カ月後、外国の報道は、万寿台芸術創作社のシン・ショクヒ部長のインタビューから、金日成が新たに建設予定であった自身の銅像の建立を取りやめるよう指示したと伝えたが[505]、それは実際のところ金正日銅像の建立拒否であり、それは首領のみを社会の求心点と設定して舞台装置を整えようとしていたことを示す事例であった。

また、金正日の業績を伝えるために平壌市で建設に着手した「3大革命展示館」も金日成の強い反対にあい、その内容を首領の領導の下で大衆的英雄主義を発揮したイメージに合わせるように修正したのである。金日成は、「平壌に新たに建設する3大革命展示館に建立する3大革命記念碑の彫刻群像に、わたしと金正日同志の銅像を前に建立してその後ろに3大革命の彫刻群像を建てるようとする

---

[502] 「蒼光山大記念碑」は、第一章で説明したよう1975年から1991年までの「平壌繁栄期」を内容とした図案である。とくに、70年代と80年代に平壌市の「10個通り」の建設の中で、蒼光通りには金正日の主居空間と執務室を中心する大記念碑的建築物が集約されていた。

[503] 「長子山記念碑」は、1950年6月に勃発した朝鮮戦争の後退が始まる10月に、8歳になる金正日は中国の吉林省に避難したのが事実であろうが、北朝鮮は戦争中に金正日が慈江道に位置している長子山人民学校に移したと伝えている。金正日は幼い頃、そこで「二つの朝鮮松の木」を植え、戦線で過ごしている父親に手紙を送ったとされている。これは金正日の革命歴史において有名な実話となり、後日に長子山は革命史的地と設定され意味深い教化の場になった。

[504] 김일성「인민적인 미술작품을 더 많이 창작할데 대하여」(金日成「人民的な美術作品をさらにたくさん創作することについて」万寿台創作社を見回りながら幹部に対する談話、1991年2月11日、『金日成著作集』第43巻)36頁。

[505] 韓国の『京郷新聞』は、香港のSouth China Morning Post紙が、平壌発記事で「偉大な指導者」は、1992年4月の彼の80歳誕生記念式を準備している人々に対して、それ以上自分の銅像を建てないことを指示したと伝えた。「金日成、銅像それ以上に建てないようにと指示、香港言論報道」『京郷新聞』1991年3月13日、5面。

案が造られましたが、そのようにするのではなく、労働英雄の彫刻群像を前に建てるようにすることが良いです」[506]と指示したのである。

金日成が言う労働英雄の彫刻群像とは、1970年代、80年代の首領に対する忠誠の化身を描くものである。結局、従来の金日成銅像の後ろに大衆的英雄主義を刻印した「3大革命展示館」が金日成の80歳誕生日に合わせて建立されたが、金正日の業績に直接触れる内容は一切排除された。このような事例は、金日成が北朝鮮で行うすべて行う政治行為において首領偉業の「唯一的効果」を産出し、それを権力の生命力と認識していたことを意味していよう。

このような、美的認識の論理的体系を集約化したのが「主体文学論」であるが、ここでは国全体が「首領を親として一つの家族」として見なして論じたのが特徴である。すなわち、全社会を親子関係と位置づけ、文学の使命を、首領の特殊な社会的地位と歴史に実存する偉大な人物として描くことに求めたのである[507]。まさに首領中心の一体感を強調するものである。

この「主体文学論」の最大の作品は、金日成の80歳誕生日に合わせて発刊された『世紀とともに』と題する「金日成回顧録」であった。人々の心の琴線に触れる祖国の解放者の話は、それこそ人民大衆の感情・情緒を刺激し、金日成の偉大性をさらに高める方向に作用したと考えられる。金正日は「主体文学論」において、「首領と人民の関係は、領導者と戦士の関係を超えて、父親と子の関係、一つの思考、一つの呼吸、一つの行動につながる血縁的紐帯になり、首領を親として崇めるすべての社会成員の関係は、革命的信義と同志愛に基礎を置いた関係になります」[508]と説明した。父親と子の関係とは、首領は政治的生命を生んでくれた親であるために、子は生命の恩人に忠誠を尽くすべきだという意味である。

---

506 金日成「人民的な美術作品をさらにたくさん創作することについて」、36頁。
507 『主体文学論』、前掲書、14-15頁。
508 同上、111頁。

ラスウェルによると、一体感は政治的な「われわれ」意識を創出する心理機制である。この「われわれ」意識は政治現象の中心となる。政治的要求は、自我が一体化している自我の集合体・集団の名においてなされ、その結果生じる「われわれ」意識によって正当化される。政治的要求をめぐって、自我が同一化した集団の名の下で情緒的に結びついた時に、政治が始まる[509]。結局、情緒的作用は集団の成員に対する触媒となり、集団の凝集力を強化するように作用する。したがって、新たに導入された美的認識過程は、①大衆の感情・情緒の美的基準が首領になる過程であり、②首領が人々の精神のみならず心も奪い与えるような主体になる過程であった。

過程	導入		過程		結果
	思想意識	→	美的認識	→	忠誠の行動
性格	不変性・絶対性 強制 (受動性)	＋	可変性 刺激と反応、説得 (自発性・能動性)	=	権力の均衡
状態	停止状態	＋	運動状態	=	首領を求心力に
基準	首領の唯一的思想	=	首領の美的基準 (「革命的首領観」)	=	首領に忠誠・孝誠 (首領権力の安定化)

出所：筆者作成

[表5-1]「首領権力」の政治的安定化過程

[表5-1]に示したように、人々の思想意識は、首領の絶対的地位と決定的役割を求める不変性を原則とする受動的思考過程であるとするならば、美的認識過程は、感情と情緒が働く作用過程として可変性を求める能動的行動の動機操作過程である。思想意識は主体思想教化によって形成されるものの、美的認識過程は集団と家族、社会と個人、社会生活の隅々に深く浸透した環境と繰り返す生活方式

[509] ラスウェル・カプラン、前掲書、36頁。

を通じて一つの文化となる。まさに、絶対的不変の思想意識は停止状態を示すものの、可変的運動状態にある美的認識過程は力学的量を生成する一つの過程とも言えよう。思想意識と美学認識の教化過程は停止と運動の結合として均衡的な権力の安定化を目指すものであった。

つまり、人々の思考を操作して大衆の受動的思考方式を確立し、思想感情の移入によって感動・激動を噴出する能動的で即興的な行動を表すという、「刺激と反応」の秩序を確立する権力の政治過程であった。本稿では、このような「刺激と反応」の政治方式を「情緒政治」と呼ぶことにする。「情緒政治」の目的は、人々の首領に対する忠誠と孝誠という[510]、絶対的服従の「唯一的効果」を産出することであった。

３．大衆と権力の血縁的紐帯

新たな「情緒政治」は、金日成・金正日に、人民に親近感を覚えさせる新たな指導方式を求めた。大衆の思想意識と感情・情緒をコントロールする中で目立った方式は、大衆の手紙に回答書簡を送る手紙形式と、人々の生活を世話する恩情形式の二つの方式であった。たとえば、1990年11月1日に、金正日は朝鮮中央通信社5局2細胞党員が朝鮮労働党創建45周年に当たって送った手紙に対して、回答書簡を送るという新たな政治行為を見せ始めた。また、同年12月25日には、朝

[510] 「忠誠」とは首領と戦士の間に(首領と後継者、首領と党、首領と人民)絶対的服従を意味するが、これは従来使われた用語である。「孝」とは、孔子によると、家庭内における親孝行を意味する。この時期、国家全体を「一つの大家族」と設定し、首領を親に人民は子に位置づける中で、親である首領に対する道徳的犠牲を求める用語が孝誠である。湯浅邦弘著『論語――真意を読む』中公新書、2012年、182－189頁を参照。

鮮文学創作社の詩人達が、部門党拡大会議において詩文学発展の道で永遠に党に従って首領に忠誠を尽くすと決心した内容の手紙を金正日に送った。金正日は二日後の12月27日に、「わが党の建設と活動で永遠な同行者、立派な助言者になることを期待する」という内容の回答を返したのである[511]。また、1991年2月11日に朝鮮人民軍第525軍部隊の兵士が送った手紙に対して金正日は回答書簡を送った。

金正日の回答書簡は、発送と同時に全国規模で中央ＴＶや放送で報道され、人民の心に応える指導者像が喧伝されることになったのである。中央から地方の末端組織まで、社会や軍隊、学校にいたるまで、指導者の回答書籍を人民に対する信頼と受け止め、忠誠を誓うイベントが行われた。また、1992年1月8日に平壌市倉前人民学校の1，2細胞の14名の党員が送った感謝の手紙に対して、「党に従って力強く前進してきた老党員同志に感謝する」と金正日は回答し、1月24日には金日成総合大学歴史学部と物理学部の細胞党員が送った手紙に「わが党の教化戦士により大きな勝利があることを期待する」、「科学発展はわが勝利の担保である」という回答を金正日は与え、それが全国に伝えられたのである。

回答書簡を通して政治的効果を目指した意図が、金正日の次のような言及によく現れている。1991年1月5日、金正日は党中央委員会と政務院の責任幹部に対する演説で、最近「わたしは、朝鮮中央通信社5局2細胞党員から送ってもらった手紙に回答書簡を送り、朝鮮文学創作社の作家たちから送ってもらったの手紙にも回答書簡を送りました。今、他の国の人々は朝鮮中央通信社5局2細胞党員と朝鮮文学創作社作家らが自らの決議を込めた手紙をわたしに送り、わたしが彼らの手紙に回答書簡を送った新聞記事を見て、わが党と知識人が団結していることを

[511] 「일심단결의 훌륭한 전통，빛나는 계승」（「一心団結の立派な伝統の輝く継承」『朝鮮中央年鑑1990年版？』平壌：朝鮮中央通信社、1991年）137頁。

高く評価している」[512]と言った。回答書簡がエリート・大衆と権力の紐帯を強化する政治手段であることを示す言葉である。

もちろん、過去にも手紙形式の回答書簡という政治行為はあったが、 外国人向けの回答書簡であったが[513]、国内に向けの回答書簡はなかった。国内においては一方的な手紙形式の政治行為は、公開書簡と演説形式の書簡の二つに分類されるが、二つとも一方的な政策原則と執行方法の形式であった[514]。しかし、1990年代に入って、金正日による指導者の回答書簡が初めて大衆の間に血縁的紐帯を強化するコミュニケーション形式の政治方式として導入されたのである。社会の末端組織が送った手紙に、金正日がことごとく回答したのは過去にはなかった新たな形式であった。美的認識の「五大命題」が発表された時期である90年11月から92年1月までの間に、数多い手紙のやりとりがあり、全国には人民を重視する首領と、指導者のために一心団結を強化する雰囲気が満ちることになったのである。

512　金正日「党事業をさらに強化して社会主義建設を力強くせき立てよう」、21頁。

513　回答書簡の場合はたとえば、1962年1月26日金日成は「キューバ新聞編集局が提起した質問に対する回答書簡」、1965年1月8日「ワシントンの朝鮮問題研究所の所長に送った回答書簡」、1967年1月4日「ワシントンの朝鮮問題研究所の所長に送った回答書簡」など外国に向けの回答書簡がある。『金日成著作集』第4巻(1948年9月9日共和国創建以後)から第44巻まで参照した。

514　公開書簡の場合、金日成によって行われるが、たとえば、「公開書簡、全国のすべての選挙者へ」というタイトルで、1967年10月28日、1972年12月1日、1982年2月19日、1986年10月27日、1990年4月18日に全国に送られた。また、演説文形式の書簡の場合、金日成と金正日は大会や記念日に向けて一方的に書簡を送った。たとえば、金日成は1974年7月31日党組織幹部教習会の参加者に「党事業をさらに強化することについて」というタイトルの書簡を送り、1993年2月22日朝鮮社会主義労働青年同盟第8次大会に「青年らは党の領導を仕え、主体革命偉業を輝く完成しよう」という書簡、1994年2月24日全国農業大会に向けて「社会主義農村テーゼの旗幟高め農村問題の終局的解決のために」という書簡を送った。金正日は、1978年全国映画部分の幹部の大会に送った書簡「党思想事業の要求に合わせて映画普及事業を改善強化することについて」、1981年6月12日、全国党幹部教育機関の教員教習参加者に送った書簡「党幹部教化事業を改善するいくつかの課題」、3月31日全国文化芸術人大会の参加者に送った書簡「主体的文学芸術をさらに発展させるために」、1984年7月22日全国教育幹部会議の参加者に送った書簡「教化事業をさらに発展させるために」、1989年11月27日全国労働行政幹部教習の参加者に送った書簡「労働行政事業をさらに改善強化することについて」、1991年10月28日全国科学者大会の参加者に送った書簡「科学技術発展で新たな転換を起こせ」、1992年11月20日創立45周年を記念する社会安全部政治大学教職員、学生に送った書簡「われわれ式社会主義を簡潔に擁護する真の社会安全幹部を育つよう」、それ以外にも多いが、一方的書簡であった。『金日成著作集』、『金正日選集』、『朝鮮中央年鑑』を参照した。

また、手紙形式のみならず、恩情の政治行為も人々の心を掴むに十分な効果をもつものであった。1991年2月16日、金正日は自らの誕生49周年に当たって、戦後(1945年8月15日)から1983年4月までの間に生まれた148組の三つ子とその親、また、1983年5月から1991年1月まで生まれた132組の三つ子とその親、そして2組の四つ子とその親に銀粧刀と金の指輪を下賜して首領の領導的役割を共有する地位を示した。もちろん、金正日は1983年から三つ子が生まれるたびに、 銀粧刀と金の指輪、他の贈り物を下賜してきていたが[515]、91年2月には北朝鮮に生存するすべての三つ子と四つ子に一挙に贈り物を下賜したことが特徴である。当時それは金正日の恩情が全国に伝わることになる、それこそ重大な政治イベントであったが、贈り物を受け取る方もテレビの報道を見て感情移入する方も感動的刺激を受ける機会になり、指導者の温情的政治行為によって、首領は全国民の親として奉じられることになったのである。

また、この時期、金正日の恩情は、青年たちの集団的な結婚式にも特徴付けられる。1991年11月1日、年間計画を前倒しで遂行した徳川鉱山の7名の青年労働者の集団結婚式に際して金正日の名で贈り物が下賜され、とくに1992年2月16日の自らの50歳の誕生日に当たっては、年間の石炭生産計画を遂行して結婚式を行う延風青年炭鉱の10名の青年労働者、恩徳鉱山の12名の除隊軍人の青年労働者、成川青年炭鉱の26名の女性除隊軍人らに、結婚式の贈り物を下賜した。それは、指導者の親のような愛として全国に伝えられたのである[516]。

この他にも金正日は、同時期に一般人民の誕生日や還暦、あるいは70歳と100歳になる誕生日に贈り物を下賜した。さらに、傷痍軍人と結婚する青年らの行動

---

[515] 鐸木昌之[1992]、前掲書、217頁。
[516] 「령도자와 인민의 혈연적 뉴대」(「領導者と人民の血縁的紐帯」『朝鮮中央年鑑』平壌：朝鮮中央通信社、1993年)251頁。

を高く評価して、恩情と愛の贈り物を下賜したという[517]。このような青年たちの結婚行為は、美的認識と密接に関連していると言ってよい[518]。1991年に平壌で出版された『青年と美学観』には、青年は結婚を選択する時に、どのような客観的条件に魅惑を感じるのかではなく、むしろ人間の内面を重視すべきであり、社会的価値である首領と指導者に対する忠実性を生命として持ったのか否かを見るべきと論じている[519]。実際、全社会の人々に対する、親のような首領と指導者の愛と配慮に対して、忠誠をもって恩返しすることが求められたのである。

このように、全国で情緒的運動が盛り上がる中で、1991年12月24日に金正日は人民軍最高司令官に就いた。そして金正日が50歳の誕生日を迎える92年2月16日の三日前の13日には、全国民に向けて、金日成は国家主席の資格で全体労働者、技術者、事務員の生活費（給料）を引き上げ、協同農民の収入を増加させる施策を実施する中央人民委員会政令を発表したのである[520]。経済的困難が続く中で、全国的な規模で給料を引き上げることは、人々に物質的刺激を与えることを目的とするものだった。このような精神的および物質的補償を与える政治イベントは、金正日と人民の密接な関係を形成することに目的があった。こうした中で、金日成は2月16日に金正日を称賛する頌詩を作り上げたのである[521]。

金正日の銅像やその業績を排除しながら、その一方で直接金正日を称賛する頌詩を作り上げたのは、一般的には金日成が高齢になって金正日に箔を付けたい

517　同上、252頁。

518　男女の愛情問題と結婚問題は直接的には倫理道徳的問題であるものの、美と善が統一されたためにこの問題は決して人間に対する美的評価から離れてはいない。

519　『青年と美学観』、前掲書、86－89頁。

520　조선민주주의 인민공화국 중앙인민위원회 정령 「전체 로동자, 기술자, 사무원들의 생활비를 높이며 협동농민들의 수입을 늘이는 시책을 실시함에 대하여」（朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会政令「全体労働者、技術者、事務員の生活費を上げ、協同農民の収入を増やす施策を実施することについて」『労働新聞』1992年2月15日）1面。

521　頌詩の内容は次のようである。「白頭山頂金正日峰、小白水河碧渓流、光明星誕50週、賛文武忠孝備、萬民頌薺同心、歓呼聲高震天地」。

がためであったと評価するものが多いが[522]、それは極めてよく計算された政治的行為であったと思われる。頌詩の内容は、①金正日が白頭山で生まれたことを既成事実化する中で、金日成が実際白頭山で活動して祖国を解放したという神話を強調し、②金正日が多才多能な存在であるために人民が従うと言って、金正日の役割を高めることを目指したのである。すでに述べたように、高齢化が進む金日成にとって、金正日の役割を高めることが彼自身の権力維持を可能にするからである。金正日の権威を高めることは、結局、首領の分身としての役割を強化することになる。首領に対する忠誠心を生命として持つべき金正日の地位は、金日成の事業負担を軽減する役割を強化すればするほどさらに高くなり、それによって、結果的には金日成の権威は絶対権力としてより安定的なものになるからである。

[522] 代表的には、황장엽 『회고록』（黄長燁『回顧録』ソウル：時代精神、2006年）。

第二節 「首領権力」の合法化

１．憲法改正：立法権・行政権の「独占的形態」へ

北朝鮮は、1992年4月9日に開催された最高人民会議第9期第3回会議において憲法を改定補充した(以下、改正憲法と称す)。憲法改正は、1972年12月27日に採択(以下、旧憲法)されてから20年ぶりであった。ラスウェルの指摘によると、公式的憲法は少なくとも何らかの政治方式を具体化したものであり、その中から政治的主義・主張が形成される[523]。憲法改正を行う一年前の1991年に平壌で出版された『主体の社会主義憲法理論』（以下、「憲法論」と称す）でも、憲法は国家の階級的力量関係を反映し、支配階級に有利な社会関係を法的に強固化すると論じられている[524]。このような論理は、①階級的力量の権力関係を反映し、支配者に有利な法的構造を合法化し、②規定された権力関係を社会に全面的に適用する、というところに目的があった。つまり、「唯一的効果」の産出を目的とした、「首領権力」の独占的論理だったということができるだろう。

憲法は政治体制の基本的パターンであると考える時に、改正憲法に「社会政治的生命体」論に基づいた首領・党・大衆の権力構造と金日成・金正日の権力関係が、集中的に確立されるように支える法的装置になる。『勤労者』の論説は、旧憲法が11章149条から構成されたことに比べ、改正憲法は7章171条から構成され、重要原則を人民大衆中心のわれわれ式社会主義の固守・発展、そして優越性

523　ラスエェル・カプラン、前掲書、256－257頁。
524　심형일 『주체의 사회주의 헌법리론』(シム・ヒョンイル『主体の社会主義憲法理論』平壌：社会科学出版社、1991年)50－51頁。

をさらに高く発揚させることを規定したと説明する[525]。前述したように、人民大衆中心というのは首領の領導を受ける大衆を意味し、われわれ式社会主義とは首領の絶対的地位と決定的役割を意味するために、結局、1992年の憲法改正は、「首領権力」の擁護・安定を強化する性格を持ち、立法権と行政権が首領のみに集中制限されることが特徴であった。

以下その点を細かくみていくと、まず、第一に、立法権が金日成に集中された点が挙げられる。旧憲法の第73条で「立法権は最高人民会議（代議員数687名）のみが行使する」[526]ことを、改正憲法の第88条では「立法権は最高人民会議と最高人民会議常設会議（構成員数17名）が行使する」[527]と修正し、金日成を中心とする極めて少数に立法権が掌握される法的条件を作り出した。このように立法権を修正した論理的根拠は二つある。一つ目は、首領が憲法作成を直接遂行すると論理をつけ[528]、そのために立法段階で金日成の権力意志と利害関係が有利に投射された特徴を持つようになる。

二つ目は、首領の地位と国家主席の地位を同一視し、首領を国家首班、国家の代表者として最高職位に推戴すべきと主張することによって、首領の立法権を正当化する論理的根拠を作り出した。北朝鮮は、国家機関に対する首領の唯一的指導を保障するために、首領を首位とする国家主権の最高指導機関を組織し、そ

---

525 「사회주의헌법을 철저히 구현하여 우리 식 사회주의를 고수하고 더욱 빛내여나가자」(「社会主義憲法を徹底に具現して、われわれ式社会主義を固守し、さらに輝かせよう」『勤労者』1992年第12月号)3頁。

526 旧憲法、前掲書、15頁。

527 最高人民会議常設会議の定義については第3章第一節（註）を参照されたい。最高人民会議常設会議は、最高人民会議常務機関、最高人民会議（5年）の休会中に立法と一連の主権活動を遂行する機関。『조선어대사전』(『朝鮮語大辞典』第2巻、平壌：社会科学出版社、1992年)648頁。

528 北朝鮮の憲法論によれば、「労働階級の首領は、社会主義憲法の作成を直接遂行する。首領は憲法に関する科学的な思想と理論に基礎を置いて社会主義憲法の作成方向と原則を提示し、構成体系と規定内容を指導し、憲法草案を成文化する作業も直接指導し、実現するからである」。シム・ヒョンイル、前掲書、50頁。

の構成と任務、活動方式を明確に規定することが重要であると言う[529]。このような論理は、「主席」という地位について、旧憲法が金日成の個人独裁の制度化を目指して「導入」したとすれば、改正憲法は、金日成が首領であるために国家主席になるべきという「社会政治的生命体」論に基づく権力の「独占」的性格が特徴的である。したがって、憲法改正は「首領権力」の合法化を目指す制度的装置であったとも言えよう。

改正憲法の第105条は、「国家主席は国家の首班であり、国家を代表する」と規定した条項である。これは旧憲法の第91条「国家主席は国家の首班であり、国家主権を代表する」という文章から「主権」という言葉を削除した内容である。金正日の言葉を借りると、北朝鮮が言う「主権はもっぱら主権機関によって代表される」ものであるが故に、「わが国では最高人民会議をはじめとして各級の主権機関の活動によって主権の唯一性と完全性が担保される」[530]ことになる。つまり、北朝鮮で「主権」は最高人民会議、中央人民委員会、政務院、国防委員会を示す国家権力機関なのである。

したがって、旧憲法において主席は、①国家主権を代表する一つの権力機関を意味し、②実際仕事をするという意味を包含していたが、改正憲法では「主権」とういう言葉を外すことによって、国家主席の地位は首領の絶対的地位と同等になり、実際に仕事をしなくても特定の存在として位置づけられことになったのである。

第二に、改正憲法は、国家機構の再編を通して行政権の主席集中化を目指した。「首領権力」の目的は国防委員会という国家機構を生み出した。改正憲法は、

---

529 同上、125頁。

530 김정일 「우리 인민정권의 우월성을 더욱 높이 발양시키자」 전국인민정권기관 일군강습회 참가자들에게 보낸 서한, 1992년 12월 21일(金正日「わが人民政権の優越性をさらに高く発揚せよう」全国人民政権機関幹部教習会の参加者に送った書簡、1992年12月21日、『金正日選集』第13巻)281頁。

国家機構の再編を通して金日成と金正日の権力関係を成文化した。上述したように、権力の「唯一的効果」の産出を目的としたのである。改正憲法では、「国防」と題する四つの条項を新設し、それによって第111条に国防委員会が国家主権の最高軍事指導機関として独立することになった。旧憲法の第93条に規定された「主席は国家の全般的武力の最高司令官、国防委員会委員長になる国家の一切の武力を指揮統率する」という主席の権限から、最高司令官と国防委員長が分離したのである。

5ヵ月前に金日成から金正日に移譲された人民軍最高司令官職は、改正憲法で規定されることがなく、国防委員長職はまた空席になった。国防委員会が国家機構として組織されたのは、1990年5月24日に開催された最高人民会議第9期第1回全員会議のことである。ここで最も注目されたのは、金正日が国防委員会第一副委員長に就いたことである。

過去において、金正日に使用してきた「実務指導」という呼称を、金日成のみに使ってきた「現地指導」という呼称に昇格させた時期にスタートすることになった金正日国防委員会第一副委員長の「現地指導」の業務は、金日成の手が届かないような山峡や地方の軍部隊にまで拡大された。その後、高齢化が進む金日成の事業をさらに代替補完する目的で、1991年末には金正日は最高司令官に就任したのである。また、改正憲法によって空席になった国防委員会委員長の席には、翌年の1993年4月7日に最高人民会議第9期第5回会議で金正日が選出され、結局、国家主席から分離した二つのポストは両者とも金正日に引き渡される結果となった。

以上のように、金日成は国家主席として絶対的決定権を握ったまま、金正日に分身として役割を任せたのである。これが、いわゆる首領と指導者の「唯一的領導体系」になり、「意図された効果の産出」を目的とする法的装置となった。

たとえば、「主権」の観点から見ると、国防委員会は国家主権の最高軍事指導機関として、国家主権機関を総括する主席の下に位置づけられる一つの国家権力機関である。これは、すでに説明したように、まさに「首領」概念の範疇の中で出発した後継者の地位と同様であり、国防委員長の地位もまた主席に従属する一つのポストとして構造化されたのである。

さらに、命令権についても、金日成と金正日の関係は明確に規定されることになった。旧憲法と改正憲法において国家主席は、共に「主席は命令を出す」と規定された唯一の存在であるが[531]、それに加えて改正憲法では国防委員会も命令を出す機関として規定された[532]。翌年金正日は国防委員長に選出されたが、改正憲法では国防委員長の権限として命令権は規定されていない。命令権を持っている主席は金日成一人であるが、国防委員会は国家機構である。したがって、執行においても金日成のみが命令を出す唯一の存在になる。

これとは別に、その前に金正日が就任した人民軍最高司令官は、第四章で論じたように、北朝鮮の歴史的経緯から見ると軍事に関する指揮権と命令権を併せ持つ職責である。しかし、決定権は軍権のなかで最も上位に位置づけられる党中央委員会軍事委員長が掌握しており、人民軍最高司令官の命令権も独自に行使し得ないという制限が科せられている。

また、旧憲法の第91条は、「主席は中央人民委員会を直接指導する」と規定していたが、改正憲法の第107条は、「直接」という言葉を外すことによって金日成の事業負担を減少するように規定した。金日成が1991年に何度も述べたように、彼はこれからも10年間ほど仕事を続けることを目指していた。改正憲法は、主席として命令する地位を維持しながらも直接的な負担を軽減することができる

---

[531] 旧憲法の第94 条、改定憲法の第108条は「主席は命令を出す」と規定された。
[532] 改正憲法、前掲書、第115条。

ように、法的装置を設定したところに大きな意味を持つと言ってよいだろう。

このように「首領権力」の観点から解釈された金日成と金正日の権力の差別化は、 党・国家・軍において、①首領と後継者の関係（1986年「社会政治的生命体」論）、②党中央委員会軍事委員長と人民軍最高司令官の関係（1991年12月24日、金正日最高司令官の推戴）に加えて、憲法改正を通して③国家主席と国防委員長の関係にも確立された。両者は「首領権力」の一定量を保存するために、互いに補完・補充の方式に努めた。金日成と金正日の「主従関係」が明確に合法化されたのである。

２.「一つの大家族」論：政治方式の変容

(1) 「忠誠」の持続・「孝誠」の登場

1992年1月から、首領を親とする「一つの大家族」論が登場した。金日成に対する「忠誠と孝誠」を求め、首領・党・大衆の「社会政治的生命体」を忠誠と孝誠の結晶体、親・子の「一つの大家族」として、論理的に再定立したのである。ここで「忠誠」は、過去から続けて使われた政治概念であったが、「孝誠」は新たに導入された権力手段である。前者は、首領と戦士の関係を示し、後者は親と子の関係を示すもので、両者は首領の絶対的権力を再強化する手段に過ぎない。

「忠誠」は、1985年1月に行った金正日の談話によると、「党と首領は人民を信頼し、人民は党と首領に忠誠を尽くすことによってわが一心団結があり」、「人民に対する党と首領の信頼と愛、党と首領に対する人民の忠誠の結合体がす

なわち、わが一心団結である」[533]とされる。かつては、「一心団結」という社会結合の原理は、首領の信頼に対して恩返しをする人民の忠誠という、「信頼と忠誠」の価値交換原理であった。しかし、「孝誠」が新たに導入されてから、社会結合の「一心団結」の原理は、「忠誠」に「孝誠」を加えて作用するようになったのである。

「孝誠」が最初に登場したのは、1988年6月18日にカンボジアの大統領であるノルドム・シアヌークと行った金日成の談話であるが、そこで金日成は金正日を国にとっては「忠臣」であり、家庭においては「孝子」であると評価した。金日成は「もともと、忠臣や孝子というのは封権儒教の教理から生まれたものだが、悪いとは言えない。国に忠誠を尽くし、親に孝誠を尽くすことは良いことである」[534]と述べた。このような金日成の言葉は、二つの側面で定義される。一つは、首領と後継者の関係であるが、この関係は、すでに説明したように首領に対する後継者の「忠誠」を彼の生命として規定した。またいま一つは、親と子の関係であるが、親に対して子が「孝誠」を尽くすことを意味する。「孝誠」の親子関係として当然な意味と見えるが、これは更なる権力論ほかならない。

したがって、金日成の高齢化が進む時期に出された「忠誠と孝誠」は、金正日の権限が拡大すればするほどそれが「首領権力」の一定量として補充され、さらに強化・安定化するようになった。首領の意志に後継者が服従し、親の意志に子が服従する「忠誠と孝誠」は、80歳になった金日成の高齢化に従う金正日の「役割論」とも言えよう。金日成は1992年3月に、金正日による力の補完について

533　김정일 「일심단결의 기치를 높이 들고 나가자」(金正日「一心団結の旗幟を高く掲げていこう」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話、1985年1月26日、『金正日選集』第8巻)166頁。

534　1988年6月18日、金日成は「わたしが金正日同志について評価すると、彼は、国と人民には忠臣であり、家庭的には孝子です」。김일성 「민주주의 캄보쟈 주석과 한 담화」(金日成「民主主義カンボジア主席との談話」1988年6月18日、『金日成著作集』第41巻)142頁。

次のように述べた。

「私が今、年をとっていても健康な身体で事業を継続することができるのも、金正日同志の忠誠と考誠がそこには含まれています。彼はいつも私の健康と休息について特別な関心を注いでいます。彼は、私が事業するうえで不便にならぬよう必要な対策を講じています。彼は、私が文献をたくさん読むために視力が悪くなり疲労を感じることを心配して、私に報告する文献を大きな文字で作成するように措置し、一部文献と資料は録音して私に捧げています。そのため、私は多くの文献を読んで批准しますが、疲労を感じません」[535]。

90歳まで仕事を続けると頻繁に述べていた金日成にとって、金正日の「忠誠と孝誠」は、自らの健康と事業を補佐・補充する役割として必要不可欠なものであった。当時、国際社会で金正日の権力拡大が云々されるほど金正日の権限が大きくなる時期に、金日成は「孝誠」概念を使って金正日の拡大する権限を牽制したのである。権力の決定権は握ったままに金正日に執行権のみを引き渡したことも、金正日の銅像と記念碑の建立を不許したことも金正日に対する金日成の牽制心理が表れた同様な事例である。「首領権力」における「孝誠」の政治心理は、次のような事例にも表れている。

全国に「情緒政治」を活発に展開する中で、ついに1991年9月19日に、金日成は慈江道前川郡を現地指導する時に、忠誠と孝誠を全国に広げる契機を作り出した。金日成は、来年(1992年)は金正日の生誕50年に当たる年であるが、「現在、

[535] 김일성 「사회주의위업의 계승완성을 위하여」(金日成「社会主義偉業の継承完成のために」抗日革命闘士、革命家子女に対する談話、1992年3月13日、1993年1月20日、3月3日、『金日成著作集』第44巻)137頁。

全体の幹部と党員、勤労者が、首領に対する金正日同志の無限の忠誠心と至極の孝誠に従うために努力しているが、それは当然なことである」と述べ、「金正日同志は祖国と人民の中心であり、私には至極の孝子である」と評価した。そして、前川郡の鄭春実商業管理所長の事業努力を高く評価しながら、「私が教えた通りに仕事をする人が忠臣である」と、鄭春実のような「人が英雄であり、忠臣である」、「金正日同志が鄭春実のみならず、たくさんの人々を忠臣に育てている」と評価したのである[536]。

1992年4月の金日成80歳の誕生日を迎えて鄭春実を主人公とする朝鮮芸術映画「孝女」が制作された。金日成を父親（アボジ）に、金正日をお兄さん（オラボニ）と呼ぶ鄭春実は全国の人々のモデルになり、その後全国に「鄭春実運動」が展開された。もちろん、主人公の経済問題の自立的解決（第四章で論じたように中央経済と地方経済の分離から）、つまり、自らの食衣住の解決を強調する内容である。このような内容を背景に、映画において最も重視されたのは金日成を人々の親と認める「一つの大家族」の「擬似親子」関係であった。この映画で興味深いところは、金正日を人々のお兄さんとして兄弟の範疇に位置づけたところである。ここになぜ、金日成と金正日を「親」と「お兄さん」の地位に区別したのかという疑問が残る。

地位は役割の条件になる。金日成を人民の「親」に位置つけたのは、人民大衆という政治的生命を生んだ絶対的存在、最高決定権者という権力の主体を意味した。一方、金正日を人民の「お兄さん」に位置つけたのは、人民を導く領導者であるものの、その役割はどこまでも「親」の負担を減らすためであり、「親」の仕事を助けることに限定される。したがって、金正日と人民の「忠誠と孝誠」

---

536 김일성 「일군들은 당과 수령을 위하여, 조국과 인민을 위하여 충실히 일하여야 한다」(金日成「幹部らは党と首領のために、祖国と人民のために忠実に仕事をしなければならない」 慈江道党委員会責任書記、前川郡商業管理所所長に対する談話、1991年9月19日、『金日成著作集』第43巻)215頁。

は、「親」の金日成に捧げられるものに他ならない。実際、1992年から全国で「忠誠と孝誠」というイベントが開かれた。「忠誠と孝誠」は、①金正日を人民の領導者として兄弟的関係に結合させる触媒になり、②金日成に向かえる「絶対的服従」の機制として作用された。「一つの大家族」論は、 金日成の高齢化という変数の変化によって「首領権力」のさらなる強化を目指した重要な政治概念であった。

(2) 「仁徳政治」から「銃・爆弾精神」[537]へ

下からの「忠誠と孝誠」を強調した後、党機関紙はその根拠として首領の「愛と信頼」という抽象的な概念を作り出した。1992年11月号の『勤労者』掲載の論説は、永生不滅の主体思想を具現して人民大衆中心の政治を実施する過程で、新たな政治原理と人民的政治方式を定立したと主張し、それを「愛と信頼の政治」と言い、新たな時代の政治の典型になったと強調した。この「新たな政治、愛と信頼の政治が成されたことによって、政治を権力の代名詞と認めた既成の観念に終止符が打たれ、人民のための政治を基本とした新たな政治史が幕を開けた」[538]と主張したのである。

さらに、「先進的人類は今、権力と支配の政治から愛と信頼の政治への歴史転換を成し遂げたわが党の業績について、高く称賛している」[539]と述べた。換言すると、1992年以前の政治方式は「権力と支配の政治」方式であり、それが「愛

---

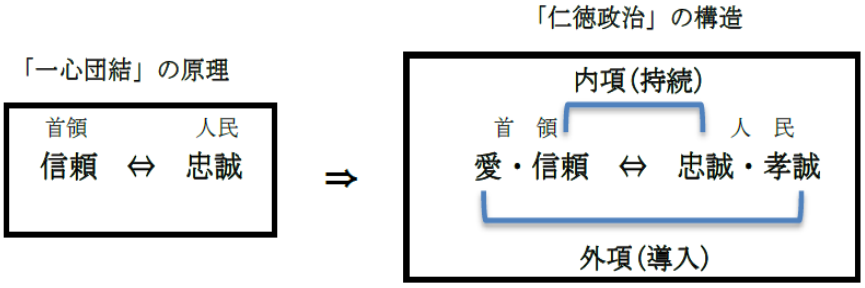
[537] 「銃・爆弾精神」とは、自分の体を銃と爆弾にして首領を擁護する精神である。この頃から銃・爆弾精神は、首領決死擁護精神と自爆精神（首領に対する義を守るためには自爆して死なければならないという精神）と共に使用されたが、現在も持続的に使われている。黄長燁、『北朝鮮の真実と虚偽』、212頁。

[538] 리원경 「우리 당의 정치는 사회적인간의 본성적요구를 구현한 참다운 정치」（李ウォンキョン「わが党の政治は社会的人間の本性的要求を具現した真の政治」『勤労者』1992年11月号）40頁。

[539] 同上、40頁。

と信頼の政治」へと転換したことになる。つまり、金日成の80歳の誕生日と金正日の50歳の誕生日に向かって再定立された政治方式は、「上からの愛と信頼」に対して、「下からの忠誠と孝誠」をもって応える形の血縁的原理の確立を意味し、いわば国を「一つの大家族」として位置づけることになったのである。

党機関誌である『勤労者』が、自ら過去の政治方式を批判したのは異例なことである。「進歩的な政治原理といっても、決して固定不変なものではない」[540]との前提のもと、間接的ではあるが過去の政治方式を「権力と支配の政治」と批判したことは、北朝鮮史において初めてのでき事であった。首領は、かつての「信頼」を与える存在から「信頼と愛」を与える存在になり、人民は、かつての「忠誠」を尽くす存在から「忠誠と孝誠」を尽くす存在になった。



出所：筆者作成

［図5-1］「仁徳政治」への政治方式の変容

金日成から与えられる「愛と信頼の政治の生活力は、何よりもわが人民の政治生活で権力政治の跡を永遠に消し、仁徳政治の新たな場を開いた」[541]とされたのである。したがって、「仁徳政治」[542]という政治等式の変容は次のようになる。

---

[540] 同上、41頁。
[541] 同上、44頁。
[542] 儒教で「仁」は、基本的に美徳を意味する。「仁」は『論語』の中でも最高の徳目とされるが、「孝」はさらにその根本の道徳であると強調するのである。湯浅邦弘、前掲書、189頁。したががって、孝行とは「仁」の基であるが、北朝鮮の「仁徳」は先に「孝」が求められ、次の出されたものであるのが特徴的である。朝鮮史において、李朝500年の間

［図5-1］で示されたように「仁徳政治」構造では信頼と忠誠は過去との持続性を持ちながら内項になり、愛と孝誠は新たに登場したが、感情・情緒から噴出する即刻的行動や無意識的行動を前提とする。①前者が思想意識を示すならば、後者は上で説明した「情緒政治」の過程を示すものである。②また、前者が首領と後継者の領導的役割を示す「首領と戦士」の関係を表したとすれば、後者は首領の絶対的地位を示す「親と子」の関係を示したものであり、この両者は首領という金日成に統合される原理として作用される。結果的には、金日成の個人権力の範囲と絶対的価値を示すものに他ならない。

第一に、首領を「親」と設定したことによって、人民は、①社会政治的生命を首領から受けとって生の喜悦を感じ、②永生の恩人である首領と指導者同志をいつも心の柱として信じ、③党と首領に運命を委託することになった。それは、1992年11月号の『勤労者』が、「愛と信頼の政治には、党と首領が子の生命について母親の心で人民の政治的生命を貴重にし、彼らの運命に全面的な責任を持つ立場として一貫されていた」[543]と論じたところからも明確である。これが、上で論じたように生の喜悦を感じさせるように美学的刺激を与え、それを受け内面化過程で金日成・金正日を生の柱と認め、結果的には運命を委託する「刺激と反応」の「情緒政治」の正当性論理となったのである。このように、首領を「親」と設定したのは、人々の「生殺与奪」の権を持つ絶対者として正当化するためであった。

第二に、金日成が「親」の地位を確保したことによって、子が親を代えることも、また超えることもないように不変の存在になったと言ってよいだろう。そ

に支配思想であったこのような儒教は、身分制度と家族制度を形成し社会生活を深く根をおろして政治を支えたのである。金日成・金正日に必要なのでは、「孝」から出される人民の献身的精神であった。

[543] 同上、41頁。

れは、子が親に忠誠と孝誠を尽くすのは義務だからである。そこから忠臣と孝子の性格が設定された。金正日によると、忠臣はどのような困難な環境と条件下であっても首領に忠誠を尽くすものであり、孝子は政治的生命の親である首領を無限に尊敬し、首領の安寧と万寿無疆を保障し、首領の思いを実現し、首領の心配を減らして首領に喜びと満足を捧げるものである[544]。

「親」の設定が示唆する権力構造は、以下のような二点をもって説明される。一つ目は、金正日にとっても親である金日成を、超えることが有り得ないように設定した。金日成の高齢化に従って、金正日の役割が大きくなる時であったが故に、「親子関係」を明確に設定する必要があったと思われる。二つ目は、金日成の絶対的地位であるが、それは人民の代を続いて絶対的に服従を引き出すためであった。金正日が「個別的人の社会的地位と役割は他人がとって代わることができるが、首領の地位と役割は誰も代わることはできない」[545]と強調したように、金日成は歴史に一回のみに出現する特殊な存在として位置づけられたのである。

1993年2月17日に、党中央委員会の責任幹部を対象にした談話において、金正日は青年たちを「党と首領を擁護保衛する500万の銃爆弾になるようにすべき」だと強調し、初めて人間の「銃爆弾」という用語を使用した。社会主義労働青年同盟（社労青）第8次大会（2月18日－22日）開幕の前日であることから、「銃爆弾」という用語は、その大会に向けられたものであると見られる。実際、その10日後である2月26日に、金正日は「銃爆弾」精神についてさらに具体的に説明した。すなわち、今、わが国では青年の数が500万名にもなる。今回の社労青第8次大会で、青年代表達は500万名全てが銃爆弾になって党を決死擁護すると決議し

544　金正日「主体の党建設偉業を代を続けて輝かせる真の幹部を育てよう」、304頁。
545　『主体文学論』、前掲書、143頁。

た。500万の青年に300万の少年たちを加えると、800万名になる[546]というのである。このように、青少年の一人一人が一つの銃爆弾になるということは、それが金日成の仁徳政治、「愛と信頼の政治」に応えるものとして位置づけられたといってよいだろう。

1993年4月9日に開かれた最高人民会議第9期第5回会議で、金正日は国防委員長に選出された。人民軍将兵達は、命がそのまま城塞になり、楯となり、銃爆弾になって党と首領を決死擁護し、一心団結の威力を発揮したとされた[547]。実際、金日成と後継者のために命を投げ出しても、それは栄光だと考えるように教化が進んだのである。このような状況は、過去に求めた「権利と義務」の強制力から、「愛と信頼の政治」が人間の心理と心を掴んだ「情緒政治」へと転換した結果、産み出されたものであった。

1994年11月に発表された『社会主義は科学である』という論文で金正日は、「わが党の愛と信頼の政治、仁徳政治はわが国の社会主義の優越性と不敗性を規定する根本要因になっている」[548]と定義した。北朝鮮は、1992年から初めて「愛と信頼の政治」や「仁徳政治」という政治方式を概念化した。そこにおいて「首領権力」の量質の不変、つまり、権力維持が目的であり、そのために変化した環境と条件に合わせて統治方式を変えるのは、必要不可欠であったと考えられるだろう。

---

[546] 김정일 「청년들과의 사업에 힘을 넣을데 대하여」(金正日「青年との事業に力を入れることについて」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話、1993年2月26日、『金日成選集』第13巻)341頁。

[547] 「조선인민군 최고사령관 김정일동지를 국방위원장으로 높이모시자」(「朝鮮人民軍最高司令官金正日同志を国防委員長として高く奉じよう」『朝鮮中央年鑑』1994年)125頁。

[548] 김정일 『사회주의는 과학이다』(金正日『社会主義は科学である』平壌：朝鮮労働党出版社、1994年)39頁。

第三節　金日成の80年の生涯と「首領権力」

１.「傘寿演説」と三つの権力観

1992年4月15日、金日成は80歳の誕生日に政府が準備した宴会で「人民大衆の役割を高めることは自主偉業の勝利のための担保」であるという演説（以下、「傘寿演説」と略す）を行った。北朝鮮で「平壌宣言」と称される「傘寿演説」は、金日成が自らの生涯の総括と位置づける中で、これから次の10年間に、すなわち金日成が90歳になるまでの10年間に備えて準備を固めるような権力の意志を表明した演説であった。この演説で、金日成は三つの権力観を示した。

第一に、絶対的権力観である。金日成は「傘寿演説」で「私が祖国を解放しないと帰らないと決心して鴨緑江を渡ったのが昨日のことのようですが、私の年齢は80歳になりました」[549]と述べて、自らの80年の生涯を「祖国解放」、「革命」、「人民」に結び付け絶対的存在として示した。また、「振り返ると、私の80年の生涯は、一言で言えば、人民の息子として人民のために捧げた一生涯だと言えます」[550]と総括した。金日成は自らを人民の息子と表現した。つまり、金日成は自らの生涯を北朝鮮の国家発生・発展の全過程と同一視し（第二章で説明したように首領の絶対的地位の構成要素）、首領は人民大衆の要求が切迫した時期に、人民の息子（希望）として出現した必然的存在に位置づけたのである。

---

[549]　この内容は北朝鮮で「金日成元帥様の革命歴史」の教科書の内容である。金日成は後日に14歳になる1926年「わたしは祖国を解放しないと帰らないと決心して鴨緑江を渡った」と言ったが、これは北朝鮮の人々に金日成を「祖国解放」の恩人として連想させる言葉である。

[550]　김일성 「인민대중의 역할을 높이는 것은 자주위업의 승리를 위한 담보」（金日成「人民大衆の役割を高めることは自主偉業の勝利のための担保」 朝鮮民主主義人民共和国政府で備えた宴会での演説、1992年4月15日、『勤労者』1992年4月号）4頁。

1992年1月号の『勤労者』に掲載された論説が、「首領を離れてはわが革命のすべての勝利と、わが党とわが祖国、わが人民の高い光栄と未来について考えられない」と強調する[551]こととも、それは文脈を同じくする。ニーチェが指摘したように、位置を決するのは権力量である[552]ことを考えると、金日成が認めた「人民の息子」や「人民の親」という概念は、人民を権力量と見た場合、自らの比重をより大きな存在として認める金日成の自己認識の反映である。つまり、金日成の認識は［金日成≧人民］、［金日成≧国家］の等式になる。

金日成は祖国と人民という絶対量を、自らの権力量と認めたのである。この権力の絶対量は、1992年5月に金正日も述べたように、「わが社会主義祖国で生きている人間は例外なく社会政治的生命体に属している」[553]という、他の選択肢もない強制性を帯びた絶対量である。ここで特徴的なのは、1986年に「社会政治的生命体」と言う「閉じた系」を設定した以後、社会主義諸国の崩壊を経験しながら1990年には「われわれ式」を設置し、その後、1992年には「一つの大家族」として「閉じた系」を再設置して量的保存性を高めたことにある。外部世界から区別する二重・三重の「閉じた系」装置、その中で求める首領の地位の絶対的高さと無所不為の権限、そこに相応する人民大衆の絶対的服従は金日成が絶対君主的認識を持っていたことを反映していよう。

第二に、 一元的権力観であるが、これについては論理的側面を説明する。「首領権力」の抑圧装置（司法・警察・軍隊・法）とイデオロギー諸装置を区別

---

551 「위대한 수령 김일성동지의 탄생 80돌을 승리자의 대축전으로 맞이하기 위한 전인민적 투쟁에 떨쳐나서자」（「偉大な首領金日成同志の誕生80周年を勝利者の大祝典に迎えるために全人民的闘争に出て行こう」『勤労者』1992年1月号）12頁。

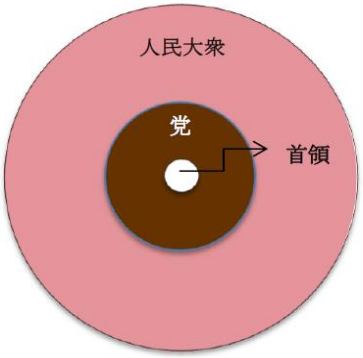
552 「権力への意志」（下）『ニーチェ全集』第13巻、376頁。

553 김정일 「다부작예술영화 『민족과 운명』의 창작성과에 토대하여 문학예술 건설에서 새로운 전환을 일으키자」（金正日「ドラマ『民族と運命』の創作成果に基づき文学芸術建設で新たな転換を起こせ」文学芸術部門幹部及び創作家・芸能人との談話、1992年5月23日、『金正日選集』第13巻）87頁。

して、暴力によって国家の支配に正統性を付与する前者の抑圧的な機能より、後者の生産的機能に注目したい。それはイデオロギーの再生産を通して社会のすべての関係を首領中心の単一原理として統一し、「首領権力」が一元的に行使されるようにしたからである。いわば、首領を政治体制と社会的力学作用の原因と見なす首領中心の思考様式である。たとえば、金日成は「社会政治的生命体」で首領の地位を「桃の種」に比喩し、「首領･党･大衆の一心団結を桃にたとえることができる」[554]と述べた。

また1992年2月18日に金日成は、外国人との談話で、桃を見ると、真中に種があり、種を回る固い殻があり、その次に果肉があるが、桃に比喩して言うと、首領と党は桃の種とそれを回っている固い殻と同じであり、首領と党の回りに団結した人民大衆は果肉と同様である」[555]と説明した。

この「桃」論は、金日成を「種」とする①体制の必然的存在（起源）、②有機体的「生命力」の「根源」に必然的存在、③権力メカニズムの「中心」に位置づける権力維持への反映である。



出所：筆者作成

[図5-2]「桃」に比喩した首領中心の構造

このような認識を背景に、金日成は「傘寿演説」で「自身の生命をいつも人民大衆の生命と結びつけ、人民大衆と生死運命をともにすることに生の誇りと勝利の秘訣を求めた」と述べた。そして、「われわれが建設した社会は、党と人民大衆が一心団結して革命の自主的な主体をなし、

554 김일성 「민족올림픽위원회협회 위원장인 메히꼬출판회사 위원장경 사장일행과 한담화」（金日成「民族オリンピック委員会協会委員長であるメキシコ出版会社社長一行との談話」1991年6月5日、『金日成著作集』第43巻）139頁。
555 김일성 「볼리비아공산당 중앙위원회 제1서기와의 담화」（金日成「ボリビア共産党中央委員会第1書記との談話」1992年2月18日、『金日成全集』第91巻）86頁

政治、経済、文化のすべての面で主体が確立した社会であり、すべてを人間のために服務する人民大衆中心の社会主義」だと強調し、社会全体を「一心団結」をなした一つの「主体」と見なして、これを「人民大衆中心の社会主義」と定義したのである。金日成の言葉には、①金日成個人と大衆の生命を等式化して自らの「生殺与奪」権を示し 、②生命の繋がりを強調して人民大衆が存在する限り、首領の存在が永遠となるという永遠への欲望の価値観を表し、③人民大衆（国家）の生存活動ですべての側面において主体の一元化（金日成の意志が実現する）を強調したことが窺われる。ここには金日成の独占的認識が反映されている。

第三に、蓄積性権力観であるが、それについては権力の流れと方法的側面を説明する。金日成は「傘寿演説」で「今日、全ての党員と勤労者は革命の代を継承し金正日同志と党中央委員会の周りに固く団結して革命の代を続ける確固な主体をなしており、これはわが革命の終局的勝利のための基本担保」であると述べ、「これがわたしの80年生涯の主な総括」だと満足の意を示した。金日成の言葉には二つの意味で蓄積性が内包されている。一つは、時間の蓄積性であるが、ここには金日成の年齢という個人変数によるものである。また今一つは業績の蓄積性であるが、ここは金日成・金正日の役割に関する共通領域を示すものである。

一つ目に、金日成は自らの80年の生涯と北朝鮮の革命の年代記を一致させ、継続革命の観点で現在の持続性を強調した。革命の代を継承するというのは世代の交代移動を意味するものではなく、現存する権力の持続性を保障するためであり、そうすれば革命の終局的勝利（未来）も保障することができるという意味に解釈される。二つ目は、金正日の周りに固く団結することを求めるのは、そうすれば金正日の領導的役割を高めることができるし、二人の共有する「領導的役割」の側面が強化されれば、首領偉業の結果はさらに高くなるという論理に繋がると考えられる。たとえば、金正日は1992年1月に発表した「主体文学論」で、

首領偉業について次のように説明した。後継者にとって最も重要なのは、首領に対する絶対的な忠実性を深く描くことである。首領に対する忠実性は、首領偉業を形象化する後継者の基本品性である。後継者は、首領が開拓した偉業を代を続けて固守し、完成していくことを第一の使命に持つため、首領に限りなく忠誠と孝誠を尽くすことになる[556]。金日成の「傘寿演説」と金正日の論文は文脈を同じくするのである。

金日成の時間と業績の蓄積性は互いに正比例する。金日成の高齢化が進めば進むほど金正日の役割はさらに拡大及び強化されるし、金日成の役割が強くなればなるほど金日成の業績とその偉大性はさらに高くなり、金日成の権力は安定的となる。実際、北朝鮮は1992年4月9日に憲法を改正して国防委員会を独立させたが、その職位に金正日をすぐ就けることはせず、翌1993年4月に任命した点が注目されるであろう。この頃の金正日の役割拡大と、それに伴って権威を高めるようとする努力は、人民軍最高司令官を引き渡し、金正日の生誕50年に当たって頌詩を作り、人民大衆と指導者を渾然一体化するイベントなどを推進したことに比べれば、抑制したものであったと思われる。

のみならず、金日成の誕生日二日前の4月13日に、金日成に対して共和国「大元帥」の称呼が授与された。金日成に大元帥称呼授与を決定した機関は、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党軍事委員会、国防委員会、中央人民委員会であったが、同機関は4月20日には金正日と呉振宇に対して共和国「元帥」称呼を授与した。金日成「大元帥」と金正日「元帥」は、差異性が明確になり、授与された日も金日成の誕生日を前後としたのは、後継者の権威を首領の権威に従属させるような政治行為であった。結局、後継者の役割は、首領の偉業に帰結される「首領

556 『主体文学論』、前掲書、139頁。

権力」の従属変数に過ぎないということになろう。

以上の検討から、金日成の三つ権力観は、首領概念の構成要素に一致することが明らかになった。①絶対的権力観は、首領の絶対的地位は人民大衆の絶対的服従を前提とする垂直的特徴があり、②一元的権力観は、首領の決定的役割で団結の中心として「社会政治生命体」の生命力の源泉になり、その存在の根源として最高決定権を持つ。そして、③独占的権力観は、首領の決定的役割の一つの構成要素である領導的役割であるが、これは、首領と後継者の「唯一的領導」によって首領偉業の「唯一的効果」を産出する結果を目的とする。①と②は首領の固有性として権力の絶対量或いは一定量を示し、③は二人の権力者の共有する側面であるが、権力の作動原理は首領から始まった生命力運動が首領に帰結されるメカニズムになる。ここで首領から始まった北朝鮮の現在（国家の発生と発展過程）は金日成の時間に一致化し、その中で後継者の役割による大衆運動の結果は首領偉業に吸収されるという特徴を内包している。

２.「首領権力」の計量的検討

(1) 「現地指導」の計量分析

金正日は1974年2月14日、金日成の後継者に「推戴」されたと言われるが、金正日が、表舞台に登場したのは、1980年10月10日に開催された朝鮮労働党第6回大会である。これまで金日成だけが持っていた党中央委員会政治局、党書記局、中央軍事委員会における地位を獲得し、誰の目にも明らかなかたちでナンバー2

となったのである[557]。そして、1990年から金正日の政治行為は「実務指導」から金日成のみが使った「現地指導」に昇格された。北朝鮮の政治行為で最も重視される「現地指導」について検討した場合、金正日の政治行為は金日成の補完的役割として特徴される。1981年から1994年の間に測定された金日成と金正日の現地指導は、以下のようになる。

年度	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	総計
金日成	13	13	13	11	7	8	14	8	14	4	9	5	16	3	138
金正日	7	1	4	13	4	5	6	15	2	2	1	9	4	3	76

資料：『朝鮮中央年間』1981－1994年（金正日の実務指導は1990年から現地指導に変わった）。
出所：李グァンセ『北韓の現地指導と政治リーダーシップに関する研究』、144頁より再作成。

［表5-2］ 金日成・金正日の「現地指導」の頻度

［表5-2］に示されたように、金日成が毎年平均して9.9回現地指導したことに比べ、金正日は毎年5回程度で金日成の半分程度になる。李グァンセは、1990年に入って金日成の現地指導が徐々に減る傾向が現れていると指摘し、その原因を1980年第6回党大会以後、金正日の執務指導が公開される中で、北朝鮮体制の求心力が金正日へ移動していったためだと説明しているが[558]、 厳密に言えば、金正日の現地指導の回数からは権力移動が証明されない。ただし、90年から金正日の実務指導が金日成に対してのみ使われた現地指導に昇格されたことからその比重が大きくなったという説明が可能である。そして、金正日の現地指導が金日成のそれを上回った時期は、1984年、1988年、1992年のみであるが、これは金日成の健康と事業を補佐及び補完する役割として説明される。1984年に13回（平均

557 伊豆見元『北朝鮮で何を起きているのか』ちくま新書、2013年、107頁。
558 이관세 『북한의 현지지도와 정치리더십에 관한 연구』（李グァンセ『北韓の現地指導と政治リーダーシップに関する研究』ソウル：北韓大学院大学校、博士論文、2007年）145頁。

5回の2.6倍）に金正日の現地指導が急に増えたのは、5月から7月までの金日成のソ連及び東欧への訪問による不在と、その後10月にはソ連の医療診を要請して心臓治療を受けたことによる金日成の健康悪化に起因したものである。金正日は、金日成の代わりに数多くの現地指導を行ったがこれは首領の「健康と事業」を補佐する役割であった。

また、1988年に急に15回（平均の3倍）へと増えた理由は、金日成の健康悪化に関係していたと考えられ[559]、金正日は金日成の代行として現地指導を遂行したからである。また、1992年に9回（平均の1.8倍）に増えたのは、金日成の誕生80周年に当たって、過去15年間推進してきた記念碑的建築物の現場への現地指導と、人民軍最高司令官（91年12月に推戴された）として軍部隊に対する視察があったからである。このような金正日の現地指導は、金日成の不在と健康悪化、そして偉大性を高める事業に対する、補佐・補完的政治行為に過ぎない。つまり、金日成の政治領域の中で、金正日の政治行為が行われたことになる。

李ギョドクの『金正日現地指導の特性』によると、金正日は1981年から94年まで13年間に70回に及ぶ現地指導を行ったが、金日成の死後1994年から2002年までの9年間には凡そ302回の現地指導を行った[560]。金日成の死亡以前の金正日の独自的現地指導は、金日成の現地指導の1/4にも至らない。これは、金正日がナンバー2であったにせよ、1993年までは金日成の活発な現地指導を（補完的に）遂行したからであると李ギョドクは指摘している[561]。金日成は過去に比べ近距離の現地指導を行い、その回数は変化しないが、金正日は遠距離の現地指導を行い、

---

[559] 1988年9月9日、平壌で開催された共和国創建の記念宴会で金日成は、途中で席を空けた。その前に中国の楊尚昆国家主席などと一緒に座った席で、蒼白な顔をして宴会の途中に去ったために病中にあることが知られた。「김일성 건강불안설」『동아일보』（「金日成の健康不安説」『東亜日報』1988年9月22日）3面。
[560] 李ギョドク、『金正日現地指導の特性』、28頁。
[561] 同上、28頁。

その回数に比べ移動距離が多いという特徴が現れた。。

権力あるいは支配の正当化論理から見ると、金日成にとって現地指導は人民の生活を向上させるための直接的意味を持つとすると、金正日にとって現地指導は首領の意志を実現するために人民を導くような首領と人民の中継者役割として間接的意味を持つことになる。このように金日成と金正日の現地指導を比較検討すれば、金正日は金日成の事業を補佐・補完する役割を遂行したことが明らかになる。

(2) 文献の計量分析

確かに、金正日の役割は徐々に拡大するようになったが、それは最高権力者の金日成の高齢化に正比例するものであった。金正日はナンバー2になった後、1982年に「労作」といわれる談話などを公開し、北朝鮮の方向を示すものとして一定の影響力を持つようになり[562]、1992年2月には金正日の50歳の誕生日を記念して最初の選集類の形態である『金正日選集』第一巻を出版した。1979年から刊行された『金日成著作集』のような金正日の著作の本格的な体系化作業に着手したのである[563]。これも金正日の地位が一段と高くなりその役割が増加したことを立証するものである。

ところが、序章ですでに述べたように、現在も北朝鮮は金日成の文献を「教示」、金正日の文献を「お言葉」と称して両者の地位と役割を差別化している。すなわち、それは『金日成著作集』と『金正日選集』に収録された文献を「教示」と「お言葉」に区別することを意味する。1992年に出版された『朝鮮語大辞

---

[562] 伊豆見元、『北朝鮮で何を起きているのか』、107頁。
[563] 김병로 「김정일저작 4백건의 허와실」(金炳魯「金正日著作400件の虚と実」『北韓』1994年2月号)57頁。

典』によれば、「教示」は、指針と認める教えを示すことであり[564]、「お言葉 」は相手に対する尊敬語と言われる[565]。つまり、政策決定において金日成の「教示」は政策原則及び指針を定め、一方金正日の「お言葉」は（一般の人々より尊敬語として）大衆の行動を導く方針として位置づけられることになる。

以下では、「教示」と「お言葉」の差異を明確に検討するために、金正日が表舞台に登場した1980年から金日成が死亡した1994年7月までの金日成と金正日の文献を比較分析する。金日成の教示は『金日成著作集』を使用し、金正日のお言葉は『金正日選集』を使用する。

年度	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	総合
金日成	33	33	29	17	17	19	22	15	17	18	16	19	15	19	17	306回
金正日	10	6	12	5	9	10	9	5	7	6	15	12	17	6	2	131回

出所：『金日成著作集』、『金正日選集』より筆者作成

［表5-3］ 文献に収録された「教示」と「お言葉」の頻度

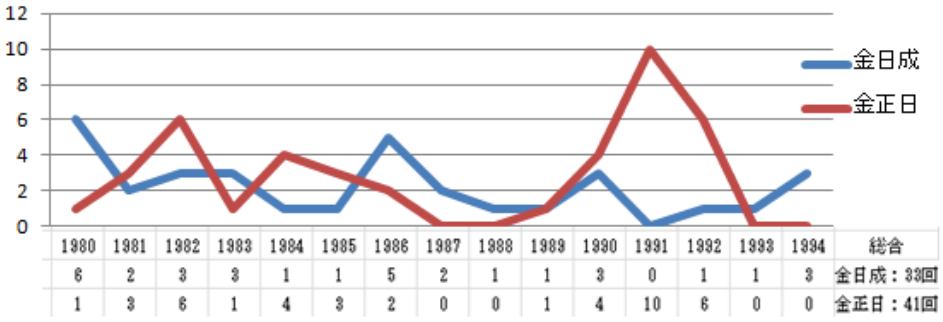
［表5-3］に表れたように、15年間の金日成の「教示」は計306回で、毎年平均20.4回行ったことになる。一方金正日の「お言葉」は計131回であり、毎年平均8.7回行ったことになる。金日成の「教示」は、金正日の「お言葉」に比べて2.3倍も多い。金日成の「教示」は1980年から1982年にかけては毎年30回前後であり、それに比べれば1983年から少し減る傾向を見せるが、その以後毎年平均を維持している。これは広い領域で金日成が政治活動を行ったことを示している。さらに、1994年には半年を過ぎた7月段階ですでに17回も「教示」を行っているが、その

564 『조선어대사전』제1권（『朝鮮語大辞典』第1巻、平壌：社会科学出版社、1992年）292頁。
565 『조선어대사전』제2권（『朝鮮語大辞典』第2巻、平壌：社会科学出版社、1992年）1068頁。

ことは、金日成の政治活動が最後まで活発であったことを証明するものであろう。

他方、金正日の「お言葉」は、1980年代に入って書簡と論文、祝賀文などの形で公開されるが、その数は1990年から増加するようになる。李ギョドクの『金正日選集の解題』の分析によれば、これは金正日が公式的な後継者になった同時期に、直接行事に参加できない場合は書簡をもって代替せざるを得ないほど活動半径が大幅に増えたからである[566]。のみならず、本研究の観点から見ると、「教示」の原則と指針とは異なり大衆を導く方針という「お言葉」の特性上、書簡や論文、祝賀文は、すでにある首領の教示を貫徹する執行者の特徴を持つ。たとえば、1982年と1990年、91年、92年には金正日の文献の数が急激に増加した。その理由は、1982年3月に発表した「主体思想について」の論文をはじめとして、金日成の誕生70周年を記念する書簡と祝賀文が六件に及んだからである。また、1990年には国際環境の激変を経験してから「朝鮮労働党はわが人民のすべての勝利の組織者であり響導者である」という論文を出し、そのほか「われわれ式」のイデオロギー再解釈と書簡を含む数は四件、1991年には上で説明したように「五大論文」と書簡を含む数が十件、92年には「主体文学論」などの論文と書簡を含めて六件もの「お言葉」が発表された。

[566] 이교덕 『김정일선집의 해제』 (李ギョドク『金正日選集の解題』ソウル：統一研究院、2001年)5頁。

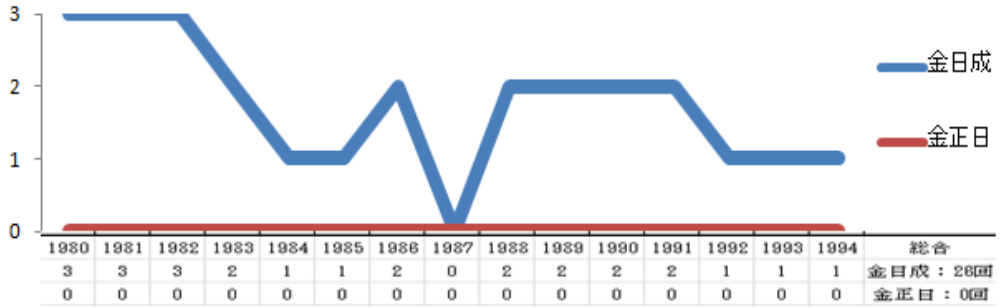


出典：1980年から1994年7月まで行った『金日成著作集』と『金正日選集』を参照して筆者が作成。

[図5-3]　金日成・金正日の「講義録及び論文、書簡」の頻度

[図5－3]に表れたように、金日成の論文及び書簡の総数は33件であり、それに比べ、金正日は41件で金日成より8回多い結果が出ている。北朝鮮において、金正日の論文は金日成の思想を体系化した実践理論として位置つけられることを想起すると、金正日とっては政策の執行権限が拡大したことを意味する。

つぎに、両者の文献の内容において北朝鮮の政治行為で最も重視される大衆演説、政策の結論と命令、対外政策に関連する内容を比較分析して見よう。第一に、最高権力を象徴する最も重要な事例は大衆演説である。北朝鮮で大衆演説は、毎年の正月に行う「新年辞」と国家の中長期的政策方針、課題と方向を提示する「施政演説」がある。下の[図5-4]のように、金日成の大衆演説は合計26回を数えたのに比べ、金正日は大衆演説を１回も行ったことがない。金日成は１年の政策方向を示す「新年辞」を1980年から1994年の15年間に1987年（1986年12月30日に行った「施政演説」を代替させた）を除ければ、14回行っており、残り12回は中長期的政策方向を示す「施政演説」であった。



出所：『金日成著作集』、『金正日選集』より筆者作成。「新年辞」と「施政演説」を「大衆演説」と表記。

[図5-4] 文献に記録された「大衆演説」の頻度

もし、金日成から金正日へと権力が移譲されていたのであれば、金正日による「新年辞」になるべきであったと言ってよいが、実際は金日成が死亡する1994年に至るまで変わりなく「新年辞」を読みあげ、一年の政策を宣布したのである。これは、金日成がまさに死を迎える瞬間まで一線から退くことがなかったことを示す事例である。また、人民大衆にとって、「新年辞」や「施政演説」を行う金日成の肉声は、毎年少なくとも2、3回耳にするものであったが、金正日の肉声は1992年4月25日の朝鮮人民軍創建60周年を祝賀する閲兵式で発した「朝鮮人民軍将兵に光栄あれ！」と言う一つの言葉だけであった。このような肉声の発出は、人民大衆に首領の地位を極めて明確に認識させる機会であるために、人民にとって金日成は非常に絶対的な存在であったのである。

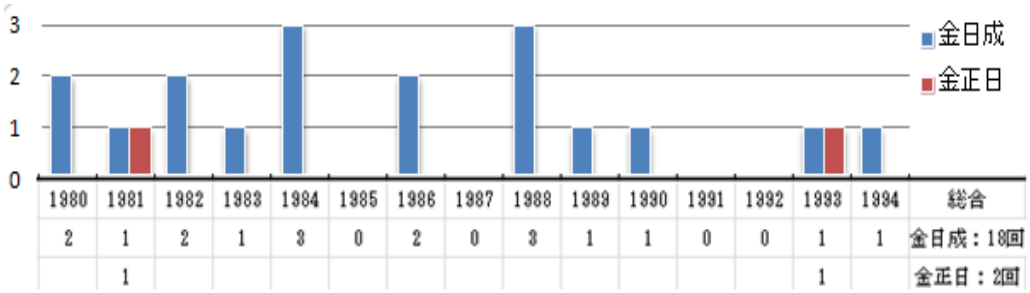
第二に、政策の結論と命令について見てみると、15年間に金日成は18回それを発し、一方金正日は2回であった。それ以外にも、『金日成著作集』のみではなく『朝鮮中央年鑑』や『労働新聞』に掲載された共和国主席の命令を含めれば、金日成のそれはさらに多い。金日成の多くの結論や命令に比べれば、金正日は1981年3月に開催された全国党扇動宣伝部会で出した結論１回[567]、1993年3月に行

[567] 김정일 「당사상사업을 더욱 개선 강화할데 대하여」（金正日「党思想事業をさら

った人民軍最高指令官命令１回であった[568]。

結局、政策決定にあたって「結論」は「教示」の意味と同様に金日成の支配的地位を反映している。前述したが、金正日人民軍最高司令官の命令権と指揮権は、金日成党中央軍事委員会委員長の決定権から出されるものである限り、金正日の「命令」は、「お言葉」の意味と同様に金日成の意志や欲望を貫徹する執行者の役割に過ぎないことになる。

以下の［図5－5］で結論と命令を通して見た「首領権力」は、どこまでも決定権が金日成にあり、金正日は最高脳髄の意志を実現する執行権を持っていたに過ぎないことが指摘されよう。



出所：『金日成著作集』、『金正日選集』より筆者作成。

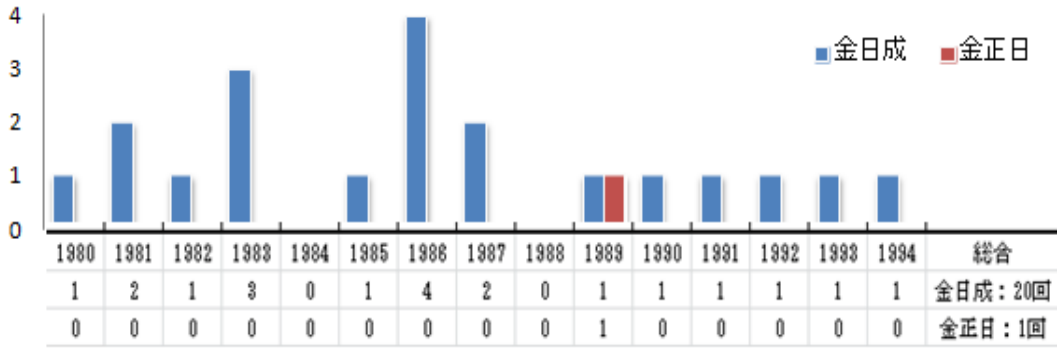
［図5-5］ 金日成・金正日の「結論及び命令」頻度

第三に、対外政策に関する文献的分析を試みよう。「教示」と「お言葉」において対外政策に関わる演説や談話、インタビューを計量化した結果（［図5-9］）、15年間に金日成は20回で毎年1、2回行ったことになるが、金正日は僅か１回のみであった。周知の通り、1980年から1994年の間に金日成は国家の代表とし

に改善強化するために」全国党宣伝幹部大会での結論、1981年3月8日、『金正日選集』第7巻）1－36頁。

[568] 김정일 「전국, 전민, 전군에 준전시상태를 선포함에 대하여」 （金正日「全国、全民、全軍に準戦時状態を宣布することについて 」 朝鮮人民軍最高指令官命令第0034号1993年3月8日、『金正日選集』第13巻）370－372頁。

て中国やソ連・東欧などへの訪問を行ったが、金正日は1983年に中国に後継者の資格で訪問したことがあっただけであった。それも同じ文脈で読み取れることになろう。



出所：『金日成著作集』、『金正日選集』より筆者作成。

[図5-6] 金日成・金正日の外国人に対する「演説・談話」の頻度

[図5-6]に示されたように、対外政策に関わる金正日の政治行為は、1989年10月に行ったキューバの新聞の社長とのインタビューだけであった[569]。金日成はほとんど毎年外国からの代表団を迎え国際会議で演説を行ったが、それは、国家を代表する最高権力者として一線から引退しなかったことを証明するものである。金日成は80歳を迎えた1992年以後も、90歳まで仕事を続けることを目指し、政治の一線から後退も、引退もしなかった[570]。金日成は身体的機能の低下によって、「現地指導」や軍部隊の視察など自らが実行し難い部分の仕事を息子に引き継ぎ、そうした金正日の補完的役割によって党・国家・軍を掌握したのである。それ以

[569] 김정일 「꾸바신문 ≪그란마≫사장이 제기한 질문에 대한 대답」(金正日「キューバ新聞『グランマ』社長が提起した質問に対する答え」1989年10月26日、『金正日選集』第9巻)。

[570] 1993年2月12日には文学芸術部門幹部に対して「みなさんが私の万寿無疆を祝宴してくれますが、私は健康です。今のようですと約10年はもっと仕事をすると思います。昨年インドの副大統領がわが国を訪れましたが、彼は私がとっても元気に見えると言いながら、私の誕生90周年に再び来ると言いました」と述べて、90歳まで仕事を続けたいとの意思があることを示した。

外にも、金日成の活動は、彼の生涯の最後の一年間（1993年7月から1994年7月初頭ま）に国内ではもちろんのこと、対外活動もきわめて活発に行ったことに注目する必要がある[571]。こうした事実は、金日成が最後まで最高権力者として務めたことを証明するものである。

[571] 『위대한 생애의 마무리』（『偉大な生涯のまとめ』平壌：朝鮮労働党出版社、1997年）141頁。

小　結

以上で検討してきたように、金日成から金正日に権力が移動することはなかった。むしろ、金日成の権威と権力がさらに強化される中で金正日の役割は増加し、首領偉業に吸収されのである。すなわち、金日成の権力の範囲の中で増加する金正日の役割は、権力の分立や権力移動ではなく金日成の権力維持を支えるものとして発揮されたのである。金日成・金正日が権力の「唯一的効果」の産出を目指して、政治手段の拡大再生産を繰り返しながら、金日成が80歳、金正日が50歳になる1992年を迎えて権力の安定化を試みたのである。

1990年代に入って、人民軍最高司令官や国防委員長に推戴された金正日の役割は、金日成の高齢化が進めば進むほど、彼の肉体的機能が低下すればするほど、より強固なものとなった。人民の目には金正日が権力者として映る可能性が高かった。人民を直接指揮するのが金正日であると認識させるために、党と人民大衆の「渾然一体」制をなした上で手紙形式の「情緒政治」や、三つ子に対する温情と青年たちの結婚式や人々の誕生日等に金正日名で下賜した贈り物などは、実際、金正日を最高権力者として一般の人民に認識させたかもしれない。さらに、金正日の誕生日に金日成が贈った頌詩などは、金正日の役割を高めることを目指したパフォーマンスであった。

しかし、このような政治過程で北朝鮮が目的としたのは、金日成の権力維持であった。金正日が最高権力者のように見えても、決して金日成の権力が弱体化することはなく、むしろ権威がさらに高くなった理由は、金日成と金正日の権力関係が、あくまでも両者の相互依存的比例関係であった。①首領と戦士の関係に設定し、金正日を首領に「忠誠」を尽くすことを第一の生命にする「忠臣」となし、また、②親と子の関係の中で、金正日を親に対する「孝誠」が最も明確な

「孝子」と位置付けた。子が親を代えることができないように、戦士は首領を代えることができないという絶対的服従者として設定された金正日は、金日成に「忠誠」を尽くすことを第一生命とする首領の分身のような存在になった。このような関係は、金日成が金正日の銅像の建立を拒否したのみならず、金正日の業績を伝えるすべての記念碑の建立も不許可としたこと、あるいは、建設することになった「3大革命展示館」の内容も金正日の業績から英雄的大衆主義を領導した首領偉業へと修正した事実からも、十分に証明されると言ってよい。

このような金日成の権力観は、1992年4月に改正された憲法にも反映された。旧憲法において、主席は国家主権を行使する機関と同等の位置づけで構成されたが、改定憲法では主席の下に、国家の主権機関である最高人民会議や国防委員会、中央人民委員会が構成されることになり、主席制の命令体系が合法化された。こうして金日成は、金正日との関係において「首領と後継者の関係」、「命令を下す主席と執行する国防委員長の関係」を設定すると同時に、高齢化に伴い進行する身体的機能低下を、金正日を自らのいわば「分身」にして仕事をさせることで補い、より一層の権力強化を図ったのである。権力を維持するためには、現状維持では不足である。権力の強化を目指してこそ権力維持が可能になることを、金日成は十分に認識していたものと思われる。

対外政策が国内政治を反映するのは一般的常識でもあり、北朝鮮が頻繁に論じる政治的現状でもある。国内における金日成の「首領権力」は、対外政策の面でも十分に発揮されていた。1990年9月に北朝鮮を訪問した自民党副総裁の金丸信に日朝国交正常化という重大な提案を直接したのも金日成であり、1990年10月に平壌で開催された第二回南北高位級会談で「二つの政府」が共存し得るとの意向を示し、91年1月1日の「新年辞」で「一つの民族、一つの国家、二つの制度、二つの政府」からなる統一方案を提案して過去からの姿勢転換を図ったのも、金

日成であった。従来主張してきた「一つの朝鮮」政策を放棄する大譲歩を金日成は行ったのである。

また、1994年6月の米国カーター元大統領訪朝の際にも、金日成は政策の最高決定権者として核兵器開発計画の中断を前提とする米国との取引を志向した。さらに同年7月後半に開催されることになった南北首脳会談についても、その開催を決断し準備したのは金正日ではなく金日成であった。金日成が90歳まで仕事を続けたいと考えていたことは明らかであり、それを可能にする環境作り腐心していたことは、二回目の南北首脳会談は自らが韓国に赴きソウル市内で演説を行うことを計画していたことからも確認されるだろう。結局、対外政策の大きな変更を僅かな時間内で決定することができたのは、金日成が「社会政治的生命体」の最高脳髄として、政策決定過程の「最終決定権」を常に独占していたからである。対外政策の決定に、金正日が介在する余地は全くなかった。それこそが、死の瞬間に至るまで、金日成が北朝鮮の最高権力者であったとことを、如実に示していると言ってよいだろう。

終　章

１.「首領権力」の確立

北朝鮮の現代史は「金日成政治史」と言えるほど、金日成の影響力は非常に大きい。金日成の生涯は、建国初頭から1994年の死亡に至るまで最高権力の獲得・強化・維持を目指した権力再編の連続であった。北朝鮮で金日成を象徴する「首領」は、絶対的地位と決定的な役割を占める「唯一無二」の存在として位置づけられるものである。しかし、「首領も人間である」限り、「人間の限界から逃れられなかった」[572]。金日成は存命中に「80の高齢にも関わらず、超人間的な精力で限りなく活動したために、心臓病が悪化するようになった」[573]と言われる。金日成の健康悪化は、長い間の心臓病に加えて、「目の手術を受けた」[574]こともあり、1980年代に入ってから「耳が遠くなり」、1980年代末には耳の難聴現状が深刻になった。金正日の言葉を借りれば、金日成は「多年間にわたって心臓病を患った」にもかかわらず、「病のために仕事ができなかったことは一回もなかった」[575]。それほど金日成は、無理に無理を重ねてきたと言えるだろう。

北朝鮮の『心理学概論』によれば、一般的に老年期の「肉体的・生理的機能の低下は人の精神作用と生活に影響を及ぼし」、「有機体的適応能力が低下され、(仕事に関して)やりたい気持ちは山々だが、身体が従わないことが特徴である」

572　『위대한 생애의 마무리』(『偉大な生涯のしめくくり』平壌：朝鮮労働党出版社年)146頁。
573　김정일 「위대한 수령님을 영원히 높이 모시고 수령님의 위업을 끝까지 완성하자」(金正日「偉大な首領様を永遠に高く奉じ、首領様の偉業を最後まで完成しよう」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話、1994年10月16日、『金正日選集』第13巻)170頁。
574　同上、622頁。
575　同上、624頁。

という[576]。最高権力者であった金日成の高齢化は、彼の絶対的権力に影響を及ぼすが故に、その対応策はきわめて国家的重大な課題になったと考えられる。金日成の「健康と仕事」を補佐する金正日の役割が増加する中で、そのまま進めば権力中心が金日成から金正日に移る可能性も出てくる。権力中心が金日成から金正日へと移行したとするならば、金日成の最高権力は相対的に弱体化するはずである。だが現実はそうはならなかった。金日成はとりわけ、外交、軍事、対南政策の決定権を決して手放すことはなく、それもあって死に至るまで、権力中心を維持し続けたのである。

金日成は、1980年代半ばまで、独裁権力の「獲得及び強化」に努めてきたが、1986年以降は「維持及び安定化」への再編を目指して「首領権力」を創造した。その結果、金正日の役割が増加したにもわらず、自らの最高権力をさらに安定化させ1994年7月8日に死亡するまで引退することもなく、最高決定権を握ったままに政治を続けることになった。

本研究では、金日成の高齢化を迎えた時期、実際に金日成が最後まで最高権力を維持してきたことを「首領権力」の仮説を通して検証した。金日成の生涯の晩年期であり、金正日の役割が最も活発になった時期である1986年から1994年を研究時期として設定し、両者の間で権力中心が移譲されたのか否かを検討した。その結果は次のようである。北朝鮮で「首領」概念が金日成の独裁権力を正当化するための手段であったことが、三つの時期に分けて説明された。第一段階は、1967年に「党の唯一思想体系の確立」を宣布した以後の「首領への党の価値集中化」を求める時期である。第二段階は、1972年に「主席制」を導入してから、金日成が党総書記と国家主席を兼任して制度的権力を掌握し、さらに、その上に首

576　李ジェスン、前掲書、433頁。

領として君臨した1985年までの時期である。この時期の特徴は「首領の権威(偉大性)構築」であり、また主に首領の「健康・仕事」を補佐することが国家の最優先的課題に設定され、後継者の登場を促したことである。したがって、「首領」範疇の中に後継者が位置づけられ、後継者の役割はイデオロギー解釈と党宣伝によって首領の権威（偉大さ）を高めることであった。金正日は、「寝ても覚めてもどのようにすれば首領をもっと奉じることができるのかという思いのみであり」、首領をさらに高い地位へと奉じることを金正日自身の「最も大きな使命」[577]としていたのである。

第三段階は、1986年からの「首領権力」の生成期である。全社会の絶対的存在であった金日成は高齢化が進む中で、最高権力（最高決定権・命令権・執行権）のうちの執行権を金正日に任せるようになった。金正日の役割が行政権にも拡大する必要が提起される時に、金日成はそれに対応する形で「首領権力」を創り出したのである。「首領権力」は、「社会政治的生命体」とその中で、首領と後継者、首領と党、首領と人民大衆、首領と個人といった具体的な関係を再構築した「首領中心の権力構造」を持つものであった。「首領権力」の特徴は、首領中心の地位と最高決定権をさらに強化したことである。「首領権力」は「社会政治的生命体」という「閉じた系」を設定した中で、金日成と人々の関係を「生命の繋がり」と位置づけたが、その構成要素の相互作用を通して金日成は絶大な権力を振るうことになった。

ラスウェルによると政治変動は、営為の範囲と変化の程度から、変革

---

[577] 김정일 「위대한 수령님을 높이 모시고 사회주의 건설을 다그치며 조국통일을 앞당기자」(金正日「偉大な首領様を高く奉じ、社会主義建設を促進し祖国統一を早く成し遂げよう」朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話、1982年9月9日、『金正日選集』第7巻)616頁。

(transformation) と変更(reformation)に分けられる[578]。また、変化・改革が既定の政治的方法に則ってなされるか否かにより、穏健的と急進的とに分けられる。北朝鮮は権力の営為の範囲を「社会政治的生命体」に続けて1990年には「われわれ式社会主義」に、そして1992年には「一つの大家族」に定め、その中で構造の変化を促がしてきた。金正日はこのような変化を「社会政治的及び経済的変革」と呼んだ。本研究ではこのような変化を「静かな変革」と位置づけた。

２.「静かな変革」による「首領権力」の特徴

「首領権力」は、支配の安定性を目指した。第一に、「社会政治的生命体」という「閉じた系」の設定とその中での「首領」の地位の変化を通して、金日成の権威を最大化し、権力の絶対量を決めたことから「権力維持」への変化がはじまった。首領の絶対的地位は、主体思想の創始者、祖国の解放者を称する建国神話（建党、建国、建軍）に基礎を置き、国家の生成と発展過程を総括する特殊な地位を象徴化するものであった。もちろん、このような論法は過去の「革命と建設」においても強調されたものであるが、「社会政治的生命体」の最高脳髄になった首領の比重は、過去より格段に重くなった。それは、首領を祖国・民族に同一化する基礎になり、人民の政治的運命を生み出す唯一の「親」として絶対化される手段になったからである。結局、金日成の絶対的地位（権威・偉大性）は、後継者・党・人民の絶対的服従を前提とした権力の絶対量を示すものであった。

第二に、目立った変化は金日成と金正日の関係を再構築したことである。元

578　ラスウェル・カプラン、前掲書、311頁。

来、首領範疇の中で登場した後継者は首領の従属変数として位置づけられたが、「首領権力」での後継者は、首領に従属しながら下位体系である党の中央に位置づけられることで、両者の関係は主従関係として構造化されたのである。「社会政治的生命体」で首領が党から分離されて格上げされたことによって、この主従関係は可能になった。首領と後継者の主従関係は「首領権力」の最も重視すべきところである。過去において両者の関係は、金正日の役割が強化されることによって金日成の権威はさらに高くなったために、金正日の役割は金日成の権威(偉大性)増大に正比例するものだとされた。

しかし、金日成の高齢化に伴う金正日の役割をさらに拡大する時期に、両者を明確に区別したのは力の絶対者（主体）と服従者（補完として権力）関係であった。つまり、金日成は生命体の中心及び最高脳髄として権力の最高決定権者であり、金正日は権力の執行部分である金日成の領導的役割を共有するものに過ぎなかった。二人の領導的役割を一つにまとめるのが「唯一的領導」であるが、その上に首領の固有性である絶対的地位と中心的役割が位置づけられ、その下には後継者の固有性である首領に限りなく「忠誠」（首領と戦士の関係）と「孝誠」（親子関係）を尽くすことが求められた。すなわち、金日成は権力の決定権を自らの絶対的ものに設定し、執行権において金日成と金正日の領導を示す「指揮権の統一」を図った。それによって自らの高齢化と金正日の忠誠心を正比例関係に設定し、金正日の活動業績を吸収する構造を創り出し、支配の安定性を試みたのである。

第三に、党の位相と機能が格下げられたことが明らかになった。過去の党は「革命と建設」の「心臓」であったが、「首領権力」においては「社会政治的生命体」の「神経」に変換された。これは「社会政治的生命体」で首領が党から分離され格上げされたからであり、首領と党の間に後継者を位置づけられたからで

ある。元来、1986年に開催する予定であった第7回党大会は、「社会政治的生命体」論が登場したことによって結局開催されることがなかった。「首領権力」において党の地位が「心臓機能」から「神経機能」へと格下げされたためであったと考えられる。「首領権力」は、1980年に開かれた第6回党大会以降、現在に至るまで党大会は開催されていない理由にもなる。

第四に、政治方式の変化が明らかになった。「社会政治的生命体」で権力の対象者である人民は首領の領導に従う受動的存在として位置付けられた。「首領権力」は首領と人民を結び付ける「唯一的思想体系」、「情緒・感性の教化体系」、「唯一的領導体系」によって三つの統治過程を持つことになった。一つ目は「唯一的思想体系」であるが、これは金日成の意志が後継者の役割によって党の神経機能を通して人民大衆に届くような認識体系であり、二つ目の「情緒・感性の教化体系」は人民大衆に思想教化と文化情緒的刺激を与え、忠誠心を作り出す感情操作過程であり、三つ目の「唯一的領導体系」は、人民大衆の忠誠心が党の神経機能と後継者の役割を通して首領に届くような実践及び行動体系である。過去においては認識・実践に基づいていた思想体系が、「首領権力」では認識・感情・行動に構成された思想体系・感情体系・領導体系に変え、その中で領導体系をさらに重視したことが特徴的である。

権力の維持と行使には権力者の「身体的安全」と「権力の排他性」が最も重要な一次的問題となる[579]。独裁者の高齢化問題は、最高権力を維持するか否かに関わる最も重要な問題であった。90歳まで仕事を続ける意志を強く示した金日成にとって、1987年は75歳になる年であり、北朝鮮の心理学で言えば、人間の生涯で老衰期に当たる時期であった。金日成は「有機体的適応能力が低下する時期」

[579] 白鶴淳、前掲書、740頁。

に「自己中心性が強くその以外にも、未来に対する構想の代わりに自己生涯に対する回顧的傾向が表れる特徴」[580]を持つ一般的な老年期と、とくに異なるわけではなかった。しかし、金日成は権力維持への「強い要求に比べ能力は伴わず」、その足らない部分が金正日によって補完されることを求めたのである。「首領権力」は金正日の補完的役割から得られた成果を首領の業績へと吸収し、金日成の偉業として蓄積される過程に権力構造を再編するものであった。

３．国際環境の激変とさらなる「首領権力」の強化

このような金日成の高齢化に従う「静かな変革」は、「社会政治的生命体」の「首領中心論」から始まり、革命伝統の再構築と民族の歴史的再解釈を通して金日成を現存する北朝鮮の建国始祖として位置づけるシンボル操作によって進められた。そうした過程で、1989年に起きた国際環境の激変は、北朝鮮に社会主義諸国が崩壊する中で「生存の維持」というもう一つの重い課題をもたらしたのである。北朝鮮は、1990年から「社会政治的生命体」という「分割不可能」な空間をさらに、他の社会主義と区別される「われわれ式社会主義」として概念化し、党・国家・軍隊を「われわれ式」の中核となる首領の私的手段へと変更させたのである。この過程で、金正日の役割は徐々に増大することになった。

金日成は1990年に党内部の組織改編を通して国家権力を担当した党行政部を、金正日の直轄部署である組織指導部に編入することを許可し、同年5月には最高人民会議第9期第1回会議で国防委員会を再組織して金正日に第一副委員長職を与

580　李ジェスン、前掲書、434頁。

えた。また、1991年12月24日には人民軍最高司令官、1993年4月には国防委員長に金正日を就けたのである。その一方で、大衆には金正日に対する権力集中と見えるような政治イベントを行い、金正日の権威を高めることに腐心した。金日成が金正日の50歳の誕生日にあたって作り出した「頌詩」や、様々な機会で金正日に対する賞賛を行ったことなどがそれである。このような政治行為は、形式的に見れば先行研究で論じられたように権力移動という解釈を生み出すことになったと考えられる。

しかし、本研究の観点から見た場合、金日成が金正日の権威を高めたのは、それによって自らの更なる権力強化を目指したものであった。当時、1992年の金日成の80歳の誕生日と金正日の50歳の誕生日を迎えて、金日成と金正日を一緒に奉ずる銅像の建立が計画されていたが、結局、金日成の反対によって金正日の銅像は建立されなかったという事実もまた、金日成の権力への意志がどれほど強かったのかを説明する事例であると言ってよい。

1980年代の金正日の業績を伝える「蒼光山大記念碑」と金正日の幼い頃を伝える「長子山記念碑」の建立が金日成の指示によって撤回され、結局、「3大革命展示館」のみが首領の領導を伝えるように内容を修正して金日成銅像の後ろに再建立されたことも、金正日の領導的役割の結果が金日成の業績に吸収される「首領権力」の一環であったことをよく示していた。それらは、1980年代以後、金日成死後に備えるための「金正日後継体制」の構築ではなく、金正日を金日成の機能の一部として取り込む作業が加速化されたことを意味していたと言ってよいだろう。また、国家全体を「一つの大家族」にまとめ、その中で首領を親と認め、人民を子と位置づけて、首領と人民を「擬似親子関係」に設定したことも、金日成に「首領」の地位に加えて人民に生命を与える「親」の地位を与えて、子が親を超えることも代えることもできない絶対的地位の条件をさらに固めるもの

であった。

金日成にとって、①金正日の活動領域が広くなる時に、金正日は首領の戦士として「忠誠」を尽くし、息子として親に「孝誠」を尽くすモデルとして位置づけられ、それを②全国に首領と人民の関係として拡大させた。「忠誠」は過去から持続的に求められたが、「孝誠」は新たに求められるものであった。前者が思想意識であるとすれば後者は感情・情緒が作動するものであり、それは究極的に首領を擁護するための「銃爆弾」として行動することを人民に強要するものであった。

対外政策においても、金日成は最高決定権者であった。建国から北朝鮮のみを承認し支援してきたソ連は、1990年に国際環境の激変と共に韓国を承認することになったが、これらの「不利な状況」を転換する対外政策の決定も金日成の直接的な言及によってなされた。90年9月に平壌を訪問した自民党副総裁の金丸信に対して金日成は、日本に「前提条件なし」で国交正常化交渉を始めることを提案したのである。それは日本にとっても予想外の出来事であったが、国内において政策決定を独占していた金日成は、短い間に決断することができたし、そのプロセスに金正日は参加することができなかった。

また、南北関係において「逆方向体制」への定着を試みる中で金日成は決定権を行使した。1987年から社会的実践として大衆運動として展開された「首領権力」は、同年に行った韓国の「6.29宣言」に直面し、その対応として7月15日金正日の「7.15談話」が一般に公開された。韓国の「民主主義」と北朝鮮の「首領権力」は、南北の「逆方向体制」に進む転換点になったのである。1990年10月に平壌で開催された第2回の南北高位級会談の際に、金日成は韓国側の代表団に南北の「二つの政府」の共存について新たに提案したが、この内容は、2ヵ月後の1991年1月1日に金日成の「新年辞」を通して北朝鮮の新たな統一政策となった。

もちろん、90年9月のソウルにおける第1回南北高位級会談の際には提案されることのなかった「二つの政府」の共存論は、90年9月17日に実現した「南北国連同時加盟」を前提とした提案であり、また 12月30日に「南北基本合意書」の締結を期待した提案であった。金日成が1991年1月1日に提案した「一つの民族、一つの国家、二つの制度、二つの政府」からなる連邦制という新たな統一方案は、3ヵ月という短い間に1973年以来固守してきた「一つの朝鮮」という対外政策及び統一政策の原則を放擲するものであった。それが可能であったことも、金日成が最高決定権者であることを如実に示している。

また、金日成の最高権力は、国家の存亡に関わる問題への決定権からも証明される。1994年6月のカーター米国元大統領との会談を、金正日を同席させず、金日成が全て一人で取り仕切ったことに、その点はよく示されている。金日成は、米朝関係がきわめて緊張していた時のカーターとの会談を、息子に任せることはしなかったのである。さらに、カーターの仲介を得て実現することになった金泳三との南北首脳会談の準備作業を、金日成は金正日に任せることなく、全て自分が陣頭指揮にたって進めた。金日成は1994年7月25日に平壌で開催される予定であった南北首脳会談の準備に集中しながら、第2回目の南北首脳会談をソウルで行い、そこで自分が南の国民に対して演説することまで考えながら準備を進めたのである。金日成は1995年の「統一時間表」[581]までに一年を残して死亡した。これからも10年ほど、90歳まで仕事を続ける意思があることを頻繁に述べていた金日成は、対外政策や統一政策のみならず、党・国家・軍隊・人民に関するすべて

[581] 1994年4月16日金日成は「米国『ワシントンタイムズ』記者団の「これから一年残った1995年をいまなお統一の時間表とみなしているのでしょうか」という質問に、われわれが「祖国統一の目標とした1995年は、あと一年しか残っていませんが、われわれは失望しません」と答えた。김일성 「미국 『워싱톤타임스』 기자단이 제기한 질문에 대한 대답」（金日成「米国『ワシントンタイムズ』記者団が提起した質問に対する答え」1994年4月16日、平壌：朝鮮労働党出版社、1994年）19－20頁。

の決定権を握ったまま、1994年7月8日に急死したのである。

金日成と金正日の関係は、党における党総書記と組織担当書記、国家権力における国家主席と国防委員長、軍隊における党中央軍事委員会委員長と人民軍最高司令官、人民に対する首領と指導者という関係になっている。金正日は1974年から1994年まで20年間、父親に従ったために後継者としての地位は安定的ではあったものの、絶対的決定権はなかったが故に、金日成死後、三年間の期間を三年喪と宣布し、金日成の権威を活用したいわゆる「遺訓政治」を実行した。本来であれば三年喪は、2年目に終わるのが儒教の伝統であるが、金正日は満3年間も続けたのである。もちろん、1995年からの自然災害や飢餓が継続した状況も考慮すべきであろうが、三年喪を満3年間にするという朝鮮の歴史にない事例が生じたのである。さすがに、1997年7月8日に金永南が宣布して三年喪は終了したものの、3年間も「遺訓政治」が必要であったという事実は、金日成存命中には金正日時代に向けての準備が十分に整えられなかったことを明確に示している。金正日は「父親の死後、約3年間をかけてすべての軍部隊を訪ね、自らが面接した後に師団長クラス以上の任命を行った。その部隊訪問の回数は1994年だけでも20回、95年には54回を数えると言われた」[582]が、それも3年の時間をかけて自らが金正日時代を準備しなければならなかったことを傍証する事例であろう。

金日成の最大の目的は、高齢化が進行する中で決して引退はせず独裁権力を手放さないという点にあったと思われる。たしかに、金日成はその目的を達成したと言えるかもしれない。しかし、金日成が長年の政策課題としてきた「人民生活の向上」も、「祖国の統一」も、「米国との敵対関係の解消」も全て実現はできなかった。金日成は、「国家の最高統治者」として、自らが目標として設定し

[582] 伊豆見元「朝鮮半島情勢の新展開と北朝鮮の『大量破壊兵器』」『新防衛論集』第28巻第4号、19－20頁。

た課題については何一つ目覚ましい業績を残すことなく、それらを全て「負の遺産」として金正日に引き継ぐだけで、82年に及ぶ自らの生涯を閉じたのである。

本研究で意識したのは、第一に、北朝鮮の最高権力者である金日成が自らの高齢化をどのように認識し、同時に自国にとってきわめて不利な状況をもたらした国際環境の変化をどのように認識し、とくに、1987年に行った韓国の「民主化」をどのように認識し、その二つの課題にどのような対応策をとったかを明らかにすることであった。第二に、北朝鮮の一般民衆が北朝鮮の権力者が打ち出す様々な施策（すなわち、上記二つの対応策）をどのように認識し、受け入れたのかを常に意識しつつ、上記の北朝鮮の対応策を検討することであった。以上のように、北朝鮮内部の視点、あるいは北朝鮮の一般大衆の反応という点を視野に収めて1986年－1994年間の北朝鮮の対内外政策を分析したのが、本研究の特徴の一つである。本研究では、金日成から金正日への権力移譲はなく、金日成の権力中心はさらに安定的であったことを明らかにした。

現在、北朝鮮の政治動態を「首領権力」の視点から見た場合、金日成の絶対的権威が世襲権力を支える基盤として依然として機能していることが指摘される。その点で、「首領権力」の現在的意味はけっして小さくない。「首領権力」によって北朝鮮に根深く浸透した虚構神話は、人々の慣習と規範として文化的情緒を形成する要因になった。金正日時代も、金正恩時代も金日成の権威と社会的凝集力は不可分になっている。

金日成の「建国神話」は虚構であるが、「首領権力」によって強力に再構築された金日成の建国神話は、北朝鮮の伝統としての地位を獲得し支配者の正統性に繋がる。領導的役割（権力）は指名によって「世襲」されるものの、金日成の伝統的権威、カリスマ的権威を意味する偉大性は世襲できない。そのために、金

日成の誕生した1912年を主体年号と設定し、2013年4月には「錦繡山太陽宮殿法」を制定し、「首領永生偉業」を聖なる伝統として保存することになったと思われる。そこには、金日成の影響力を政治の正統性として使用しようとする意図が如実に窺われた。いずれにせよ、金正日時代を振り返る際にも、また金正恩時代を分析する際にも、金日成の「首領権力」が依然として北朝鮮政治に一定の影響力を持っていることを視野に収めて考察する必要がある。この問題については今後の研究課題としたい。

参考文献

Ⅰ　北朝鮮の資料

１．公刊文献

(1)　日刊・ 月刊・年刊の定期刊行物

『경제연구』(『経済研究』1987年～1994年)。

『국제생활』(『国際生活』1986年～1988年) 。

『근로자』『勤労者』(公開：1967年～1991年、非公開：1992年～2005年)。

『로동신문(労働新聞)』。『민주조선(民主朝鮮)』。

『정치법률연구』(『政治法律研究』2004年～2011年)。

『조선중앙년감』(『朝鮮中央年鑑』1973年、1982年、1988年～1995年)。

『천리마』(『千里馬』1987年～1994年)。

(2)　辞典類

『삼지연』（タブレット電子辞典『三池淵（サムジヨン）』平壌、2013年)。

『정치사전』(『政治辞典』平壌：社会科学出版社、1973年)。

『조선대백과사전(3)』（『朝鮮大百科事典(3)』平壌：百科事典出版社、1996年)。

『조선대백과사전(6)』（『朝鮮大百科事典(6)』平壌：百科事典出版社、1998年)。

『조선대백과사전(20)』(『朝鮮大百科事典(20)』平壌：百科事典出版社、2000年)。

『조선어대사전』제1권（『朝鮮語大辞典』第1巻、平壌：社会科学出版社、1992年)。

『조선어대사전』제2권（『朝鮮語大辞典』第2巻、平壌：社会科学出版社、1992年)。

『조선어사전(2)』(『朝鮮語辞典(2)』平壌：科学百科辞典出版社、2010年)。

『철학사전』(『哲学辞典』平壌：社会科学出版社、1985年)。

『철학사전』(『哲学辞典』平壌：社会科学出版社、1970年)。

(3)　規約・法資料

『조선민주주의인민공화국 사회주의 헌법』(『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』最高人民会議第九期第三回会議において採択、1992年4月9日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年)。

『조선민주주의인민공화국 사회주의 헌법』（『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』最高人民会議第五期第一回会議において採択、1972年12月27日、平壌 ： 朝鮮労働党出版社、1973年）。
「조선로동당규약」（「朝鮮労働党規約」朝鮮労働党第6回大会での採択、1980年10月13日、『朝鮮労働党第6回大会文献集』平壌：朝鮮労働党出版社、1981年）。
『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』（日本語版）平壌：外国文出版社、2014年。

(4)　文献・解説資料

『김일성저작집』（『金日成著作集』平壌：朝鮮労働党出版社、1979年～1995年、第2巻、第7巻―第44巻）。
『김일성전집』（『金日成全集』平壌：朝鮮労働党出版社、2009年～2011年、第81巻、第83巻―第92巻）。
『김정일선집』（『金正日選集』平壌：朝鮮労働党出版社、1992年～1998年、第1巻、第3巻、第5巻―第13巻）。
『김정일선집(증보판)』（『金正日選集（増補版）』平壌：朝鮮労働党出版社、2010年～2012年。第6巻、第12巻、第13巻）。
『김정일동지략전(증보판)』（『金正日同志略伝（増補版）』平壌：朝鮮労働党出版社、2008年。
소학교 2학년교과서『친애하는 지도자 김정일원수님 어린시절』（小学校2年生教科書『親愛たる指導者金正日元帥様の幼少期』平壌：教育図書出版社、1987年から1999年版、2001年版、2004年版から2013年版）。
『조선로동당 략사』（『朝鮮労働党略史』平壌：朝鮮労働党出版社、1979年）。
『조선로동당 력사』（『朝鮮労働党歴史』平壌：朝鮮労働党出版社、1991年）。
『조선로동당의 사회주의 건설령도사』（『朝鮮労働党の社会主義建設の領導史』平壌：朝鮮労働党出版社、1995年）。
「친애하는 지도자 김정일동지의 로작 『주체사상교육에서 제기되는 몇가지 문제에 대하여』의 해설」（「親愛なる指導者金正日同志の労作『主体思想教化で提起されるいくつかの問題について』の解説」平壌：朝鮮労働党出版社、1988年）。
『金日成主席革命活動史』（日本語版）朝鮮・平壌：2012年。
『金正日略伝』（日本語版）平壌：外国文出版社、2000年。
資料集『祖国統一めざして』（日本語）朝鮮通信社、1990年。

２．単行本

고영환『우리민족 제일주의론』(高ヨンファン『わが民族第一主義論』平壌：社会科学出版社、1989年)。

『국가와 법의 리론』(『国家と法の理論』平壌：金日成総合大学出版社、1985年)。

김일성「미국 『워싱톤타임스』 기자단이 제기한 질문에 대한 대답」(金日成「米国『ワシントンタイムズ』記者団が提起した質問に対する答え」1994年4月16日、平壌：朝鮮労働党出版社、1994年)。

―――『사회주의 완전한 승리를 위하여』 (金日成『社会主義の完全な勝利のために』朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第8期だ1次会議で行った、施政演説、1986年12月30日、平壌：朝鮮労働党出版社、1986年)。

―――『조선로동당 건설의 력사적 경험』(金日成『朝鮮労働党建設の歴史的経験』平壌：朝鮮労働党出版社、1986年)。

김재천『후계자문제의 이론과 실천』 (金ジェチョン『後継者問題の理論と実践』1989年)。

김정일『건축예술론』(金正日『建築芸術論』1991年5月21日、平壌：朝鮮労働党出版社1992年)。

―――『무용예술론』(金正日『舞踊芸術論』1990年11月30日、平壌：朝鮮労働党出版社1992年)。

―――『미술론』 (金正日『美術論』1991年10月6日、平壌：朝鮮労働党出版社、1992年)。

―――『사회주의는 과학이다』(金正日『社会主義は科学である』平壌：朝鮮労働党出版社、1994年)。

―――『 음악예술론』(金正日『音楽芸術論』1991年7月17日、平壌：朝鮮労働党出版社1992年)。

―――『인민생활을 더욱 높일데 대하여』(金正日『人民生活をさらに高めるために』朝鮮労働党中央委員会責任幹部会議での説、1984年2月16日、平壌：朝鮮労働党出版社、1984年)。

―――『조선로동당은 우리 인민의 모든 승리의 조직자이며 향도자이다』(金正日『朝鮮労働党はわが人民のすべての勝利の組織者であり、嚮導者である』1990年10月3日、平壌：朝鮮労働党出版社、1993年)。

―――『주체문학론』(金正日『主体文学論』1992年1月20日、平壌：朝鮮労働党出版社1992年)。

———『직업동맹사업을 더욱 강화할데 대하여』(金正日『職業同盟事業をさらに教化するために』全国職業同盟幹部教習会に参加者に送った書簡、1984年5月3日平壌：朝鮮労働党出版社、1984年)。
———『주체사상교양에서 제기되는 몇가지 문제에 대하여』(金正日『主体思想教化で提起されるいくつかの問題について』朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話1986年7月15日、平壌：朝鮮労働党出版社、1987年)。
———『주체사상에 대하여』(金正日『主体思想について』1982年3月31日、平壌：朝鮮労働党出版社、1982年)。
———『현시대와 청년들의 임무』(金正日『現時代と青年の任務』朝鮮労働党中央委員会責任幹部に対する談話1988年10月12日、平壌：朝鮮労働党出版社、1989年)。
김철우『김정일장군의 선군정치』(金チョルウ『金正日将軍の先軍政治』平壌、平壌出版社、2000年)。
『당의 령도밑에 창작건립된 대기념비들의 사상예술성』(『党の領導の下で創作建立された大記念碑の思想芸術性』平壌：朝鮮美術出版社、1989年)
『동명왕릉에 대한 연구』(『東明王陵に関する研究』平壌：社会科学出版社、1994年)。
리재순『심리학개론』(李ジェスン『心理学概論』平壌：科学百科辞典綜合出版社、1988年)。
———『의식의 형성발전과 자주성, 창조성의 증대』(李ジェスン『意識の形成発展と自主性、創造性の増大』平壌：科学百科事典総合出版社、1993年)。
맑스 엘겔스 레닌 쓰달린『로동 계급의 당』(『マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン)労働階級の党』平壌：朝鮮労働党出版社、1965年。
『미학개론』(『美学概論』平壌：社会科学出版社、1991年)。
『사람중심의 사회주의』(『人間中心の社会主義』平壌：朝鮮労働党出版社、1987年)。
『사회주의 완전승리와 인민정권』(『社会主義の完全勝利と人民政権』平壌：科学百科事典総合出版社、1988年)。
심형일『주체의 법리론』(シム・ヒョンイル『主体の法理論』平壌：社会科学出版社、1987年)。
———『주체의 사회주의 헌법리론』(シム・ヒョンイル『主体の社会主義の憲法理論』平壌：社会科学出版社、1991年)。
『유훈을 받들어』(『遺訓を奉じる』平壌：金成青年出版社、1995年)。
『인민대중중심의 사회주의』(『人民大衆中心の社会主義』平壌：平壌出版社、1992年)。

전용석『수령의 공산주의적 덕성』(全ヨンソク『首領の共産主義的徳性』平壌：朝鮮労働党出版社、1991年)。
정기종 「력사의 대하 총서 『불멸의 향도』」(鄭ギジョン「歴史の大河総書『不滅の嚮導』」平壌、文学芸術総合出版社、1998年) 。
『주체미술건설』(『主体美術建設』平壌：文学芸術総合出版社、1995年)。
『주체사상 학습참고자료(용어해설)』(『主体思想の学習参考資料（用語解説）』平壌：金成青年出版社、1990年)。
『주체사상이 밝힌 조국에 대한 견해와 관점, 립장』(『主体思想が明らかにした祖国に対する見解と観点、立場』平壌：科学百科事典出版社、1987年)。
주체사상총서 제5권『사회주의, 공산주의 건설이론』(主体思想叢書、第5巻『社会主義、共産主義建設理論』平壌：社会科学出版社、1985年)。
――― 제6권『인간개조리론』(主体思想叢書、第6巻『人間改造理論』平壌：社会科学出版社、1985年)。
――― 제9권『령도체계』(主体思想叢書、第9巻『領導体系』平壌：社会科学出版社、1985年)。
『주체철학의 기본범주로서의 주체에 대하여』(『主体哲学の基本範疇としての主体について』平壌：社会科学出版社、1994年)。
『청년과 미학관』(『青年と美学観』平壌：金成青年出版社、1991年)。
최만철『충과 효』(崔萬哲『忠と孝』平壌：発行社未記録、1989年)。
최철웅외『국제공산주의 운동 안의 변절자들과 그 말로』(崔チョルウンほか『国際共産主義運動の中の変節者らとその末路』平壌：社会科学出版社、1999 年)。
허담『김정일위인상(1)』(許錟『金正日の偉人像(1) 』平壌：朝鮮労働党出版社、2000年)。
―――『김정일위인상(2)』(許錟『金正日の偉人象(2)』平壌：朝鮮労働党出版社、2000年)。
『혁명적 량심과 실천』(『革命的良心と実践』平壌：朝鮮労働党出版社、1990年)。
『후계자론』(『後継者論』東京：グウォルソバン、1986年)。
趙成伯著『金正日指導哲学』（日本語版）平壌：外国文出版社、1999年。

3．　論文

강석승　「백두산 밀영일대에서 새로 발굴된 사적물들은 항일의 혁명전통을 빛내이는 귀중한 재부」（カン・ソクスン「白頭山密営地帯で新たに発掘された史的物は抗日の革命伝統を輝く貴重な財部」『勤労者』1988年11月号）。

강하빈　「모든 형대의 사상교양은 주체사상교양의 한고리」（カン・ハビン「すべての形態の思想教化は主体思想教化の一つ」『千里馬』1988年5月号）。

「경제분야에서 제국주의자들의 반사회주의적　책동의　반동성」（「経済分野における帝国主義者の反社会主義的策動の反動性」『経済研究』1991年号）。

김양환　「우리식 국가정치체제의 본질적 특성（金ヤンファン「われわれ式国家政治体制の本質的特性」『政治法律研究』2011年4号）。

김일성　「인민대중의 역할을 높이는 것은 자주위업의 승리를 위한 담」（金日成「人民大衆の役割を高めることは自主偉業の勝利のための担保」1992年4月15日、『勤労者』1992　年4月号）。

김재성　「수령，당，대중의 통일체는 력사의 자주적인 주체」（金ジェソン「首領・党・大衆の統一体は歴史の自主的な主体」『勤労者』1987年7号）。

김정일　「맑스-레닌주의와 주체사상의 기치를 높이 들고 나가자」（金正日「マルクス・レーニン主義と主体思想の旗幟を高く掲げよう」カル・マルクスの誕生165周年および逝去100周年に当って、『勤労者』1983年5月号）。

김학봉　「수령，당，대중은 운명을 같이하는 사회정치적 생명체」（金ハクボン「首領・党・大衆は運命をともにする社会政治的生命体」『勤労者』1987年12号）。

또도르 쥡꼬브　「ブルガリア「벌가리아공산당 제13차대회에서 한 연설」（ジプコフ「ボルガリア共産党第13次大会での演説」『勤労者』1987年7号）。

리기성　「사회주의의 완전한 승리를 이룩하는데서 나서는 기본문제」（李キソン「社会主義の完全な勝利を成し遂げるところで提起される基本問題」『経済研究』1987年2号）。

리대덕　「혁명적동지애」（李テドク「革命的同志愛」『千里馬』1987年4月号）。

리동춘　「주체형의 공산주의자의 혁명적수령관」（李ドンチュン「主体型の共産主義者の革命的首領観）」『勤労者』1987年8号）。

리원경　「사회주의사회 발전과 완성의 몇가지 문제」（李ウォンギョン「社会主義の社会発展と完成のいくつかの問題」『勤労者』1986年4月号）。

―――「우리 당의 정치는 사회적인간의 본성적요구를 구현한 참다운　정치」（「わが党の政治は社会的人間の本性的要求を具現した真の政治」『勤労者』1992年

11 月号)。
리재일 「당의 유일사상체계 확립과 당정책 학습」(李ジェイル「党の唯一思想体系の確立と党政策学習」『勤労者』1972年第7号)。
리춘학 「제3차 7개년계획 시기 생산적 축적과 그 실현(李春学「3次7ヵ年計画の時期における生産的蓄積とその実現」『経済研究』1988年1号)。
「사회주의헌법을 철저히 구현하여 우리 식 사회주의를 고수하고 더욱 빛내여나가자(「社会主義憲法を徹底に具現し、われわれ式社会主義を固守し、さらに輝かせよう」『勤労者』1992年第12月号)。
「소련공산당 제27차대회 보고」(「ソ連共産党第27次大会報告」『勤労者』1987年7月号)。
안천훈 「우리의 국가정치체제는 불패의 정치체제이며 가장 위력한 정치체제」(安チョンフン「われわれの国家政治体制は不敗の政治体制であり威力な政治体制」『政治法律研究』2004年1号)。
양형섭 「우리당의 사상이론은 조선혁명을 승리에로 령도하는 지도적지침」(楊亨燮「わが党の思想理論は朝鮮革命を勝利に導く指導的指針」『勤労者』1987年第2号)。
엄기현 「항일유격대원들의 수령에 대한 무한한 충직성」(オム・キヒョン「抗日遊撃隊員の首領に対する無限の忠直誠」『勤労者』1967年7月号)。
연정술 「사회정치적 생명체에서의 혁명적 의리와 동지애」(延ジョンスル「社会政治的生命体での革命的義理と同志愛」『千里馬』1988年12月号)。
오진우 「경애하는 수령 김일성동지는 주체 시대의 위대한 군사전략가이시며 백전백승의 강철의 령장이시다」(呉振宇「敬愛たる首領金日成同志は主体時代の偉大な軍事戦略家であり、百戦百勝の強鉄の英将である」『勤労者』1992年4月号)。
「위대한 수령 김일성동지의 탄생 80돌을 승리자의 대축전으로 맞이하기 위한 전인민적 투쟁에 떨쳐나서자」(「偉大な首領金日成同志の誕生80周年を勝利者の大祝典に迎えるために全人民的闘争に出て行こう」『勤労者』1992年1月号)。
윤재창 「제3차7개년계획은 사회주의완전승리를 위한 웅대한 경제건설강령」(ユン・ジェチャン「第3次7ヵ年計画は社会主義完全勝利のための巨大な経済建設綱領」『経済研究』1987年3月号)。
정순기 「언어는 민족을 특징 짓은 가장 중요한 공통성」(鄭スンキ「言語は民族を特徴づけるもっも重要な共通性」『勤労者』1984年1号)。
「제3차7개년계획을 수행하기 위한 진군을 힘있게 다그치자」(第3次7ヵ年計画遂行のために進軍を力強くせき立てよう」『勤労者』1987年第7月号)

주도일 「혁명적 구호문헌에 반영된 항일혁명투사들의 혁명적 수령관」(チュ・ドイル「革命的口号文献に反映された抗日革命闘士の革命的首領観」『勤労者』1990年 『근로자』4月号)。

「주체의 혁명적기치를 높이 추켜들고 1990년대를 위대한 승리와 영광의 년대로 빛내이자」(「体の革命的旗幟を高く掲げ、1990年代を偉大な勝利と栄光の年代に輝こう」『勤労者』1990年1月号)。

최광 「친애하는 김정일동지를 조선인민군 최고사령관으로 추대한 것은 주체의 혁명무력 건설에서 특기할 력사적 사변」(崔光「親愛たる金正日同志を朝鮮人民軍最高司令官に推戴したのは主体の革命武力建設で特記する歴史的事変」『勤労者』1992年2月号)。

최승주 「수령절대신뢰심 흠모심은 사회주의 위업의 성과적수행을 위한 위력한 사상정신적 담보」(崔スンジュ「首領絶対信頼心、欽慕心は社会主義偉業の成果的遂行のための威力ある思想精神的担保」『政治法律研究』2010年2号)。

홍극표, 박원필 『사회주의 국가기구에 대한 위대한 수령 김일성동지의 리론』(洪グックピョ・朴ウォンピル『社会主義国家機構についての偉大な首領金日成同志の理論』平壌：社会科学出版社、1976年)。

4. 映像資料

리태식의 시『고향집과 사진』(李テシキの詩『生家と写真』平壌：朝鮮中央ＴＶ、2012年2月放送)。2015年7月現在、 ttps://www.youtube.com/watch?v=CRIdoCcY7NAで再確認可能。

소개편집물 아크릴화 『백두밀영고향집을 찾으신 위대한 령도자 김정일동지』(紹介編集物、アクリル画『白頭山密営の生家に訪ねた偉大な領導者金正日同志』平壌：朝鮮中央ＴＶ、2012年6月放送)。
2015年7月現在、ttps://www.youtube.com/watch?v=eL-itn920Agで再確認可能。

Ⅱ　日本語の資料

１．辞典類

石川文康ほか『カント事典』弘文堂、2014年。
大石紀一郎ほか『ニーチェ事典』弘文堂、2014年。
加藤尚武ほか『ヘーゲル事典』弘文堂、2014年。
田中浩、安世舟『事典――政治の世界』御茶の水書房、1987年。

２．単行本

アルギエ、Ｆ著、野田又夫・布施佳宏訳『永遠への欲望』以文社、1979年。
青山建熙『北朝鮮悪魔の政体』光文社、2002年。
イーストン、デイヴィッド著、山川雄巳監訳『政治構造の分析』ミネルヴァ書房、1998年。
伊豆見元ほか『北朝鮮――その実像と軌跡』高文研、1998年。
――――　『北朝鮮で何が起きているのか』ちくま新書、2013年。
伊豆見元・張達重編『金正日体制の北朝鮮』慶應義塾大学出版会、2004年。
磯崎敦仁・澤田克己『北朝鮮入門』東洋経済新報社、2010年。
市野川容孝『身体/生命』岩波書店、2009年。
伊藤光利・田中愛治・真渕勝『政治過程論』有斐閣、2000年。
ウェーバー、M著、濱嶋朗訳『権力と支配』講談社学術文庫、2012年。
エーデルマン、マーレー著、法貴良一訳『政治の象徴作用』中央大学出版社、1998年。
エリクソン、E.H・エリクソン、Ｊ．Ｍ・キヴニック Ｈ．Ｑ．著、朝長正徳・朝長梨枝子共訳『老年期』みすず書房、1990年。
オーバードーファ、ドン著、菱木一美訳『二つのコリア――国際政治の中の朝鮮半島』共同通信社、2007年。
大内憲昭『朝鮮社会主義法の研究』八千代出版、1994年。
岡部達味『中国の対外戦略』東京大学出版会、2002年。
小倉和夫『権力の継承』日本国際問題研究所、1985年。
小此木政夫編『岐路に立つ北朝鮮』日本国際問題研究所、1988年。

――― 『ポスト冷戦の朝鮮半島』日本国際問題研究所、1994年。
――― 『金正日時代の北朝鮮』日本国際問題研究所、1999年。
カヴァナー、D.著、寄本勝美・中野実訳『政治文化論』早稲田大学出版部、1977年。
萱野稔人『権力の読みかた』青土社、2007年。
川添登『象徴としての建築』筑摩書房、1982年。
外務省『外交青書―我が外交の近況』（外務省、昭和63年、第32号）。
木宮正史『国際政治のなかの韓国現代史』山川出版社、2012年。
金賛汀『北朝鮮――建国神話の崩壊』筑摩書房、2012年。
金成黙、金致泳著、三浦洋子訳『北朝鮮の農業』農林統計協会、2001年。
小松佳代子『社会統合と教育――ベンサムの教育思想』流通経済大学出版会、2006年。
コジェーブ・アレクサンドル著、今村真介訳『権威の概念』法政大学出版局、2010年。
下斗米伸夫『ソ連＝党が所有した国家』講談社、2004年。
――― 『モスクワと金日成』岩波書店、2006年。
ジャン・アメリイ著、竹内豊治訳『老化論』法政大学出版局、1977年。
ジャン・グルニエ著、西永良成『正統性の精神』信栄堂、1988年。
シュミット、カール著、田中浩、原田武雄訳『独裁』未来社、2009年。
鐸木昌之『北朝鮮――社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会、1992年。
――― 『北朝鮮――首領制の形成と変容』明石書店、2014年。
徐大粛著、林茂訳『金日成』株式会社講談社、2013年。
孫光柱著、ベ・ヨンホン訳『金正日レポート』ランダムハウス講談社、2004年。
張仁淑著、辺真一・李聖男訳『凍える河を超えて(下)』講談社、2003年。
中村栄孝『朝鮮――風土・民族・伝統』吉川弘文館、1970年。
塚本勝一『北朝鮮・軍と政治』原書房、2012年。
ニーチェ全集(13)・原佑訳『権力への意志』(下)、ちくま学芸文庫、2010年。
浜治世ほか『現代基礎心理学――動機・情緒・人格』第8巻、東京大学出版会、1981年。
バトラー、ジュディス著、佐藤嘉幸・清水知子訳『権力の心的な生』有限会社月曜社、2012年。
檜垣立哉『フーコー講義』河出書房新社、2010年。
平岩俊司『北朝鮮は何を考えているのか』ＮＨＫ出版、2013年。
――― 『北朝鮮――変貌を続ける独裁国家』中公新書、2013年。
黄長燁著、編集部訳『北朝鮮の真実と虚偽』光文社、1999年。
藤田哲司『権威の社会現象学』東信堂、2011年。
マーティン・ブラッドー著、朝倉和子『北朝鮮――偉大な愛の幻(上)』青灯社、2007年。

星野智『現代権力論の構造』情況出版株式会社、2000年。
ボヘンスギー著、丸山豊樹訳『権威の構造』公論社、1977年。
ポール・ヴァレリー著、恒川邦夫訳『精神の危機』岩波書店、2010年。
マコーマック、ガバン著、吉永ふさ子『北朝鮮をどう考えるのか』株式会社平凡社、2004年。
ミルグラム、Ｓ著、山形浩生訳『服従の心理』河出文庫、2012年。
湯浅邦弘『論語』中央公論新社、2012年。
柳澤英二郎・加藤正男・細井保編『危機の国際政治史（1917－1992）』亜紀書房、1997年。
ラスウェル. H. D著、 永井陽之助訳『権力と人間』東京創元社、1990年。
――― 久保田きね子訳『政治――動態分析』岩波書店、1992年。
ラスウェル. H. D・カプラン. A著、堀江湛・加藤秀治郎・永山博之訳『権力と社会』芦書房、2013年。
ラッセル・バートランド著、東宮隆訳『権力：その歴史と心理』みすず書房、1992年。
ランコフ・アンドレイ著、鳥居英晴『民衆の北朝鮮』花伝社、2009年。
ルークス・Ｓ著、伊藤公雄訳『権力と権威』アカデミア出版会、1989年。
ルーマン. N著、佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣、2007年。
和田春樹『北朝鮮――遊撃隊国家の現状』岩波書店、1998年。
―――『北朝鮮現代史』岩波新書、2012年。

３．論文

秋野豊「モスクワの朝鮮半島政策」（小此木政夫編『ポスト冷戦の朝鮮半島』日本国際問題研究所、1994年）。
伊豆見元「東欧の変化と北朝鮮の対外関係」（『東亜』1990年、2月号）。
――― 「急転換の北朝鮮と今後の展望」（『アジア時報』1991年7月号）。
――― 「朝鮮半島情勢の新展開と北朝鮮の『大量破壊兵器』」（『新防衛論集』第28巻第4号、2001年3月）。
木宮正史「韓国の民主化―民主化への移行過程との関連を中心にして―」（坂本義和編『世界政治の構造変動 4 市民運動』岩波書店、1995年）。
―――『米中関係と朝鮮半島」、『国際問題』2014年1・2月。
小牧輝夫「対外開放を模索する北朝鮮経済」（小此木政夫編『ポスト冷戦の朝鮮半島』、

日本国際問題研究所、1994年。
鐸木昌之「北朝鮮の対外政策―対ソ政策とイデオロギーの連繋を中心に―」（日本国際政治学会編、『国際政治』第92号、1989年）。
崔慶嬉「東欧・ソ連における社会義体制の崩壊と北朝鮮」（東京大学大学院総合文化研究科『アジア地域文化研究』第6号、2010年）。

Ⅲ　韓国語の資料

１．　刊行物

『경향신문(京郷新聞)』。『동아일보(東亜日報)』。『월간중앙(月刊中央)』。

２．　単行本

고재홍 「북한군 최고사령관 연구」（高ジェホン「北韓軍における最高司令官の研究」ソウル：統一研究院、2006年。
권헌익, 정병호 『극장국가 북한』（権ホンイク・鄭ビョンホ『劇場国家・北朝鮮』ソウル：チャンビ、2013年）。
김갑식『김정일정권의 권력구조』（金ガブシク『金正日政権の権力構造』ソウル：韓国学術情報㈱、2005年）。
김병로『주체사상의 내면화 실태』（金炳魯『主体思想の内面化の実態』ソウル：民族統一研究院、1994年）。
김세균『북한체제의 형성과 한반도 국제정치』（金セギュン『北韓体制の形成と韓半島の国際政治）』ソウル：ソウル大学出版部、2006年）。
박형중『북한의 정치와 권력』（朴泂重『北韓の政治と権力』ソウル：白山書院、2002年）。
백학순『북한 권력의 역사』（白鶴淳『北韓権力の歴史』ソウル：ハンウル、2010年）。
석영환『김일성 장수건강법』（ソク・ヨンファン『金日成長寿健康法』ソウル：パンパス、2004年）。
송승섭『북한자료의 수집과 활용』（ソン・スンソプ『北韓資料の収集と活用』ソウル：韓国学術情報(株)、2011年）。

오일환, 정순원『김정일시대의 북한정치경제』(オ・イルファン、鄭スンウォン『金正日時代の北朝鮮政治経済』ソウル：ウルユ文化社、1999年)。
이교덕『북한 주요 기초문헌 해제집(ＩＩＩ)：「근로자」해제』(『北韓の主要基礎文献解題集(ＩＩＩ)：「勤労者」解題』ソウル：民族統一研究院、1995年)。
―――『김정일선집의 해제』(『金正日選集の解題』ソウル：統一研究院、2001年)。
―――『김정일 현지지도의 특성』(李ギョドク『金正日の現地指導の特性』ソウル：統一研究院、2002年)。
이상우『북한정치: 신정체제의 진화와 작동원리』(李相禹『北朝鮮政治：神政体制の進化と作動原理』ソウル：ナナム、2012年)。
이우영『전환기의 북한의 사회통제체제(転換期の北朝鮮の社会統制体制)』ソウル：統一研究院、1999年。
―――『북한사회의 상징체계 연구』(李ウヨン『北朝鮮社会における象徴体系の研究』ソウル：統一研究院、2002年)。
이종석『조선로동당 연구』(李鍾奭『朝鮮労働党研究』ソウル：歴史批評社、1995年)。
정성장「스탈린체제와 김일성체제의 비교연구」(「スターリン体制と金日成体制の比較研究」ソウル：韓国国際政治学会『国際政治論叢』第37集2号、1997年)。
―――『현대북한의 정치』(鄭成長『現代北朝鮮の政治』ソウル：ハンウルアカデミー、2011年)。
―――「중국과 북한의 당중앙군사위원회 비교연구」(「中国と北朝鮮の党中央軍事委員会の比較研究」『世宗政策研究』ソウル：世宗研究所、2011年)。
―――『김정은시대 북한최고인민회의 상임위원회의 위상과 역할』(『金正恩時代、北韓最高人民会議常任委員会の以上と役割』ソウル：世宗研究所、2014年)。
최진욱『김정일 정권과 한반도 장래』(崔ジンウク『金正日政権と韓半島の将来』ソウル：韓国外国語大学出版部、2005年)。
한만길『북한에서는 어떻게 교육할까』(ハン・マンギル北韓ではどのように教育するのか』ソウル：ウリ教育、1999年)。
허문영『북한 지도부의 정세인식 변화와 정책 전망』(許文寧『北韓指導部の情勢認識の変化と政策展望』ソウル：民族統一研究院、1994年12月)。
―――『북한외교정책 결정구조와 과정: 김일성시대와 김정일시대의 비교』(『北韓外交政策における決定構造と過程：金日成時代と金正日時代の比較』ソウル：民族統一研究院、1998年)。
현성일『북한의 국가전략과 파워엘리트』(玄成日『北韓の国家戦略とパワーエリート』ソウル：ソンイン、2007年。

황장엽『회고록』(黄長燁『回顧録』ソウル：時代精神、2006年)。
———『인간중심철학원론』（黄長燁『人間中心の哲学原論』ソウル：時代精神、2008年)。
———『사회역사관』(黄長燁『社会歴史観』ソウル：時代精神、2010年。
황장엽·이신철『논리학』(黄長燁・李シンチョル『論理学』ソウル：時代精神、2010年）。

3．論文

곽인수『조선노동당의 당적지도에 관한 연구』(グァク・インス『朝鮮労働党の党的指導に関する研究)』慶南大学校、修士論文、2003年。
김광인『북한 권력승계에 관한 연구』(金光仁『北朝鮮の権力継承に関する研究』ソウル：建国大学校博士学位論文、1998年)。
김병로「김정일저작 4백건의 허와실(金炳魯「金正日著作400件の虚と実」『北韓』1994年2月号)。
이관세『북한의 현지지도와 정치리더십에 관한 연구』(李グァンセ『北韓の現地指導と政治リーダーシップに関する研究』ソウル：北韓大学院大学校、博士論文、2007年)。
이승열「『수령체제』의 변화와 『수령승계방식』의 한계에 관한 연구」(李スンヨル「首領体制』の変化と『首領継承方式』の限界に関する研究」ソウル：北韓大学院大学校博士学位論文、2009年）。
이주철, 최완규「북한주민의 역사인식과 의식변화」(李ジュチョル・崔完圭「北韓住民の歴史認識と意識変化」『韓国民族運動史研究』第37集、ソウル：韓国民族運動史学会、2003年)。
이즈미 하지메「北韓에도 『東歐』바람 불까」(伊豆見元「北韓にも『東欧』風が吹くか」『月刊中央』1990年2月)。
허문영『1993년 12월 당중앙위 전원회의 및 최고인민회의 결과분석』（『1993年12月、党中央委員会全員会義および最高人民会議の結果分析』ソウル：民族統一研究院、1993年12月)。
현성일『북한 노동당의 조직구조와 사회통제체계에 관한 연구』(玄成日『北朝鮮労働党の組織構造と社会統制体系に関する研究』ソウル：韓国外国語大学校政策科学大学院修士学位論文、1999年）。

Ⅳ　欧文の資料

Harrison, Selig, *Korean Endgame: A Strategy for Reunification and U.S. Disengagement* (Princeton: Princeton University Press, 2002).

Jean, Amery, *Über das Altern. Revolte und Resignation*, (Klett, Stuttgart 1968).

Judith, Butler, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection,* (Stanford, Stanford University Press, 1997).

Kelman, Herbert C., "Three processes of social influences," in E. P. Hollander R. G. Hunt, *Current Perspectives in Social Psychology* (New York: Oxford University Press, 1963).

Lasswell, H. D. and Kaplan, A., *Power and Socierty: A Framework for Political Inquiry,* (Yale University Press, 1950).

Lasswell, H. D., *Politics: Who Gets What, When, How.* (New York, 1963).

——— *Power and Personality.* (W.W.Norton & Company. Inc. New York, 1948).

Oberdorfer, Don, *The Two Koreas : A Contemporary History* (New York: Basic Books, 1997).

Sigal, Leon V., *Disarming Strangers: Nuclear Diplomacy with North Korea* (Princeton: Princeton University Press, 1998).

Ⅴ　中国語の資料

刘金质・潘京初・潘荣英・立锡遇编 『中国与朝鲜半岛国家关系文件资料汇编』上卷 1991-2006, 世界知识出版社, 2006年.

刘金质・扬淮生编『中国对朝鲜和韩国政策文件汇编5(1974－1994)』中国社会科学出版社, 1994年.

李君如编『邓小平理论形成和发展—大事记— (1977－1992年) 』学习出版社, 1997年.

李振城主编「无硝烟的战争『和平演事变』的对策」天津社会科学出版社, 1991年.

钱其琛『外交部档案馆新华社』世界知识出版社, 2003年.

『人民日报』.

Ⅵ　インタビュー（年齢順）

黄長燁(1923年生、男性、1997年脱北、元朝鮮労働党書記・政治哲学者）2010年9月13日、3月10日、2009年2月20日、2008年9月24日、2月13日、2007年8月7日、3月25日などの数十回、ソウル江南区宣陵洞に位置した執務室。

張○○(73歳、男性、1996年脱北、元朝鮮中央ＴＶ放送局20年間勤務）2015年5月12日、2013年8月14日、2009年8月10日、9月15日、ソウル市蘆原区。

林○○(65歳、女性、2002年脱北、元両江道ジャガイモ農場の派遣農民）2010年8月24日、2013年2月15日、2015年5月18日、ソウル市内。

崔○○(63歳、男性、1995年脱北、元朝鮮人民軍相左、韓国軍大佐に当たる地位）2015年2月25日、2014年8月26日、ソウル市内。2012年6月7日、ソウル市内の国策研究所。

金○○(59歳、男性、1998年脱北、元国連食糧農業機構United Nation Food and Agriculture Organization (FAO)に努め)2011年8月12日、2009年9月3日、ソウル市内。

金○○(58歳、男性、2003年脱北、元北朝鮮咸興コンピュータ科学技術大学教員）2014年8月30日、9月1日、ソウル市内。

李○○(50歳、女性、2012年脱北、元北朝鮮の宣伝扇動講師）2014年12月2日、ソウル市内。

金○○(48歳、女性、2014年脱北、元清津化学繊維工場労働者・清津市場での商売人）2015年5月25日、6月10日、ソウル市内。

安○○(46歳、男性、2014年脱北、元咸鏡南道人民委員会部員）2015年5月29日、6月2日、15日、ソウル市内。